

ISSN 1348-8384



拓殖大学
語学研究

Takushoku Language Studies

2017.12

No. 137

目 次

〈論文〉

劉天華と文明戯……………久米井敦子（1）

日本人学生によるインドネシア語作文の
文章誤用の分析 ……………末延 俊生（21）

中国語語順体系に貫かれた構成原則について
— 基本語順の設定とその核心的 SVO の
位置づけを中心に —……………平山 邦彦（57）

〈諸文化圏・諸言語圏における女神〉
韓国における女神の様相 — バリ公主 — ……村上 祥子（101）

〈研究ノート〉

「母音」, 「子音」, 「音節」という用語について ……阿久津 智（123）

ヒンドゥー教の祭礼における女神たちの役割とお姿
— ディーワリー（燈火）祭, ホーリー（迎春）祭など
五つの祭礼の考察 —……………坂田 貞二（149）

〈抄録〉

「英語で授業をする」ことに関する研究
— 高校生の意識調査から —……………保坂 芳男（173）

〈資料〉

台湾語 “有 (ū)” “無 (bô)” の文法化とその周辺 (資料篇)

— 樋口靖著『台湾語会話 (第二版)』に基づいて —

……………浅井 澄民 (191)

“Lazarillo de Tormes” (1554) の

文法的特徴についての考察

— 「第一章」(下) — ……………廣澤 明彦 (211)

文化的反義語

— 英語の実例集 — ……………山田 政通 (261)

拓殖大学 研究所紀要投稿規則 …………… (299)

拓殖大学言語文化研究所 『拓殖大学 語学研究』執筆要領 …… (302)

Takushoku Language Studies

No. 137

Contents

〈Articles〉

A Study on Liu Tianhua and Wenming -xiKUMEI Atsuko (1)

Analisis Kesalahan Kalimat Bahasa Indonesia

Dalam Karangan Mahasiswa JepangSUENOBU Toshio (21)

The Constitutive Principle

behind the Word Order System in Chinese:

Focusing on the recognition to the basic word order

and the positioning to the core of SVO ...HIRAYAMA Kunihiko (57)

Goddess in several different cultures and languages:

The goddess's aspect in Korea

— princess BARI —MURAKAMI Shoko (101)

〈Study Note〉

On Some Phonological Terms:

Bo-in (Vowel), *Shi-in* (Consonant) and *On-setsu* (Syllable)

.....AKUTSU Satoru (123)

Five Hindu Festivals worshipping Goddesses including

Diwari and Holi.....SAKATA Teiji (149)

〈Abstract〉

A Study of Teaching English Through English:

With a focus on attitudes

of high school studentsHOSAKA Yoshio (173)

〈Material〉

Grammaticalization of “ <i>ū/bô</i> ” in the Taiwan Minnan Language	ASAI Sumitami (191)
Estudio sobre las características gramaticales del “Lazarillo de Tormes (tractado primero)” (tercera parte)	HIROSAWA Akihiko (211)
A Study of Cultural Antonyms: English Examples	YAMADA Masamichi (261)
Submission of Manuscript	(299)
Instructions for Contributors	(302)

〈論文〉

劉天華と文明戲

久米井 敦 子

要 旨

作曲家で音楽教育家の劉天華（1895-1932）は中国民族音楽の近代化に貢献した人物として知られている。彼は1912～1914年に上海の劇団「開明社」で楽団のトランペット奏者として活躍していた。

開明社が演じていたのは当時上海で流行していた「文明戲」であった。文明戲は西洋の近代演劇に倣い、リアルな舞台や口語によるセリフを使用した。しかし、劇中では京劇などの伝統歌唱を多用し、現在の「話劇」に比べると、近代演劇というには中途半端なものであった。しかしこうした現象は、他者の文化である近代文化受容の黎明期において自己を認知するための「民族性」という近代性の現れであった。

劉天華は1914年に上海を離れ帰郷して音楽教師となり、国楽（中国音楽）の研究と教育に傾倒していく。その後1922年に北京大学附設音楽伝習所（招聘当時は「北京大学音楽研究会」）に国楽教師として招聘され、1927年に「国楽改進社」を設立し、国楽の創作、演奏、教育、保存、研究などの分野で大きな功績を残した。劉天華はこうした一連の事業を「国楽改進」と呼んだ。国楽改進とは、西洋音楽の要素を取り入れることで国楽を改良、推進し、それによって新しい自分たちの音楽を創造しようという試みであった。

本論は文明戲と劉天華の国楽改進の間にある旧文化を利用した近代文化の受容という類似点に注目し、国楽改進という事業の起源を彼の文明戲体験に求めたものである。

キーワード：劉天華、国楽改進、文明戲、開明社

1. はじめに

中国民族音楽の近代化に貢献をした劉天華（1895-1932）は、1910年代から1930年代にかけて活躍した作曲家、演奏家、音楽教育家である。彼は辛亥革命直後の1912年から1914年の約2年間を実兄の劉半農とともに上海で過ごしている。当時、上海では西洋式の近代演劇に倣った「文明戯」と呼ばれる新しい演劇が流行しており、多くの劇団が活動していた。劉天華はその1つである「開明社」に所属し、その楽団でトランペットを吹いていた。

当時の上海には「租界」と呼ばれる外国人居留地があり、西洋建築が立ち並び、西洋文化が定着していた。その様子は現在も保存されている多くの建造物や街並からも想像できるであろう。また、租界では治外法権が適用されていたため、各地から知識人や政治活動家、ひいては闇社会の人間までもが、新しい文化と自由を求めて集まった。欧米人によってキリスト教系の学校も多く創設され、近代教育が盛んであった。新しい演劇形態である文明戯は、こうした東洋の中の西洋ともいべき租界で、新しい文化活動の一環として生まれたのである。

劉天華に関する研究はすでに多く行われているが、彼の上海における活動に関して詳細に論じたものは管見の限りまだない。その原因は資料が少ないことにある。現在、劉天華の日記や書簡は残っておらず、我々が彼の生涯、特に前半生について知る手掛かりは親族の回想だけである。また、劉天華自身による言説は、北京で発行された『新楽潮』や『音楽雑誌』といった雑誌に発表された1927年以降のものが残っているだけだが、それらの資料に上海で活躍した時期に関する言及はない。しかし劉天華の全貌を解明するには、上海での2年間を無視することができない。本論は上海での体験がその後の劉天華の音楽思想——彼のライフワークである「国楽

改進」に与えた影響を解明しようと試みるものである。

2. 劉天華の生涯と国楽改進

2-1. 劉天華の生涯^①

劉天華の生涯については他の機会にすでに論じた^②ので、ここでは詳細に触れない。ただ、本論のテーマである上海期の位置づけを明確にするために、劉天華の生涯を以下の通り4つの時期に区分し、各時期の概要を確認しておこう。

① 幼少期～少年期（1895～1912）

1895年、江蘇省江陰で学堂を経営する家庭に生まれた劉天華は父のもとで初等教育を受け、1909年に常州府中学堂へ進学する。しかし1911年10月の武昌蜂起の発生に伴い授業が停止となり、劉天華は学業を途中で断念せざるを得なかった。その後は兄とともに地元で革命運動に参加をして過ごす。

幼少期の劉天華は、故郷の江陰で近所の寺院や孔廟の宗教音楽に触れたり、近所の人から笛や二胡（中国民族楽器の一種で二弦の擦弦楽器）を習ったりして、民間の音楽に親しんで育った。常州府中学堂に進学後は、中学堂の軍楽隊に参加してトランペットを習った。多感な思春期に初めて触れた西洋楽器は劉天華を魅了したことだろう。トランペットの輝かしい音や軍楽隊の奏でるアンサンブル、西洋の音階やリズムなど、中国音楽と大きく異なる西洋音楽に劉天華はこの時期に初めて触れたのである。

② 上海期（1912～1914）

1912年の春、劉天華は編集の職を得た兄の劉半農とともに上海へ行き、劇団「開明社」の楽団員として活動する。1914年に開明社が活動を停止

したため、劉天華は帰郷を余儀なくされる。

③ 江蘇期（1914～1922）

1914年に上海から故郷の江陰に戻った劉天華は、小学校の音楽教師を経て翌1915年に母校の常州府中学堂の後身である江蘇省立第五中学（1913年改称）に招聘される。音楽教育に理解の深い校長童斐の下、劉天華は中学の軍楽隊と国楽隊を指導した。

教鞭をとる傍ら劉天華は、二胡の名手として有名だった周少梅や、琵琶の名人の沈肇州といった在野の音楽家たちに学んだ。

また1921年には、江陰の自宅で「暑期国楽研究会」を開催した。これは地元の音楽教師や音楽を愛好する青少年を対象とした音楽講習会で、夏季休暇の間泊まり込みで行われた合宿であった。この研究会には劉天華が師事した音楽家や地元の寺院の僧侶がゲスト講師として招かれ、劉天華は自作の「病中吟」、「空山鳥語」、「月夜」（いずれも二胡独奏曲）を教授した^③。受講生の中には第五中学の生徒たちもいた。その中には呉伯超、儲師竹のように、後に北京でも劉天華の教え子となる者も含まれていた。

こうした活動からわかるのは、この時期、劉天華の関心が「国楽」、つまり自国の音楽に向けられていたことである。

④ 北京期（1922～1932）

劉天華は1922年、北京大学附設音楽伝習所の国楽教師として招聘されて北京へ赴任し、1932年に伝染病のため急逝した。劉天華に関する先行研究はこの10年間の活動をテーマとしたものが大半を占めているため、北京期に関してはここで詳述しない。ただ、北京へ来てからも、劉天華が目指したものは国楽研究であったことは指摘しておきたい。衰退の一途をたどる国楽を採集し、保存し、さらに創造刷新をしていこうという劉天華の信念は、1927年の「国楽改進社」設立へと続いていく。その活動の一

環として発行された『音楽雑誌』は、劉天華自身の論説が掲載された貴重な資料である。

劉天華の以上の経歴を音楽事業の発展という視点から見ると、次のように考えることができる。

「①幼少期～少年期」は音楽への関心が芽生えた萌芽期である。幼少時すでに身近な音楽に関心を寄せていたことから、音楽家として大成する生来の可能性を覗うことができる。中学生になって軍楽隊の活動を通じて西洋楽器という新しい世界の音楽と出会う。「②上海期」では、学業の中止を余儀なくされた劉天華が、学んだ音楽を上海の商業演劇という新天地で実践する、音楽家としての入門期である。「③江蘇期」は、生業として演奏していた音楽を教員として研究し、次世代へ伝え始める時期である。この時期から劉天華は国楽を重視し始める。生涯の事業を国楽改進に定め、それに向けて準備を始めた熟成期といえよう。それは「④北京期」において継続され、国楽改進社旗上げや、作曲、演奏活動、教育事業において功績を重ねることで開花するのである。北京期は開花期と言うことができよう。

2-2. 国楽改進 — 劉天華の音楽観

では、劉天華が生涯の事業として志した国楽改進とはどのようなものだったのだろうか。劉天華は1927年、雑誌『新楽潮』第1巻第1期に寄せた文章の中で以下のように書いている。（以下、劉天華による言説の引用はすべて方立平2009をテキストとし、筆者訳とする）

音楽が人類にとって大きな効用があることは、誰もが認めぬわけにはいかない。しかし我が国において最近最も振るわない学問は音楽といえるだろう。西洋人をまねてピアノを弾いたり歌を歌ったりする者はいるが、すべて特権階級のものである（しかも、ごく少数にすぎない）。

一般民衆に音楽を普及させることなど、気の遠くなるような話である。そもそも、一国の文化とは、他人の表面だけをまねれば済むものであるはずない。また逆に、古いしきたりに則り、自分の見解に固執すればいいというものでもない。自国固有の精髓を採用しつつ、外来の潮流を受け入れなければならないのだ。東西の調和と合作の中から新しい道を打ち出してこそ、進歩という言葉に値するのである。(劉天華「国楽改進社縁起」、『新楽潮』第1巻第1期)

劉天華が目指したのは、西洋音楽という新しい潮流のエッセンスを積極的に取り入れることによって伝統的な国楽を「改進」(改良, 推進)し、それによって新しい国楽を創造することだった。劉天華は北京で外国人教師にヴァイオリンや作曲法を学んだり、和声に関する文献を翻訳したり⁽⁴⁾するなど、西洋音楽を積極的に学んでいた。その熱意と進歩は、北京大学付設音楽伝習所の元同僚で、中国の西洋音楽受容に多大な貢献をした蕭友梅(1884-1940)に「日夜練習に励み、何年も習わぬうちに造詣が深くなった」と言わせたほどであったが⁽⁵⁾、それはすべて国楽改進のための手段の1つに過ぎなかったのである。

国楽に西洋音楽の要素を積極的に取り入れるという考えは、劉天華の創作において実践されている。劉天華が生前に楽譜を発表した曲は、すべて工尺譜(一部は五線譜も)で表記されている⁽⁶⁾。工尺譜とは中国の伝統的な楽譜の1種であり、従来は旋律のみを表現する記譜法であった。劉天華は工尺譜に西洋の楽譜(数字譜, 五線譜)の要素を積極的に取り入れることで、リズムや装飾音、速度などを明示した。例えば、数字譜のリズムを示す傍線や、ヴァイオリンの五線譜のボーイングを表す弧線(スラー)、指使いを示す数字などである。速度は「転慢(だんだん遅く)」(rit.)、「極慢板(きわめて遅く)」(adagio con espress)というように中国語で指示を入れている。トリルを示す西洋音楽の記号「tr」も見られる(図)。

The image shows a handwritten musical score for the piece "除夜小唱 (良宵)". The score is written on multiple staves, with various musical notations and annotations. The notation includes notes, rests, and other symbols typical of a musical score. There are several vertical lines of text on the right side of the page, including the title "除夜小唱" and the name "劉天華". The score is written in a traditional Chinese style, with some annotations in Japanese characters. The page number "105" is written at the bottom center.

図 「除夜小唱 (良宵)」工尺譜。『音楽雑誌』第2期 マイクロフィルム版より

また劉天華は演奏時のポジションに関して厳格な態度を取っている（以下、引用部の〔 〕内はすべて引用者による補足とする）。

胡琴〔二胡を含む中国の擦弦楽器の総称〕における「三把」という演奏法は、まだそれほど古くない。おそらく三弦や琵琶などの楽器から応用したのであろう。以前は、中把と下把の2つのポジションの音は上把で1オクターブ低い音を弾いて済ませていた。各ポジションの音色おんしよくを利用し、さらにそれを楽譜に記すことは、これまでにはなかった。この「月夜」と「除夜小唱」の2つの曲は、各ポジションの音色おんしよくの美しさに基づいて作曲した。そのため中把の指示の箇所を上把で弾いたり、上把の指示の箇所を中把で弾いたりしてはならない。（劉天華「除夜小唱，月夜説明」『音楽雑誌』2期）

ポジション（中国語では「把位」）とは弦楽器の運指法に関する用語で、二胡の場合は左指で弦をおさえる位置を指す。例えば、二胡の外弦（A弦）では解放弦（弦をおさえずに出す音で、この場合はA＝ラ）の一度高い音（B＝シ）に第一指（人差し指）を置く位置が「上把」（第一ポジション）である。Bを内弦（D弦）で弾く場合は、「中把」（第二ポジション）の第二指（中指）の位置をおさえる。同じBであっても外弦では明るい響きに、内弦では深みのある音になる。ヴァイオリンなど西洋の弦楽曲の作曲者は運指法を数字で楽譜に明記することでポジションを指定し、弦による音色おんしよくの違いを音楽表現に生かす。劉天華はその記譜法を二胡曲の楽譜に応用したのである。上の引用で劉天華はこうしたことは中国音楽において「これまでにはなかった（未之前聞）」としている。

西洋音楽（クラシック音楽）の演奏者は楽譜の指示を遵守しつつ自身の独創性を発揮しなければならない。それこそが西洋音楽（クラシック音楽）の醍醐味であり真髄である。そのため作曲者は自身の楽想を楽譜に詳細に

書き込むのである。作曲者が構想した音色^{おんしよく}を楽譜に表そうという劉天華の楽譜改革は、西洋音楽の概念の国楽における実践であったと言える。

3. 文明戯と開明社

3-1. 文明戯とは

文明戯は「新劇」とも呼ばれ、20世紀初頭、中国の演劇の近代化の過渡期に生まれた演劇を指す。新劇とは、京劇などの伝統演劇＝旧劇に対する呼び方であり、文明戯の活動が超克する対象として伝統演劇を強く意識していたことは明確であろう。中国の伝統演劇＝旧劇は唱^{うたい}を中心とし、胡琴（弦楽器）や羅鼓（打楽器）を伴う歌劇であった。舞台には背景を用いず、小道具も机と椅子といったきわめて限られたものしか置かず、さまざまな情景は類型化された伴奏や役者の所作によって象徴的に表現される。また、役柄が生（男性）、旦（女性）、丑（道化）というように類型化されているのも特徴である。これに対して文明戯＝新劇は、西洋式の演劇を手本に、口語によるセリフや自然な所作、背景や小道具を採用することによって、リアルな舞台を目指したものであった。

「文明戯」という名称に関しては諸説あり⁽⁷⁾、また文明戯は劉天華が活躍していた当初は「新劇」と呼ばれていた。しかし劉天華に関する諸資料では「文明戯」という名称が使用されており、また、名称の問題は大変重要ではあるが、本論は劉天華の上海期での活動が後の国楽改進という事業にどのような思想的影響を与えたかに焦点を当てて論じることを目的としているため、ここで詳細に触れることはせず、便宜上「文明戯」という名称を用いる。

一般に文明戯の起源は、19世紀末から20世紀初頭にかけて起こった学生演劇と、日本に留学した知識人たちが体験した日本の近代演劇の影響であるとされる。

現在確認できる最初の学生演劇は、1898年、上海の聖約翰書院（セント・ジョーンズ書院）のクリスマス・イベントで学生たちによって演じられたものである。それを皮切りに、その後他の学校でも盛んに演劇が演じられるようになった。こうした演劇は伝統劇の演目を継ぎ合わせたようなもので⁽⁸⁾、近代演劇というには中途半端なものだったと思われる。しかしこの活動から汪優遊や朱双雲といった文明戯を代表する人材が生まれていることを考えると、この時期の学生演劇が後の文明戯の成立に与えた影響は小さくない。

中国演劇の近代化の嚆矢として広く認知されているのは、1907年2月に東京で上演された春柳社の「茶花女」（椿姫）と同年6月の「黒奴籲天録」（アングル・トムの小屋）である。春柳社は1906年に東京で結成された清国留学生たちによる劇団である。この上演は、新派俳優の藤沢浅次郎（1866-1917）の指導を受けて⁽⁹⁾大成功をおさめ、中国ではこの成功が伝わったのちに新しい演劇の試みが始まるのである。たとえば王鐘声は上海で春陽社を旗揚げして「黒奴籲天録」などを上演し（1907年）、春柳社のメンバーだった陸鏡若は帰国後に新劇同志会を設立した（1912年）。このほかにも上海には進化団（1910年）、新民社、啓民社、民鳴社（いずれも1913年）など、多くの劇団が誕生した。

文明戯は近代式のリアルな舞台を目指していたが、近代演劇の重要な要素である脚本を用いず、「幕表」と呼ばれる物語のあらすじを書いたものに依拠して上演していた。演技は役者の即興で行われたため、收拾がつかなくなることもしばしばあったという。

文明戯は1914年に最盛期を迎え、その後は衰退し、遊戯場で上演され、やがて新興地方演劇へと発展解消される。中華人民共和国建国後の中国演劇史においては、近代演劇の始まりは新文化運動の担い手たちによる「話劇」であるとされ、文明戯は伝統劇から近代演劇への過渡期に発生した低俗な演劇に過ぎないと考えられるようになり、顧みられなくなった⁽¹⁰⁾。

3-2. 開明社とは

劉天華が所属した開明社はこうした文明戯の劇団の1つで、1912年に結成された⁽¹¹⁾。創立者は朱旭東と李君磐と言われている。文明戯の役者だった徐半梅は開明社について以下のように回想している（以下、引用部分はすべて筆者訳）。

彼〔李君磐〕の劇団はそのほかの劇団と比べると3つの相違点があるので、ここで挙げておきたい。1つ目は、彼らの劇団に楽団があること。2つ目は彼らが洋装戯に長じていること。3つ目は南洋群島や日本へ行ったことがあることである⁽¹²⁾。

また、役者として活躍した朱双雲が同時代の文明戯界を紹介した『新劇史』（1914年）では、開明社について次のような説明がある。

【[1912年の] この月 [旧暦の4月], 李君磐と朱旭東が開明社を組織し, 大舞台で上演】

開明社は新劇の中の別派である。なぜなら、音楽やダンスを重視したからで、東西洋の歌舞劇⁽¹³⁾とかいうものに、開明社が劣ることはない。この時期にいわゆる国民募金というものがあり、人々の多くが積極的に寄付をしていた。開明社はこの時流に乗って結成され、大舞台〔劇場名〕で上演をした。収入はすべて国民募金に寄付をし、公益を重んじたので、チケットは大変よく売れて1000元以上を稼いだ⁽¹⁴⁾。

【この月 [旧暦の5月], 開明社は謀得利で上演】

開明社は大舞台で上演後、素晴らしい名声を得た。そこで謀得利戲院を借りて連日上演した。チケットの売れ行きは芳しくなく、10

日ともたずに閉幕した⁽¹⁵⁾。

【この月 [旧暦の8月], 上海開明社は中華大戲園で上演, 3日で終了】
開明社の中華大戲園での上演は旧劇グループの妬みを買ったため3日で終了するはめになった。初日の夜に「痴情」を上演したが, 2幕目が始まったばかりなのに時間をせかさされ, 観客の不興を買った。2日目の夜もある劇を上演したが, 劇が終わらないうちに観客が大いにブーイングをした。こうして上海では新劇の居場所がほとんどなくなってしまった⁽¹⁶⁾。

【この月 [旧暦の12月], 開明社は四川へ】

上海に身の置き場がなくなり, さらに長江流域一帯へはすでに出遅れていた開明社は, やむを得ず四川へ旅立った。四川省の省都である成都で上演をすると観客がたくさん集まって大盛況だった⁽¹⁷⁾。

これらの記録からわかるとおり, 開明社は自前の楽団を持ち, 時代に先駆けて音楽やダンスを取り入れたことを特徴とする劇団であった。当初はチャリティー公演として大入りとなった開明社は, 商業劇団としては競争の激しい上海で興行を維持できなかった。『新劇史』にはこの時期, 地方都市へ移動した劇団の記録が多い。開明社に限らず, 上海で興行に行き詰って地方巡業に出た劇団は多く, 上海周辺の都市ではすでに多数の劇団が興行をしていた。出遅れた開明社はやむを得ずさらに遠い四川まで行き, 興行はそれなりに成功したという。

また, 黄愛華によれば, 開明社はリーダーの朱旭東の弟子や親族を中心としたまとまりのよい団体だったという⁽¹⁸⁾。

では, 開明社のリーダーとして知られる李君磐と朱旭東とはどのような人物だったのだろうか。

李君磐は江蘇省常熟の出身で、南菁高等学堂と南京の格致書院で学んだ。英語に長じ、蘇州で中学校の教師を数年つとめた。その後、北京で江蘇旅京公学を経営する⁽¹⁹⁾。1910年、北京の茶館・天楽園で「音舞盛会」を開く。これは学校運営の資金集めのための学生たちによるチャリティー公演で、中国で最初の音楽会だという⁽²⁰⁾。

朱旭東は清朝末期にベルギーへ遊学し、帰国後は皇族の寄付を受けて北京で音楽学校の設立を試みたが援助が途絶えて失敗した。辛亥革命が起ると江南で蜂起に参加して投獄され、革命後に釈放となった。その後李君磐とともに上海へ行き、学校教育が及ばない部分を補うために開明社を設立した。開明社では厳しい規律の下、午前中に音楽、午後には演劇、夕食後にダンスと西洋音楽の訓練が行われたという⁽²¹⁾。

劉天華が開明社に入ったのは兄の劉半農の人脈によるものと思われる。当時劉半農は開明社で作詞や編集を担当していた⁽²²⁾。徐半梅は開明社の公演の楽屋で李君磐から劉半農を紹介されたことを回想している⁽²³⁾。

1914年の3月から5月にかけて開明社は上海で多くの興業を行っている⁽²⁴⁾。同年5月に上海で文明戲6劇団が「新劇公会」を結成し、「六大劇団連合演劇」の公演を行ったときは、開明社は「六大劇団」の1つとして公演に参加した。この年は後に「甲寅の中興」と呼ばれる文明戲の最盛期であった。この「公会」は公演直後に解散し、それ以降、朱旭東、史海嘯、朱小隱の3人の開明社社員の名前は7月末まで春柳劇場の公演広告に現れるもの⁽²⁵⁾、開明社としての上演広告は見られない。そして開明社は同年11月、劉芸舟が主催する「中華木鐸新劇」の日本公演⁽²⁶⁾への出演を最後に、歴史から姿を消した。劉天華は「公会」解散後の1914年の仲夏（旧暦5月）のころ、上海を引き上げて帰郷する。

3-3. 文明戲における音楽⁽²⁷⁾

すでに述べたとおり、文明戲の舞台は背景や大道具、小道具を使用する

ことでリアルな日常生活を再現したものであり、役者のセリフは日常的な言葉づかいであった。脚本ではなく幕表を使用した即興性の強い演劇ではあったものの、基本的に西洋の近代演劇を目指したものだと言える。しかし劇中で、宴会のシーンなどを借りて京劇などの伝統歌唱が披露されることがあり、こうした伝統歌唱に言及する広告や劇評も多かった。伝統歌唱は文明戯にとって重要な要素であり、また、観客からも喜ばれたのである。

このことについて、松浦恆雄は、次のように指摘する。

このような文明戯における歌唱〔「水金橋」の一段や「李陵碑」が劇中劇として歌われたこと〕は、公演を重ねるうちに、次第に重要性を増していったものと思われる。それは、文明戯が、観客の強い嗜好に訴えて観客を動員しようとしたためではない。(中略)おそらく、当時の観客にとって、劇中歌と文明戯のリアルな演技とは、抵触するものではなかったのであろう。(中略)むしろ逆に、優れた歌唱の挿入は、文明戯の演劇としての質を高める役割を果たすと考えられていたのである⁽²⁸⁾。

さらに松浦は、このような現象から新劇に旧劇の要素を取り入れることを目指す考え方が生まれたと指摘し、当時の演劇雑誌の記事から以下の2節を引用する。

演劇改良の要務は、第一にまず新旧の境界をなくすことである。第二に新旧の学理を融合しなければならない。第三に新旧両派の長ずるところを兼ねそなえなければならない⁽²⁹⁾。

(前略) 将来の新劇を造らんとすれば、必ずまず京劇の改良から着手

し、一方で新旧の観念を破って一炉に溶かし、その欠点をなくし、その精華を選び取らねばならない。その作用は偉大にして比べるものがないであろう⁽³⁰⁾。

こうした旧文化と新文化の併用という文明戲の方向性が、のちに欧陽予倩の「歌劇」、つまり京劇と異なる新しい伝統劇の誕生につながっていくと松浦は指摘し、そして次のように論じる。

後発近代国家の近代化の過程において、『民族』的な自己は——前近代の自己は当然のように他者として認識され認定され、他者（「欧米」）の視点による自己改造を余儀なくされる。しかし、自己改造した自己が、自己であると認識されるためには、自己改造によって新しい民族性が創造され、それが多くの中国人に認知されねばならないだろう。（中略）文明戲が弾詞などの旧小説を繰り返し舞台にかけたのは、この点から見れば、決して近代化からの落伍ではなく、それ自身がまさに新しい民族性の創造だったと言える⁽³¹⁾。

近代の受容とは西洋＝他者を受け入れることに他ならない。その過程において自己が自己であり続けるためには、民族性という近代的な概念が必要になる。その結果、文明戲では近代演劇を目指すために伝統演劇の要素を取り入れざるを得ないという現象が生じた。文明戲は近代文化を創造するために伝統文化を利用していたのである。

4. 結 び

これまでの劉天華研究では、上海での体験はどのようにとらえられていたのだろうか。

「開明劇社」は当時上海で最も有名だった劇団の1つである。平日は公演の仕事が忙しく、1914年の2月から5月の期間だけでも、80近くの「新劇」を上演していた。ほとんど毎日が新しい演目だった。このように多くの新演目の仕事によって、劉天華の編曲や吹奏のプレッシャーは大きく、また多くのトレーニングとなった。編曲のスキルを伸ばすために、彼は音楽理論を研究した。吹奏の腕を上げるためには、「毎日夜明けから深夜まで休むことなく」1つの楽器を練習し続けた。この期間、劉天華は上海の有名な万国楽隊に入って勉強した。万国楽隊には多くのヨーロッパ出身の音楽の達人がいた。劉天華は彼らからピアノ、ヴァイオリン、金管楽器などの多くの楽器を学んだ。特に金管楽器の上達が速かった。「十里洋場」と呼ばれた上海と故郷の地方都市江陰では環境があまりに違い、西洋楽器の発達ふりと中国楽器の立ち遅れに、幼少期から伝統的な学問を学んできた劉天華は多くのことを感じた⁽³²⁾。(筆者訳)

劉天華にとって上海での体験は、音楽の修行時代であり、また多くの西洋楽器に触れ、親しむ貴重な機会だった。そして、西洋楽器に圧倒され、中国楽器の貧弱さを思い知らされた時期でもあった。

しかし劉天華が上海で学んだのはこれだけだろうか。伝統劇＝「旧劇」と一線を画して新しい近代演劇を作ろうとしていた文明戯＝「新劇」の劇団が、作品中に「旧劇」の要素である伝統歌唱を取り入れ、さらにそれが評論家や観客に受け入れられていることから、何かを感じはしなかったろうか。新しい演劇を目指した文明戯＝新劇が、旧劇の要素を取り入れていることの意味についても、考察をしたのではないだろうか。劉天華の上海での収穫は、古い要素を取り入れながら新しいものを創造していた文明戯から、中国古来の音楽である国楽に改良を加えて新しい中国音楽を作り出す国楽改進というライフワークの糸口を見つけたことである。

文明戲が衰退した後、文明戲出身の人材は、ほかの分野で活躍を続ける。欧陽予倩は伝統劇の世界で「歌劇」という新しい形式を生み出し、鄭正秋は草創期の中国映画界の重要人物となる。開明社のリーダー朱旭東も、後に京劇の名優である尚小雲の下で京劇の近代化に尽力をしたという⁽³³⁾。

文明戲の歴史にはほとんど名を残さなかった楽団員の劉天華は、上海で見た文明戲から、新旧両文化の精髓を取り入れることで新しい中国文化を創造していく1つの方向性を学び、それを国楽の改革に応用し、自分の音楽を生み出すのである。上海から帰郷後、彼は音楽教師をつとめながら、名人から二胡や琵琶といった中国楽器を学び、国楽隊や講習会を指導することで後進を育て、「病中吟」などの名曲を創作した。こうした活動はやがて彼を北京大学という最高学府へ導く。劉天華はその地でさらなる飛躍を実現するのである。

《注》

- (1) 劉天華の生い立ちについては劉北茂 2004 p. 85-98, 方立平 2009 p. 257-275 を参照した。
- (2) 長谷川（久米井）2012
- (3) この3作品の楽譜の発表は以下の通りである。
 - 月夜『音楽雑誌』2期（1928年2月）五線譜，工尺譜
 - 病中吟『音楽雑誌』8期（1930年1月）工尺譜
 - 空山鳥語『劉天華先生紀念冊』（1933年）五線譜，工尺譜
 楽譜の最初の発表を確定稿初版と考えるのであれば、これらの曲が1921年の段階でどの程度完成していたのかは不明である。
- (4) 『音楽雑誌』2期～6期に翻訳「曲調配和声法初歩」を連載している。原著者はJ. E. Verhamとなっているが、詳細は不明。
- (5) 蕭友梅 1933
- (6) 注3以外に劉天華が生前楽譜を発表した楽曲は以下の通り。
 - 琵琶独奏曲「改進操」『音楽雑誌』1期（1928年1月）工尺譜，五線譜
 - 二胡独奏曲「閑居吟」『音楽雑誌』4期 1928年10月）五線譜，工尺譜
 - 琵琶独奏曲「虚籁」『音楽雑誌』7期（1929年8月）工尺譜
 - 琵琶独奏曲「歌舞引」『音楽雑誌』9期（1930年1月）工尺譜

二胡独奏曲「光明行」『音楽雑誌』10期（1932年2月）工尺譜

- (7) たとえば瀬戸 2009 は、「文明戯」という名称が使われ始めたのが最盛期以降（1917年以降）であることを指摘し、「文明戯」とは革命理念を喪失して凋落した「新劇」に対する否定的な呼び方であったと論じている。瀬戸の論に準じれば、劉天華が活躍していた1912年から1914年の時期の文明戯は「新劇」と称されるべきである。
- (8) 汪優遊 1934。本論では『中国近代文学論文集——戯劇卷 1919-1949』p. 313-335（中国社会科学出版社、1988年）をテキストとした。
- (9) 神山 2009 p. 109
- (10) 新文化運動以降の話劇のみを正統な近代演劇ととらえる中国近代演劇史を見直す試みとして、近年文明戯が再評価されている。2007年に北京で開催された「春柳社百年記念国際シンポジウム」では、日中の演劇研究者によって文明戯が多様な角度から再検証された。その成果は『文明戯研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』として出版された。
- (11) 宋宝珍 2009, 朱双雲 1914 による。
- (12) 徐半梅 1957 p.46-47
- (13) 「東西洋」は日本、「歌舞劇」は歌舞伎を指すと思われる。
- (14)~(17) 朱双雲 1914
- (18) 黄愛華 2001 p. 259
- (19) 朱双雲 1914, 徐半梅 1957 p. 46。「江蘇旅京公学」に関しては未詳。「公学」は私立大学に相当する教育機関で、「旅京」とは北京（首都）滞在の意味を表すので、清朝末期到北京に設立された江蘇出身者を対象とした教育機関と思われる。
- (20) 李炎鋳 1996
- (21) 悲天 1915
- (22) 悲天 1915, 朱洪 2007 p. 14
- (23) 徐半梅 1957 p. 47
- (24) 松浦 2005 付録の『申報』広告調査を参照。
- (25) 黄愛華 2001 p. 258
- (26) 詳しくは黄愛華 2001 16章~18章, 2006, 吉田 1991を参照。なお、梅蘭芳は梅蘭芳 1961においてこの来日公演に劉天華が同行したと語っているが、それは記憶違いと思われる。
- (27) 本項の文明戯における伝統歌唱の採用に関する問題については、主に松浦 2005, 2009を参照した。
- (28) 松浦 2009 p. 241

- (29) 馮叔鸞「戲劇改良論」（『嘯虹軒劇話』中華図書館，1914年）松浦2009 p. 244 より引用
- (30) 沈芳塵「戲劇潮流」（『鞠部叢刊』交通図書館，1918年）松浦2009 p. 244 より引用
- (31) 松浦2009 p. 248
- (32) 方立平2009 p. 260
- (33) 黄愛華2001 p. 253

参考文献

◎文明戲，文明戲関係者，演劇に関するもの

- 朱双雲1914『新劇史』上海新劇小説社（本論では趙驥校勘版，文匯出版社，2015年をテキストとした。）
- 徐半梅1957『話劇創始期回憶録』（中国戲劇出版社）
- 黄愛華2001『中国早期話劇與日本』（岳麓書社）
- 范石渠／趙驥校勘『新劇考』2015（文匯出版社）
- 朱双雲／趙驥校勘2015『初期職業話劇史料』（文匯出版社）
- 天悲2015「朱旭東軼事」（『戲劇叢報』1）
- 汪優遊1934「我的俳優生活」（『社会月報』第1巻1-3，5期）
- 梅蘭芳1961「戲劇參加辛亥革命的幾件事」（『戲劇報』6期）
- 黄愛華2006「“中華木鐸新劇”在日本的公演」（『浙江芸術職業学院学報』）
- 瀬戸宏2005『中国話劇成立史研究』（東方書店）
- 飯塚容ほか2009『文明戲研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』（東方書店）
- 吉田登志子1991『『中華木鐸新劇』の来日公演について——近代における日中演劇交流の一断面』（『日本演劇学会紀要』29号）
- 松浦恆雄2005「文明戲の実像——中国演劇における近代の自覚——」（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター『中国における都市型知識人の諸相』）
- 宋宝珍／藤野真子訳2009「文明戲における劇場の状況と上演形態」（『文明戲研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』東方書店）
- 松浦恆雄2009「新しい『民族形式』の創造と文明戲」（『文明戲研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』東方書店）
- 神山彰「日本の新派，新劇と春柳社」2009（『文明戲研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』東方書店）

ロベール・ビニヤール 1969『世界演劇史』(白水社)

アラン・ヴィアラ 2008『演劇の歴史』(白水社)

◎劉天華および音楽に関するもの

国楽改進社『音楽雑誌』1-10 (1928~1931)

陳振鐸 1997『劉天華的創作和貢獻』(中国文聯出版公司)

劉育和ほか 1997『劉天華全集』(人民音楽出版社)

『中国音楽詞典』(人民音楽出版社, 2003年)

劉北茂 2004『劉天華音楽生涯』(人民音乐出版社)

方立平ほか 2009『劉天華先生研究與回憶』(上海教育出版社)

王国潼 2010『劉天華二胡曲』(人音楽出版社)

徐瑞岳 1990『劉半農評伝』(上海文芸出版社)

朱洪 2007『劉半農伝』(東方出版社)

蕭友梅 1933「聞国楽導師劉天華先生去世有感」(『劉天華先生紀念冊』)

李炎鋈 1996「中国最早の中西合璧音舞盛会」(『南京史志』2期)

方立平 2009「劉天華年譜」(方立平主編『劉天華先生研究與回憶』上海教育出版社)

『新音楽辞典』(楽語)(音楽之友社, 1977年)

榎本泰子 1998『楽人の都上海——近代中国における西洋音楽の受容』(研文出版)

長谷川(久米井)敦子 2012「劉天華研究序説」(『語学研究』126号)

久米井敦子 2014「劉天華の音楽観——北京大学時代を手掛かりに——」(『語学研究』130号)

久米井敦子 2015「国楽改進社幹事社員——その功績と限界——」(『語学研究』133号)

(原稿受付 2017年11月20日)

〈論 文〉

Analisis Kesalahan Kalimat Bahasa Indonesia Dalam Karangan Mahasiswa Jepang

Toshio SUENOBU

Abstract

This error study of language aims to describe the understanding of sentences and errors in the composition of Indonesian sentences by Japanese students who are studying Indonesian as a foreign language. This research data is derived from Indonesian essay written by Japanese students.

Based on data analysis, we can draw three conclusions. First, the mastery of the construction of Japanese students' sentences is still in the stage of transitional construction. Second, grammatical sentence constructions made by students include: (a) single sentences with simple patterns, i.e., Subject-Predicate, Subject-Predicate-Object, and Subject-Predicate-Adverbial.; (b) sentences with predicates of transitive and intransitive active verbs and adjectives. Third, the students' sentence errors are a sequence of words, the predicate filler, double predicate, and the omission of the description element.

Kata Kunci: kesalahan kalimat, pembelajaran bahasa

1. Pendahuluan

Bagi bangsa Indonesia, bahasa Indonesia tidak hanya sebagai bahasa negara dan bahasa nasional, tetapi juga sebagai bahasa kedua.

Kedudukannya sebagai bahasa negara dan bahasa nasional menyebabkan bahasa Indonesia dikuasai oleh penutur dengan cara diperoleh, tidak dikuasai melalui proses pembelajaran, meskipun bahasa Indonesia menjadi bahasa kedua. Hal ini dimungkinkan karena bahasa Indonesia digunakan dalam semua aspek kehidupan nasional di negara Indonesia.

Bahasa Indonesia dapat dilihat dari tiga sudut pandang, yaitu dari segi intern linguistik, segi sosiologis, dan segi yuridis (Harimurti, 1991: 2). Dari sudut intern linguistik, bahasa Indonesia merupakan salah satu varian historis, varian sosial, maupun varian regional dari bahasa Melayu. Sebagai varian historis, bahasa Indonesia merupakan kelanjutan dari bahasa Melayu, bukan dari bahasa lain di Asia Tenggara. Sebagai varian sosial, bahasa Indonesia dipergunakan oleh sekelompok masyarakat yang menamakan diri bangsa Indonesia, yang tidak sama dengan bangsa Malaysia atau bangsa Brunei yang mempergunakan varian bahasa Melayu lain. Sebagai varian regional, bahasa Indonesia dipergunakan di wilayah yang sekarang disebut Republik Indonesia. Namun, dari sudut sosiologis, bahasa Indonesia boleh dianggap lahir atau diterima eksistensinya dalam Sumpah Pemuda 28 Oktober 1928. Secara Yuridis bahasa Indonesia diakui secara resmi pada tanggal 18 Agustus 1945.

Salah satu usaha yang ditawarkan dalam kongres bahasa Indonesia 1954 dan ditawarkan oleh Moeliono (1981) adalah pembelajaran melalui jalur pendidikan. Tujuan pembelajaran bahasa Indonesia tidak hanya sekedar mampu menggunakan secara lisan, tetapi juga mampu menggunakan secara tertulis dengan tetap mengikuti kaidah bahasa yang telah dirumuskan. Bahkan Halim (1979: 19) secara tegas menyatakan bahwa tujuan pengajaran bahasa Indonesia berhubungan erat dengan masalah bahasa Indonesia baku karena sasaran yang hendak dicapai adalah penguasaan pemakaian bahasa Indonesia yang baik dan benar. Dalam perkembangannya bahasa Indonesia tidak hanya dipelajari oleh bangsa Indonesia, tetapi juga oleh bangsa

dari negara lain, misalnya negara Australia, China, Korea, Rusia, termasuk Jepang. Dalam konteks ini bahasa Indonesia telah menjadi bahasa asing bagi negara-negara tersebut.

Pembelajaran bahasa Indonesia sebagai bahasa asing dapat dilakukan dengan dua cara, yaitu pembelajar langsung datang ke Indonesia dan mengikuti pembelajaran di sejumlah universitas yang membuka kelas pembelajaran bahasa Indonesia sebagai bahasa asing. Selain itu, pembelajar juga bisa mempelajari bahasa Indonesia di negara masing-masing yang dipandu oleh dosen yang memiliki kemampuan bahasa Indonesia yang baik. Meski demikian, kedua bentuk itu pada prinsipnya sama, yaitu mempelajari bahasa Indonesia sebagai bahasa asing.

Pembelajaran bahasa, termasuk bahasa asing mencakup dua unsur, yaitu pemahaman dan produksi yang keduanya merupakan sisi lain dari dikotomi kompetensi-performansi. Menurut Douglas (2007) pemahaman tidak hanya dimaknai sebagai kemampuan individu dalam memahami kaidah bahasa, tetapi juga memahami produksi bahasa, baik lisan maupun tulis. Sebaliknya, produksi dikonsepsi sebagai hasil yang dapat dilihat secara nyata yang berupa penggunaan bahasa, baik lisan maupun tulis. Dalam kaitan dengan bahasa, pengamatan dan penelitian yang pernah dilakukan membuktikan keunggulan umum pemahaman atas produksi. Artinya, pembelajar tampaknya memahami lebih banyak produksi daripada yang mereka produksi. Mereka mungkin memahami isi atau pesan kalimat-kalimat dalam bahasa Indonesia, tetapi mereka tidak mampu membuat kalimat yang dibacanya atau didengarnya (Brown, 2000).

Pemahaman isi atau pesan yang terkandung dalam kalimat bukanlah tujuan akhir, tujuan ahirnya adalah kemampuan pembelajar untuk dapat mengomunikasikan pesan dengan bahasa Indonesia. Artinya, performansi yang diwujudkan bentuk produksi menjadi indikator penguasaan bahasa Indonesia. Dalam kenyataannya penguasaan seperti itu tidak mudah, termasuk bagi mahasiswa Jepang

yang sedang belajar bahasa Indonesia sebagai bahasa asing. Bahasa Indonesia memiliki sistem gramatikal yang berbeda dengan bahasa Jepang. Hal itu dapat dilihat dari sistem pembentukan kata, frasa, dan kalimat. Artinya, tipologi bahasa Indonesia dan bahasa Jepang berbeda jauh.

Dalam kaitan ini Chomsky (dalam Richeit dan Hans, 2008) membedakan antara kompetensi dan performansi. Kompetensi berkaitan dengan pengetahuan penutur tentang bahasanya, sedangkan performansi berkaitan dengan kemampuan menggunakan bahasa. Penutur asli diasumsikan memiliki pengetahuan yang baik tentang sistem bahasanya sehingga dia tidak pernah memproduksi tuturan yang dianggap oleh penutur asli lainnya sebagai tuturan yang tidak gramatikal. Penutur asli memiliki kemampuan untuk mengenali dan mengoreksi tuturan yang salah atau keliru. Hal itu berbeda dengan pembelajar yang sedang mempelajari bahasa asing atau bahasa kedua. Mereka umumnya belum dapat mengenali kalimat-kalimat atau tuturan yang benar atau yang salah sehingga mereka pun belum memiliki kemampuan untuk mengoreksinya. Keadaan ini sangat wajar dan terjadi apalagi sistem bahasa pertama pembelajar berbeda sama sekali dengan sistem bahasa yang sedang dipelajarinya, seperti bahasa Indonesia dan bahasa Jepang. Untuk itu diperlukan kajian kesalahan berbahasa yang dapat memetakan wilayah yang telah atau sedang dikuasai dan wilayah yang belum dikuasai.

Perbedaan tersebut menjadi faktor penghambat penguasaan bahasa Indonesia dan berpotensi sebagai penyebab berbagai kesalahan yang dilakukan mahasiswa dalam memproduksi kalimat bahasa Indonesia. Namun, penguasaan dan kesalahan yang telah dicapai dan dialami oleh mahasiswa tidak akan dapat terungkap dengan baik jika belum ada kajian yang dapat mendeskripsikan wilayah gramatikal yang telah dikuasai dan yang masih banyak kesalahannya. Dengan dasar itu, penelitian ini mencoba mendeskripsikan dua hal, yaitu konstruksi kalimat yang telah dikuasai dan kesalahan-kesalahan

kalimat yang dilakukan oleh mahasiswa. Hal ini didasarkan atas pendapat Richards (1974) bahwa kesalahan berbahasa hendaknya tidak dipandang sebagai suatu kekacauan, tetapi dipersepsi sebagai cara orang untuk menguasai bahasa. Dengan penjabaran secara terperinci, kesalahan akan dapat diketahui bentuk-bentuk yang telah dikuasai dan bentuk-bentuk yang belum dikuasai, sehingga pengajar atau guru memiliki gambaran wilayah yang sudah ataupun belum dikuasai.

Alasan lainnya adalah analisis kesalahan dapat memetakan atau memotret indikasi kesulitan pembelajar terhadap aspek bahasa tertentu yang hanya dapat dijelaskan dengan kebiasaan dalam bahasa pertamanya dan hasil transfernya dalam bahasa yang sedang dipelajarinya (Lado, 1975). Dengan data kesalahan tersebut, kesulitan pembelajar dapat dipetakan dan diprediksi dengan cara membandingkan konstruksi antara bahasa ibu dan bahasa target sehingga dapat meminimalkan kesulitan dan kesalahan. Oleh karena itu, dapat dikatakan bahwa analisis kesalahan berbahasa cukup erat kaitannya dengan pembelajaran bahasa. Untuk memahami proses pembelajaran, kita harus mengkaji perkembangan penguasaan pembelajar dalam memproduksi bahasa yang dipelajarinya. Dengan data tersebut, pengajar atau pendidik dapat memperbaiki tiga hal, yaitu identifikasi bahan pembelajaran, silabus dan program remedial. Semuanya berkaitan dengan kajian analisis kesalahan berbahasa (Richards, 2008).

Penelitian ini bukanlah penelitian yang pertama kali. Sudah ada penelitian tentang kesalahan berbahasa yang dilakukan sebelumnya. Misalnya, pada tahun 1974, Burt melakukan penelitian yang menganalisis kesalahan pada orang dewasa di kelas. Tujuan penelitian ini adalah mengetahui kesalahan berbahasa dari sudut pandang penutur atau penulis. Tekanan peneliti ini adalah mendeskripsikan kesalahan yang menyebabkan penutur atau penulis salah memahami pesan yang disampaikan melalui bahasa kedua, yaitu bahasa Inggris. Area

sintaksis merupakan penyebab utama kesalahpahaman pesan. Suhendra Yusuf (2012) mengkaji strategi yang digunakan oleh pembelajar bahasa Indonesia di Amerika Serikat dalam memahami bahasa kedua, yaitu bahasa asing. Hasilnya diperoleh strategi pembelajaran bahasa asing dan deskripsi kesulitan mereka dalam menguasai bahasa Inggris akibat adanya perbedaan struktur bahasa Indonesia dengan bahasa Inggris. Penelitian yang dilakukan Aqsa Jaben (2015) bertujuan mengkaji kesalahan berbahasa yang dibuat oleh pembelajar bahasa asing dan bahasa kedua dalam rangka memahami strategi dan teknik yang digunakan dalam proses pembelajaran bahasa asing dan bahasa kedua. Kajian yang keempat adalah kajian yang dilakukan oleh Junaisyah dan Afirin (2014) tentang analisis kesalahan berbahasa Indonesia. Kajian ini hanya mendeskripsikan sejumlah kesalahan berbahasa Indonesia dari sudut pandang kebiasaan yang dilakukan oleh penutur Indonesia. Kajian ini sama sekali tidak menyertakan kesalahan yang dilakukan oleh penutur asing. Sebelumnya juga ada kajian yang serupa yang dilakukan oleh Setyowati (2013). Hasil kajian tidak jauh berbeda dengan yang dilakukan oleh Junaisayah dan Arifin, yaitu memetakan bentuk-bentuk bahasa yang salah dan yang baku secara teoretis. Dengan kata lain, kajian kesalahan berbahasa memang sudah pernah dilakukan dalam berbagai bahasa, seperti bahasa Inggris, bahasa Arab, tetapi bukan bahasa Indonesia sebagai bahasa asing.

Lebih lanjut kontribusi linguistik hasil kajian penguasaan bahasa pada aspek pembelajaran bahasa dapat dilihat dari kajian perbandingan sistem bahasa kedua dengan sistem bahasa ibu. Kajian ini juga dapat digunakan untuk mengetahui wilayah yang dianggap sulit bagi pembelajar sehingga dapat dijadikan dasar oleh guru atau pengajar untuk menekankan cakupan materi pembelajarannya. Dengan kajian ini, guru mendapat gambaran bagian-bagian yang umumnya sulit dimengerti atau dipahami oleh pembelajar bahasa kedua.

Salah satu cara yang cukup representatif untuk dapat melihat hasil pembelajaran bahasa kedua adalah dengan mengumpulkan data pembelajar, baik dalam bentuk tulis maupun lisan. Data tersebut berupa penggunaan dalam bahasa target, yaitu bahasa yang sedang dipelajari (Ellis, 1997: 4). Pembelajaran bahasa kedua tidak hanya terfokus pada kemampuan komunikasi lisan, tetapi juga kemampuan menulis yang sesuai dengan ciri-ciri formal bahasa target. Saat difokuskan pada kemampuan komunikasi, fokus kajian dapat diarahkan pada kemampuan dalam melafalkan kata, frasa, kalimat yang bermakna, sedangkan kajian pembelajaran bahasa yang difokuskan pada kemampuan menulis dapat diarahkan kepada kemampuan siswa dalam merangkai kata menjadi frasa; frasa menjadi kalimat; dan kalimat menjadi paragraf. Kajian bagian ini umumnya terfokus pada kemampuan siswa dalam menaati sistem kaidah bahasa, baik kaidah morfologi, maupun sintaksis. Dengan kaidah tersebut dapat diketahui kemampuan dan kesalahan yang dibuat siswa dalam tataran tersebut.

Kajian pembelajaran bahasa kedua digunakan untuk mengetahui dua hal. *Pertama*, kajian bertujuan untuk mengetahui kesalahan yang dilakukan pembelajar dalam menggunakan ciri-ciri gramatikal bahasa target. Dengan tujuan ini, peneliti menggunakan data untuk menemukan berbagai kesalahan gramatikal. *Kedua*, kajian bertujuan untuk mengetahui sejumlah kaidah yang telah dikuasai oleh pembelajar. Dengan tujuan ini, umumnya peneliti akan mengajukan data-data penggunaan bahasa target yang benar secara gramatikal. Hal ini dijadikan dasar untuk menunjukkan penguasaan pembelajar dalam memahami kaidah.

Bagi orang dewasa, penguasaan bahasa kedua dapat dilakukan dengan dua cara, yaitu melalui pemerolehan dan pembelajaran (Krashen, 1981). Pemerolehan merupakan proses penguasaan bahasa kedua atau bahasa asing yang dilakukan secara bawah sadar dengan jalan berkomunikasi langsung dengan penutur bahasa yang sedang

dipelajari. Pemahaman kaidah gramatikal bahasa kedua juga dilakukan secara bawah sadar. Artinya, pembelajar memahami kaidah bahasa tanpa ada manipulasi atau kondisi yang sengaja dibuat dengan tujuan penguasaan gramatikal. Penguasaan bahasa kedua seperti ini memiliki kesamaan dengan pemerolehan bahasa pertama oleh anak-anak. Pada umumnya dalam pemerolehan pembelajar kurang tanggap terhadap kaidah-kaidah bahasa kedua yang digunakannya. Mereka tidak dapat menjelaskan struktur kalimat yang digunakannya. Bagi mereka fokus utamanya adalah isi pesan dapat dikomunikasikan kepada mitra tutur. Hal ini berarti pembelajar lebih tahu bagaimana berbahasa atau menggunakan bahasa dalam tindak komunikasi daripada tahu tentang bahasa. Dengan kata lain performansi lebih utama dibandingkan dengan kompetensi.

Pembelajaran bahasa kedua merupakan proses penguasaan bahasa oleh pembelajar secara sadar. Kaidah-kaidah bahasa kedua dikaji dan dipelajari secara terstruktur. Dalam proses ini kaidah-kaidah kebahasaan dijelaskan secara rasional. Kaidah kebahasaan dikuasai melalui lingkungan yang artifisial dan formal manipulatif. Artinya, mereka tidak dihadapkan pada situasi berbahasa sesungguhnya, tetapi dihadapkan pada kasus-kasus berbahasa dengan memberi penjelasan-penjelasan tata bahasa dan pembetulan atas kesalahan-kesalahan berdasarkan tata bahasa. Dengan cara ini, pembelajar diharapkan dapat memahami dan menjelaskan kaidah bahasa dengan benar.

Secara teoretis, setiap pembelajar bahasa memiliki kompetensi bahasa ibu atau bahasa pertama. Kompetensi itu terbagi menjadi dua bagian besar, yaitu kompetensi organisasi dan kompetensi pragmatik. Kompetensi organisasi terdiri atas dua aspek kompetensi, yaitu kompetensi gramatikal dan kompetensi tekstual. Kompetensi pragmatik mencakup kompetensi ilokusi dan kompetensi sosiolinguistik. Dengan kata lain kompetensi gramatikal merupakan salah satu bagian dari kompetensi bahasa. Keseluruhan kompetensi itu

digunakan bagi setiap pembelajar untuk memahami dan menguasai bahasa lain, termasuk bahasa kedua atau bahasa asing. Bagi pembelajar bahasa asing, kompetensi yang harus diketahui lebih awal adalah kompetensi gramatikal. Kompetensi gramatikal merupakan pengetahuan pembelajar tentang kosakata, morfologi, sintaksis, fonologi, dan grafologi. Berikut diagram kompetensi yang diadaptasi dari Bachman (1990: 67).

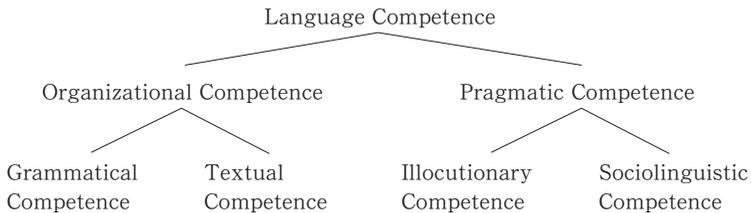


Diagram 1 pembagian kompetensi bahasa

Berkaitan dengan pemerolehan ada tiga tahapan pemerolehan bahasa. Pertama, pembelajar memperoleh pengetahuan kebahasaan dengan cara membaca atau mendengar orang berbicara. Periode ini disebut sebagai periode diam atau *silent period*. Pada tahap ini, pembelajar bahasa kedua mencoba memahami kaidah bahasa dengan cara membaca bacaan bahasa target atau dengan cara mendengarkan penutur asli berbicara. Tahap berikutnya adalah pemerolehan urutan: urutan afiks, dan urutan frasa. Tahap ketiga adalah pemerolehan urutan lanjutan (*sequence of acquisition*) berkaitan dengan struktur kalimat. Pada saat proses penguasaan struktur gramatikal, biasanya pembelajar melakukan kesalahan secara gradual. Artinya, mereka tidak hanya melakukan kesalahan dalam membuat kalimat, tetapi juga dapat membuat kalimat yang benar seperti yang dihasilkan oleh penutur asli. Proses seperti ini disebut sebagai konstruksi transisional (Ellis, 1997). Indikator proses ini dapat dilihat dari: (a) pembelajar gagal membuat verba dengan afiks tertentu dengan benar dan (b) pembelajar melakukan generalisasi berlebihan.

Dalam artikel ini konsep kesalahan (*error*) dan kesilapan (*mistakes*) dibedakan. Kesalahan merefleksikan ketidaktahuan pembelajar tentang kesalahan yang telah dilakukan. Mereka tidak tahu bahwa kalimat yang dibuatnya salah. Bahkan mereka juga tidak tahu bahwa kalimat yang dibuatnya juga benar. Sebaliknya, kesilapan merefleksikan kesalahan yang dilakukan pembelajar, tetapi pembelajar tahu bahwa dia membuat suatu kesalahan. Dengan kata lain, sesungguhnya dia mengetahui konstruksi yang benar. Namun, oleh suatu sebab tertentu, dia mengalami kekeliruan (Ellis, 1997: 17). Sebelumnya, Richards (1974) membuat perbedaan antara konsep kesilapan (*mistake*) dan kesalahan sejati (*true error*). Kesilapan merupakan aspek performansi, bukan aspek kompetensi. Artinya, seorang pembelajar melakukan kesalahan dalam memproduksi satuan bahasa, tetapi dia sadar akan kesalahan yang dia lakukan. Kesalahan sejati berkaitan dengan kompetensi. Artinya, pembelajar benar-benar belum mengetahui kaidah-kaidah yang benar dan yang salah, sehingga dia tidak dapat menentukan apakah kalimat yang dibuatnya benar atau salah. Dengan kata lain, kalimat-kalimat yang salah yang dihasilkan oleh pembelajar dapat diklasifikasikan secara sistematis penyimpangannya, tetapi kalimat-kalimat yang benar tidak dapat dijadikan fakta penguasaan.

Contoh: *the big of them contained a snake*. Penggunaan *past tense* pada verba *contain* sudah benar, tetapi pada bagian akhir dia mengatakan *the basket contain a snake*. Bentuk *past tense contain* pada kalimat tersebut salah dan dia tahu kesalahan itu. Contoh lain pada bagian awal narasi dia menulis: *Kakak sedang menulis surat*. Kalimat tersebut benar dan dia tahu bahwa kalimat itu benar. Akan tetapi, di bagian lain tanpa sengaja dia menulis atau mengucapkan *dia sedang nulis proposal*. Kata *nulis* salah seharusnya *menulis*. Secepatnya dia akan mengoreksi ucapannya dengan mengatakan atau menggantinya dengan kata *menulis*.

Kesalahan tidak sistematis. Artinya kesalahan yang dilakukan

tidak dapat diprediksi, tidak pada tempat yang sama. Namun, sangat mungkin ada yang bersifat universal yang dialami oleh setiap pembelajar, misalnya urutan kata dalam bahasa target. Namun, ada juga yang tidak universal, yaitu menyesuaikan antara bahasa target dengan bahasa ibu. Dalam hal ini, bahasa pertama menjadi penyebab kesalahan produksi bahasa target. Dengan kata lain peranan bahasa pertama terhadap penguasaan bahasa kedua sangat tinggi (Krashen, 1981: 67). Interferensi merupakan salah satu gejala yang disebabkan oleh peran pemerolehan bahasa pertama. Hal ini terjadi karena pembelajar mencoba mengganti kaidah bahasa kedua dengan kaidah bahasa pertama. Ini menunjukkan terjadinya proses penguasaan bahasa (Krashen, 1981: 67) yang dalam pemerolehan bahasa asing dapat saja terjadi kesilapan interferensi. Dalam pandangan Richards (1974), kesalahan ini dimasukkan dalam jenis kesalahan intralingual dalam bentuk transfer lingual (*lingual transfer*), yaitu kesalahan akibat penerapan kaidah bahasa yang berbeda. Dalam hal ini, kaidah bahasa pertama diterapkan ke dalam bahasa kedua. Selinker (1969) menggunakan istilah lain untuk mengklasifikasi kesalahan yang demikian, yaitu kesalahan transfer bahasa (*language transfer*).

Penyebab kesalahan kedua adalah kesalahan intralingual. Kesalahan ini mencakup penghilangan (*omission*), generalisasi berlebihan, dan ketidaktahuan pembatasan kaidah (Richard, 1974; Ellis, 1997). Kesalahan penghilangan (*omission*) merupakan kesalahan yang disebabkan oleh penerapan kaidah yang tidak sempurna. Ada bagian gramatikal yang dihilangkan, sehingga konstruksinya tidak sempurna, misalnya penghilangan artikel atau preposisi. Penghilangan kedua bentuk ini akan mengganggu kebermaknaan kalimat dan menyebabkan kalimat tidak gramatikal. Sebagai contoh, kesalahan dalam memilih artikel *a* di awal kata sebagai penanda tunggal dan *s* di akhir kata sebagai penanda jamak dalam bahasa Inggris berakibat kalimat tidak gramatikal. Demikian juga penghilangan preposisi dalam bahasa Indonesia dalam sebuah kalimat akan

menyebabkan kalimat tidak gramatikal dan sulit dipahami. Kesalahan generalisasi berlebihan (*overgeneralization*) biasanya dilakukan oleh pembelajar dengan melihat yang terdapat dalam bahasa pertamanya. Kesalahan generalisasi berlebihan berprinsip bahwa kesalahan satuan bahasa yang dihasilkan pembelajar tidak merefleksikan kaidah dalam bahasa ibunya sebagaimana pada faktor transfer bahasa, tetapi mencerminkan generalisasi yang berlebihan berdasarkan sebagai data pada bahasa kedua. Misalnya, dalam bahasa Indonesia terdapat bentuk pembeda untuk laki-laki dan perempuan seperti pada kata *mahasiswa mahasiswi*, *pemuda pemudi*, dan *karyawan karyawati*. Berdasarkan data tersebut, pembelajar membentuk kata *remaja* dan *remaji*. Padahal bentuk *remaji* tidak terdapat dalam bahasa Indonesia. Kesalahan demikian disebut sebagai kesalahan transfer (*transfer error*) (Ellis, 1997: 19) atau interferensi intralingual (*intralingual interference*) (Richards, 1974).

Dari sudut pandang bahasa pembelajar, pembelajar melakukan kesalahan dalam membuat kalimat (penghilangan atau overgeneralisasi) sangat mungkin disebabkan oleh faktor konteks linguistik (*linguistic context*), *konteks psikolinguistik*, dan *situasi sosiolinguistik* (Richards, 1974; Ellis, 1997). Kesalahan yang disebabkan faktor konteks linguistik dapat diketahui ketika mereka menggunakan konteks yang ada dalam bahasa mereka, sementara konteks tersebut tidak ada dalam bahasa target. Misalnya, pembelajar kesulitan untuk menentukan bentuk yang akan dipilih *bermain*, *mainan*, *memainkan*, atau *pemain*. Penggunaan satu bentuk akan memicu penggunaan bentuk lain. Jika kata *bermain* yang dipilih akan muncul bentuk *akan*, *tidak*, *sedang*, *telah* di depan kata *bermain*, tetapi jika yang dipilih adalah *mainan* tidak akan muncul bentuk-bentuk itu. Kesalahan juga dapat terjadi karena konteks situasional (*situational context*). Pembelajar sangat mungkin menghasilkan kalimat yang cocok dengan konteks situasinya, tetapi tidak berterima dalam konteks situasi penutur asli. Misalnya, kalimat *saya*

menonton gadis, seharusnya menjadi *saya melihat seorang gadis*. Contoh lain adalah pemilihan bentuk formal dan informal. Dalam bahasa Indonesia bentuk formal ditandai dengan penggunaan afiks secara lengkap, sedangkan bentuk informal umumnya tidak menggunakan bentuk yang lengkap. Pada umumnya pembelajar lebih menyukai penggunaan bentuk formal meskipun situasi penggunaannya informal. Misalnya ketika mereka di pasar bentuk yang dipilih adalah *Berapakah harga satu kilogram mangga ini?* seharusnya bentuk informal seperti *Berapa sekilo?*

Faktor berikutnya yang memengaruhi akurasi produksi bahasa target adalah konteks psikolinguistik (*psycholinguistic context*). Konteks ini mengaitkan kesiapan pembelajar dalam memproduksi satuan bahasa dalam bahasa target. Kesiapan pembelajar akan mempengaruhi akurasi bahasa yang dihasilkan. Faktor ketiga adalah situasi sosiolinguistik. Penggunaan bahasa dengan konteks yang berbeda akan menghasilkan perbedaan ragam dan tipe bahasa. Suatu istilah yang digunakan oleh pembelajar sangat mungkin berkaitan dengan konteks sosiokultural tertentu pada bahasa ibu. Sebaliknya, dalam konteks yang sama, hal ini belum tentu memiliki dampak atau kaitan erat dengan sosiokultural bahasa target atau bahasa kedua.

2. Metode Penelitian

Data kajian ini adalah karangan mahasiswa Jepang yang sedang mempelajari bahasa Indonesia sebagai bahasa asing. Umumnya mereka belum mengenal atau mempelajari bahasa Indonesia. Karangan yang dipilih adalah hasil karya mereka dalam bentuk tulisan tangan. Karangan yang menjadi sumber data sebanyak 32 karangan. Dari sumber data tersebut dilakukan pemilahan bentuk kalimat yang benar dan bentuk kalimat yang salah. Parameter yang digunakan adalah kaidah atau sistem bahasa Indonesia. Selain itu,

untuk memastikan akurasi data juga dilakukan *expert judgment*, yaitu dimintakan pertimbangan atau pendapat pada penutur asli bahasa Indonesia yang memiliki kompetensi dan performansi baik.

3. Hasil dan Pembahasan

3.1. Penguasaan Kalimat

3.1.1. Kalimat Tunggal

Berdasarkan jumlah klausa, kalimat bahasa Indonesia dapat berupa kalimat tunggal dan kalimat majemuk. Kalimat tunggal merupakan kalimat yang dibentuk dari satu klausa, sedangkan kalimat majemuk merupakan kalimat yang terbentuk dari dua klausa atau lebih. Berkaitan dengan jenis kalimat tersebut, penguasaan mahasiswa Jepang terhadap kalimat bahasa Indonesia baru sebatas kalimat tunggal. Hal ini dapat dipahami karena untuk membentuk kalimat tunggal tidak diperlukan konstruksi yang kompleks. Dua atau tiga kata sudah dapat menjadi kalimat. Kalimat jenis ini yang paling dominan dikuasai oleh mahasiswa. Berikut contoh kalimatnya.

- (1) Saya sudah makan sate ayam.
- (2) Saya sudah menonton film.
- (3) Aku pergi ke laut.
- (4) Saya pergi ke Laut Enoshima.
- (5) Laut ini sangat indah.

3.1.2. Kalimat Tunggal Aktif

Dalam karangan mahasiswa Jepang didominasi penggunaan kalimat tunggal aktif, meskipun tidak semua kalimat aktif yang dibuatnya adalah benar. Secara teoretis, ada dua kalimat aktif, yaitu kalimat aktif transitif dan kalimat aktif intransitif. Kalimat aktif transitif merupakan kalimat yang memerlukan hadirnya objek, se-

dangkan kalimat aktif intransitif merupakan jenis kalimat yang tidak memerlukan hadirnya objek. Dari kedua jenis kalimat tersebut, mahasiswa Jepang lebih menguasai kalimat aktif intransitif dibandingkan dengan kalimat aktif transitif. Hal itu dapat dilihat pada data berikut.

- (6) Saya tidak bangun pagi-pagi.
- (7) Saya pergi dengan keluarga.
- (8) Saya pergi ke rock in Japan.
- (9) Saya pulang ke Jepang.
- (10) Saya pergi ke Kenya selama 11 hari pada musim panas.
- (11) Saya berwisata ke kebun binatang Masaimera.
- (12) Kita bermain-main di pantai.
- (13) Saya bekerja di pasar super.

Kalimat di atas merupakan kalimat aktif intransitif. Hal itu dapat dibuktikan dengan melihat verba pengisi predikatnya, yaitu *pergi*, *berwisata*, dan *bermain*. Kalimat aktif intransitif yang dikuasai memiliki ciri khas, yaitu umumnya menggunakan verba dasar dan hanya sebagian kecil verba berafiks *ber-* seperti *bermain*, *berwisata*, dan *bekerja*. Ciri khas lain adalah struktur kalimat aktif umumnya berpola S-P-K. Semua kalimat di atas memiliki pola S-P-K. Fakta lain yang menguatkan adanya dominasi penggunaan verba dasar adalah penyusunan kalimat aktif transitif yang dengan sengaja menghilangkan afiksnya seperti pada contoh berikut ini.

- (14) Saya beli ikan.
- (15) Saya sudah beli batik.
- (16) Saya sudah beli oleh-oleh.
- (17) Saya sudah beli sepeda motor.
- (18) Saya minta gaji.
- (19) Saya melihat kuil.

(20) Saya sudah melihat laut.

Kalimat (14) -- (18) sesungguhnya merupakan kalimat aktif transitif. Namun, dilihat dari verba dan ragam bahasa ada perbedaan dengan kalimat (19) dan (20). Predikat pada kalimat (14) -- (18) merupakan verba dasar, sedangkan predikat pada kalimat (19) dan (20) merupakan verba berafiks. Predikat pada kalimat (14) -- (18) sebenarnya berupa verba berafiks *meN-*, tetapi afiks tersebut tidak dimunculkan. Bentuk kalimat (14) -- (18) masih berterima bagi penutur bahasa Indonesia. Umumnya kalimat-kalimat tersebut digunakan dalam ragam santai.

Dalam komunikasi santai atau kausal kalimat-kalimat seperti itu justru yang paling banyak digunakan oleh penutur bahasa Indonesia. Misalnya, *Kamu sedang buat apa? Dia tidak minta uang, dan Saya sudah punya bukunya*. Namun, bentuk-bentuk seperti itu akan dianggap salah jika dilihat dari ragam formal karena tidak memenuhi salah satu syaratnya, yaitu afiksasi harus ditulis lengkap. Bahasa yang digunakan dalam ragam formal, baik bahasa tulis maupun lisan, tidak diperbolehkan menanggalkan afiks, semua afiks harus hadir. Oleh karena itu, kalimat-kalimat (14) a. -- (18) a. dalam ragam formal akan berubah seperti kalimat berikut ini.

- (14) a. Saya membeli ikan.
- (15) a. Saya sudah membeli batik.
- (16) a. Saya sudah membeli oleh-oleh.
- (17) a. Saya sudah membeli sepeda motor.
- (18) a. Saya meminta gaji.

Fakta tersebut menunjukkan bahwa mahasiswa Jepang belum sepenuhnya menguasai penggunaan afiks bahasa Indonesia, khususnya afiks *meN-*. Akibatnya, kalimat yang dihasilkan cenderung beragam santai. Hal itu berbeda dengan kalimat (19) dan (20)

yang secara nyata memunculkan afiks *meN* pada kata *membeli* dan *meminta*. Kalimat-kalimat seperti ini harus menjadi target penguasaan mahasiswa sehingga mahasiswa dapat membuat kalimat yang lengkap dan benar berdasarkan kaidah formal bahasa Indonesia. Namun, sebagai langkah awal penguasaan kalimat seperti pada data (14) a. - (18) a. merupakan modal dasar untuk menguasai kalimat-kalimat yang lebih lengkap.

Berbeda dengan kalimat aktif yang sudah banyak dikuasai oleh mahasiswa Jepang, kalimat pasif belum dikuasai. Meskipun ada data penggunaan kalimat pasif, datanya hanya sedikit dan salah. Artinya, mahasiswa Jepang mungkin tidak terbiasa menyusun informasi dalam bentuk kalimat pasif. Salah satu alasan yang dapat dikemukakan adalah penyusunan kalimat aktif jauh lebih mudah dibandingkan dengan kalimat pasif. Oleh karena itu, ada kecenderungan mahasiswa Jepang memilih kalimat aktif untuk menyampaikan maksudnya daripada kalimat pasif.

3.1.3. Kalimat Tunggal Berpola S-P, S-P-K, dan S-P-O

Secara teoretis, dalam bahasa Indonesia mengenal setidaknya lima konstruksi kalimat tunggal, yaitu (1) subjek — predikat (S-P), (2) subjek — predikat — objek (S-P-O), (3) subjek — predikat — pelengkap (S-P-Pel), (4) subjek — predikat — objek — pelengkap (S-P-O-Pel), dan (5). subjek — predikat — keterangan (S-P-K) (Alwi et al, 2008; Sugono, 2008). Dari kelima konstruksi kalimat tersebut, baru ada tiga yang dikuasai oleh mahasiswa Jepang, yaitu konstruksi S-P, S-P-O, dan S-P-K, sedangkan konstruksi kalimat S-P-Pel, S-P-O-Pel belum dikuasai. Hal itu dapat diketahui dari ketiadaan kalimat yang berkonstruksi seperti itu.

- (19) Saya pernah bekerja.
- (20) Saya tidak bekerja.
- (21) Saya sudah melihat laut.

- (22) Saya melihat kembang api.
- (23) Saya pulang ke Jepang.
- (24) Saya mau pergi ke Malaysia.
- (25) Saya berenang dengan teman-teman.

Kalimat (19) a. dan (20) a. merupakan kalimat yang berstruktur S-P. Kalimat (21) a. dan (22) a. berstruktur S-P-O, sedangkan kalimat (23) a. - (25) a. berstruktur S-P-K. Secara lengkap analisis fungsi dapat dilihat di bawah ini.

- (19) a. Saya pernah bekerja.
S P
- (20) a. Saya tidak bekerja.
S P
- (21) a. Saya sudah melihat laut.
S P O
- (22) a. Saya melihat kembang api.
S P O
- (23) a. Saya pulang ke Jepang.
S P K
- (24) a. Saya mau pergi ke Malaysia.
S P K
- (25) a. Saya berenang dengan teman-teman.
S P K

3.1.4. Kalimat Tunggal dengan Predikat Verba, Adjektiva, dan Nomina

Predikat kalimat bahasa Indonesia tidak hanya dapat diisi oleh kata atau frasa berkategori verba, tetapi juga dapat diisi oleh kata atau frasa berkategori nonverba, seperti nomina, adjektiva, numeralia, dan frasa preposisional. Hal ini berbeda dengan bahasa Inggris yang hanya membolehkan predikat diisi oleh kata atau frasa

berkategori verba. Ciri khas ini menjadi kendala bagi penutur asing yang ingin belajar bahasa Indonesia. Berdasarkan data yang ada, kalimat-kalimat yang disusun oleh mahasiswa Jepang mengacu pada tiga jenis predikat, yaitu kalimat dengan predikat verba, adjektiva, dan nomina.

- (26) Saya melihat kuil.
- (27) Saya ingin membeli kucing.
- (28) Saya akan pergi ke Nagono.
- (29) Saya makan daging panggang.
- (30) Saya gembira.
- (31) Saya sungguh sibuk sekali.
- (32) Ikan itu enak sekali.
- (33) Itu enak sekali.
- (34) Laut ini sangat indah.
- (35) Nama saya Mamoka.
- (36) Saya mahasiswa Universitas Takushoku.

Kalimat (26) - (29) merupakan kalimat dengan predikat verba, yaitu *melihat*, *membeli*, *pergi*, dan *makan*. Fakta ini menunjukkan bahwa mahasiswa memiliki kemampuan dalam merangkai kalimat dengan predikat verba. Mereka mengetahui bahwa verba akan diletakkan setelah nomina yang menduduki subjek. Kemampuan itu juga dapat dibuktikan dengan urutan kata yang *ingin* dan *akan* yang mendahului verba *ingin membeli* dan *akan pergi*.

Kalimat (30) - (34) merupakan kalimat dengan predikat adjektiva, yaitu *gembira*, *sibuk*, *enak*, dan *indah*. Kalimat dengan predikat adjektiva termasuk konstruksi yang cukup sulit dipahami oleh penutur asing yang memiliki tipe bahasa fleksi atau fleksi aglutinatif. Bahasa-bahasa dengan tipe seperti itu umumnya predikat harus berkategori verba, misalnya dalam bahasa Inggris untuk mengatakan *dia cantik* tidak bisa dengan konstruksi *she beautiful*, tetapi *she is*

beautiful. Kemunculan *to be is* merupakan perwujudan kehadiran verba yang disebutnya sebagai *linking verb*, yaitu verba yang kehadirannya semata-mata untuk memenuhi kebakuan kaidah. Kalimat dalam bahasa Indonesia tidak berlaku seperti itu. Kelas adjektiva dapat langsung diletakkan setelah nomina tanpa didahului oleh verba seperti pada kalimat (30) - (34). Kalimat (35) dan (36) merupakan kalimat dengan predikat nomina dan frasa nomina, yaitu *Mamoka* dan *mahasiswa Universitas Takushoku*.

Kemampuan mahasiswa Jepang dalam menyusun konstruksi kalimat bahasa Indonesia dengan predikat adjektiva juga dibuktikan dengan kemampuannya meletakkan atribut adjektiva di depan atau di belakang adjektiva dengan benar, misalnya *enak sekali* dan *sangat indah*.

3.2. Kesalahan Kalimat

3.2.1. Urutan Kata

Salah satu alat sintaksis yang menentukan makna dan kegramatikalitas kalimat adalah urutan kata. Dalam bahasa Indonesia urutan kata sangat menentukan bentuk, makna, dan kegramatikan kalimat. Misalnya, urutan kata *guru anak saya* membentuk frasa nominal. Jika urutan kata tersebut diubah menjadi *anak saya guru*, ini akan berubah menjadi kalimat. Urutan kata yang keliru juga dapat mengakibatkan konstruksi tidak gramatikal. Misalnya *kue ibu membeli*. Konstruksi seperti itu tidak bermakna dan tidak ada dalam bahasa Indonesia, meskipun maksudnya mungkin dapat ditangkap oleh penutur asli. Jika urutannya diubah menjadi *ibu membeli kue*, konstruksi tersebut menjadi benar dan bermakna.

Sehubungan dengan hal tersebut, dalam karangan mahasiswa Jepang banyak dijumpai konstruksi tidak gramatikal yang disebabkan kesalahan dalam urutan kata. Kesalahan tersebut berupa kesalahan dalam urutan frasa nominal yang menduduki fungsi tertentu.

Frasa nominal (FN) merupakan frasa yang berunsur pusat berkategori nomina. Dalam bahasa Indonesia frasa nominal dapat dibentuk dengan menggabungkan dua kata atau lebih berkategori nomina atau diperluas dengan atribut adjektiva. FN yang dibentuk dengan menggabungkan kata berkategori nomina harus bermakna posesif, misalnya *rumah Agus* dan *mobil ayah*. Kedua frasa tersebut bermakna rumah milik Agus dan mobil milik ayah. Jika gabungan kata tersebut bermakna identitas, gabungan kata tersebut tidak membentuk FN, melainkan kalimat, misalnya *ayah dokter* yang artinya ayah adalah seorang dokter tidak bermakna dokter milik ayah. Hal ini berbeda dengan FN *dokter ayah*, yang sama dengan konstruksi *dosen saya*.

Dalam karangan mahasiswa Jepang ditemukan kesalahan-kesalahan dalam urutan FN yang menduduki fungsi subjek atau objek, berikut ini contoh datanya.

- (37) *Indonesia laut indah.
- (38) *Saya suka Indonesia laut.
- (39) *Saya sudah minum manis teh hitam.
- (40) *Saya melihat indah sungai dan pegunungan.
- (41) *Saya gemuk karena makan lezat makanan.

Data (37) merupakan kalimat yang salah atau tidak gramatikal. Penyebabnya subjek yang diisi oleh FN terbalik urutannya sehingga unsur pengisi subjek menjadi tidak jelas. Frasa *Indonesia laut* seharusnya menjadi *laut Indonesia* yang maknanya laut milik Indonesia. Demikian juga urutan frasa *Indonesia laut* pada data (38). Kesalahan urutan tersebut menyebabkan kalimat (38) menjadi salah.

Kesalahan urutan juga terjadi pada data (39) - (41). Perbedaan dengan kesalahan urutan kata pada data (37) dan (38) adalah urutan pada kedua data tersebut melibatkan dua kata nomina, sedangkan pada data (39) - (41) melibatkan nomina dan adjektiva.

Sebagaimana dikemukakan di atas, penggabungan nomina dan nomina menjadi frasa jika gabungan kedua kata tersebut bermakna posesif. Apabila FN tersebut dibentuk oleh kata berkategori nomina dan adjektiva, urutan kedua kata tersebut adalah *nomina + adjektiva*. Dalam hal ini, adjektiva berfungsi sebagai atribut atau penjelas nomina, misalnya *rumah kecil* bukan *kecil rumah*, *gadis manis* bukan *manis gadis*. Dengan demikian, urutan konstruksi *manis teh hitam*, *indah sungai dan pegunungan*, dan *lezat makanan* seharusnya diubah menjadi *teh hitam yang manis*, *sungai dan pegunungan yang indah*, dan *makanan lezat*. Dengan demikian, kelima kalimat tersebut akan menjadi benar jika diubah sebagai berikut.

- (37) a. Laut Indonesia indah.
- (38) a. Saya suka laut Indonesia.
- (39) a. Saya sudah minum teh hitam yang manis.
- (40) a. Saya melihat sungai dan pegunungan yang indah.
- (41) a. Saya gemuk karena makan makanan lezat.

Kesalahan urutan kata yang dilakukan oleh mahasiswa Jepang sangat mungkin dipengaruhi oleh kaidah urutan kata dalam bahasa Jepang. Bahasa Jepang dan Inggris memiliki pola urutan kata FN yang sama, yaitu antribut-senter. Artinya, kata berkelas apa pun sepanjang berfungsi sebagai atribut akan diletakkan di depan unsur inti. Misalnya, dalam frasa *new generation*, kata *new* 'baru' sebagai atribut sedangkan *generations* 'generasi' sebagai senter dalam bahasa Indonesia. Konstruksinya diubah menjadi senter-atribut sehingga menjadi *generation + new* atau *generasi baru*.

3.2.2. Pemilihan Predikat yang Tidak Tepat

Dalam kalimat bahasa Indonesia predikat merupakan pusat. Artinya, ciri subjek dan ciri fungsi lain yang mengikuti predikat ditentukan oleh ciri predikat. Oleh karena itu, pemilihan kata pengisi

predikat harus benar. Jika salah dalam memilih akan mengakibatkan kesalahan kalimat, misalnya kalimat *Saya sudah dibaca buku* atau *Saya makanan roti*. Dalam kedua kalimat tersebut terjadi kesalahan pemilihan kata pengisi predikat akibatnya kalimat yang dibentuk menjadi salah. Pemilihan pengisi predikat itu sebenarnya berkaitan dengan pembentukan kata dengan afiksasi. Pemilihan afiks yang tidak tepat dapat berakibat ketidaktepatan predikat. Umumnya kesalahan tersebut dilakukan oleh penutur asing yang sedang belajar bahasa Indonesia.

Sehubungan dengan hal itu, dalam karangan mahasiswa Jepang juga ditemukan kesalahan dalam pemilihan bentuk kata pengisi predikat seperti tampak di bawah ini.

- (42) *Saya mau dimainkan lagi.
- (43) *Saya sudah dimainkan drum.
- (44) *Saya minuman kopi.
- (45) *Saya kesenangan.
- (46) *Itu kesenangan sekali.
- (47) *Bahasa Indonesia terlalu sulit paham.
- (48) *Saya mengenyangkan.

Kalimat (42) dan (43) sekilas sama, yaitu sama-sama menggunakan kata *dimainkan* sebagai predikat. Namun, keduanya berbeda. Kalimat (42) dapat dianggap benar dan dapat pula dianggap salah tergantung pada konteksnya. Kalimat (42) adalah kalimat benar jika kalimat tersebut digunakan dalam konteks tertentu, misalnya dalam konteks pertandingan basket atau sepak bola. Dalam pertandingan basket atau sepak bola pelatih akan menunjuk para pemain. Jika seseorang ditunjuk oleh pelatih untuk bermain, sedangkan dalam pertandingan sebelumnya dia sudah bermain, dia dapat berkata *Saya mau dimainkan lagi*. Namun, jika konteks adalah seseorang yang baru saja bermain, misalnya bermain lompat tali,

atau bermain pasir di laut ingin bermain lagi setelah istirahat ingin bermain lagi, kalimat yang tepat untuk mengungkapkan maksud tersebut adalah *saya mau bermain lagi* bukan *saya mau dimainkan lagi*. Dalam hal ini yang menentukan bermain atau tidaknya seseorang adalah pihak lain, yaitu pelatih. Konteks yang melingkupi kalimat (42) adalah konteks yang kedua sehingga kalimat tersebut salah dan kalimat yang benar adalah *Saya mau bermain lagi*.

Konteks kalimat (43) sangat jelas. Hal ini dapat diketahui dari nomina *drum* yang mengikuti predikat. Sebenarnya maksud yang ingin disampaikan kepada pembaca adalah penulis sudah memainkan drum. Maksud itu seharusnya diungkap dengan kalimat *saya sudah bermain drum* bukan *saya sudah dimainkan drum*.

Kesalahan kedua kalimat di atas juga berkaitan dengan ketidakmampuan mahasiswa untuk membedakan bentuk pasif dan bentuk aktif. Padahal dalam bahasa Indonesia bentuk aktif dan pasif sangat menentukan kegramatikalannya konstruksi. Hal itu dapat dipahami karena satu kata dasar bahasa Indonesia dapat dibentuk menjadi verba aktif (transitif dan intransitif) dan verba pasif. Misalnya, kata *main* dapat dibentuk menjadi memainkan (verb aktif transitif), bermain (verba aktif transitif) dan dimainkan (verba pasif). Adanya beragam bentukan verba tersebut membingungkan mahasiswa Jepang untuk memilih satu kata yang tepat.

Kesalahan kalimat (44) - - (46) penyebabnya sama, yaitu ketidaktepatan unsur pengisi predikat. Namun, kasusnya berbeda dengan kalimat (42) dan (43). Predikat pada kalimat (44) - - (46) berkategori nomina. Penggunaan nomina sebagai predikat harus memperhatikan ciri semantis nomina pengisi subjeknya. Jika tidak memperhatikan hal itu, kalimat menjadi salah seperti pada nomor (44) - - (46). Sebagaimana dijelaskan sebelumnya, kalimat dengan predikat berkategori nomina dibenarkan apabila makna nomina tersebut merupakan identitas bagi nomina pengisi subjek. Jika ciri nomina pengisi predikat tidak memiliki kesesuaian makna dengan ciri

nomina pengisi subjek, kalimat menjadi salah. Berikut contoh penjabarannya.

A		B	
Subjek berciri manusia	Predikat berciri manusia	Subjek berciri manusia	Predikat berciri nonmanusia
Dia	ayahku	*Dia	rumah
Toni	guru saya	*Toni	makanan
Ayah	pedagang	*Ayah	perahu

Subjek dalam kalimat kolom A memiliki ciri sebagai manusia. Kata *dia* merupakan pronomina persona atau kata ganti orang. Kata *Toni* adalah nama orang, sedangkan kata *ayah* adalah kata sapaan untuk orang tua laki-laki. Ketiga kata tersebut mengacu pada manusia. Predikat pada kalimat kolom A juga berciri manusia. Kata *ayah* merupakan kata sapaan orang tua laki-laki, sedangkan kata *guru* dan *pedagang* merupakan nomina yang mengacu profesi seseorang. Dengan kata lain, ada kesesuaian semantis antara unsur pengisi subjek dan predikat. Sebaliknya, predikat dalam kalimat kolom B tidak memiliki ciri manusia. Nomina *rumah*, *makanan*, dan *perahu* mengacu pada benda yang tidak hidup dan bukan manusia, sehingga konstruksi seperti itu salah. Untuk menguji kebenaran kalimat kolom A dan B dapat dilakukan cara menyisipkan kata adalah di antara subjek dan predikat. Apabila hasilnya memiliki sesuai semantis, kalimat tersebut benar. Sebaliknya, jika kehadiran kata *adalah* menyebabkan kalimat tersebut janggal, kalimat itu salah. Berikut perbandingannya.

A			B		
Dia	adalah	ayahku	*Dia	adalah	rumah
Toni	adalah	guru saya	*Toni	adalah	makanan
Ayah	adalah	pedagang	*Ayah	adalah	perahu

Dari perbandingan di atas dapat disimpulkan bahwa kalimat pada kolom A benar, sedangkan kalimat pada kolom B tidak benar. Hal ini yang terjadi pada data (44) dan (45) di atas. Subjek pada kalimat (44) dan (45) berciri manusia, sedangkan nomina pengisi predikat tidak berciri manusia sehingga tidak ada kesesuaian semantis. Sebaliknya, data (46) subjek dan predikat memang tidak berciri manusia, tetapi kehadiran kata *sekali* tidak memungkinkan kata tersebut berangkai dengan nomina. Perhatikan perbandingan berikut.

A	B
*Saya adalah minuman kopi	Saya minum kopi
*Saya adalah kesenangan	Saya senang
*Itu adalah kesenangan sekali	Itu menyenangkan sekali

Kalimat dalam kolom A salah, sedangkan kalimat dalam B benar. Pada kalimat (44) kehadiran nomina *kopi* menandakan bahwa predikatnya bukan nomina, tetapi verba karena fungsi nomina *kopi* sebagai objek. Sebaliknya, kalimat (45) nomina *kesenangan* tidak tepat karena yang dibutuhkan adalah kata yang menyatakan keadaan *senang*. Pada kalimat (46) kehadiran kata *sekali* menandakan bahwa kata sebelumnya harus berkategori adjektiva atau verba adjektiva, yaitu verba yang diturunkan dari kelas adjektiva dan bukan nomina. Dalam bahasa Indonesia nomina tidak dapat didahului atau diikuti oleh kata yang menyatakan kualitas, seperti *sekali*, *sangat*, dan *cukup*, misalnya **sangat rumah*, **mobil sekali*, dan **cukup pintu*. Oleh karena itu, kalimat pada kolom B menjadi opsi yang sesuai dan benar.

Kasus (45) memiliki kemiripan dengan kasus-kasus sebelumnya. Perbedaannya, pada kasus (47) predikat kalimat berkategori verba. Sebenarnya secara struktural dalam bahasa Indonesia jika ada kalimat yang terdiri atas nomina sebagai subjek dan verba sebagai

predikat, kalimat itu sudah benar dan memenuhi unsur minimal. Namun, kalimat tersebut belum tentu jelas makna dan informasinya. Oleh karena itu, kalimat yang demikian seringkali tidak gramatikal jika dilihat dari aspek semantik. Dalam kaitan ini konsep sintagmatik dan paradigmatis tidak semuanya dipenuhi. Kalimat (47) termasuk kalimat (42) - (46) hanya memenuhi aspek paradigmatis, sedangkan hubungan sintagmatik antar unsurnya tidak terpenuhi. Akibatnya, kalimat tersebut tidak berterima.

Kalimat (48) *Saya mengenyangkan* memiliki kemiripan dengan kalimat *Ayah sedang hamil*. Kalimat tersebut benar dari segi struktur atau aspek paradigmatisnya, tetapi gagal dalam hubungan sintagmatik. Kata *ayah* memiliki ciri laki-laki dewasa, sedangkan kata *hamil* memiliki ciri perempuan. Dalam hal ini, ciri perempuan tidak dapat dilekatkan pada ciri laki-laki sehingga kalimat tersebut tidak berterima. Kalimat baru akan berterima jika subjek diganti dengan kata yang memiliki ciri perempuan, misalnya *wanita itu*, *kakaknya*, dan *istrinya*. Dengan demikian, kalimat (48) juga baru akan berterima jika kata *saya* yang memiliki ciri manusia diganti dengan kata yang memiliki ciri sesuatu yang biasa dimakan karena kata *mengenyangkan* memiliki konsep keadaan seseorang yang makna sesuatu. Apabila kata *saya* tetap dipertahankan, kata *mengenyangkan* harus diganti dengan keadaan tentang *saya*, yaitu kata berkategori adjektiva. Apabila dilihat dari konteks, kalimat (48) menceritakan keadaan tentang saya setelah makan, yaitu kenyang, bukan mengenyangkan. Untuk lebih jelasnya perhatikan perbandingan konstruksi berikut ini.

A		B		C	
S	P	S	P	S	P
*Saya	mengenyangkan	Roti itu	mengenyangkan	Saya	kenyang
*Dia	mengenyangkan	Kue itu	mengenyangkan	Dia	kenyang
*Adik	mengenyangkan	Makanan ini	mengenyangkan	Adik	kenyang

Kalimat pada kelompok A salah, sedangkan kalimat pada kelompok B dan C benar. Kalimat A pada salah karena hanya memenuhi aspek paradigmatis, sedangkan aspek sintagmatik tidak terpenuhi. Sebaliknya, kalimat pada kelompok B dan C benar karena memenuhi kedua aspek tersebut, yaitu sintagmatik dan paradigmatis. Dengan demikian, kalimat pada kedua kelompok tersebut tidak hanya benar dari sisi struktur, tetapi juga benar dari sisi semantiknya.

Kalimat pada kelompok A di bawah ini juga salah karena tidak memenuhi aspek sintagmatik, sedangkan kalimat pada kelompok B benar karena kalimat-kalimat tersebut memenuhi aspek hubungan sintagmatik dan paradigmatis.

A		B	
S	P	S	P
*Ayah	sedang hamil	Istrinya	sedang hamil
*Lelaki	sedang hamil	Wanita itu	sedang hamil
*Paman	sedang hamil	Kakaknya	sedang hamil

Dari paparan di atas dapat diketahui bahwa pada umumnya mahasiswa Jepang yang sedang belajar bahasa Indonesia mengalami kesulitan dalam pembentukan kata dengan afiksasi. Kesulitan tersebut tampak dari kesalahan dalam memilih kategori kata pengisi predikat dari bentuk dasar yang sama. Misalnya, kata dasar *main* dapat dibentuk menjadi *bermain*, *memainkan*, *pemain*, dan *mainan*. Kata-kata tersebut tentu saja memiliki makna dan perilaku yang berbeda. Kesalahan dalam memilih kata tersebut akan berakibat kesalahan dalam kalimat. Berikut ini bukti perbedaan kata-kata tersebut.

Kata	Kategori	Contoh kalimat	Struktur
bermain	verba	Saya sedang bermain piano.	S-P-Pel

memainkan	verba	Dia sedang memainkan piano.	S-P-O
mainan	nomina	Dia membeli mainan.	S-P-O
pemain	nomina	Ayahnya pemain sirkus.	S-P

3.2.3. Predikat Ganda

Predikat dalam kalimat bahasa Indonesia pada umumnya hanya ada satu, sedangkan kata yang lain merupakan atribut. Misalnya, dalam kalimat *Saya akan pergi ke Bali* predikatnya adalah *pergi*, sedangkan kata *akan* merupakan atribut kata *pergi*. Namun, dalam beberapa kasus seringkali dijumpai konstruksi kalimat bahasa Indonesia yang predikatnya merupakan verba berderet, misalnya *Polisi berhasil menangkap pencuri*. Dalam kalimat tersebut ada dua verba, yaitu *berhasil* dan *menangkap*. Meskipun ada dua verba, predikat kalimat tersebut tetap satu, yaitu *menangkap* sehingga kalimat tersebut dapat diungkapkan menjadi *Polisi menangkap pencuri*.

Sehubungan dengan hal tersebut, dalam karangan mahasiswa Jepang ditemukan predikat yang ganda. Kedua unsur predikat tersebut memiliki kemandirian yang otonom sehingga menimbulkan kecacauan gramatikal seperti tampak di bawah ini.

- (49) *Saya sudah melihat menonton film.
- (50) *Ikan itu banyak sangat indah.
- (51) *Saya adalah berburu anggur.

Kalimat pada data (49) - (51) memiliki dua predikat. Predikat kalimat (49) adalah *melihat* dan *menonton*; predikat kalimat (50) adalah *banyak* dan *sangat indah*; predikat kalimat (51) adalah *adalah* dan *berburu*. Kehadiran dua kata yang berpotensi menjadi predikat tersebut menyebabkan kalimat tidak gramatikal.

Pada kalimat (49) kata *melihat* dan *menonton* memiliki makna yang hampir sama atau bersinonim. Kedua kata tersebut berpotensi

menjadi predikat kalimat tersebut. Namun, jika keduanya dihardirkan bersamaan, kalimat justru menjadi tidak gramatikal. Untuk menjadi gramatikal cukup digunakan salah satu saja *melihat* atau *menonton*. Kesalahan ini sangat mungkin akibat kebingungan mahasiswa dalam menentukan verba yang dapat mengidentifikasi kegiatan yang berkaitan dengan film. Dalam persepsi mahasiswa sangat mungkin kata *menonton* belum mengandung makna melihat sehingga dicoba untuk dirangkaikan dengan kata *melihat*. Bagi penutur bahasa Indonesia, konstruksi yang biasanya digunakan adalah *menonton film* bukan *melihat film*.

Pada kalimat (50) kata *banyak* dan *sangat indah* tidak dapat dirangkai menjadi satu menduduki satu predikat. Kata numeralia *banyak* tidak dapat mendahului atau mengikuti kata adjektiva *indah*. Dalam bahasa Indonesia, numeralia *banyak* digunakan untuk mengidentifikasi jumlah nomina dan digunakan sebagai pembentuk FN, misalnya *banyak rumah*, *banyak orang*, dan *banyak mahasiswa*. Oleh karena itu, konstruksi *banyak sangat indah* tidak gramatikal. Kesalahan kalimat (50) sangat mungkin disebabkan oleh ketidaktahuan mahasiswa dalam menghubungkan kata *banyak* dan *sangat indah* agar menjadi gramatikal, yaitu dengan memanfaatkan kata hubung *dan*. Penggunaan kata hubung *dan* dapat menghubungkan kedua kata tersebut dan menjadi kalimat yang gramatikal, yaitu *Ikan itu banyak dan sangat indah*.

Pada kalimat (51) terdapat kata *adalah* dan *berburu* yang sama-sama dapat menjadi predikat dalam kalimat bahasa Indonesia. Akan tetapi, kehadiran kedua kata tersebut secara simultan dalam satu fungsi dan dalam satu kalimat menyebabkan kalimat tidak gramatikal. Dalam bahasa Indonesia kata *adalah* merupakan kopula yang salah satunya digunakan untuk menyatakan bahwa bagian sebelum dan sesudah kata *adalah* memiliki referen yang sama atau makna yang hampir sama, misalnya *Presiden Indonesia adalah Joko Widodo* dan *Joko Widodo adalah Presiden Indonesia*. Sementara itu,

kata *adalah* pada kalimat (51) tidak digunakan untuk menyatakan hal tersebut. Kehadiran kata *adalah* sangat mungkin dipengaruhi oleh konstruksi bahasa Jepang yang harus memunculkan verba, khususnya dalam konstruksi nomina. Hal itu juga terjadi dalam bahasa Inggris. Misalnya, kalimat *He is a teacher* dapat diterjemahkan dalam bahasa Indonesia menjadi *Dia adalah guru* atau *Dia guru*. Keduanya benar dan gramatikal. Kehadiran kata *adalah* dalam kalimat *Dia adalah guru* merupakan terjemahan dari kata *is* yang dalam bahasa Inggris yang berfungsi sebagai *linking verb*. Dengan kata lain, kesalahan dalam kalimat (51) dimungkinkan karena mahasiswa melakukan analogi seperti itu, tetapi analoginya salah. Analogi seperti ini biasanya disebut sebagai *over analogy*.

3.2.4. Ketidaklengkapan unsur Keterangan

Fungsi keterangan dalam kalimat bahasa Indonesia umumnya bersifat opsional. Artinya, kehadiran keterangan dapat dihapuskan tanpa mengganggu kegramatikalannya kalimat. Misalnya, kalimat *Mereka sedang pergi ke Jakarta* dengan kalimat *Mereka sedang pergi* merupakan kalimat yang sama-sama gramatikal. Perbedaannya, kejelasan tujuan pergi. Kalimat yang pertama tujuannya jelas, yaitu *ke Jakarta*, sedangkan kalimat berikutnya tidak jelas tujuannya. Namun, apabila ada unsur keterangan yang dihilangkan dan tidak dihadirkan, kalimat menjadi tidak gramatikal. Hal ini yang ditemukan dalam karangan mahasiswa Jepang seperti tampak berikut ini.

- (52) *Saya sudah pergi Candi Borobudur.
- (53) *Saya ingin pergi India secara pribadi.
- (54) *Saya sudah pergi Shizuoka.
- (55) *Saya mandi pantai itu.
- (56) *Bahasa Indonesia terlalu sulit paham.
- (57) *Saya pergi ke Nagano libur musim panas.

Kalimat (52) -- (57) merupakan fakta adanya penghilangan unsur yang menduduki fungsi keterangan. Penghilangan unsur tersebut menjadi penyebab kalimat-kalimat tersebut tidak gramatikal. Pada kalimat (52) dan (54) ada preposisi yang dihilangkan, yaitu preposisi *ke*. Ketidakhadiran preposisi sangat mengganggu informasi dan kegramatikan kalimatnya. Dalam kaidah bahasa Indonesia pengisi fungsi keterangan umumnya adalah frasa preposisional (Alwi, *et. al.*, 2008). Frasa preposisional termasuk frasa eksosentrik dengan unsur inti preposisi. Oleh karena itu, kehadiran preposisi menjadi wajib apalagi frasa tersebut berada setelah verba dasar (*pergi*). Ketiga kalimat tersebut menjadi benar jika preposisi tersebut dihadirkan seperti tampak berikut ini.

- (52) a. Saya sudah pergi ke Candi Borobudur.
- (53) a. Saya ingin pergi ke India secara pribadi.
- (54) a. Saya sudah pergi ke Shizuoka.

Kesalahan yang terdapat pada kalimat (55) -- (57) juga disebabkan oleh penghilangan preposisi. Dalam kalimat (55) terjadi penghilangan preposisi *di*, kalimat (56) penghilangan preposisi *untuk*, sedangkan kalimat (57) terjadi penghilangan preposisi *pada*. Kalimat tersebut menjadi benar jika diubah sebagai berikut.

- (55) a. Saya mandi **di** pantai itu.
- (56) a. Bahasa Indonesia terlalu sulit **untuk** dipahami.
- (57) a. Saya pergi ke Nagano **pada** libur musim panas.

Dalam bahasa Indonesia preposisi *di*, *ke*, dan *dari* sebagai preposisi inti atau sejati tidak mungkin dihilangkan dalam konteks posisi apapun. Namun, ada beberapa preposisi yang kehadirannya bersifat opsional. Dalam konteks linguistik tertentu, preposisi tertentu, seperti *dengan* dan *untuk* dapat tidak dinyatakan dan tidak

menyebabkan kalimat tidak gramatikal. Hal ini dapat dilihat dari unsur pengisi predikat, apakah predikat diisi oleh verba dasar atau verba berafiks. Umumnya, frasa preposisional yang hadir setelah verba dasar wajib hadir, sedangkan preposisi yang hadir setelah verba berafiks bersifat opsional. Perhatikan perbandingan berikut ini.

Andi pergi dengan kakaknya.	Dia berlari dengan cepat.
*Andi pergi kakaknya.	Dia berlari cepat.
Dia datang dari Bali.	Dia berasal dari Bali.
*Dia datang Bali.	*Dia berasal Bali.

Kesalahan berbahasa mahasiswa Jepang yang disebabkan oleh penghilangan preposisi, khususnya preposisi sejati, yaitu *di*, *ke*, dan *dari* memperlihatkan adanya kebingungan dalam penggunaannya. Hal itu terbukti adanya fakta kalimat lain yang menggunakan preposisi yang sama dengan benar. Hal ini membuktikan bahwa mahasiswa masih dalam proses penguasaan. Dalam proses seperti itu pembelajar seringkali membuat kalimat-kalimat yang salah, tetapi juga membuat kalimat-kalimat yang benar. Namun, mereka tidak mengetahui benar atau salahnya.

4. Simpulan

Berdasarkan pembahasan di atas dapat ditarik beberapa simpulan berikut ini.

1. Konstruksi kalimat yang dibuat oleh mahasiswa Jepang yang sedang belajar bahasa Indonesia sebagai bahasa asing berada dalam tahap konstruksi transisional. Artinya, konstruksi yang dibuat dalam proses dari salah menuju konstruksi yang benar. Dalam tahap ini, mereka akan membuat konstruksi yang salah sekaligus konstruksi yang benar dalam satu tipe kalimat yang

sama. Hal ini merupakan proses yang wajar dalam pembelajaran bahasa asing. Fakta ini juga menunjukkan bahwa sedang terjadi proses penguasaan bahasa mahasiswa.

2. Konstruksi kalimat yang gramatikal yang berhasil dibuat oleh mahasiswa mencakup: (a) kalimat tunggal dengan pola sederhana, yaitu S-P, S-P-O, dan S-P-K. Pola yang lebih kompleks seperti S-P-O-Pel belum muncul, apalagi kalimat majemuk; (b) Kalimat aktif transitif dan intransitive, khususnya dengan verba dasar. Mahasiswa umumnya tidak melekatkan afiks *meN-* (*me-*, *mem-*, *meng-*, *men-*, dan *meny-*) pada verba transitif seperti *beli*, *baca*, dan *ambil* tetapi untuk verba aktif intransitif mereka justru membuat verba yang lengkap dengan afiks yang benar. Hal ini menunjukkan mereka belum mengetahui ragam formal dan nonformal; (c) Mahasiswa sudah dapat membuat kalimat dengan predikat berkategori verba, nomina, dan adjektiva, sedangkan predikat dengan kategori numeralia dan frasa preposisi belum ditemukan datanya. Hal ini dapat terjadi karena konstruksi dengan predikat numeralia dan frasa preposisional merupakan keunikan dalam bahasa Indonesia dan jarang ditemukan dalam konstruksi bahasa lain.
3. Kesalahan dalam penyusunan kalimat yang dilakukan oleh mahasiswa mencakup empat jenis kesalahan. Pertama, kesalahan berupa urutan kata khususnya pada frasa adjektival, dan frasa nominal. Kesalahan pada kedua frasa tersebut tampaknya terpengaruh oleh bahasa ibu, yaitu bahasa Jepang. Dalam bahasa Jepang frasa berstruktur atribut-senter, sedangkan bahasa Indonesia senter-atribut. Misalnya, dalam frasa nominal **Indonesia laut* seharusnya *laut Indonesia*. Demikian juga pada frasa adjektival. Oleh karena itu, faktor penyebab kesalahan ini adalah interlingual berupa transfer lingual atau interferensi lingual. *Kedua*, kesalahan berupa pemilihan kata pengisi predikat. Kata yang dipilih tidak memiliki hubungan sintagmatik dengan unsur

lain. *Ketiga*, kesalahan berupa penggunaan predikat ganda. *Keempat*, kesalahan berupa penghilangan sebagian unsur keterangan. Faktor penyebab kesalahan kedua, ketiga, dan keempat adalah faktor intralingual.

Daftar Pustaka

- Alwi, H., Dardjowidjojo, S., Lapoliwa, H., dan Moeliono, A. M. 2008. *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Edisi Ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.
- Bachman, L. 1990. *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Brown, Douglas H. 2000. *Principles of Language learning and Teaching*. San Fransisco: Longman.
- Burt, K. 1975. "Error Analysis in the Adult EFL Classroom". dalam TESOL Quarterly. Vol. 9, No. 1, 53-63. Albany: State University of New York.
- Ellis, Rod. 1997. *Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Halim, A. 1976. "Fungsi Politik Bahasa Nasional", dalam Amran Halim (ed.), *Politik Bahasa Nasional 1*, 13-25. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa Departmen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Jabeen, Aqsa. 2015. *The Role of Error Analysis in Teaching and Learning of Second and Foreign Language*. *Education and Linguistics Research* Vol. 1, No. 2, 52-61.
- Krashen, Stephen D. 1981. *Second Language Acquisition And Second Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.
- Kridalaksana, Harimurti. 1991. *Masa Lampau Bahasa Indonesia: Sebuah Bunga Rampai*. Yogyakarta: Kanisius.
- Lado, R. 1957. *Linguistic Across Cultural*. Ann Arbor: University of Michigan.
- Matanggui, Junaiyah H. dan Arifin, E Zaenal. 2015. *Analisis Kesalahan Berbahasa Indonesia*. Tangerang: Pustaka Mandiri.
- Moeliono, A. M. 1985. *Pengembangan dan Pembinaan Bahasa: Ancangan Alternatif di Dalam Perencanaan Bahasa*. Djembatan: Jakarta.
- Richards, Jack C. 1974. *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*. London: Longman.
- Rickeit, Gert dan Hans Strohner. 2008. *Handbook of Communication Competence*. New York: Mouton de Gruyter.
- Selinker, Larry. 1972. *Interlanguage*. Dalam IRAL. Vol. 10, No. 3, 209-232.
- Setyowati, Nanik. 2013. *Analisis Kesalahan Berbahasa Indonesia: Teori dan*

- Praktik*. Surakarta: Yuma Pustaka.
- Sugono, Dendy. 2009. *Mahir Berbahasa Indonesia dengan Benar*. Jakarta: Gramedia.
- Yusuf, Suhendra. 2012. "Language Learning Strategies of Two Indonesian Young Learners in the USA". *International Journal of English Linguistics*; Vol. 2, No. 4, 65-72.

(原稿受付 2017年11月20日)

〈論文〉

中国語語順体系に貫かれた 構成原則について

— 基本語順の設定とその核心的 SVO の位置づけを中心に —

平山邦彦

要 旨

中国語の基本語順は一般的に SVO と認識されている。本稿では、日本人にとって適した語順体系の確立を目指しその触りの部分を論じた。本稿では、中国語の文は SVO を核心とし、各種構文は SVO に対するコーティング形式という考えのもと、議論を進めている。まずは既存の代表的分析法を概観し、SVO 語順を核心とした語順分析について言及した。その上で、(1)日本人にとって SVO の基本関係は日本語の「-を」「-に」等幾つかのパターンで括られる、(2) SVO と他の構文のコーティング関係において、SVO は文意的核心ではなく認知的核心を示す、という2点を指摘した。

キーワード：語順、言語背景、SVO、コーティング、認知的核心

1. 問題提起

周知の如く、中国語は孤立語であり各語彙には形態変化が存在しない。そして、その意思伝達には語順が大きな役割を持つ。例えば、以下の如く2つの単語や語句を並べた際、統語関係や意味関係⁽¹⁾にも変化を伴うこと

(1) 「意味関係（“语义关系”）」という表現を用いる場合、「動作者-動詞-受動

となる（以下、例(1)~(3)は陆俭明 2005：12 より引用）。

- (1) 眼睛大大的 [主述関係] ≠ 大大的眼睛 [連体修飾関係]
(目がぱっちりしている⁽²⁾) (ぱっちりした目)
- (2) 吃饭了⁽³⁾ [動目関係] ≠ 饭吃了 [主述関係]
(ご飯を食べた) (ご飯は食べた)
- (3) 客人来了 [主述関係] ≠ 来客人了 [動目関係]
([来る予定の] 客が来た) ([予定されてなかった] 客が来た)
- (4) 来早了 [動補関係] ≠ 早来了 [連用修飾関係]
([結果として] 来るのが早かった) ([意図的に] 早めに来た)

以上、二つの単語（それぞれ“吃”[食べる]と“饭”[ご飯]，“客人”[客]と“来”[来る]，“来”[来る]と“早”[早い]）が異なることで文法関係、意味関係にずれの生じることが分かる⁽⁴⁾。

中国語の基本語順は一般的に SVO であると認識されている⁽⁵⁾。更に VO 語順の使用頻度が OV 語順より高い点に対する指摘も見られる⁽⁶⁾。教育の現場や教材においても通常単純な文型を SVO と定めた上で解説が成され

者」のように述語動詞を巡る意味役割との関係で用いられることも少なくない。本稿では主に「異なる成分同士の日訳関係」という意味合いで用いる。

- (2) 本校の日本語訳について、筆者によるものは（ ）で示している。引用文献のものは〔 〕で記している。
- (3) 他に「食事をする状況になった／ご飯ですよ」の意味を持つ。
- (4) 更には語順が同じだとしても、構造や意味が一定の関係になるとは限らない。例えば以下の例は何れも「動詞＋名詞」の組み合わせであるが、名詞と動詞の何れにアクセントを置くかによって“述賓关系”（動目関係）と“‘定一中’偏正关系”（連体修飾構造）と構造に変化がもたらされる。例①“学习文件”（文献を学習する／学習文献），例②“进口设备”（設備を輸入する／輸入設備），例③“出租汽车”（自動車をレンタルする／レンタルする車→タクシー）。（陆俭明 2005：14）
- (5) 张谊生（2013）
- (6) 储泽祥 王艳（2016）

る⁽⁷⁾。そして、以下のような単純な SVO タイプの文が提示されてくる（例（5）（6）は平山（2012）より引用⁽⁸⁾）。

（5） 我吃面包。（私はパンを食べます）

（6） 我是日本人。（わたしは日本人です）

この点は、第一外国語として英語を学んできた大多数の日本人話者にとってさほど違和感を覚える内容でないだろう。一方中国語 SVO 語順をとる言語と一言で述べても、全ての語順が英語に似通ってくるわけではない。当然、英語の知識をそのまま中国語の語順理解や語順整理に当てはめられるわけでない。

例えば、その語順の特徴が日本語に類似する部分は、日本人母語話者としての言語背景が手がかりになる（例（7）-（9）は平山 2008 より引用）

（7） 我们晚上去看电影。（私達は夕方映画を見に行きます）

晚上我们去看电影。（夕方私達は映画を見に行きます）

（8） 看电视的孩子〔テレビを見ている子ども〕

（9） 我们五点在车站见面。（私達は5時に駅で会います）

上の例において、中国語が日本語と類似の語順的振舞を呈する。（7）は主語と動作発生時点の語順である。通常動作発生の時点は主語の後に置か

（7） 教材の例を挙げると枚挙にいとまがないが、文法書では丸尾（2010）、瀬戸口（2003）、語順を中心に扱った学習書を挙げられれば林松濤（2011）、林松濤王怡韡（2013）、陸偉榮（2016）、平山（2012, 2017a, 2017b）等何れも基本語順を SVO として議論を進めている。また、管見の限り、SOV を基本語順として解説する教材は目にする事ができない。

（8） 本稿の例文は、大部分は平山（2012, 2017a）を始め学習書や辞書から引用している。一部出典の記されていない例が含まれている。それらは筆者による作例である。

れるが、文頭に置くことも可となる⁽⁹⁾。(8)は連体修飾語の語順である。連体修飾語が名詞性のもの、動作性のものであろうと“的”を後続させ“-的”という形で前方から修飾する。英語の如く、関係代名詞“wh-”を用いた表現に気を使う必要もない。(9)について「ある場所で」という部分を見れば、“前置詞‘在’+場所”と真逆の語順になる。一方前置詞フレーズ全体に視野を広げてみると、日本語同様、連用修飾語として前から修飾する点で一致している。この点、日本人話者の言語背景から判断すると、別段不思議なものとは言えないだろう。そうは言うものの、これらは言語類型論から見る語順傾向の普遍性から見る時、SVO語順、そして前置詞を用いる言語としては異色の特色を放つことになる⁽¹⁰⁾。更には、以下の語順は通常日本人学習者の言語背景からは見出しにくい。この点は、以下のような誤用例の算出とも関連性を持つことが推測される。

(10) *老师走进来教室了。〔老师走进教室来了。〕(先生は教室に入ってきました)

(11) *我们学过汉语两年〔→我们学过两年汉语〕。(私達は2年間中国語を学んだことがある)

(12) *我睡觉了八个小时〔→我睡了八个小时觉〕。(私達は8時間眠った)

(13) *他给妈妈打了电话三次〔→他给妈妈打了三次电话〕。(彼はお母さんに3度電話をかけました)

(10)は方向補語“来/去”と場所目的語の位置を巡る誤用である。場所目的語“来/去”の前に置かれる。(11)(12)は目的語と時量補語を巡

(9) 但し全てのパターンに入れ替えが完全に可能というわけではない。例えば時間を表す語句に“什么时候”を用いた場合、主語の前に置くと成立度が危ぶまれることになる。(a)“你什么时候来?”(あなたはいつ来ますか)(b)“?什么时候你来?”(いつあなたは来ますか)

(10) 刘丹青(2003:37,315-319),リンゼイJ.ウェイリー著 大堀他訳(2006:30),Greenberg著 陆丙甫等译(1984)。

る誤用である。時量補語は通常目的語より前に置かれる。杨德峰（2008）の指摘の如く英語からの影響は至極理解しやすい⁽¹¹⁾。(13)は目的語と動量補語を巡る誤用である。動量補語は通常目的語より前に置かれる。

以上、中国語にも独自の語順の特徴があることを眺めてみた。中国語全体像の解明において語順体系に対する的確で且つ簡明な整理や分析を成すことの重要性は今更強調すべき点でもない。語順については教材や参考書（林松濤 2011；林松濤 王怡韡 2013；陸偉榮 2016；平山 2012, 2017a, 2017b）、研究論文（戴浩一 1988；刘丹青 2003；陆丙甫 2008a 等）においても多くの考察が成されている。学習書は通常学習者（日本で出版されるものに関しては日本人、多くは初級者）にとっての利便性が念頭に置かれていることは推測に難くない。一つ一つの説明は初学者にとって分かり易い部分もあるが、確固たる理論的背景と根拠に基づくものか見出しづらいものも少なくない。一方、研究論文において関心事項は通常「中国語の言語構造の正確な記述」という点にある。よって、中国語以外の言語の母語話者にとって中国語という語順体系を理解する上で最も合理的なものであるかは必ずしも考慮されているとは限らない。但し、外国人の立場から中国語文法を見つめる時理論的正しさに加え、「使用する側の立場から見た利便性」という点も必要不可欠な要素と感じざるを得ない。この点は、中国語教育、言語情報処理、コーパス開発、機械翻訳等関連の研究各種分野の発展において重要な役割を担うことになる。

本稿では、以上のコンセプトのもと既存の中国語文法の枠組を軸としながらも、「一人の日本人話者の立場から簡明で筋道が明確な整理を」、換言すれば「日本人話者の言語背景を有効活用しながら」という角度を織り込みながら、中国語の語順体系について考察を加えていく。

(11) 対応する英文を杨德峰（2008）から挙げておく：We have learned Chinese for two years./He called his mother three times./I have slept for eight hours.

2. 基本語順 SVO とコーティング関係

SVO を中心として体系的成立という点については筆者の中で語順教材の作成や語順をテーマとした語学講座を担当する中で一貫したテーマとして取り組んできた。この点は、平山（2012, 2017a, 2017b）において体系化を試みている。分析に際しては、SVO という骨子（核心）に対して、如何に肉付け（コーティング）されてきたかを明確に示すことが道標となるという考えで纏めてきた。その過程において、基本語順とコーティング関係を明確化する際困難かつ明確化の必要性を感じさせた点が幾つか生じてきた。以下に、その具体的な内容を挙げておく。

（一） 核心としての SVO の確立

まずは核心、骨子という部分の基本語順についてである。日本人の中でも SVO に対する概念が備わっているとしても、その意味関係に関して中国語話者の SVO に対するイメージ（主に「S は O を V する」）と必ずしも一致しているとは限らない。中国語においては日本人の SVO からイメージが湧きにくい動目構造（例えば“吃食堂”（食堂で食べる）や、“开玩笑”（からかう），“游泳”（泳ぐ）と言った離合詞のように）が多数存在する。更には平山（2008, 2009）でも言及したが、「～が」という動作者が目的語の位置に置かれる存在文に関する日本語母語話者からすると、違和感を覚えるところである。一方、中国人話者の立場から見れば“有”構文とさして変わりのないという指摘が見られる。言語記述の正確さと日本人の言語背景を加味したところで、どの部分で核心としての枠組みを括っていくか。

（二）基本構造 SVO の核心的意義づけ

基本語順とコーティングの関係を描写する上で、核心としての意義づけはいかなる点にあるのか。多くは、意味的核心と捉えることができる。

(14) 他明天回老家。(彼は明日実家に戻ります)《平山 2012》

⇒他回老家。(彼は実家に戻ります)

(15) 我也去北京。(私も北京に行きます；私は北京にも行きます)《平山 2012》

⇒我去北京。(私は北京に行きます)

一方で、次の如くコーティング成分を取り去ることで文意は全く逆のものとなる（文意的核心として捉えられない事例に関して、詳細は 3.1 節を参照）。

(16) 她不吃面包。(彼女はパンを食べません)《平山 2012》

≠她吃面包。(彼女はパンを食べる)

このような現象を加味した上で形式の関連性を以下に定めるのか。

（三）SVO に対するコーティング関係の確立

SVO 語順に対するコーティング関係を如何に法則的に、且つ合理的な説明を加えて行くことができるか。

(17) 他明天回老家。(彼は明日実家に戻ります) →連用修飾語

(18) 汤有点儿咸。(スープはちょっぱり塩辛い) →連用修飾語

(19) 我听错了你的话。(彼はあなたの話を聞き間違えました) →結果補語

(20) 我给你一个礼物。(私はあなたにプレゼントを贈ります) →二重目的語

(21) 我们点菜吃。(私たちは料理を注文して食べます) →連動文

(22) 我回东京去。(私は東京に帰ります) →“来 / 去”のような関係を如何に扱うか

(23) 沙发上躺着一只猫。(ソファーに猫が1匹横になっています) →

派生的な VO 関係

上の例を挙げれば、(17)(18)は連用修飾語を用いた例である。VO に対する前方コーティングと見ることができる。(19)は“听你的话”という VO 関係について V (“听”) に対してコーティングの施された形式と考えられる。(20)は VO₁O₂ という二重目的語形式、(21)で示した連動文は VO に別の動作が後続していく文である。言わば VO に対する後方からのコーティングと言えそうである。(22)では方向補語“去”を用いたと言われる例である。教学の場では一般的に“回去”の中に場所目的語“家”が挿入された形として教えられる。一方で連動式とし“去”は VO (ここでは“回家”) と構造的に切れているとする考え方もある(楊徳峰 2005; 高橋 2006, 2009)。(23)は存在文の例である。このタイプの文は動作者(「～が」)という成分が目的語の位置に置かれる。これを如何に扱っていくか。

以下紙幅の都合上、本稿だけでこれらを逐一議論するのは不可能である。次章以降では(一)(二)及び(三)においては VO に対する前方コーティングという点について整理を試みる。

3. 中国語の構造分析

第1章で述べた通り、本稿では SVO を基本語順として分析を進める。その第一歩として構造分析について言及したい。語順構造は統語構造の中心的位置を占めるものとなる。また、中国語の基本語順を SVO とする場合、基本とする範囲をどの点に設定するか、この点も分析の利便性や効率性に大きく作用する。この点も、注意を払っていく必要がある。本章では、構造分析について代表的なものを取り上げ検証を行う。

3.1 “句子成分分析”（文成分分析⁽¹²⁾）

文成分分析法では、核心部分を定めた上で枝葉として他の文法成分がどのように付加されたかを分析するものである。この部分に関しては陆俭明（1993a, 1993b, 2005）において利点と局限に対して詳しい指摘があるので、以下に纏めておきたい。詳しい手順は次の通りになる（陆俭明 2005 参照）。

- （1） 分析的对象是单句。（分析对象は单文）
- （2） 认定一个句子有六大成分——主语，述语（即谓语），宾语，补足语，形容词性附加语（即今天一般所说的定语），副词性附加语（即今天一般所说的状语和补语），这六个句子成分分为三个级别：主语，述语（即谓语）是主要成分，宾语，补足语是连带成分，形容词性附加语，副词性附加语是附加成分。（一つの文につき六大文成分——主語，述語，目的語，補足語，形容詞性付加語（現在で言う連体修飾語），副詞性付加語（現在で言う連用修飾語と補語）を認定。これら六つの成分を三つの等級に分類。主語，述語を主要成分とし，目的語，補足語が連帯成分となる。更に，形容詞性付加語と副詞性付加語が付加成分となる）
- （3） 作句子成分的原则上只能是词。（文成分となるのは原則的に単語のみ）
- （4） 分析时，先一举找出全句的中心词作为主语和述语（即谓语），让其他成分分别依附于它们。（分析の際，まず文全体で中心となる語を探し出し主語，述語とする。その他の成分を両者に付加されるものとする）

(12) “句子成分分析法”に対する「文成分分析法」のいう日本語訳は筆者によるものである。

- (5) 分析手続は、先看清全句の中心詞を主語と述語（即謂語）、再看述語（即謂語）是哪一種動詞、決定它後面有無連帶成分賓語或補足語、最後指出句中所有附加成分——形容詞性附加語和副詞性附加語。（分析手続きは、まず文全体で中心となる語をはっきり主語、述語として示す。その後述語はどの動詞かを観察し、後ろに連帶成分である目的語或いは補足語があるかを判断し、最後に全ての付加成分——形容詞性付加語と副詞性付加語を指し示す。）

即ち、文成分分析法では“主語＋述語（動詞・形容詞）”をベースとして、目的語もその外枠に加えられた成文として分析していることになる。

具体例として陸検明（1993a, 1993b）から（这些）工人 [立刻] 修 〈好〉了（一座）桥。（これらの労働者はすぐに一つの橋をしっかりと修理した）という文を用いた説明が成されている（ は主語、 は述語、 は目的語、（ ）は連体修飾語⁽¹³⁾、〔 〕は連用修飾語⁽¹⁴⁾、〈 〉は補語）。

(24)

- (a) 这些 工人 立刻 修 好了一座桥。
(b) 这些 工人 立刻 修 好了一座桥。
(c) (这些) 工人 [立刻] 修 〈好〉了(一座) 桥。

分析の際、まず文全体の主要部分（主語と述語）を探し出す（上の例では“工人修”（労働者が修理する））。次の段階として、述語がどの動詞かを見極めた上で、副次的成分として目的語の有無を確認することとなる（上の例では“工人修桥”（労働者が橋を修理する）という構造が確認され

(13) この部分の記述は3.1節の本文中で取り上げた(2)の定義からすれば形容詞性付加語とすべきであろうが、陸検明（1993a, 1993b）において“定语”と解説されていたのに合わせて、本稿でも「連体修飾語」という用語を用いている。

(14) この部分の記述は3.1節の本文中で取り上げた(2)の定義からすれば副詞性付加語とすべきであろうが、陸検明（1993a, 1993b）において“状語”と解説されていたのに合わせて、本稿でも「連用修飾語」という用語を用いている。

る)。最後に付加成分として連体修飾語（“一座”）や連用修飾語（“立刻”）の存在を突き止める。

文成分分析法は“中心詞分析法”（中心語分析法）という別称に示される通り文の核心部分を捉える上で効力を発揮する。この点は、中国語の文構造を把握する上でも、我々日本人が外国語としての中国語を理解するにおいても利するところは少なくない。

更に陆俭明（2005）で文成分分析法は文の核心を把握することにたけた分析法であるので、次のような長い文に遭遇しても文意を読み取る上で役立つ点も指摘されている（(25)は陆俭明 2005：59より引用。下線は筆者によるもの）。

(25) 我国首次升空的（“神州—3号”）模拟载人飞船经过264个小时在太空运行之后按照原先预定的时间安全，准确地返回原先计算好的我国西北地区的地面。（我が国で初めて打ち上げられた「神州—3号」模擬有人飛行船は264時間宇宙を運行した後先に定めた時間通りに安全，正確にもともと計画しておいた我が国の西北地区の地上に戻りました）

例えば、この例においても基本的な内容が“‘神州—3号’飞船——返回——地面”（「神州—3号」という飛行船が地上に戻った）であることが分かる。

一方で、陆俭明（1993a, 1993b, 2005）では文成分分析法の局限に関しても言及がある。言及された中での代表部分（本稿のテーマとする語順体系と関連する内容）として、以下の要素を挙げることができる（例文(26)から(33)は何れも陆俭明（1993a, 2005：60）から引用）。

【主語＋述語（＋目的語）の形が不成立】

(26) 他贪图安逸。（彼は安逸をむさぼっている）→ *他贪图

(27) 封建思想必须清除。（封建思想は取り除くべきである）→ *思想

清除

- (28) 我们学习好的品德。(私達は良い人徳を学びます) → ? 我们学
习品德

上の例において(26)は目的語“安逸”を削除することにより、文が不成立となる。(27)においては、“必須”を削除することで“思想”が動作対象としての読みが困難となる。更には、“封建”という連体修飾語が取り去られると排除されるべき“思想”の特性が特定できず、文としても成立に困難を極めることとなる。(28)においても、“品德”の具体的な内容を示す連体修飾語“好的”を削除すると文として不自然となる。

【主語+述語(+目的語)で文意が変化】

- (29) 我弟弟不喜欢京剧(私の弟は京劇が好きでない) ≠ 弟弟喜欢(弟は好きだ)
- (30) 我们都听不懂。(私達はみんな聞いて分かりません) ≠ 我们听
(私達は聞く) ≠ 我们懂(私達は分かる)
- (31) 他死了爷爷。(彼はおじいさんを亡くした) ≠ 他死了(彼は死んだ)
- (32) 北京队大败安徽队(北京チームが安徽チームを大いに打ち負かす) ≠ 北京队败(北京チームが負ける)
- (33) 不合格的党员清除了。(不適格な党員は取り除くべきである) ≠ 党员清除(党員が取り除く)

上に挙げた(29)から(31)は、文成分の削除により文意が変わる。(29)では否定副詞“不”を削除することで、肯定と否定が全く逆になる。(30)では可能補語を構成する“不”を削除することで「～できない」という核心的意義が消失されることになる。(31)は目的語“爷爷”を削除した場合、「亡くなる」という動作の主体が“他爷爷”(彼のおじいさん)から“他”(彼)へと変化する。(32)では“安徽队”という目的語を削除することで、

“北京队”が勝者から敗者へと変わる。(33)では連体修飾語“不合格的”を取り除くことで、“党员”が“清除”(取り除く)という動作の受け手から主体へと変化する。

以上、文成分分析に基づく核心の抽出では困難が生じることを指摘した。ここで一点核心という点について言及すれば、同分析法においては文構造における核心のみならず意味的核心と部分に焦点を置いた分析法と言える。意味の点まで考慮した試みは評価に値する内容であるが、それが故に弊害を招いた点が見て取れる。

3.2 “层次分析”(階層分析)

階層分析は、その名の如く文構造の階層性を考慮に入れた分析法である。一つの文を構造毎に二分し、各階層における直接成分同士の関係性を示していく。階層分析の特徴は「どの部分で構造の切れ目が入るか」を示す“切分”，そして「各階層における前後両者がいかなる文法関係にあるか」を示す“定性”という部分が特徴となる(陆俭明(1993a, 1993b, 2005))。

“层次分析”(階層分析)を用いた場合、先に挙げた“句子成分分析法”における核心語順を描写する上での困難を解消することができる。例えば、例(26)から(28)及び(29)から(33)においても、何れも第一階層が“主谓短语”(主述フレーズ)として分析することができる。

- | | | | |
|------|-------|-------------|---------------|
| (34) | (26') | <u>他</u> | <u>贪图安逸</u> |
| | (27') | <u>封建思想</u> | <u>必须清除</u> |
| | (28') | <u>我们</u> | <u>学习好的品德</u> |
| | | 主 | 述 |

- | | | | |
|-------|-----|------------|--------------|
| (29') | (a) | <u>我弟弟</u> | <u>不喜欢京剧</u> |
| | (b) | <u>弟弟</u> | <u>喜欢</u> |

- (30') (a) 我们 都听不懂。
(b) 我们 听
(c) 我们 懂
- (31') (a) 他 死了爷爷
(b) 他 死了
- (32') (a) 北京队 大败安徽队
(b) 北京队 败
- (33') (a) 不合格的党员 清除了
(b) 党员 清除

主 述

以上、「文成分分析法」では矛盾が生じる内容を階層分析では主述フレーズとして纏めることができる。更に、主述フレーズにおける「主語」（主語）と「谓语」（述語）は「陳述・説明の対象と陳述・説明の内容」という関係を表す（朱德熙 1982：17；北京大学中文系现代汉语教研室编 2004：307；興水・島田 2009：21；三宅 2012：81 等）。上に挙げた例(26')から(33')では述語は「動詞」「形容詞」「動目フレーズ」「動補フレーズ」と様々である。また主語においても動作者はもちろんのこと受動者となることもあり得る（例(27'), (33' a)）。何れのパターンも、先述の「陳述・説明の対象と陳述・説明の内容」という関係性で網羅することが可能となる⁽¹⁵⁾。

上述の如く、階層分析では中国語の文構造を正確に描写する点で長けている。但し、大多数の文構造の大枠を主述フレーズとして一括り纏めることは正確さを有していても実用性や利便性を欠いたものとなる（陆丙甫 2008b：130）。階層分析は各階層における構造関係を記述するものであり、

(15) 主語の定義について「特に厳密な資格はなく、説明の対象」と規定する解説は中国語のみならず、大西（2011：50）の如く英文法書でも見ることができる。

異なる階層の語句動詞の意味関係を記述する能力を有していない。例えば先に主語は動作者のみならず受動者等が来ることもある点を指摘したが、階層分析ではこのような点を明確に示す術を持たない。更には、以下のようにならぬに無尽蔵に拡張される形式に対しては、その分析に困難を極める。

- (35) ……张三告诉我 李四认为 王五说过 赵六主张……（…張三は私に李四は王五が趙六は……と話したと持っていると言って、…）
（陸丙甫 2008b : 130）

例(35)のように延々と続く文の一部を抽出した場合、核心を捉える上では大いに不向きとなる。

3.3 SVO を骨子とした語順分析

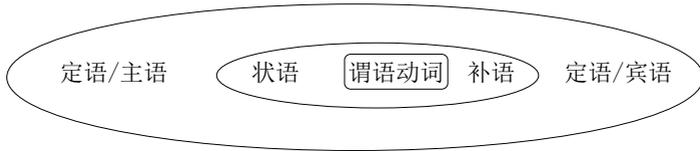
以上，“句子成分分析”（文成分分析），“层次分析”（階層分析）の双方を概観すると、前者は文構造の核心部分の抽出、言わば簡明な描写という部分で利点を発揮する。一方後者は、正確な文構造を記述する上で効力を発揮するが構造的、そして意味的核心という部分を説明する機能を有していない分、簡明さや利便性という部分に関しては劣ることになる。利便性は、外国人の立場から中国語を理解する上では特に重要な意味を持つ。概して、言語分析において、文成分分析、階層分析の何れも一長一短を持ち、正確さと利便性の何れかを欠いている。逆に言えば正確な記述と利便性という双方の需要を満たす分析法が必要とされる。

利便性は、中国語 SVO の語順的特徴の整理と記述を目的とする本稿の立場からしても重要な要素となる。その点を考えると、SVO 語順をベースとしたコーティング関係が合理的に説明できれば理想である。コンセプトは、文成分分析法と類似した観点になるかと思われるが、文成分分析法ではコーティング関係に関して厳密さに欠いていた嫌いがある。コーティングという言葉を用いるならば、同分析法では「主語＋述語」に様々なコーティングが施されたように捉えているとうことになるが、その弊害に

については既に言及した通りである。

コーティング関係について考察する場合、語順階層に適切な描写という部分が必要となる。大まかな語順階層という点について、张国宪・卢健（2013：144）においては、中国語の大まかな語順は述語動詞を中心に次のような統語位置を占めるといふ指摘がある。

(36)



张国宪・卢健（2013）において、“谓语动词”（述語動詞）を中心にして“状语”（連用修飾語）と“补语”（補語），“主语”（主語）と“宾语”（目的語）がそれぞれペアを成して、一方で“定语”（連体修飾語）は二種の統語的位置を占めることを指摘している。即ち、連体修飾語は主語、目的語の中で体现されるわけであるから、主語、述語、目的語等と同一線上に並べられることができないものと言える。

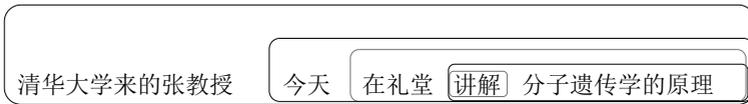
文構造の述語部分の分析から“定语”（連体修飾語）を排除すべきという主張は陆丙甫（2008a, 2008b）にも見られる。また、张国宪・卢健（2013）においては、主語と目的語をペアと成すと言っても述語動詞との緊密性では大きく隔たりがある。この点を踏まえ陆丙甫（2008a：246, 2008b：131）では、“直系成分分析”（直系成分分析⁽¹⁶⁾）が提示されている。当分析では語順類型論の“语义靠近原理”（意味接近原則）に基づき語順階層を“轨层结构”（軌層構造）として示していく。

この原則では世界中のあらゆる言語は、述語動詞を基層として、連用修

(16) “直系成分分析”に対する「直系成分分析」は筆者による日本語訳である。

飾語として外層から内層へ“时位（時間的位置：T），时量（時間量：D），处所（場所：L），工具（道具：I），方式（方式：M）”という順序で統語位置の段階性を表すとある。陆丙甫（2008a, 2008b）で“清华大学来的张教授今天在礼堂讲解分子遗传学的原理”（清华大学からいらした張教授は今日講堂で分子遺伝学の原理を講義されます）という例を挙げ論証が成されている。

(37)



上の例に見る時述語部分において連用修飾語部分を比べると“今天”（T），“在礼堂”（L）という語順で並んでおり、意味接近原則に準じた統語位置を呈していることになる⁽¹⁷⁾。

ここで陆丙甫（2008a, 2008b）の直系成分分析の特徴について述べれば、次の通りに纏められる。

- (a) 連体修飾語の扱い方。連体修飾語を語順分析の平面から外し、外枠の構造として扱う。
- (b) 基本語順 SVO と連用修飾語による前方コーティングの関係性に対し詳細な記述が行われている。

(17) 陆丙甫（2008a, 2008b）から意味接近原則による語順原理を示す例として、更に以下の例（a. は中国語、b. 英語）を引用しておく。a. (他) [上星期 [[在实验室 [用计算机 [连续地 [工作了]]]] 六天]]. b. (He) [#####worked] continually]with computers]in the lab]for six days]last week]. 両者の例でも、語順原則の通りに外層から内層へ「上星期 / last week（時間位置：T），六天 / for six days（時間量：D），在实验室 / in the lab（場所：L），用计算机 / with computers（道具：I），连续地 / continually（方式：M）」と配列された形となっている。

以上、語順類型論の観点から SVO をベースとした VO に対する外層から内層へのコーティング原則を綿密に描写したものとなる。本稿の主旨で SVO 語順を核心としたコーティング解明という点からすれば、第一段階として各連用修飾語の語順傾向という細かい点までを視野に入れたわけではないが、上のような軌層図を見れば「主語 + (連用修飾語 (V + O))」という構造関係を容易に読み取ることができる。例えば、(37) を例にとると“清华大学来的张教授讲解分子遗传学的原理”(清华大学から来た張教授が分子遺伝学を講義する)を核として、各種連用修飾語が枝葉として付加されたことが読み取れる。そして、“清华大学来的张教授”“遗传学的原理”のように連体修飾構造は語順モデルの大枠から外れている。階層分析では S と VO という異なる階層のものを同一平面上に並びた意味的な核心を瞬時に読み取ることができる。よって、この分析法では「主語 + 述語」という階層構造も把握しやすいし連用修飾語が (SVO 全体ではなく) VO を修飾している、という点も見出しやすい。更には「主語 + 動詞 + 目的語 (SVO)」という基礎的意味を容易に読み取ることができる。この点は、本稿で意図とする中国語 SVO 語順をベースとした語順的特徴を捉える目的から見ても、有効な分析法である。

但し、一方で、陆丙甫 (2008a, 2008b) では語順類型論的な観点から一部分の構文や文法現象が論じられているに過ぎない。VO と連用修飾語以外の軌層関係について言及が成されていない。中国語の言語事実を眺めてみると、コーティング関係は VO に対するもの、或いは前方からのものに限らない⁽¹⁸⁾。更には第 2 章で言及した本稿の対象とする (一) 核心としての SVO の意味関係の確立、(二) 基本構造 SVO の核心的意義づけ、という点についても依然明確な分析がなされていない。(二) について、陆丙甫 (2008: 25) においても、肯定と否定で意味が逆転するという現象

(18) この点は第 2 章で示した通り、今後の考察対象とする。

（例。“人们的心情很不平静”（人々の心は穏やかでない）と“心情平静”（心が穏やかだ））に対する言及は成されているが、このように否定副詞を付加した否定文に対して、如何なる次元で核心を成しているかという点は正面からの議論が見られない。第4章、第5章ではそれぞれの点に焦点を当てて整理していく。

4. 基本語順

本章では第2章で提示した問題点（一）核心としてのSVO，という点について整理する。

4.1 形容詞述語文

まずは形容詞述語文の基礎となる簡素な体系である⁽¹⁹⁾。日本語としては「SはAだ」と表現される。また、英語にも“S is Adv（例. She is beautiful）”という類似した形式の構文が存在する。中国語における簡素な形容詞述語分は、述語の核心部分を性質形容詞や数量形容詞が担う⁽²⁰⁾。

(19) 形容詞述語文は形容詞が述語の核を占める文である。よって、“S+A”をベースとした各種表現が存在する（例。“风大极了”（風が非常に強い），“天阴上来了”（空が曇ってきた））。これらのタイプでは“风大”（風が強い），“天阴”（空が曇っている）という表現をベースに、形容詞“大”“阴”の後に、それぞれ程度補語“极了”と複合方向補語“上来”が付加された形となる。このように基本をベースに他成分の付加されたタイプは、別稿に譲る。

(20) 形容詞には事物の属性を表す状態形容詞に対して、事物の具体的な状況や状態を表す状態形容詞が存在する。状態形容詞は性質形容詞形容詞の重ね型〔慢慢儿（ゆっくりだ）；高高兴兴（嬉しそうだ）〕や性質形容詞に語尾の付着した形式〔胖乎乎（まるまる太っている）；凉冰冰（ひんやりしている）〕等が存在する。以上、状態形容詞は性質形容詞にコーティングの施された形式と考える。

【性質形容詞】

(38) 这个很大。(これは大きい)《平山 2017a》

(39) 他很认真。(彼はまじめです)《平山 2017a》

【数量形容詞】

(40) 人很多(人が多い)《商務印書館 小学館共編 2016 : 405》

(41) 公园里人很少(公園の中は人が少ない)《相原茂 2010 : 1406》

上に(38)(39)に性質形容詞“大”“认真”，(40)(41)に数量形容詞“多”“少”の例を取り上げた⁽²¹⁾。特に何かの程度を付加しない「SはAだ」という意味を表したい場合，形容詞の前には“很”が付加されることとなる⁽²²⁾。

4.2 動詞述語文

次に，動詞述語文である。本節では中国語 SVO の基本モデルを考察したい。3.2 節でも触れた通り，中国語において主語は陳述の対象としての働きを持ち，動作者と限るものではない。但し，一方で動作者が主語の典型になるのも事実である。また 3.3 節でも言及したが，コーティングと直接関わってくるのは多くが動詞 V の部分となる。よって，VO の意味関係を軸に議論したい。以下，中国語の SVO モデルと，日本人の SVO 語感を総合して纏めていく。

(21) 但し数量形容詞は他の機能について異なる振舞いが見られる。例えば連体修飾語に“很”や“不”を用いる場合，性質形容詞は通常“很 / 不 A 的 N”をとり，形容詞の後に“的”が必要となる〔例，很认真的学生（とてもまじめな学生）／不好的习惯（良くない習慣）〕。一方数量形容詞は“很多人 / 不少人”（多くの人）のように，形容詞の後に“的”を必要としない。

(22) 厳密に言えば“很”も程度副詞の一種となるので，構造的には“SA”の述語形容詞に“很”の付加された形となる。但し，本文中でも触れた通り，形容詞のみで述語を形成した場合対比，比較の意味が加わった有標形式となる。よって，本稿では“S 很 A”を基本形式として扱った。

4.2.1 VO 動詞述語文

VO が述語として用いられた動詞述語文 SVO における VO の意味関係は大部分が「O を V する」「O に V する」という 2 種類に対応する。他の意味関係について対応する動詞の数は限られるので、個別の動詞として認識する形で整理できよう（平山 2008）。日本人学習者の言語背景で日本語訳に対するスキーマの定着したパターンであるほど、日本人話者にとっても中国語 SVO を日本語に訳す際、違和感なく変換できることが予想される。以下、例を観察する。

[S は O を V する] タイプ

この種の意味関係は動作動詞、状態動詞と目にすることができる。まずは、以下の例を挙げておく。

(42) 我喝冰咖啡。(私はアイスコーヒーを飲む)《平山 2012》

(43) 她写信。(彼女は手紙を書く)

上に挙げた(42)(43)の動作動詞が用いられている。動詞との関係性から言えば(42)は受動者目的語、(43)は結果目的語とその役割は異なる。但し、日本で訳出する SVO の意味関係としては何れも「-を」という同様の関係性になる。

更には次の例である。

(44) 他知道这件事。(彼はこの事を知っています)《商務印書館 小学館共編 2016:2024》

(45) 我相信你。(私はあなたを信じています)《孟琮等 1999》

上に挙げた“知道”(知っている)、“相信”(信じている)は心理活動を表す。また、文自体も心理状態を表している。更には、次の例である。

(46) 我很喜欢历史。(私は歴史を好んでいる；私は歴史が好きだ)《商務印書館 小学館共編 2016：1676》

(47) 我讨厌这个地方的风沙。(私はこの土地の砂嵐を嫌っている；私

はこの土地の砂嵐が嫌いだ)《孟琮等 1999》

上に挙げた“喜欢”(好む;好きである)，“讨厌”(嫌う;嫌いだ)も心理状態を表すものである。このタイプは日本語に訳す場合、「SはOをVする」以外にも「SはOがVだ」と「が格」を用いて訳出することも可能、更には多くの場合この形で訳出する方が自然な形となる。何れにしても、英語にも“like”“hate”のような類似した動詞が存在する。よって、日本人にとって大きな抵抗感が存在しないであろうことは推測される。

[SはOにVする]

まずは該当する例を挙げておく。

(48) 她去图书馆。(彼女は図書館に行く)《平山 2012》

(49) 姐姐来东京。(姉が東京に来る)

(50) 我给你。(私はあなたにあげます)

(51) 我告诉你。(私があなたに話します)

上に挙げた VO 関係において目的語の役割を見ると、(48)の“图书馆”(図書館)、(49)の“东京”(東京)は着点としての場所を表す。(50)(51)の“你”は動作対象となる人を表す。更には英語にも対応する表現として“go to + 場所”“come to + 場所”, “give” “tell” 等が存在しており、SVO の形としては受容しやすいことが推測される⁽²³⁾。

4.2.2 “是”を用いた動詞述語文

このタイプの文は、“是”を用いた動詞述語文では、「SはOだ(S=O)」という意味関係を表す。英語では言えば be 動詞を用いた構文と近い

(23) 周智の如く、“给”“告诉”は“V + O₁ [人] + O₂ [事物]”(O₁にO₂をVする)という二重目的語構文を形成する〔例. 我给你一本书(私はあなたに本を一冊あげる) / 我告诉你一件事(私はあなたにある事を教える)〕。この点も英語に“give”“tell”を用いた二重目的語構文が存在することと類似している。

性格を持つ⁽²⁴⁾。

(52) 我是日本人。(わたしは日本人です)《平山 2012》

(53) 他是公司职员。(彼は会社員です)《平山 2017a》

(54) 这是我的书。(これは私の本です)《平山 2017a》

上掲の例で言えば、それぞれ“我＝日本人”“他＝公司职员”“这＝我的书”という同値であることが示されている。

4.2.3 “在”を用いた動詞述語文

“在”を用いた動詞述語文は存在を表す。このタイプの動詞述語文は“S [人/物]+ ‘在’+O [場所]” (S [人/モノ]はO [ある場所]にある/いる)という形で用いられる。存在を表す“有”構文と対比される際、「人/物」と「場所」の語順（動詞Vの前か後か、即ち主語Sに「人/物」が置かれ、目的語Oに「場所」が置かれる）という点が注意点として示される。

(55) 银行在邮局旁边。(銀行は郵便局の隣にあります)《平山 2012》

(56) 他在房间里。(彼は部屋の中にいます)《平山 2017a》

上掲の例では“银行”（銀行）という物，“他”という人がある場所〔それぞれ“邮局旁边”（郵便局の隣），“房间里”（部屋の中）〕に存在することが示されている。こちらの表現は英語の“S be (am/is/are) in +場所”が存在することからも、日本人話者にとっても容易に受容しやすいことが伺い知れる。

4.2.4 “有”を用いた動詞述語文

次に“有”を用いたタイプである。周知の如く，“有”には「所有」と

(24) 英語の be 動詞と異なる用法も存在する。例えば教科書や文法書で取り上げられるものとして“是…的”を挙げることができる〔例、我是昨天来的（私は昨日来たのです）〕。

「存在」の二種の意味を持つ。まずは、所有を表すタイプを挙げておく。

(57) 我有电脑。(私はパソコンを持っている)《平山 2017a》

(58) 我有三十本小说。(私は小説を 30 冊持っている)《平山 2012》

(59) 他没有手机。(彼は携帯電話を持っていない)《平山 2017a》

存在を表すタイプは“S [所有者]+有/没(有) + O [被所有者]”(S [所有者]はO [被所有者]を持っている/持っていない)という語順で用いられる。それぞれ肯定の場合は“有”，否定の場合は“没 [有]”という動詞が用いられる。所有を表す“有”動詞述語文のVOの日訳関係においても、「OをVする」という優勢的な対訳が当てられる。英語にも，“have”を用いた語順表現は見慣れたものであろうから，“有/没(有)”を用いた動詞述語文の語順は日本人の英語学習でも容易に想像することができよう。

次に存在を表す表現である。このタイプの動詞述語文は“S [場所] + ‘有/没(有)’ + O [人/物]”[S [ある場所]にO [人/モノ]がある・いる/ない・いない]という形で用いられる。存在を表す“在”構文と対比される際、「人/物」と「場所」の語順(Vの前か後か、即ち主語Sに場所が置かれ、目的語Oに人や物が置かれる)という点が注意点として示される。また述語動詞には所有と同様に肯定の場合“有”，否定の場合“没 [有]”という動詞が用いられる。この点は日本語で存在の否定を表す場合も「ない」という語を用いる(「*あらない」と表現しない)ことと類似している。

(60) 那儿有一家快餐店。(あそこに一軒のファストフード店があります)《平山 2012》

(61) 教室里有一个人。(教室には人が一人います)《平山 2012》

(62) 屋里没有空调。(部屋にはパソコンがありません)《平山 2017a》

上掲の例において(60)(61)は，“那儿”(あそこ)，“教室里”(教室の中)という場所における“一家快餐店”(一軒のファストフード店)，“一

個人”（一人の人）の存在が述べられている。一方（62）は，“屋里”（部屋の中）という場所における“空调”（エアコン）の存在が否定されている。

ここで「VO」の意味関係に目を向けると「OがVする」（主語を含めると「S [に] はOがVする」）となる。日本語の場合、通常「-が」は動作者の後に置かれる。よって、SVO 言語における目的語の位置は違和感を覚えやすいものとなりやすい。但し、英語学習で“there is”構文に触れている日本人学習者の言語背景を考えると、それほど難を覚えるものとは考えにくい⁽²⁵⁾。

更には、所有と存在はリンクという点から言及すると、存在を表す“有”述語文における主語となる場所はある種の無生物領域と見ることができると言える。換言すれば広義の所有者として認識できる。また日本語でも所有を表す“有”は「SはOを持っている」以外にも、「SにはOがある」（例えば(60)(61)(62)は「私にはパソコンがある」「私には小説が30冊ある」「彼には携帯電話がない」）と訳出することもできる。後者で訳出した場合主語Sの場所的側面が浮き上がっていることが見て取れる。よって、孟琮等（1999）で次のように「所有」「存在」の“有”の目的語を何れも“受事”（受動者）として分類しているのは一理あることと言える。

- (63) 所有：我有书（私は本を持っている；私には本がある）／有材料（材料を持っている；材料がある）／有气魄（气迫を持っている；气迫がある）／有力量（力を持っている；力がある）／有干劲（やる気を持っている；やる気がある）

(25) 存在を表す“有”の習得に関して“there is (are)”構文が参考になる点は先行研究でも指摘がある。例えば丸尾（2003：27）では、語順形式だけでなく目的語の性質（不特定性）の説明という部分にも言及が成されている〔例.*There is my book on the desk. → There is a book on the desk. / *一本书在桌子上。→ 桌子上有一本书。〕。

存在：有人（人がいる⁽²⁶⁾）／有水（水がある）／有魚（魚がいる）
／有樹（木がある）

更には、日本人学習者にとって英語学習で馴染みの多い“have”に関しても、「存在」「所有」の意味を有するし、英文法の解説でも目にすることもできる。一般的な市販の英文法書（高梨 1970：350）から例を挙げておく。

- (64) The boy has a ball in his hand. [少年は手にボールを持っている]
My room has only two windows. [私の部屋には窓が2つしかない]

4.2.5 各種 VO の意味関係

本章では、意味関係から見た中国語の基本的な語順枠組みを論じてきた。そして、日本人学習者の動詞述語文 SVO 語順に対して有する言語背景からくる知識をもとに、4.2.1 節から 4.2.4 節の形に纏めてみた。その中で VO の意味関係として「O を V する」「O に V する」が一番多く目にする意味関係であることを示した。この点は、日本人の SVO に対する認識からしてもさして真新しいことでないかもしれない。但し、用例資料を基に少し補強を入れておきたい。

意味役割という点から見ると、中国語の目的語は動詞に対して受動者〔“紅茶”（紅茶を飲む）〕、対象〔“給你”（あなたに与える）〕、結果〔“做菜”（料理を作る）〕、場所〔“進教室”（教室に入る）〕、動作者〔“下雪”（雪が降る）〕等多くの関係性を呈す。分類数に関しては各種文献によって差異が見られる。詳細な分類を行っているものとして、例えば孟琮等（1999）では、以下の 14 種類の項目を設定している。それぞれ、挙げられた例と日本語訳を付しておく（以下に挙げた①から⑭の日本語訳において

(26) “有人”は他に「人がいる」という統語の意味から転じて、語用論の意味として「(席などが)空いている」という意味で使われることも少なくない：这儿有人吗？（ここ空いていますか）

「Oを」「Oに」以外の意味関係で訳出された部分は助詞を斜体網掛けとして示している)⁽²⁷⁾。

- ① 受事宾语（受動者目的語）：挂地图（地图を掛ける），看电影（映画を見る）
- ② 结果宾语（結果目的語）：拿主意（心を決める），排队（列に並ぶ；列を作る）
- ③ 对象宾语（対象目的語）：告诉大家（みんなに教える），给别人（他人にあげる）
- ④ 工具宾语（道具目的語）：扇扇子（扇子で扇ぐ；扇子を扇ぐ），烧煤（石炭を燃やす），拴绳子（縄で縛る；縄を縛る），往脸上扑粉（顔に白粉を塗る）
- ⑤ 方式宾语（方式目的語）：弹C调（ハ調で引く），写仿宋体（宋体で書く），跳探戈（タンゴを踊る）
- ⑥ 处所宾语（場所目的語）：游昆明湖（昆明湖を泳ぐ），坐飞机（飛行機に乗る），东西在桌子上（物が机の上にある）
- ⑦ 时间宾语（時間目的語）：迎接国庆节（国慶節を（*で）迎える），祝贺新年（新年を（*で）祝う），订下星期五（金曜日を予約する；金曜日で予約する）
- ⑧ 目的宾语（目的目的語）：赶任务（任務達成を急ぐ），考研究生（大学院を受験する），量水温（水温を量る）
- ⑨ 原因宾语（原因目的語）：救灾（災害から救う），缩水（水に縮む），挠痒痒（かゆいところを搔く）
- ⑩ 致使宾语（使役目的語）：开门（ドアを開ける），扩大战果（戦果を拡大させる），立纪念碑（記念碑を立てる），满足了群众的愿望（群衆

(27) “去一次”（一度行く），“看一个小时”（一時間見る）等動詞に後続する動作量や時間量を表す成分を準目的語とする考えもある（朱德熙 1982，北京大学中文系现代汉语教研室编 2004）。本稿では補語として扱う。

の願いを満足させた)

- ① 施事宾语 (動作者目的語): 起風 (風が起こる), 下雨 (雨が降る),
来了几个人 (何人ががやって来た), 我的脑子里闪过这种念头 (私の脳裏にこういう考えがよぎった)
- ② 同源宾语 (同源目的語): 睡觉 (眠る), 谈话 (話をする), 跳舞 (ダンスをする)
- ③ 等同宾语 (同等目的語): 我是工人 (私は労働者だ), 他长得像他哥哥⁽²⁸⁾ (彼はお兄さんに似ている), 他装病人 (彼は病人を装う)
- ④ 雑類 (雑類): 谈心 (心中を打ち明ける), 偷嘴 (盗み食いをする),
推玉米 (トウモロコシ [粉] をひく), 写作业 (宿題をする)

以上大雑把な概観ではあるが、目的語が何れの機能を表す場合も大多数の場合「Oを」「Oに」という形で訳出されることが分かる。

また、この点は単なる語感的な部分だけでなく、少なからず日中対照の部分からの根拠を得ることができる。上に挙げた機能の中には日本語文法書から類似用法の解説が見られる。受動者目的語、結果目的語は日本語のヲ格に類似した機能と重なる部分も少なくない。また、③の対象目的語は二格と重なる部分も少なくない。例えば高橋他 (2005:36) を挙げると、ヲ格について①の受動者機能として「[はたらきかけを受ける対象]、②の結果目的語に当たる機能として「[つくりだす対象 (動作の前には存在しない)』という項目が設定されている。更には、⑥の場所目的語に対しても「とおりすぎる場所 (場所名詞)」という用法を見ることができる⁽²⁹⁾。

更に高橋他 (2005:36) から二格についても、③の対象目的語に当たるものとして「あいて (ひと名詞)」という解説が挙げられている。

(28) 動詞。「像」について孟琮等 (1999) では「象」と記載されているが、現在の規範に従い「像」を用いる。

(29) 以下に高橋他 (2005:36) からは挙げられた例を列挙しておく。「歩行者歩道をあるきます」「列車はいまアルプスのたにまをはしている」

その他に挙げられた例であるが、⑪⑬は「動詞＋目的語」の形で一つの意味が形成された例が少なくない。ヲ格を用いた日本語例と対応する意味関係での訳出可能な例も少なくない。⑫の同源目的語に関しても、“我是工人”のような“是”に関しては「～である」という意味関係が日本人話者の中で一種のスキーマとして形成されている点は既に説明した通りである⁽³⁰⁾。また他の目的語について見ると、⑦の時間目的語はその挙げられた例を見ると、「ある場所で」という発生した場所よりも、モノ性として捉えられるものも少なくない。

日本人のSVO感覚と比較的異色を呈するものとして⑪の動作者目的語、④道具目的語、⑤方式目的語、が挙げられよう。⑪の“起风”“下雨”は事前現象を表し「無主語文」という分類をされる。また“[家里]来了几个人”“我的脑子里闪过这种念头”等は存現文（の中の現象文）に分類される⁽³¹⁾。日本人話者の語感からもガ格が目的語の位置に置かれる点に違和感が持たれやすい。こちらは、SVOの基本形式からのリンクとして扱っていったら良いのだろう。

④の道具と⑤の方式は一種の隣接した概念である。道具や方式というのは何かの目的動作があって成り立つものである。④の道具の例はデ格において訳出される文もヲ格での訳出が多く可能（むしろヲ格の方がより自然）となる。道具の場合、その受動者の性格が見だしやすい。何かに対する動作を行う場合、その道具に対する動作が同時に行われる為である。

(30) 例えば同源目的語に挙げられた例の“像他哥哥”の“像”と“他哥哥”関係性に対しても、高橋他（2005：36）で二格に対して「認識の内容」という類似した分類が設定されている（例、すすきのほがゆうれいにみえた／ネコのごえがあかんぼうのこえにきこえる）。

(31) 平山（2008, 2009）でも言及しているが、存現文中の目的語は受事目的語と指摘するものも見られる（李臨定1994, 任鷹2006）。本稿でも存現文における目的語を受動者目的語と見る立場をとる。基本的リンク関係は、紙幅の都合上、稿を改めて論じたい。

例えば，“扇扇子”において「風を扇ぐ」という動作の発生には「扇を扇ぐ」という動作がまず行われる必要がある。

また⑤の方式目的語について任鷹（2000：117）で“用汉语说”と“说汉语”における“汉语”は前者が方式で、後者を受動者と分析している。その際それぞれに対応する「中国語で話す」と「中国語を話す」を取り上げ論証が行われている。即ち「目的語が方式を表す語句でも目的語として用いられた時点で受動者であり、日本語のヲ格と対応する」という主張である。同様の理屈から考えると，“C 调”“仿宋体”というのはそれぞれ「曲を演奏する」、「文字を書く」という前提において成り立つ。よって、実際のニュアンスとしては“弾 C 调”“写仿宋体”はそれぞれ「ハ調（の曲）を演奏する」「宋朝体（の文字）を書く」という訳出した方が妥当なのかもしれない。更には、方式というものの自体後ろに何かの動作の存在があって初めて成り立つものである。例えば、⑥の場所目的語の例において，“飞机”が挙げられている。一方で、次のような表現では方式として解釈される（例(65)は平山 2012 より引用）。

- (65) (a) 坐飞机（飛行機に乗る）
(b) 坐飞机去美国（飛行機に乗って【→で】アメリカに行く）

上掲の例は教科書等でも提示されるような連動文である。上の文では後続動作“去上海”の存在が先行する VO の目的語の意味役割を顕現させていることが窺える。以上、VO という範囲だけでの関係性では純粋な方式目的語というものも認知し難いのではないだろうか⁽³²⁾。

更には⑥の場所目的語について補足すれば、教科書や参考書等ではほと

(32) 道具や手段の中には元々その役割を持たないものが、構文や表現の中でその役割を担う場面も存在する。例えば“用肉包子打狗”（肉まんを犬を叩く）という例において，“肉包子”（肉まん）は(65)で挙げた“飞机”（飛行機）と異なり、本来は何かの道具ではなく本来の役割は食品である。しかし，“用__打狗”という文の中で道具という範疇に入ることになる陸俭明（2005：160）。

んど説明されることもない“吃食堂”（食堂で食べる）のような共起関係も存在するし、目的語研究の中では議論的となっている。但し、「食堂でご飯を食べる」という場合“在食堂吃”という方が自然な形であるし、「Oを/にVする」タイプと比べると大きな制約が存在することになる⁽³³⁾。

以上、中国語のVO関係の特徴及び日本人話者のバックグラウンドから考察しても、4.2.1節で挙げた「Oを」「Oに」を中心として意味関係を中心にSVOの基準を纏めていく点の妥当性を改めて確認した⁽³⁴⁾。

5. SVOと連用修飾語のコーティング関係

本章では、VOに対する前方コーティングの関係を通して、第2章で示した問題（二）「基本構造SVOの骨子的意義づけ」という点について考察を行う。この点については構造だけでなく意味的コーティングという部分も外国人の立場から中国語を眺める上では整理しておきたい項目である。文成分分析法を使用する際(21)のように核心だけを取り出すと文意が反対になるような弊害は意味的核心の捉え方に対しての合理性が欠けてい

(33) “吃食堂”に関する議論は、王占华（2000）、胡勇（2016）等を参照。

(34) 4.2.1節ではSVO形式を論じたが、SV形式に対する整理も必要な作業となる。SV形式についても、様々な要素が考えられる。①述語の中の目的語の省略（例、你喝可乐吗？我喝[可乐]。（あなたはコーラを飲みますか—私は[コーラを]飲みます））。②述語が自動詞〔我今天休息（私は今日休みます）〕。③SVOの時とSVの時点に動詞の意味が変化する（例、他死了（彼は死んだ）／他死了爷爷（彼はおじいさんが亡くなった）＝例(31)；北京队败（北京チームが負ける）／北京队大败安徽队（北京チームが安徽チームを大いに打ち負かす）＝例(32)《陆俭明 1993b：203》）。施春宏（2004：18）の指摘するSVOとSVの双方の語順をとる動詞において、それぞれ無標形式がどちらになるか異なるという点とも関わってくる。SV形式に関する分析は稿を改めて論じたい。

た点とも関連してくる。以上の点を踏まえて、議論していきたい。

5.1 前方コーティング（連用修飾）のタイプ

まずは、同修飾語として用いられるタイプについて幾つか類型を示しておきたい⁽³⁵⁾。

第3章で述べたが、SVOのVOに対する前方コーティングは連用修飾語が該当する。“状語”（連用修飾語）とはその名の通り用言を修飾するものであり「動詞、形容詞の前で状態、程度、時間、場所等を表す修飾成分」⁽³⁶⁾となる。修飾というのは平たい言葉を用いれば「かざり」と表現できる⁽³⁷⁾。通常はその有無が文の核心的意味に影響を及ぼさないという点が類推できる。この点は大多数の連用修飾語に適応できる。以下に連用修飾語のタイプを挙げておく。

① 形容詞

- (66) 快上车吧。(早く車に乗りなさい)《商務印書簡 小学館共編 2016: 880》⁽³⁸⁾
- (67) 外面很冷, 多穿点儿衣服。(外は寒いので, 服を多めに着なさい)
- (68) 热烈欢迎 (熱烈に歓迎する)《興水・島田 2011:138》
- (69) 你们应该好好儿学习。(あなた達はしっかり働くべきだ)《守屋

(35) 本節の目的は連用修飾語の全てを網羅してリストアップすることではない。本文中で示した通り、あくまでコーティング関係から、SVOの骨子的役割を探し出していくという部分にある。よって、紙幅の関係上を鑑み、使用(或いは目にする)頻度がそれほど高くないと思われるものについては特出すべき点が見出せない場合、適宜省略している。

(36) 《現代汉语词典(第7版)》参照。

(37) 相原他(2016: 154)。

(38) 次のように受動者が主語となっている例は対象外とする。: 他的话难懂。(彼の話は分かりづらい)《商務印書簡 小学館共編 2016》

1995：167》

(66)-(69)は形容詞に“地”を伴わずに連用修飾語となる例である。(66)(67)は一音節形容詞⁽³⁹⁾, (68)(69)は二音節形容詞の例である。何れもSVOが文意的核心となり、その上でコーティングの施された関係と言える。(66)の“快”は“你上车”という前提のもとに動作の取り掛かりを速めるニュアンスを付加している。(67)は“你穿衣服”(あなたが服を着る)という前提のもと“多”を付加することで衣服の量を増やすことが伺える。同様に(68)(69)も、“热烈”“好好儿”は“我们欢迎”(私達が歓迎する)、“你们学习”(あなたが勉強する)という程度情報を加えることになっている。

② 指示代名詞

(70) 我们这么办吧。(私たちはこうしましょう)《平山2012》

(71) 你别那么固执! (そんなに意固地にならないで)《平山2012》

指示代名詞“这么/这样”(このように; そのように)、“那么/那样”(そのように; あのように)は動作の方式や程度を表す。(70)で示される“这么”という方式は“我们办~”(私は~を行う)という一連の動作を確認することで認識される。同様に(71)に示される“那么”という程度は“你固执”(あなたが意固地になっている)という事態と共に確認される内容となる。

③ 疑問代名詞

疑問代名詞“怎么”は「どのように」という手段を問う意味と、「な

(39) (66)のような“快”について中には副詞と分類する考えも見られる。例えば(66)の引用元の商務印書館 小学館共編(2016), 等や《现代汉语词典(第7版)》等が該当する。但し, 当該の“快”を形容詞, 副詞何れに分類しても本稿の議論とは何ら抵触するところではない。

ぜ；どうして」と原因を問う意味を持つ。

- (72) 你们怎么办? (あなた達はどうしますか) 《平山 2012》
(73) 他们怎么反对我的意见? (彼らはなぜ私の意見に反対のですか) 《平山 2012》
(74) 你为什么不理我? (あなたはどうして私に構わないの) 《平山 2017a》

手段，原因に何れの意味を表す場合においても，疑問文自体は SVO という存在が前提となって問われる内容となる。

④ “地”を用いた連用修飾

構造助詞“地”を用いることにより，様々な成分と結びついて描写性の連用修飾語を構成する。

- (75) 他努力地学习。(彼は一生懸命勉強します) [→二音節形容詞]⁽⁴⁰⁾ 《平山 2017b》
(76) 妈妈气愤地骂孩子。(お母さんはかんかんになって子供を叱っています) [→二音節形容詞] 《平山 2017b》
(77) 你们应该好好儿学习。(あなた達はしっかり勉強すべきだ) [→一音節形容詞の重ね型] 《守屋 1995:167》
(78) 我向上级详细地汇报了情况。(私は上司に事細かに状況を報告しました) [→二音節形容詞の重ね型] 《平山 2017b》
(79) 他们非常热情地招待了我们。(彼らは非常に心をこめて我々をもてなしてくれた) [→修飾フレーズ] 《丸尾 2010:196》
(80) 他无精打彩地回家了。(彼は意気消沈して家に帰った) [→慣用語] 《丸尾 2010:196》

(40) 一音節形容詞は連体修飾の“的”を伴えるが，連用修飾の“地”をつけることはできない(例，快说(速く話す)→*快地说；轻搁(そっと置く)→*轻地搁)(北京大学中文系现代汉语教研室编 2004:339, 三宅 2012:92)。

上に挙げた連用修飾語において“地”の前には様々な成分が置かれているが、何れも SVO という事象（“他学习～”（彼は～を勉強する），“妈妈骂孩子”（お母さんが子供を叱る），“你们学习”（あなたが勉強する），“我汇报情况”（私が状況を報告する），“他们招待我们”（彼らが私達をもてなす），“他回家”（彼が家に帰る））から顕現される動作者 S の様子を表している。

⑤ 前置詞フレーズ

以下に介詞フレーズの例を挙げた。④の“地”を用いた連用修飾語に対して、介詞フレーズは動詞や形容詞の前において限定性を表す⁽⁴¹⁾。

- (81) 公司离东京塔很远。(会社は東京タワーから遠いです)《平山 2012》
- (82) 我们从明天开始放假。(私たちは明日から冬休みになります)《平山 2012》
- (83) 他们在图书馆学习汉语。(彼らは図書館で中国語を勉強します)《平山 2012》
- (84) 小张对历史感兴趣。(張さんは歴史に興味があります)《平山 2012》
- (85) 我跟你说。(私はあなたに言います)《平山 2012》
- (86) 我比哥哥矮一点儿。(私は弟より少し背が低いです)《平山 2012》

上の文では SA ((81)では“公司远”(会社が遠い), (86)では“我矮”(私は「背が」低い)若しくは SVO ((82)では“我们放假”(私達は休みになる), (83)では“他们学习汉语”(彼らは中国語を勉強する), (84)では“小张感兴趣”(張さんは興味がある), (85)では“我说～”(私は～を話す) という命題が、介詞フレーズによって示された状況下にて成立する

(41) 三宅 (2012: 94)

ことが示される。

次に、“把”構文の例を見ておきたい。以下のタイプは通常のSVOにおいて目的語の位置に処するものが介詞フレーズの位置にて用いられる。

(87) 我把葡萄放冰箱里了。(わたしはブドウを冷蔵庫に入れました)

《平山 2012》

(88) 把U盘拿来。(UBSメモリを持ってきて)《平山 2012》

上の例においても“我放葡萄”(私が葡萄を入れる)，“[你]拿U盘”([あなたが]USBを持つ)というSVOの存在を見いだすことができるが、更には受動者成分が特定成分となることで、「何かをか」ではなく「どうなったのか」という点に焦点が置かれる。言わば、受動者よりも動作の方に際立ちが持たれた形と言える。更には、動作対象に対する“移请”(感情移入)という主観性が付加されることとなる(沈家煊 2002: 394)。

次に受け身文である。こちらは、動作者が介詞フレーズとして用いられている。

(89) 我的游戏机被妈妈扔在垃圾桶里了。(わたしのゲーム機はお母さん

にゴミ箱に捨てられました)《平山 2012》

(90) 我的自行车被小偷偷走了。(私の自転車は泥棒に盗まれました)

《平山 2012》

上の例では、“妈妈扔我的游戏机”(お母さんが私のゲームを捨てる)，“小偷偷我的自行车”(泥棒が私の自転車を盗む)というSVOの存在が基盤となっている。通常目立たせる必要のない成分を介詞フレーズの位置に置くこととで、「捨てる」「盗む」という事態を有標化させている点が窺える。また、受け身文に関しては、通常「不利益のニュアンスを含む」と説明されるが、ここにも話者の感情移入という話者の主観性による修飾を見いだすことができる(沈家煊 2008: 394)。

⑥ 時間名詞

時間名詞が連用修飾語で用いられる時「いついつに」という動作発生の時点を表す。

- (91) 他明天回老家。(彼は明日実家に戻ります)《平山 2012》
 (92) 我今天打扫房间。(私は今日部屋を掃除します)《平山 2012》
 (93) 我们下午一点吃午饭。(私達は午後 1 時に昼食を食べます)《平山 2012》

上の例において“明天”（明日），“今天”（今日），“下午一点”（午後 1 時）はそれぞれ，“他回老家”（彼は帰省する），“我打扫房间”（私は掃除する），“我们吃午饭”（私達は昼食を食べる）という動作の発生を前提とし、その時間を示している。

一つ他の修飾語と顕著な差異の見られる点と言え、主語としての性質を帯びていることである。即ち、時間成分は“回老家”，“打扫房间”，“吃午饭”というどうするのかという陳述や説明を受ける対象ともなる。この点は、上の 3 例に関して「彼は、明日は帰省します」「私は、今日は部屋を掃除します」「私達は、午後 1 時は昼食を食べます」と時間を表す成分の後に「は」を付加できる点から見ても、理解しやすい点も言えよう。

また統語的振舞いに関しても主語と捉えられるような特徴も見ることができる（以下(94)-(96)は朱德熙（1982：97）より引用）。

- (94) (a) 今天下午开会。(今日の午後会議があります)
 (b) 今天下午开不开会？(今日の午後会議がありますか)
 (95) (a) 晚上会下雨。(夜雨が降るだろう)
 (b) 晚上会不会下雨？(夜雨が降るだろうか)
 (96) (a) 教室里在上课。(教室で授業が行われています)
 (b) 教室里是不是在上课？(教室で授業が行われていますか)

朱德熙（1982：97）では主語の判定基準の一つとして反復疑問文にすることができるかという点を挙げている（“你去”（あなたは行く）→“你去

不去?”(あなたは行きますか);“他抽烟”(彼はタバコをする)→“他抽不抽烟?”(彼はタバコを吸うだろうか)。上の例において時間名詞は、主語としての特徴が見られることが分かる⁽⁴²⁾。

⑦ 副詞

次に副詞の例である。①～⑥に関しては、それぞれ連用修飾語としての特徴の差異は見せつつも、SVO という文意的核心の基にコーティングの施された形式と言える。副詞も同様に多くの場合は SVO を文意的核心と見なすことができる。前者の例を挙げておきたい(副詞の機能は各例文後に付した [→] を参照)。

(97) 汤有点儿咸。(スープはちょっぴり塩辛い) [→程度] 《平山 2012》

(98) 她很喜欢听爵士乐 [彼女はジャズを聴くのがとても好きだ] [→程度] 《守屋 1995》

(99) 我一共有三双皮鞋。(私は全部で革靴を3足持っています) [→範囲] 《平山 2012》

(100) 我哥哥在看新闻。(兄はニュースを見ています) [→時間] 《平山 2012》

(101) 她已经结婚了。(彼女は既に結婚しました) [→時間] 《相原他 2016: 143》

(102) 天渐渐黑下来了。(空がだんだん暗くなってきた) [→様態] 《丸尾 2010: 196》

(103) 我也去北京。(私も北京に行きます; 私は北京にも行きます) [→

(42) 更に補足すれば、(94)(95)(96)の日訳に関しても時間成分の後に「は」を付加することも不可能でない。(94)a. →今日の午後は会議があります。b. →今日の午後は会議がありますか。(95)a. →夜は雨が降るだろう。b. →夜は雨が降るだろうか。(96)a. →教室は授業が行われています。b. →教室は授業が行われていますか。以上、日本語との特徴的類似性を見ることができる。

関連] 《平山 2012》

(97)(98)の“有点儿”，“很”は“汤咸”（スープは塩辛い），“她喜欢听爵士乐”（彼女はジャズを聴くのが好きだ）という命題に対してその程度情報を付け加えている。(99)の“一共”は“我有三双皮鞋”という前提に対して「三册」が合計数であることを加えている。(100)の“在”，(101)の“已经”は“我哥哥看新闻”（私の兄がニュースを見る），“她结婚”（彼女が結婚する）という事態に対する話者の時間感覚が反映されている。(102)の“渐渐”は“天黑”という状態から顕現される様態が示されている。(103)の“也”に関しては意味的にかかるのが前方（“我”（私））と後方（“北京”（北京））の双方の状況が存在する⁽⁴³⁾。“我去北京”という事態を確認した上で他の動作（例．“他去北京”（彼は北京に行く）；“我去上海”（私は上海に行く））と対比して同類にあることが読み取れる。

5.2 認知的核心としての SVO

一方で、副詞による連用修飾は必ずしも全てのパターンについてその理屈が成り立つとは限らない。SVO が文意的核心になり得ない点については 3.1 節の文成分分析に対する局限について言及した通りである。幾つかのパターンにおいては SVO が前提命題と捉えられないパターンを挙げておきたい。まずは、(16)でも取り上げた否定文を挙げておきたい。

(104) 她不吃面包。(彼女はパンを食べません) [→否定] 《平山 2012》

(105) 他们没有吃午饭。(彼らは昼食を食べませんでした) [→否定]
《平山 2012》

(43) “也”が前にかかる場合は、修飾される部分が構造と意味においてずれが生じることになる。この点は、日本語の「も」に引きずられた“*我也”（私も）のような誤用にも繋がってくる（張恒悦 2017）。更には、本稿では深く立ち入らないが、このような構造と意味に対する修飾のずれが生じる要因についても究明していく必要があるだろう。

上の文について文成分分析法の考え方をとり SVO という核心を捉えるならば、“她吃面包”（彼女はパンを食べる），“他们吃午饭”（彼らは昼食を食べる）と全く正反対の文意を表す。このような矛盾が生じるのは、SVO を文意的核心と捉えているからであろう。

そもそも否定というのは「相対応する肯定命題が設定されており、且つ肯定命題に対する否認或いは反駁を表す」という機能を有する（沈家煊 1999：57；杉村 2005）。即ち(104)(105)を例に取れば、話者は“她吃面包”，“他们吃午饭”という肯定命題を認知しているということになる。この点から見る時、SVO は言わば認知的核心という表現できよう。

他の例を見てみよう、推量を表す語気副詞を用いた例である。

(106) 电脑好像出了毛病。(パソコンは故障したようです)〔→語気〕
《平山 2012》

(107) 他也许有事。(彼はあるいは用事があるのかもしれない)〔→語気〕
《興水・島田：316》《平山 2012》

上の例は“好像”“也许”が付加されることで、“电脑出了毛病”（パソコンが故障した），“他有事”（彼は用事がある）という内容が不確定要素であることが伺える。よって、前提命題としての機能を有していない。文意として“电脑没有出毛病”（パソコンが壊れていない），“他没有事”（彼は用事がない）、と相反する命題の存在も内在的要素として意味の含みを持つことになる。言わば、ここで SVO の部分は話者の中で認知的核心を表している。

更には、関連副詞を用いた例を幾つか挙げておきたい。

(108) 如果没有事，我就去。(もしも用事がなければ，私は行きます)
《平山 2017b》

(109) 只要电视播放足球赛，我就一定看。〔テレビでサッカーの試合があれば，私は必ず見ます〕《守屋 1995：239》

(110) 只有国家富强，人们的生活水平才会提高。〔口が富み栄えてこそ，

人々の生活レベルは**向上する**]《守屋 1995：239》

上の例では、それぞれある条件を満たすことで SVO という命題の成り立つことが分かる。(108)では、“有事”（用事がある）という状況であれば、“我不去”（私は行かない）という事態の存在が読み取れる。同様に、(109)では「テレビでサッカーの試合が放映されない」という状況では「テレビを見ない」という事態も想定内となる。(110)では、“国家富强”という前提が崩れた場合、“人们的生活水平不会提高”（人々の生活のレベルは向上しないだろう）という否定命題の含みを持つ。何れも、関連副詞を取り去った後の SVO は文意的核心にはなり得ない。但し、認知的核心としての機能を見出すことができる⁽⁴⁴⁾。

6. おわりに

本稿では、中国語文法体系と日本人学習者の言語背景の融合というコンセプトのもと、日本人学習者にあった中国語語順体系について触りの部分を次の流れで論じていった。第1章で問題を提起する。第2章で基本語順 SVO とコーティング関係という考えを提示する。第3章で既存の代表的構造分析の利点と局限を確認し、直系成分分析を中心とした語順分析を提示する。第4章で日本人話者に適した基準的 SVO に対して考察する。第5章で SVO の連用修飾コーティングを観察し、SVO は文意的核心ではなく認知的核心であることを指摘する。

以上、本稿では構造と意味という二種の尺度を用いて SVO とそのコーティング関係について分析を行った。二つの尺度を融合させるということ

(44) SVO を認知的核心とした他の構文とのコーティング関係については、3.1 節 (29)–(33)で挙げた文成分分析で矛盾の生じる関係性（可能補語、SV と SVO で意味変化の生じるパターン、受動者主語文）についても適応できると考えている。この点については、紙幅の都合上別稿に譲る。

は長所をとって短所を補うことでより合理的な分析が期待できる一方で、基本軸の明確さを欠き主観性や独善性に陥りやすくなり客観性に欠くという危険性も含むものである。この部分の折り合いをつけていくことも、重要な作業となる。

本稿では、語順分析の触りの部分を扱ったに過ぎない。詳しい内部構造に関しては、今後稿を改めて論じていきたい。

参考文献

(中国語)

- 北京大学中文系现代汉语教研室编 (2004) 《现代汉语 (重排本)》，北京：商务印书馆。
- 储泽祥 王艳 (2016) 汉语 OV 语序手段的指称化效用《语言教学与研究》，第 3 期，318-330 页。
- 戴浩一著 黄河译 (1988) 时间顺序和汉语的语序《国外语言学》，第 3 期，10-20 页。
- 胡勇 (2016) “吃食堂”的认知功能分析《世界汉语教学》，第 3 期，342-355 页。
- Joseph H. Greenberg 著 陆丙甫 陆致极译 (1984) 某些要跟语序有关的语法普遍现象《国外语言学》，第 2 期，45-60 页。
- 李临定 (1994) 施事，受事和句法分析《李临定自选集》，河南：大象出版社，144-159 页。
- 刘丹青 (2003) 《语序类型学与介词理论》，北京：商务印书馆
- 陆丙甫 (2008a) 语序类型学理论与汉语句法研究《当代语言学理论和汉语语法研究》，北京：商务印书馆。
- 陆丙甫 (2008b) 直系成分分析法——论结构分析中确保成分完整性的问题《中国语文》第 2 期，129-139 页。
- 陆俭明 (1993a) 《八十年代中国语法研究》，北京：商务印书馆
- 陆俭明 (1993b) 分析方法刍议——评句子成分分析法《陆剑明自选集》，北京：商务印书馆，199-219 页
- 陆俭明 (2005) 《现代汉语语法教程 (第三版)》，北京：商务印书馆。
- 孟琮 郑怀德 孟庆海 蔡文兰 (1999) 《汉语动词用法词典》，北京：商务印书馆。
- 任鹰 (2000) 《现代汉语非受事宾语研究》，社会科学出版社。
- 沈家煊 (1999) 《不对称标记论》，南昌：江西教育出版社。
- 沈家煊 (2002) 如何处置“处置式”？——论把字句的主观性《中国语文》，第 5 期，387-410 页。

- 沈家煊（2008）“移位”还是“移请”？——析“他是去年生的孩子”《中国语文》，第5期，1-10页。
- 施春宏（2004）汉语句式的标记度及基本语序问题《汉语学习》，第2期，10-18页。
- 王占华（2000）“吃食堂”的认知考察《语言教学与研究》，第2期，58-64页。
- 杨德峰（2005）VC1C2带宾语的位置及形成的句式《汉语教学学刊（第一辑）》，84-99页。
- 杨德峰（2008）《日本人学汉语常见语法错误释疑》，北京：商务印书馆。
- 张国宪 卢健（2013）从始点之视——汉语定语的时空视角走向，中国文法論叢刊行会編《木村英樹教授還暦記念 中国文法論叢》白帝社。
- 张道生（2013）句法层面的语序与句子层面的语序——兼论一价谓词带宾语与副词状语表程度《语言研究》，第3期，40-51页。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室编（2016）《现代汉语词典（第7版）》，北京：商务印书馆。
- 朱德熙（1982）《语法研究》，北京：商务印书馆。

（日本語）

- 相原茂（2010）『中日辞典（第3版）』，東京：講談社。
- 相原茂 石田知子 戸沼市子（2016）『Why?にこたえる はじめての中国語の文法書』，東京：同学社。
- 張恒悦（2017）「同類」を表す「也」と「も」——日本語母語話者が算出した誤用例の分析を通して——『中国語教育』第15号，37-59頁。
- 平山邦彦（2008）「日本人学習者を対象とした中国語教育に関する一考察—その言語背景を考慮に入れて」『拓殖大学 語学研究』第117号，1-32。
- 平山邦彦（2009）「存現文教学に関する一考察」『中国語教育』第7号，中国語教育学会，64-86頁。
- 平山邦彦（2012）語順で覚えよう！ ワンフレーズ中国語『NHK ラジオテキスト ト まいにち中国語』4-6月号。
- 平山邦彦（2017a）『新版 口を鍛える中国語作文——語順習得メソッド 初級編』，東京：国際語学社
- 平山邦彦（2017b）『新版 口を鍛える中国語作文——語順習得メソッド 中級編』，東京：国際語学社
- 興水優 島田亜実（2009）『中国語 わかる文法』，東京：大修館書店。
- 丸尾誠（2003）「文法事項の体系的理解を目指した中国語教授法について『中国語教育』創刊号，24-40頁。
- 丸尾誠（2010）『基礎から発展まで よく分かる中国語文法』，東京：アスク出版。

- 三宅登之 (2012) 『中級中国語 読みとく文法』, 東京: 白水社。
- 守屋宏則 (1995) 『やさしく くわしい 中国語文法の基礎』, 東京: 東方書店。
- 大西泰人 ポール・マクベイ 『一億人の英文法』, 東京: 東進ブックス。
- 北京・商務印書館 小学館共編 (2016) 『中日辞典 (第3版)』, 東京: 小学館。
- 陸偉榮 (2016) 『中国語作文語順完全マスター』, 東京: コスモピア。
- 林松濤 (2011) 『つながる中国語文法 1週間で基本をざっくりマスター』, 東京: Discover
- 林松濤 王怡韡 (2013) 『シンプル公式で中国語の語順を制す』, 東京: コスモピア。
- リンゼイ J. ウェイリー 著 大堀壽夫 古賀裕章 山泉実訳 (2006) 『言語類型論 入門 — 言語の普遍性と多様性』, 東京: 岩波書店。
- 瀬戸口律子 (2003) 『完全マスター 中国語の文法』, 東京: 語研。
- 杉村博文 (2005) 否定情報の獲得と応用 『中国語学』 252号, 36-60頁。
- 高橋太郎 金子尚一 金田章宏 齋美智 鈴木泰 須田淳一 松本泰丈 (2005) 『日本語の文法』, 東京: ひつじ書房。
- 高橋弥守彦 (2006) 『実用詳解中国語文法』, 東京: 郁文堂。
- 高橋弥守彦 (2009) 「他走下楼来了。」について 『日中対照言語研究論集』 第11号, 16-30頁。
- 高梨健吉 (1970) 『詳しい解説と段階的演習・総解英文法』, 京都: 美誠社。

[付記]

本稿は平成28年度言語文化研究所研究助成による成果の一部である。

(原稿受付 2017年11月21日)

〈論文〉

共同研究〈諸文化圏・諸言語圏における女神〉

韓国における女神の様相
—— バリ^{コンジュ}公主 ——

村上祥子

要 旨

巫俗儀礼で巫堂が口承する「バリ公主」は、死霊祭で語られる女神の始祖物語である。内容は捨てられた七番目のバリ公主が、両親の病気を治すために薬水を求めて冒険、帰ってきて両親の病気を治癒し、家族と共に神として祀られる話である。ここでは次の二点を考察した。

①「バリ公主」の内容は、世界的な英雄譚と共通の要素を持つことを八つの項目について考察し、一致することを確認した。この物語が死霊祭で語られるのは、死者が祖先神への転換のために必要な儀礼であり、祖先神は現在に生きる子孫の繁栄と平安を守ると信じたからである。

②長く「バリ公主」が儒教の規範で規制されたにもかかわらず、消えることなく信仰されたのは、女性の力があったからである。儒教の世界観は人間が生きていく価値観と規範は教えたが、死への恐れやあの世への不安、現実の苦悩や苦痛について語ることはなかった。だから女性は儒教では語ることのない信仰を守ってきた。それを可能にしたのは、高麗時代から続いた輪回奉祀と男女均分相続である。輪回奉祀とは息子や娘が祖先の祭祀を交代で担当・挙行するものであり、朝鮮王朝時代も続いた。男女均分相続は内容的に変更点があるが、朝鮮王朝時代の『経国大典』(1485年)に男女均分相続すると記されている。女性は婚姻に関係なく個人の財産を持ち、運営に当たった。

以上、「バリ公主」は英雄譚の要素をもち、祭祀権と経済的な権利を有する女性により、今日まで信仰の対象として継承されてきたといえる。

キーワード：巫俗、女神、英雄、輪回奉祀、男女均分相続

目 次

1. はじめに
2. バリ公主と死霊祭
3. バリ公主の英雄譚の構造
4. 巫俗信仰の女神と女性
5. おわりに

1. はじめに

韓国（＝朝鮮半島）で文字として残る女神の資料は、すでに男性中心社会の価値観で語られており、女神が単独で登場することはない。ただ文字として記録には残っていないが、巫堂^{ムダン}⁽¹⁾がクッ（祭祀）⁽²⁾で語るバリ公主^{コンジュ}がある。死者を送る儀礼のなかで語られる始祖巫堂^{ムダン}⁽³⁾の物語である。このような叙事巫歌は、祭神の生い立ちと、どうして神位になったのかを解く神霊の本生譚であり、神々の縁起神話である⁽⁴⁾。

内容には仏教、道教、儒教的な要素を含んでいる。バリ公主のバリ（바리）とは捨てる（바리다）という動詞からきたもので、公主とは王女の意味であり、バリ公主とは「捨てられた王女」の意味である。

口伝されてきたバリ公主の筋書きは以下ようになる。冒頭に死霊祭の主祭神であるバリ公主の父親⁽⁵⁾の神聖性が唱われ、バリ公主の話が始まる。両親の結婚、出産、バリ公主の遺棄、両親の病気、バリ公主との対面、両親の病気を治すための薬水探索と冒険、両親の病気の治癒、バリ公主と家族が神として祀られるという内容である。

巫俗は韓国では長く信仰されてきたが、朝鮮王朝時代に入ると儒教中心の規範により社会の表舞台から後退した。しかし実際は女性を中心として根強く信じられてきた。女性がそれを支えてきたのは、中世まで経済力と祭祀権をもっていたからである。それが儒教的規範の男性社会の中で、バ

り公主が長く伝えられてきた理由のひとつである。16世紀以降の朝鮮王朝社会は儒教の規律が社会を強く支配する中で、女性によりバリ公主は男性社会の価値観とは違う形で生き延びてきたといえる。

ここでは第一に死霊祭でバリ公主を語る意味と、第二に物語の構造が世界的な英雄譚との共通項目を持つことを考察する。最後にバリ公主は韓国の女神の最も基層の姿を伝えるものであると考え、この伝統を守ってきたのは女性であり、巫俗と女性の役割を考えてみたい。

2. バリ公主と死霊祭

2-1 死霊祭

バリ公主は死霊祭でのみ語られる。これが語られることにより神話的時代に遡り、神霊の創造的霊能により新しい現実をもたらすという、死して再創造されるという反復的想起であり、宗教的救いの理論を実践するものである⁽⁶⁾。

各地方により死霊祭と主人公は以下のように称されている⁽⁷⁾。

地方	死霊祭	主人公
京畿地方	チノギクッ	バリコンジュ マルミ (末っ子)
咸鏡地方	マンムキクッ	チルコンジュ (七公主)
全羅道 慶尚道	オグクッ	ベリテギ (捨てられた子)
南海地域	シッキムクッ	バリコンジュ

韓国で死霊祭を行うのは、死は肉体と霊魂の分離であり、霊魂は特殊な過程を経て転換されていくと考えており⁽⁸⁾、死霊を極楽世界に導くことによって子孫の繁栄、一家の隆昌を招くという思想が強い⁽⁹⁾からである。

同時に死霊は、死霊祭を行うことにより祖先神に変わるという考え方がある⁽¹⁰⁾。ここでは死者と祖先神を区別しており⁽¹¹⁾、「バリ公主は、巫祖の神として死霊を極楽へ連れて行くといわれている。こうしたことから死霊を極楽へ連れていってくれるようにという意味で、この神話が口誦される」⁽¹²⁾のである。

基本的な巫儀形式である十二祭次⁽¹³⁾を室内で行ってから、次に巫堂は祭場を門の外庭に移し、巫堂が杖鼓チャンゴを縦にして一面を打ちながら片手には鈴を持ってバリ公主を語る。

今回は、金泰坤が1966年1月29日から30日までソウルで採録し、『韓国巫歌集』Ⅰに収録されているものを翻訳した金香淑著『朝鮮の口伝神話』⁽¹⁴⁾を使用した。金香淑が述べているように朝鮮の巫俗神話を総合的に収録している巫歌集であること、そして現在巫俗神話の資料として最も一般的に用いられている⁽¹⁵⁾からである。

2-2 物語のあらすじ

朝鮮王朝の建国を史実に基づいて述べ、その朝鮮王朝の天が仏教の三十三天に保証されていること、死者の魂が極楽世界に導かれるようにという祈主の願いが述べられる。バリ公主の父親は朝鮮王朝の国王であり、17歳のとき16歳の妃との結婚を巫に占ってもらうと、今年結婚すれば七人の公主が生まれ、来年結婚すれば世子大君が生まれるといわれるが、占いがすべてではないと、その年の七月七日に結婚してしまう。

占いの通り、次々と公主が生まれる。七番目に懐妊したときに王妃が見た胎夢⁽¹⁶⁾は、宮殿の大梁に青龍、黄龍が入り混じり、右手に鷹を、左手に白馬を左のひざの上には黒亀を乗せ、両肩には日月が出ていた。七番目も公主であったことを知った王は、玉函を作らせ、函に国王の公主と刻み、両殿下の生年生時とバリ公主の生年生時を書いたものを赤ん坊の衣の紐に結びつけて、あの世とこの世の中間地点にあたる流沙江に投げると、黄金

の亀が甲羅に受け止める。釈迦世尊がやってきてこの函を見つけるが、女だから弟子にはできないと、ビリ功德爺とビリ功德婆（ビリとは乞食、あるいは物を乞うこと）に育てるようにいう。

バリ公主が十五歳になったとき、両親である王と王妃が重病になる。夢に童子が現れ、バリ公主を捨てた罪で死んでしまうという。病気が治るためには蓬莱山の薬水を飲めば良いと教えられる。そしてバリ公主を探すように言って姿を消す。家臣の中にも六人の公主の中にも、死後の世界にある蓬莱山に薬水をとりに行く者は誰もいなかった。そこで家臣がバリ公主を探しあて、王と血族であることを確認して両親のもとに連れて行く。

バリ公主は父母への恩返しのため薬水を探しに行く。男装して竹の笠をかぶり、鉄の背囊と鉄の杖、鉄の靴といういでたちで旅立つ。釈迦如来、阿弥陀仏、地蔵菩薩様に会い、釈迦如来から浪花と鉄の杖を与えられる。地獄にたどりつくが、ここでは罪人が裁かれていた。浪花の威力でこれらの罪人も極楽浄土である十王世界に導かれる。三千里を鉄の杖を使い、虹を架けて渡るとムザンスンの前に着く。道の通行金が無いため樵を三年、火の番を三年、水汲みを三年してから、ムザンスンと結婚し七人の息子を生む。夢見が良くないので、薬水を持ちムザンスンと七人の息子とともに父母のもとに帰ることになる。帰る途中で亡者を乗せた船に出会う。そこには極楽に行く船と地獄に行く船と行く当てもなく漂う船に乗る亡者たちと出会い、行く当てのない亡者を極楽世界に導く。

帰ってみると両親は亡くなり、葬儀をしているところであった。薬水を口に含ませると、両親は生き返る。バリ公主は両親の許可なく結婚したことを告げ許してもらう。ムザンスンは山神祭や平土祭（埋葬に関する祭祀）を司る神に、七人の息子はあの世で死者の魂を審査する十大王になり、バリ公主は寺で行う水陸会（齋）を主宰するインド国の菩薩になる。

以上が物語であるが、その内容には巫俗に仏教的、道教的、儒教的内容が共存している。しかし基本的には巫俗儀礼の形式とともに作られたもの

として時代的には朝鮮王朝時代よりは古いもの⁽¹⁷⁾と考えられる。

3. バリ公主の英雄譚的構造

これまでの研究で「バリ公主」をどのように解釈するかを見ると、以下のようにまとめることができる。巫祖神話としての入巫過程を示す⁽¹⁸⁾、死の試練物語⁽¹⁹⁾、魂返しのための霊旅⁽²⁰⁾、末娘勝利の民譚⁽²¹⁾、巫病が霊旅として現れたことが強調される物語⁽²²⁾、異郷訪問譚⁽²³⁾、英雄譚⁽²⁴⁾などである。この中で注目すべきは、英雄譚である。英雄になる条件と、バリ公主を比較すると以下の表のようになる⁽²⁵⁾。

英雄の一生	バリ公主
① 高貴な血統	朝鮮王の娘
② 誕生時の困難	望まれない誕生
③ 不思議な夢	胎夢
④ 小さな箱に入れられ水に流される	函に入れられ川に棄てられる
⑤ 動物あるいは身分の低い人に救われる	亀が背中に乗せる、養育者に会う
⑥ 冒険に旅立つ	両親の病、薬水を求めて旅立つ
⑦ 霊水を持ち帰る	薬水を持ち帰り、両親を生き返らせる
⑧ 勝利、みずから聖なる存在に移行	両親を生き返らせ巫神となる

全体を通してみると英雄譚的な要素が全体を貫いており、バリ公主は世界にある英雄譚と比べると要素的に一致する内容が多い。これら一つひとつを見ていくことにする。

① 高貴な血統

この世である人間世界の最高の王と王妃を両親として生まれる。特別な

選ばれた人間であることを示唆している。

② 誕生時の困難

両親が巫の占いを信じないで、結婚をしたことから後継ぎである世子^{セジヤ}（男子）ではなく、七番目の公主（女子）として望まれない誕生をする。ここで興味を引くのは、両親が七月七日に結婚したこと、バリ公主が七人目の娘として誕生すること、バリ公主が七人の男の子を生むことである。七という数字が特別な意味を持つと考えられる。これについてエリアーデによれば、アルタイ・シャーマンは七とか九の天階を表現する七つとか九つの刻み目を付けた木や柱に登り、またモンゴルの神話「七人の王子神」とか「侍神」があり、守護神であり軍神であるという。七という神話的な数がシャーマンの技術やエクスタシーのなかで重要な役割を果たしていることは明らかであると述べている⁽²⁶⁾。

韓国では天は七層ないしは九層に分かれており、天上を旅行する場合、一番高くまで登れる巫堂は権威があると認められる⁽²⁷⁾ という。このことはエリアーデの神話的数と相応する。七番目の公主であることは天上の旅行において最上階に到達できる能力をもつことを示唆しており、優れた巫女としての能力を表していると考えられる。世俗的な困辱と没落は、聖なる世界での権能を持つ⁽²⁸⁾ のである。

③ 不思議な夢

誕生を予告する夢が登場する。これは韓国では胎夢と言い、近年まで日常的に語られてきた。胎夢は性別、運命などを暗示すると信じられている夢であり、近親者が見る。胎夢の習俗は男尊思想が定着する前からあったが、社会が父系となり男尊思想が定着化して息子や貴人の予言的夢占いや夢兆として定着した。古代文献に記録されている胎夢は、偉人・王・王子など貴子や高僧を妊娠した場合に集約される。文献から見られる胎夢には

日・月・星辰・などの天体と天人・天女・高僧などの神人や金印・玉などの珍宝などが登場している⁽²⁹⁾。

バリ公主の胎夢を見ると、

大明殿の大梁に青龍，黄龍が入り混じっているのをみました
右手に鷹を，左手に白馬を
左の膝の上には黒亀を乗せて
両肩には日月が出ているのをみました

と語られる。宮廷に青と黄色の龍があらわれるが、五方を司る色の内、青は太陽の昇る東であり、万物の生命の始まりを意味する。黄色は天に対する地であり、中央を意味している。龍も生命の源泉を意味し、農業の豊穡をもたらす力がある。聖人が現れるとか、吉兆があるときに現れるといわれる。

その他の動物は以下の通りである。

鷹 …鳥と巫堂の関係は深く、鳥は神聖視されている。鳥は天上の靈魂と人間の世界を往来して、相互の連絡係りをすると信じられており、鳥の声は神意を空授（空中＝天から啓示される神語）で、神託を伝えるという。韓国の建国神話には卵生神話が多くあり、鳥が象徴する巫堂との関係からみても、バリ公主が巫堂の始祖としてふさわしい資格を持つことを表すと考える。

白馬…神聖の降臨を引導する。また靈魂を天上や靈魂の世界に連れて行く。

亀 …長寿を意味する。

日月…男性的な原理が日（陽）、女性的な原理が月（陰）である。

日は太陽を表し天を意味し、月は大地を表している。朝鮮王朝時代の玉座の後ろには日月と山岳を描くが、長寿と善政を象徴

しており、王というこの世での最高権威をもつ者をも象徴しているといえる。

バリ公主の両肩に日月があるということは、女性でありながらその両面の力を持っていることを示唆しているし、玉座に座るほどの特別な存在であることを物語っている。

バリ公主の誕生は特別な意味を持つものであることを現している。

④ 小さな函に入れられ水に流される

オットー・ランクは、「子棄ては原始的境遇の困難な事情のもとにあって生じた誕生を表している。したがってこの誕生という作業は最初の偉大な業績（課題）で」⁽³⁰⁾、函に入れられるというのは隠し守る子宮の代わり⁽³¹⁾であると述べている。

フレザーによれば水の上に棄てられることの意味は分娩出産の意味に照応するという。このように出産に伴う危険を象徴的に表現しているのが、小さな函に入れられ水に流されることになると考えられる。バリ公主が流される川は、あの世とこの世を分ける川と認識できる。

一方、韓国には子捨てについての習俗がある。「韓国慶尚南道の一部地方では、誕生直後のあかんぼうを短い間ではあるが、箱のような容器に入れて、棚の上とか後庭に捨てておく習俗が最近まであった。そのようにすると、あかんぼうの長寿と無病を保証するものと信じていた。また他の地方でもこれと似た習俗があった。すなわち先に生まれた嬰兒たちが夭死した時、(中略)父母たちは新しい嬰兒をかごのようなものに入れて一定期間棄てておいたものであった」⁽³²⁾という。民間習俗の中に棄て子の習俗が伝承されている。

バリ公主では両親は子を捨てたことが原因になって病気になる。病気を治すためには薬水が必要である。その薬水を求めることが出来るのは捨てた子供だけであったので、その捨て子を探し、薬水を求める⁽³³⁾。薬水は

この世のものではない。ここにすでに特殊的体験を持っている捨て子は神の資格があるものと考えられており⁽³⁴⁾、捨て子物語と親を生き返らせる物語の二つの物語が合成されていると考えられる。生き返らせるモチーフは世界的に公布されている冥界潭と一致している⁽³⁵⁾。

⑤ 動物あるいは身分の低い人に救われる

人間の最高権力者である王の娘として生まれたバリ公主が函に入れられ棄てられる川は、この世とあの世の境に位置する境界であり、川に沈まないように亀が背中に乗せる。そこを通りかかった釈迦世尊により、ビリ功德爺とビリ功德婆に育てられることになり十五歳までは何事もなく育つ。多くの英雄もある程度の歳になるまでは順調に育つ。韓国の神話の中には動物が神話の主人公を助けることが出てくるが、これは神異性を表している。トーテムズムから発想されたことで、動物を従わせるだけの力をもっていることを物語っていると考えられる。

老爺と老婆に育てられる意味は、祖先を表していると考えられる。中国や韓国の伝統仮面劇では老爺と老婆の場面があるが、これらの老爺や老婆は祖先神を象徴していると考えの共通している。また韓国では出産に関する産神婆や祖先神を表す山神を老爺や老婆で表現することが多い。元来あったこのような信仰からこの場面に登場したのではないかと考える。

⑥ 冒険に旅立つ

父母の病気を知ったバリ公主は、生んでくれた父母への恩返しのため、回復するための薬水を求めて旅に出る。男装をして竹の笠をかぶり鉄の背囊と鉄の杖、鉄の靴を履いて天宮に薬水を探しに出かける。黒鷲が道を案内してくれる。鉄の杖は振り回して突くと一千里を行く。釈迦如来と阿弥陀仏、地藏菩薩が将棋を指しているところに出くわす。阿弥陀仏と地藏菩薩から浪花（神秘な力のある花）を三枝と鉄の杖をもらう。刀の山地獄、

火盆地獄, 毒虫地獄, 寒氷地獄, 毒蛇地獄, 蛇地獄, 水地獄, 岩地獄, 無間八万四千地獄を過ぎ, 鉄の城の前に出る。そこでは罪人を裁いている。浪花で鉄の城を消し, 罪人を極楽に導く。さらに進んで薬水三千里にたどり着く。鉄の杖を投げ出すと, 虹ができ, その虹を渡るとムザンスン⁽³⁶⁾に会う。ムザンスンから樵を三年, 火の番を三年, 水を三年間汲むように言われる。それが過ぎるとムザンスンと結婚し, 七人の息子を生む。

ここでは巫堂が好む花と鳥と水という三つのものが出てくる⁽³⁷⁾。バリ公主の旅は薬水を求めての旅であるが, あの世への旅でもある。このことは秋葉隆や崔吉城がいう入巫過程を物語っている。バリ公主は旅の途中での試練を経て神と結婚するが, これは特別な能力を持つための神婚であると考えられる。

⑦ 薬水を持ち帰る

ある日, 悪い夢を見たバリ公主は, 急いで帰りたいと薬水と開眼草と息, 骨, 肉を甦らせる桃の花を三本もらい, ムザンスンと七人の息子を連れて帰る。帰り道に極楽へ行く船や地獄に行く船, 行く当てもなく彷徨っている船に出会う。彷徨っている船にバリ公主が乗り込み極楽へ送り届ける。ここでバリ公主が彷徨っている死者をあの世界に送り届けることは, バリ公主の役割を語るものと考えられるし, 死者を送るクッで語られる意味がある。

そしてこの世に帰ってくると両親はすでに死亡しており葬儀が行われているところであった。

朝鮮半島では山間に湧く霊泉のことを薬水という。これを飲めば病が治り長寿を得るという信仰に基づく, いわゆる生命の水である。各薬水にはそれぞれの縁起と効力が語られ, 眼病や外傷, 体力増強に効くもの, 子どもを授かり, 腹中の女兒を男児に変えるものなどさまざまな霊験が伝えられている。またこれを穢すと神怒に触れるとされ, 肉を食べた者や月経中

の女性など不浄の接近は許されない。この神は多く竜・蛇の形で考えられているが、水翁・水姫ともよばれ老夫婦神としてまつられることもある⁽³⁸⁾。今日でも山から薬水を汲んできて生活に利用する姿を見ることができ、薬水に対する信仰は残っている。

⑧ 勝利、みずから聖なる存在に移行

両親の口に薬水を入れ、開眼草を懐に入れ、花を目に入れると生き返る。バリ公主は両親の許可なしに結婚したことを詫げる。王は許し、ムザンソンは葬儀を司る神として祀られ、七人の息子はあの世の十大王となり、バリ公主は巫神となる。

バリ公主が旅の結果として得た薬水とは呪力を意味する。この呪力は死者を生き返らせるためのものではなく、極楽に導き、死霊から祖先への転換をはかることで現在生きている子孫の繁栄をもたらすという観念を表していると考えられる。これは死者が亡者として存在し、クッをすることで永遠の祖先神としてあの世へ送られなければ、生きている者に災いをもたらすという考えがあるからである。

以上、英雄が経験する八項目はバリ公主にも共通していることを考えると、バリ公主の物語は英雄譚である。「半ば神々の領域に属するという点で巫女と英雄は遭遇する。聖なる世界と世俗世界を和解させる能力を持っている点で、彼らは相呼応する」⁽³⁹⁾と考えられ、また「巫女はその機能において英雄である。そうであるから、巫女神話は英雄譚の全体をなし、英雄譚は巫女神話の一部をなしている。異なる点があるとすれば、英雄が直接その英雄性を肉体的に演出して見せるのに反して、巫女はその英雄的な闘争を霊的な次元で遂行する」⁽⁴⁰⁾のである。

死霊祭におけるバリ公主の物語は英雄譚の構造を持ち、死霊を祖先神にするための儀礼として十二の基本祭祀を行った後に、場所を移して語られ

る。バリ公主が語られることは重要な宗教的意義が蔵されており、神霊の創造的霊能によって、新しい現実をもたらそうとするからである⁽⁴¹⁾。このことが儒教の時代に社会的な弾圧を受けながらも巫俗が残り続けた理由の一つであると考えらる。

4. 巫俗信仰の女神と女性

巫俗が長い時間継承されてきたのは女性の力が大きい。巫俗は韓国にとって基層的な信仰であり、歴史の波の中でも生き残ってきたのは、それを支えた女性の信仰心と経済力があったからである。この両面から女神信仰を考えてみたい。

韓国の伝統的な女性像は、どのようなことにも耐えて、内助の功をする良妻賢母として認識されることが多い。幼い時は父に、嫁いでは夫に、老いては子に従うという儒教の「三従之道」を生きるべきであると考えられてきた。これは朝鮮王朝後期の儒教思想を基にした理想の姿であり、家父長制での女性としての認識が基本となっている。

しかし生活の中で「妻、母の地位と役割は相当に大きく、家族祭祀や家経営における裏方の役割は主婦が果たしている」⁽⁴²⁾。その背景となるのが、高麗時代から続く輪回奉祀の伝統と男女均分相続による経済力である。

「輪回奉祀とは息子や娘が祖先の祭祀を交代で担当・挙行するもので、高麗時代に盛んだった風俗である。朝鮮時代には儒教式祭祀を行うが、輪回奉祀の伝統は依然として続いた」⁽⁴³⁾ という。また「仏教国であった高麗時代には、祖先の位牌を寺院に祭り、祭祀を行うように依頼するやり方が取られたが、これに用いられる費用を兄弟姉妹が交代で全額負担した」⁽⁴⁴⁾ という。祖先祭祀の責務は、男女の別がなかったことが分かる。

朝鮮時代に入り、男性が行う儒教式祭祀があったにもかかわらず、女性による巫俗による儀礼が行われてきたのは、巫俗が家庭を守る女性の立場

からの祈りや信仰が凝縮された儀礼であり、儒教は人間が生きていく価値観と規範は教えたが、死への恐れやあの世への不安、現実の苦悩や苦痛について語ることはなかったからである。それらを癒すのは仏教や巫俗の宗教的な世界が必要であったからと考える。一概に言及することはできないが、仏教は早くから巫俗と習合しており、バリ公主物語りの内容にもそれがよく表れている。儀礼をおこなう方法において、仏教と巫俗は相互に影響を与えあっている。

祭祀権をもっていた女性は、儒教では埋めることはできない信仰を巫俗に求めたことが伝承され、韓国の民俗に注目した秋葉隆は、朝鮮社会の構造は巫覡道の生地にも儒教の衣を着せた二重構造であったと分析している⁽⁴⁵⁾。表向きは儒教であったとしても、その根底には巫俗が根強くあったことを示している。

崔吉城も「女性が巫俗に関心を持ってきたのは儒教が入ってから出来た新しい現象ではなく伝統的な構造からである。もちろん儒教伝来以来、男性中心主義に挑戦する意味でも巫俗に強く頼るようになった要因も無視はできないと思われる」⁽⁴⁶⁾と述べ、また「巫俗の中で祖先に関する信仰が儒教の祖先祭祀の需要と普及の基礎になったといえ」⁽⁴⁷⁾、儒教では得られない信仰性を巫俗に求めた⁽⁴⁸⁾と考察している。前述したように仏教と習合した巫俗は後からの儒教に取って代わるのではなく、信仰的なよりどころはあくまでも巫俗であった。巫俗の祖先祭祀が信仰を基にしているのに比べ、儒教のそれは規範的な意味で行われたのである。

輪回奉祀は儒教が定着する以前から、女性が直接祭祀に関わる伝統が存在したことを示しており、事実、巫俗は朝鮮王朝時代に淫祀として禁止され取り締まられたが、取り締まりはうまくいかなかった。巫俗が女性を中心として守られてきたのは、家庭を守る女性の立場からの祈りが凝縮された儀礼でもあったからである。巫俗の祖先祭祀が祖先を大切にすることが現世の幸せに結びつくという考え方は、儒教のそれとは意味の違いがあっ

たと考えられる⁽⁴⁹⁾。

朝鮮王朝時代の資料には仏教や巫俗について次のように語っている。

女性たちは仏教を信じ、仏教式の祭祀を行い、仏教行事を開き参加した。女性たちは寺院に詣でる一方で巫俗行事を開いて楽しみ、社会的に問題をかもし出すこともあった。巫俗は「淫祀」。すなわち淫乱で道理に外れた祭祀と称された⁽⁵⁰⁾。

朝鮮王朝時代には巫俗は「淫祀」。すなわち淫乱で道理に外れた祭祀と称された。巫堂は城の外の遠く離れたところに集まって住まわされ、巫堂村として区別されていた⁽⁵¹⁾が、当時、巫堂は場内に入り混じってすごし、両班の女性が時を選ばず〔巫堂のところに〕出入りしていたという。それだけでなく、女性たちは病にかかると巫堂の家を頼りとするが多かった〔『世宗実録』十三年七月十七日条⁽⁵²⁾とある。

以上のように、仏教と巫俗は同じように淫祀という言葉で語られ、排斥処置をとられたにも関わらず、無くなることはなかった。儒教社会では僧も巫堂もその身分は八賤とされ社会の底辺に位置付けられた。それにもかかわらず女性の巫俗に対する信仰は変化することはなく、このような批判を受けながらも女性の地位低下によって、刑法上、原則として責任を問われることはなかった。すなわち女性たちは「自覚がないために」処罰しがたいというのが国王の立場で、「婦女子は事理にくらい」という理由で直接罰を与えることはなかった⁽⁵³⁾。打つ手がなかったことを示している。

一方、輪回奉祀は財産相続と密接な関係があり、女性が経済力を持つことと関係する。高麗時代から続く男女均等相続は、内容的に変更点がみられるが朝鮮王朝時代にも続いており、1485年に完成した『経国大典』には財産は男女均分相続するとあり⁽⁵⁴⁾、女性はたとえ結婚しても実家から

受けた財産は個人的な資産とされていた。男性と差別なく同等に相続し、既婚女性も同様であった。このような財産は女性個人の財産であり、直接管理した。女性が持つ財産はやはり女性個人のものであり、夫婦の財産とは別産制といえる。また朝鮮王朝後期の儒教の締め付けが厳しくなる16世紀以降においては、婚家では家長は収入と管理を、主婦は支出を担当し、宗教生活の場合、家長は儒教的な祖先祭祀を担い、主婦は家の神々を信仰してこれを管轄することとなる。表の男性社会とは違い女性は家庭の中に閉じ込められたが、家庭での生計の責任を持つのは女性であったことは、今日と変わりはない。

さらに付随して結婚が妻方居住婚であったことの影響もある。妻方居住婚は高麗時代から始まり、儒教的な家族理念が本格的に定着し始めた朝鮮王朝中期まで続いたものと理解されている⁽⁵⁵⁾。伝統的な婚姻は、男性が妻の実家で暮らし、子供が生まれ育つのも妻方であった。これによって男女均分相続が可能となり、儒教式の男性が女性を迎える「親迎禮」に変えようとしたが、失敗に終わった。この痕跡は今日も新婚旅行から妻の実家にまず帰る習慣からもうかがえる。現実の女性の立場は、儒教で語られる伝統的な女性の立場とは明らかに差異があり経済力を持ち、祭祀権を有する存在であった。このことが巫俗信仰と儒教とのせめぎあいの中で、バリ公主を始祖信仰とする儀礼を守ってきたといえる。

5. おわりに

巫祖神話のバリ公主は、死霊祭のとき巫堂によって歌われる叙事巫歌である。死者の魂をあの世に送るための儀礼のなかで歌われる。これらは祖先神への転換のために必要な儀礼である。祖先神が現世の平安を司っているという考えに基づくものである。

バリ公主の物語の構造は、英雄譚的要素の基に、巫俗に仏教的要素、道

教的要素、儒教的要素が加味されているが、基本は巫俗であり、長い間を経て様々な宗教と習合しながら構成されたと考えるが、現在伝わる内容は朝鮮王朝時代を多く反映しているとみる。

物語の特徴をまとめると以下ようになる。

①信仰的には仏教・道教・儒教と巫俗の習合を表している。基本は巫俗である。②物語としての構造は、世界的に見られる英雄譚の構造と同じである。ただ主人公が女性であることが特徴的である。この世とあの世を循環してこの世に戻ってくるバリ公主の円環の旅は、成巫過程を物語っている。③占いや夢によるお告げにより、物語が展開してゆく。最終的に薬水の効能により勝利を取めるが、薬水・水に関することが物語のなかで強く意識されている。水に関する信仰がその基調にある。④同じく鳥・花が多く出てくる。⑤朝鮮王朝が時代背景となっており、その時代の価値観を強く感じさせる内容であるが、本質的にはそれ以前の巫俗信仰を基本として語られてきたもので、時代を経ることによって幾層にも時代の影響を積み重ね成立したと推測される。⑥死霊祭で語られる理由は、亡者の思いを断ち、あの世に送る役割を持ち、祖先神として現生に生きる子孫の繁栄を祈るためである。⑦内容の中で時代的要求に合致するのは両親に対する孝である。バリ公主は捨てられたにもかかわらず、病気になった両親を助けるために旅に出て最終的には生き返らせる。これは朝鮮王朝における儒教の孝思想に合致した行為である。しかし意味が同じであるとは言えない。もともとあった親子の情や血族意識が儒教の形式の中に取り込まれた形になったと考える。⑧巫俗が禁止されたにもかかわらず生き残ってきたのは、女性の存在が大きい。家庭を守るための祈りを禁止することはできなかった。これは歴史的に財産権と祭祀権を持ってきた女性は、家庭の平安と繁栄を維持するため伝統的な信仰を捨てることはなかったからである。

近年、一般に認識されてきた朝鮮時代の女性の姿が、従来の認識とは違っていることが、研究が進むにしたがって明らかになってきた。儒教の規範

から語られた女性の姿と、実際に生きてきた女性の姿の違いが明らかになりつつある。韓国社会がもつ伝統の中での女性は財産権や祭祀権を持ち、巫俗信仰を守ってきた。女性が最も重要と考える家庭の平安と繁栄を守るための祈りであり、その基本に女神がいたことを証明している。だからバリ公主は今日まで語られてきたと考える。

信仰が現代社会の価値観と交差する時、伝えられる女神に対する信仰がどう変化していくのが注目すべき次の課題となるであろう。

《注》

- (1) 巫堂には降神巫と学習巫がいる。降神巫とは巫病になり入巫祭（降神クッ）をへて巫堂となる。神託が重要になる。学習巫とは巫堂の家系の出身者、結婚や親族関係によって世襲される。神に捧げる歌、音楽、踊りの比重が大きい。
- (2) 祖先神の過程では、死霊を降ろさない。死霊は、死霊祭が終わった次の年に祖先神としてとして十二祭次課程の中で祭られる。
祭祀は①個人レベル ②ムラ、集団単位のレベル ③入巫祭… 降神クッ・神クッの種類があり、目的は主として現在生きている人間の利益を保証するために行われる。
- (3) 巫祖巫堂…巫俗信仰（民間信仰の一部）における巫儀（クッ）で口承する始祖神話である。
巫儀をとりおこなうのは巫堂（女性）、パクス（男性）と呼ばれる宗教者である。主として女性である巫堂が行う場合が多く、男性は楽士である場合が一般的である。
- (4) 柳 東植『朝鮮のシャーマニズム』学生社 1976.1 p.183
- (5) オグ大王・十王・チョンプルサン大將軍・大監様などとも呼ばれる。
- (6) 柳 東植 前掲書 p.198
- (7) 崔 吉城『韓国のシャーマニズム』弘文堂 1984.4 pp.383-384 を表としてまとめた。崔 吉城によれば「バリ公主」は平安、江原、黄海、忠清、済州島地方から採集されていない。これらの地方にはバリ公主神話はない。
- (8) 崔 吉城 前掲書 p.343
- (9) 崔 吉城 前掲書 p.366
- (10) 崔 吉城 前掲書 p.346

- (11) 崔 吉城 前掲書 p.343
- (12) 崔 吉城 前掲書 p.349
- (13) 崔 吉城 前掲書 p.346
- 祭祀とはシャーマンの世界における無数の神々を分類して祭る過程であり、基本祭祀と死霊祭は明確に区別される。祖先神の過程では、死霊を降ろさない。死霊は、死霊祭が終わった次の年に祖先神としてとして十二祭祀課程の中で祭られる。
- (14) 金 香淑『朝鮮の口伝神話』和泉書院 1998.12 pp.40-69
- (15) 金 香淑 前掲書 p.22
- (16) 子供を身ごもる兆しの夢。性別や運命などを暗示すると信じられている夢である。男児や貴子の予言的な夢識や夢兆として慣習化した。シン ジュンホ『韓国民俗大辞典』民俗文化社 1991.1 p.1440 (ソウル)
- (17) 崔 吉城 前掲書 p.405
- (18) 秋葉隆 赤松智城『朝鮮巫俗の研究』下巻 大阪屋號書店 1930.8 p.22
金 烈圭『韓国の神話・民俗・民談』成甲書房 1984.6 p.168
- (19) 柳 東植 前掲書 p.144
- (20) 松前健 魂返しのための霊旅『日本神話の新研究』桜楓社 1961 p.176
崔 吉城 前掲書 p.386 再引用
- (21) 崔 仁鶴『朝鮮昔話百戦』日本放送出版協会 1974 p.302
崔 吉城 前掲書 p.386 再引用
- (22) 崔 吉城 前掲書 p.404
- (23) 依田千百子 異郷訪問譚『朝鮮民俗文化の研究』瑠璃書房 1985.3 「日朝神話・伝承の比較」抜粋 p.31～
- (24) 趙 東一「英雄の一生、その文学的展開」(東亜文化, 10 輯 ソウル: 東亜文化研究所 1971)
徐 大錫『韓国巫歌의 研究』文学思想社 1980.6 p.241 再引用
徐 大錫『韓国巫歌의 研究』文学思想社 1980.6 バリ^{コンジュ}公主は父母のために闘争する孝をみせる。従属的英雄として小説的英雄に近い。p.244 ソウル地域本は英雄文学の一系として神話と小説の中間的性質をもつ。p.253 16世紀以降に女性英雄譚が現れる。儒教に規律が厳しくなるのに対応して現れたことに意味があると考ええる。
- (25) オットー・ランク『英雄誕生の神話』文功社 1986.7 (①～⑤)
ジョセフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄』下 人文書院 1984.10 (⑥～⑧)
- (26) エリアーデ『シャーマニズム』冬樹社 1974.11 pp.348-353

- (27) 金 烈圭 前掲書 p. 187
- (28) 金 烈圭 前掲書 p. 155
- (29) 『국시대사전』 인증서람 1961 년
- (30) オットー・ランク 『英雄誕生の神話』 文功社 1986. 7 p. 151
- (31) オットー・ランク 前掲書 p. 140
- (32) 金 烈圭 前掲書 p. 31
- (33) 崔 吉城 前掲書 p. 391
- (34) 崔 吉城 前掲書 p. 392
- (35) 崔 吉城 前掲書 p. 397
- (36) 無長生(ムザンスン)とは村の入り口に立てられる「天下大將軍・地下大將軍」と書かれた長生チャンスンに由来する名称と考えられる。
- (37) 徐 延範 『韓国のジャーマニズム』 同朋舎 1980. 4 p. 23
- (38) 世界大百科事典 第2版 薬水 <https://kotobank.jp/word/%E8%96%AC%E6%B0%B4-483646> 2016. 8. 28 取得
- (39) 金 烈圭 前掲書 p. 192
- (40) 金 烈圭 前掲書 p. 194
- (41) 柳 東植 前掲書 p. 198
- (42) 金 宅圭 『日韓民俗文化比較論』 九州大学出版会 2000. 5 p. 251
- (43) 金 美栄 「女性にとって家族とは何だったのか」 奎章韓国学研究院【編著】李淑仁【責任企画】小幡倫裕【訳】『朝鮮時代の女性の歴史』 明石書店 2015. 3
- 「輪回奉祀」とは息子や娘が祖先の祭祀を交代で担当・挙行するもので、高麗時代に盛んだった風俗である。朝鮮時代は儒教式祭祀を行うが、輪回奉祀の伝統は依然として続いた。p. 187。
- 外孫〔娘が生んだ子供〕が外家〔母方〕の祖先祭祀を受け継ぐ通俗もあり、これを外孫奉祀という。P. 191
- (44) 金 美栄 前掲書 P. 187
- (45) 秋葉隆 「村祭りの二重組織」『朝鮮民俗』第2号 朝鮮民俗学会 1934. 5 p. 5
- (46) 崔 吉城 前掲書 p. 319
- (47) 崔 吉城 前掲書 p. 321
- (48) 崔 吉城 前掲書 p. 322
- (49) 金 宅圭 前掲書 p. 251
- (50) 鄭 智泳 「禁じようにも禁じ得ず」 奎章韓国学研究院【編著】李淑仁【責任企画】小幡倫裕【訳】『朝鮮時代の女性の歴史』 明石書店 2015. 3 p. 160

朝鮮では儒教を国是として廃仏政策が一貫して展開して展開し国家仏教を排斥したものの、王室の繁栄を祈る王室仏教は存在していた。趙 恩秀「信心の力で儒教的画一化に抵抗する」奎章韓国学研究院【編著】李淑仁【責任企画】小幡倫裕【訳】『朝鮮時代の女性の歴史』明石書店 2015.3 p.290

- (51) 鄭 智泳 前掲書 p.171 世宗十三年(1431年)司憲府が主張した。その禁止を「公然と」無視した兩班の女性たちの長きに渡る駆け引きがあった。しかし処罰は強硬に行えなかった。女性たちは「自覚がないために」処罰しがたいというのが国王の立場であった。P.173
- (52) 鄭 智泳 前掲書 p.172
- (53) 鄭 智泳 前掲書 p.174
- (54) 高麗時代の相続については旗田 巖『朝鮮中世社会史の研究』法政大学出版局(1972) pp.325-361を参照。

韓国略史 72 経国大典の完成(1485年) <http://ezkorea.biz/inf8.cgi?mode=main&no=28> 2016.10.9 取得

朝鮮時代の相続は、父母の死後、その財産は男女均分相続をする代わりに、祖先の祭祀を受け持つ子孫に3分の1を更に与え、奴婢は本妻と子が均等に分けることとし、家系を継承する息子には更に5分の1を与え、妾の子へは本妻の子の7分の1を、賤民の妾の子へは10分の1を与えるとする。

儒教が導入された朝鮮時代にも、子女への均分相続が続けられた。これを立証する資料として1671年に作成された安東の川前村〔現在の慶尚北道安東市河面川前里〕にあった義城金氏の清溪宗家で伝えられてきた分財記がある。

- 金 美栄 前掲書 p.189
- (55) 金 美栄 前掲書 p.184

〈研究ノート〉

「母音」, 「子音」, 「音節」という 用語について

阿久津 智

要 旨

「母音」と「子音」とは、vowel, consonant の翻訳語として、明治元年ごろから使われ出した和製漢語のようである。「母音」が日本文典・英文典（洋文典）の両者で使われた語であるのに対し、「子音」は、当初、主に英文典で使われた語であった。日本文典では、明治中期～後期に、「父音」が多く使われた。江戸時代には、洋学を中心に、母音を表すのに、「韻字」, 「母韻」, 「韻母」, 「音母」, 「母字」などが使われ、子音を表すのに、「父字」, 「子韻」, 「子字」などが使われた。この「父・母・子」は、反切用語から来たものようである。

「音節」は、本来「ふしまわしやリズム」という意味の語であったが、1900年ごろから syllable の翻訳語として使われるようになった。それ以前は、日本文典では、「子音」, 「子韻」, 「複音」, 「単音」など、音（構造）に関する名称が主に使われ、英文典では、「連綴」, 「綴字」, 「綴音」など、つづりに関する名称が主に使われた（「熟音」は両者で使われた）。この両者における名称の違いは、日本文典と英文典における関心の違い（日本文典における五十音、英語における正書法）を示すものと思われる。

キーワード：母音, 子音, 父音, 音節, 語誌

1. はじめに

本稿では、日本語音韻論・音声学分野の基本的な用語である、「母音」、
「子音」、「音節」を中心に、これらの用語が、いつごろから使われるよう
になったのか、同様の概念を表す別の言い方にはどのようなものがあった
のか、などについて見ていく。また、それらの語がどこから来たのかにつ
いても、考えてみたい。以下、専門的な概念としての、母音、子音、音節
(vowel, consonant, syllable) と、(使用例における) 文字列としての、
「母音」、「子音」、「音節」とを区別するため、とくに「概念」を表すため
に使用するときには、《 》でくくって示す。ただし、ここでは、それぞれ
について、細かい定義は行わず、今日、一般に、母音、子音、音節とされ
るものとある程度重なるものを、すべて《母音》、《子音》、《音節》を表す
ものとしておく。

「母音」、「子音」、「音節」については、今日では、それぞれ、英語の
vowel, consonant, syllable の概念を表す語(翻訳語)として定着して
いるが、昭和の初めごろまでは、必ずしもそうではなかったようである。
昭和の初めの主な日本語音韻論・音声学の概論書を見ると、今日と同様に、
「母音」、「子音」、「音節」が使われているものが多く(佐久間鼎『日本音
声学』京文社・柳原書店 1929, 神保格『国語音声学』明治書院 1933, 金
田一京助『国語音韻論』刀江書院 初版 1931, 増補版 1935 など)、これら
の用語がほとんど定着していたようすがうかがえるが、一方で、菊沢季生
『国語音韻論』(賢文館 1935) のように、一部に別の用語が使われている
ものなどもある(母音に「母韻」が、音節に「成音」が使われている。こ
れについては、「三矢重松博士の『文法論と国語学』に従った」(菊沢
1935: 13) とあるが、三矢の書では、「母音」や「音節」の語も用いられ
ている(三矢重松『文法論と国語学』中文館書店 1932: 369))。さらに時

代をさかのぼると、明治中期の日本文典（日本語文法書）類では、《母音》に「母音」（「母韻」も見られる）、《子音》に「父音」、《音節》に「子音」が多く使われている（落合直文・小中村義象『日本文典』1890、高津鞆三郎『日本中文典』1891、関根正直『国語学』1891など。明治以前の文献については、出版元を省略して記す。以下同じ）。

これらの用語をめぐるのは、明治後期の新聞記事に、岩野泡鳴と前田林外（ともに詩人）との、次のような論争が見られる（「読売新聞記事データベース」（読売新聞「ヨミダス歴史館」）による。漢字の字体は、中国語の文献を含め、現代日本語の通用字体を用いる。傍点や傍線は省略する。ルビは一部を除いて省略する。〔 〕内は筆者。網かけは筆者。以下同じ）。

（例1）氏〔前田林外〕が氏の所謂独立音として数へるうちのンでさへ、現代の発音法に抛れば、何か一つの母音^{ほいん}を待たなければ独立が出来にくいのだが、短歌または新体詩に於ては、普通に独立音と見^み為^なされてゐるのは、恰^{あたか}もシエキスピヤ時代にKing^{きんぐ}といふ語がまだ一音節^{おんせつ}でなく、二音節^{おんせつ}に別れて、Ki-^きng^{んぐ}と発音されることがあつた、その第二音節^{おんせつ}と同じ価値であるのだ。況んや純粹の父音^{ふおん}、乃ち頭音^{ずなは}に於てをやだ。たとへばカ行の頭音^{とうおん} (k) またはタ行の頭音^{おん} (t) が、たゞそれだけでは、ひゞき（サウンド）はあるが、音^{おん}（ダイズ）^{（ママ）}には、ならない。ひゞきだけでは音にはならないが、音を有する母音^{おん}と一緒に綴られて、初めてその綴音^{せつおん}の独立した発音が出来るのだ。（岩野泡鳴「前田林外氏に答ふ」『読売新聞』1909年1月3日）

（例2）氏〔岩野泡鳴〕は熟音^{じくおん}といふ立派な用語があるのに「一音節^{おんせつ}」といふコデツケの語を使つてゐるのは悪いことだ。又字母の研究をするのに子音^{おん}といふべき所を「頭音^{とうおん}」といふ語を使つてゐる。共に滑稽式だ。頭音^{おん}といふ語は頭韻^{とうおん}であつてアルテレシオン杯^{など}を論ずる場合に使ふべき語だ。（前田林外「音韻問題（附岩野泡

鳴氏を追撃す)』『読売新聞』1909年1月10日)

(例3) 氏〔前田林外〕はまた「音節」といふ用語をこちつけだと云つたが、これは英語のシラブル (Syllable) に当る語で、語学者は普通にこれまで使用して来たのだ。〔中略〕また、氏は頭音と頭韻とを混同してゐるが、僕が頭音といふのは、五十音中、ア行を除いたすべての行のコンソナントであつて、之を父音または子音と云はないのは、わが国語学者の慣例中に、それと母音との熟合した音、乃ち、カ、サ、タ、等をも父音または子音と呼ぶこともあるからである。(岩野泡鳴「三度、林外氏を駁す」『読売新聞』1909年1月17日)

(例4) 「音節」といふ語は Ton 又は Tonalite^{〔ママ〕} それから Comme ensemble に当るのだ。日本語でいへば、音調の曲折変化する調子だ。短くいへば音律だ、音階だ、音度だ。だから「音節」杯とはいはずに何ぜ綴音又は熟音とはいはないのだと尤めたのだ。〔中略〕又頭音とは滑稽だ。母音を頭にして綴音する場合は僕等には沢山ある、そんな場合には氏のカ行以下の頭音説は直ちに究するのだ。だから、今時小学校の小供でも字母の綴音を頭音だの後尾音だといふ鈍物はないのだ。子音^{しいん} 母音^{ぼおん}で結構だ。適切だ。
(前田林外「小説材料問題 (つゞき)」『読売新聞』1909年1月31日)

ここに現れた用語を整理すると、《子音》を表す用語には、「父音」、「子音」、「頭音」、「コンソナント」があり、《音節》を表す用語には、「父音」、「子音」、「音節」、「綴音」、「熟音」、「シラブル」があつて、岩野泡鳴は、(五十音における)《子音》に「頭音」、《音節》に「音節」を用い、前田林外は、《子音》に「子音」、《音節》に「熟音」または「綴音」を用いているということになる(なお、これらの記事の中では、「子音」には「しいん」と「しおん」と、「母音」には「ぼいん」と「ぼおん」と、「綴音」に

は「せつおん」と「てつおん」と、いずれも2通りのルビが振られている)。

ところで、1929年に中国で出た「声韻学」(漢語音韻学)の概論書には、次のようにある(〔 〕内は筆者による訓読(訳)。以下同じ)。

(例5) 声母、依西文当訳曰輔音、曰僕音；依日文当曰子音、曰熟音。

韻母、依西文当曰元音、依日文当曰母音。〔中略〕日文謂声母為子音、熟音云者、以其多用首行ア、イ、ウ、エ、オ、五母音、為収声之故；謂韻母為母音云者、以其為子音所由成也。〔声母(ここでは子音のこと)は、西文(ヨーロッパの言語)に依りて当てて訳して「輔音」と曰い、「僕音」と曰い、日文(日本語)に依りて当てて「子音」と曰い、「熟音」と曰う。韻母(ここでは母音のこと)は、西文に依りて当てて「元音」と曰い、日文に依りて当てて「母音」と曰う。(中略)日文に声母を謂いて子音、熟音と為すと云う者は、其の、多く首行の「ア、イ、ウ、エ、オ」五母音を用いて、収声(音節末の音)と為すの故を以てなり。韻母を謂いて母音と為すと云う者は、其の子音の由りて成す所と為るを以てなり。〕(張世祿『中国声韻学概要』(台四版)台湾商務印書館1978:49(1929初刊))

ここでは、「声母」に当たる語には、ヨーロッパ語からの翻訳語の「輔音」と「僕音」と、日本語からの「子音」と「熟音」とがあり、「韻母」に当たる語には、ヨーロッパ語からの翻訳語の「元音」と、日本語からの「母音」とがあることが述べられている(後半は、日本語の音節は「子音+母音」という構成をとる(それがこれらの名称と関係している)ということが述べられている)。

以上の例1~例5からは、日本語において、(ア)《子音》や《音節》を表すのに複数の語が使われていたこと、(イ)《子音》を表す語と《音節》を表す語とに混用(混同)があったこと、(ウ)「母音」と「子音」とは日本で作られた語であるらしいこと、などがうかがえる。そこで、以下、「母音」、

「子音」, 「音節」(の概念を表す語)を中心に, これらの用語が, いつごろから使われるようになったのか, 同様の概念を表す言い方にはどのようなものがあったのか, などについて見ていく。また, それらの語がどこから来たのかについても考えてみたい。なお, 本稿では, 音声学・音韻論における専門的な内容(議論)には立ち入らない。

2. 母音と子音

2.1 「母音」, 「子音」の使用の始まり(明治以降)

まず, 「母音」と「子音」という語が, いつごろから使われるようになったかについて見ていく。

「母音」と「子音」とは, 『日本国語大辞典 第二版』(小学館 2000~2002。以下『日本国語大』)によれば, それぞれ, 「言語音の分類の一つ。呼気が持続的に口腔を通過する際の共鳴によって生ずる音。〔以下略〕」, 「言語音の分類の一つ。母音以外の音の総称。発音の際に, 舌・歯・口腔・唇などの発音器官によって呼気の通路を狭めたり, 閉鎖したりすることによって発する音。〔以下略〕」である(これ以外の意味はない)。同辞典に載っている両語の最も古い用例は, 西周『百学連環』(1870~71 頃)の「文字に consonants (子音) 及び vowel (母音) の二種あり」である(なお, これらには読み仮名がなく, これらをどう読んだかは不明である)。

西周『百学連環』とほぼ同時期の 1869 年に出た薩摩学生編『改正増補和訳英辞書』(いわゆる「薩摩辞書」)には, この両語がルビ付きで現れている(以下, 用例の収集には, 書籍・雑誌のほか, 「国立国会図書館デジタルコレクション」, 「国文学研究資料館 電子資料館」, 「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」, 「グーグルブックス」, 「中国哲学書籍電子化計画」, 「近代史数位資料庫」を用いた。辞典における品詞の略号等は省略した。／は改行, または, 別ページを示す。以下同じ)。

(例6) ^{コンソネント} Consonant ^{シイン} 子音 / ^{〔ウヲウ〕ル} Vowel ^{ボイン} 母音 (薩摩学生編『改正増補 和訳英辞書』(薩摩辞書) 1869)

また、1867年刊のヘボンの『和英語林集成』(初版)の英和の部には、「Vowel」の項に「boin」が現れている。「Consonant」は、同辞典の初版には見出しがなく、第2版(1872年刊)で現れる。

(例7) Vowel **Jibo; boin.** [「Jibo」は「字母」, 「boin」は「母音」(あるいは「母韻」か) だと思われる] (J. C. Hepburn『和英語林集成 A Japanese and English dictionary, with an English and Japanese index』1867)

(例8) CONSONANT **Shi-in, ko ji.** [「Shi-in」は「子音」(あるいは「子韻」か), 「ko ji」は「子字」だと思われる] (J. C. Hepburn『和英語林集成 第二版 Japanese-English and English-Japanese dictionary』1872)

ほかに、「慶応三年十二月」(1867年12月ないし1868年1月)の跋のある堀秀成『言霊妙用論』(1877刊)に、「母音」が使われている。「母音」と「子音」が文献に現れる最も早い例は、(筆者の調べた限りでは)上に挙げたものであるが、この両語は、おそらくこのころ(明治元年ごろ)から使われるようになったのではないかと思う。

ところで、vowelとconsonantに関して、19世紀の英華字典類には、ロブシャイド(羅存徳, W. Lobscheid)編『英華字典 English and Chinese Dictionary, with Punti and Mandarin Pronunciation. Part III』(1866)に、「Consonant 同音字母」, 「Vowel 自音之字」とあり、鄭其照編『華英字典集成 An English and Chinese Dictionary』(1899)に、「Consonant 無音之字母」, 「Vowel 自音之字」とある。モリソン(馬礼遜 R. Morrison)編『A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE, PART III』(1822), ウィリアムス(衛三畏 W. Williams)編『英華韻府 歴階 An English and Chinese Vocabulary in Court Dialect』(1844),

メドハースト（麦都思 W. H. Medhurst）編『English and Chinese Dictionary』（1847～1848）、ドーリットル（盧公明 J. Doolittle）『英華萃林韻府 Vocabulary and Handbook of the Chinese Language』（1872）には、「vowel」と（子音の意味での）「consonant」とは立項されていない。「母音」と「子音」（および、その同義語）とは、20世紀初め（1908年刊）の顔惠慶編『英華大辞典』に現れる。

（例9） Consonant [中略] A letter of the alphabet, as *d* or *g*, which cannot be sounded without the aid of a vowel, 字母中之無音字母, 僕音, 跟音, 子音 / Vowel A sound uttered by simply opening the mouth or vocal organs, as the sound of *a*, *e*, *o*, 元音, 喉音, 母音, 母韻（即 *a*, *e*, *i*, *o*, *u* 之音）（顔惠慶編『英華大辞典 An English and Chinese Standard Dictionary』1908）

同辞典は、「例言八則」に、「是編採用諸書。暨所参考。不下数十百種。〔中略〕有為英和字典本者。」「是の編は諸書を採用（採用）し、参考する所に暨りては、数十百種を下らず。〔中略〕英和字典を本と為す者有り。」とあるように、英和辞典から多くの「日本製の訳語」（新語）を取り入れている（沈2008：211）。一方で、「ヨーロッパ言語から直接に訳語を考える西洋系の学者たち」は、「日本の訳語に強い反発を示し、独自の訳語を主張し続け」（沈2008：210）、その代表である巖復は、1904年刊の英文法書『英文漢語』で、「Vowels 元音」、「Consonants 僕音」と訳している。また、高野（2004：123）は、「母韻（母音）Vowel-sound」と「子音（子韻）Consonant-sound」とを「和製漢語」として扱っている。以上から、「母音」と「子音」とは、日本で作られた語である可能性が高いように思われる。なお、中国語では、20世紀の初めには、vowelとconsonantに対して、さまざまな訳語があったが（例5・例9にあるもの以外に、たとえば、呉敬恒が1917年に発表した「読音統一会進程序」には、《子音》に「無音」、「啞音」などが、《母音》に「有音」、「響音」などが挙

げられている (呉敬恒, 劉紹唐主編『国音国語国字 第一集』伝記文学出版社 1960: 137)), 1940 年ごろには, 中国を代表する言語学者たちが「元音」と「輔音」とを使うようになり (代表的な著作は, 高本漢 B. Karlgren, 趙元任・羅常培・李方桂訳『中国音韻学研究』1940), それを引き継いで, 今日では, 「元音」と「輔音」とが最も一般的になっている (なお, 台湾では, 「母音」と「子音」もよく使われる)。

さて, 明治期の語学書には, 《母音》と《子音》とを表すのに, 「母音」と「子音」以外の語も使われている。英語関係 (英文典など) では, 明治初年に, 「母韻」と「子韻」(大学南校助教訳『^{クワッケンボス}格賢勃斯 英文典直訳 卷之上』1870, 亜遊居人『英学教授』1871 など) や, 「母字」と「子字」(青木輔清『英学之部 初編 横文字独学』1871, 浦谷義春『英学辞訓 一名・スペリング独学』1871 など) などが見られるが, 明治中期には, 「母音」と「子音」とが一般的になっている (「母音」と「子音」の早い時期の使用例には, 柴田清熙『洋学指針 英学部 二編』1871, 山田正精訳『英学必携 上』1872 などがある)。

一方, 日本語関係では, 明治初期の文典 (文法書) には, 母音には, 「母韻」(古川正雄『絵入智慧の環 二編下』1871, 藤沢親之『日本消息文典 上ノ巻』1874, 田中義廉『小学日本文典 一』1875) や, 「母音」(中金正衡『大倭語学手引草 前篇』1871, 渡部栄八『啓蒙 詞のたつき 一』1875, 中根淑『日本文典 上巻』1876 など) が多く使われているが, 《子音》を表す語はあまり使われていない。「父音」(小笠原長道『日本小文典』1876, 吉川楽平『国語教授式』1877, 関治彦『語格楷梯 日本文法 卷壺』1879 など) や, 「子韻」(藤沢親之『日本消息文典 下ノ巻』1874, 春山弟彦『小学科用 日本文典 卷一』1877) が見られるものの, 「もとごゑ」(古川正雄『絵入智慧の環 三編下』1872), 「^{モトゴエ}本音」(天野春翁『言葉の踏分』1877), 「原音」(物集高見『初学日本文典 上』1878) などという言い方も使われており, 明治初期には, この概念を表す語が未定着だったことをう

かがわせる。

(例10) 父音ト云フ字ハ別ニアラザレドモ、母韻ノミニテ子韻〔《音節》〕ノ生ス可キイハレナシ。故ニウクスツヌフムユルノ九字ヲ以テ仮ニ父音トナシ、母韻ト相合^(ママ)ノテ子音〔《音節》〕ヲ生ゼシム。〔句読点は筆者〕(小笠原長道『日本小文典』1876:4ウ)

(例11) 本邦単に子韻の字を製らず。其母韻に配合して全き声をなす者〔《音節》〕に就きて字を製る。故に今かりに其配合の音の者を以て子韻と名づけて母韻とわかつてり。〔句読点は筆者〕(春山弟彦『小学科用 日本文典 卷一』1877:5オ)

(例12) 母音ト相重ナル所ノ子音〔《音節》〕ニ七個ノ原音アリ。ク ス ツ ヌ フ ム ルト云フ其声隱微ニシテ未ダ全ク明ナラザル者トス。今仮ニ此隱微ナル声音ノ記標ニ扁^{カタ}傍^{カタ}仮字ノク ス ツ ヌ フ ム ルヲ用ヒテ母音トノ結合ヲ説カバ、先ツクト母音ト重リテ「かきくけこ」ノ五音成リ、スト母音ト重リテ「さしすせそ」ノ五音成リ、〔句読点は筆者〕(物集高見『初学日本文典 上』1878:2オ)

その後、明治中期～後期には、《母音》に「母音」、《子音》に「父音」が多く使われるようになった。「子音」は、「父音+母音」の《音節》の意味で多く使われている。そのほかに、《子音》には、大槻文彦が『日本辞書 言海』(1889)で用いた「発声」も用いられた(大平信直『中等教育国文典』1899, 教育學術研究会『師範教科 国語典 上巻』1904, 林治一『日本文法講義』1907など)。

(例13) 阿行ノ五音ハ、喉ヨリ単一ニ出ツ、コレヲ^{タンオン}単音ト名ヅク。加行以下、九行ノ諸音ハ、其行^{ギヤウ}毎ニ、各、其音ヲ呼ビ^{オコ}発ス一種ノ声アリテ、コレヲ^{ハツセイ}発声(Consonant.)ト名ヅケ、^{ヒビキ}単音、ソノ韻トナリ、^{オコ}発声ト、^{ヒビキ}単音ト、相熟シテ、始メテ音ト成ル、此ノ故ニ、加行以下ノ九行四十五音ヲ、^{ジユクオン}熟音(Syllable.)ト名ク、^{ナツ}単音ハ、斯ク発声ノ韻トモナルガ故ニ、亦、^{ボヘン}母韻(Vowel.)ノ称アリ。

(大槻文彦『日本辞書 言海』「語法指南 (日本文典摘録)」1889 : 2)

「発声」には、「音を出し始める」という意味があり、そこから「音節の始めの音」という意味に使われたようである。なお、近現代の中国の文献にも (一般語としての) 「発声」はよく見られる。また、清代には、江永、江有誥、陳澧、洪榜などの音韻学者が、《子音》の分類 (無気閉鎖音など) に「発声」という用語を使っているが、この用語の用法には、学者によって、多少の異同があった (『伝統言語学辞典 第2版』河北教育出版社 2010 「発声」)。近現代の中国語の例を挙げておく。

(例14) 考人類の発音機関 (Organs of Speech) 総是一様, 就其發声部位而言謂之『声』; 就其收音於喉而言謂之『韻』。所以最單純之『声韻』, 各国大略相同。記諸紙, 表声者謂之『声母』 (Consonants); 表韻者謂之『韻母』 (Vowels)。〔人類の発音機関 (Organs of Speech) を考うれば, 総て是れ一様なり。其の「発声」部位に就いて言えば, 之を「声」と謂い, 其の喉に「收音」するに就いて言えば, 之を「韻」と謂う。所以に最も單純の「声韻」は, 各国大略相同なり。諸を紙に記せば, 「声」を表す者は, 之を「声母」 (Consonants) と謂い, 「韻」を表す者は, 之を「韻母」 (Vowels) と謂う。〕 (国人「注音字母与万国音標」『東方雜誌』17-10, 1920)

(例15) 用現代語言学上的名詞説来, 声母就是一个字的發声, 等於英文的 initial; 韻母就是一个字的收音, 等於英文的 final。〔現代言語学の用語を用いていえば, 声母は1つの漢字 (音節) の「発声」であり, 英語の initial に等しく, 韻母は1つの漢字の「收音」であり, 英語の final に等しい。〕 (王力『漢語音韻学』(重版) 中華書局 1980 : 40 (1935 初刊))

日本語学の方野において、《子音》に「子音」が一般的になるのは、大

正期以降のこのようであるが、明治期の日本文典にも、《子音》に「子音」を用いた例は見られる（ビー・エッチ・チャンブレン『日本小文典』1887、和田万吉『新撰国文典』1897、岡沢鉦次郎『初等 日本文典 前編上』1900など）。

(例16) ア行の五音を母韻と名づく。カ行以下諸行の音を熟音と名づく。熟音は母韻と他の一種の音と熟合したる声音なり。こゝに他の一種の音といへるものを子音と名づく。子音は仮名にて書きあらはす便宜なきが故に、こゝに示すこと能はざるなり。カ行以下每行の五熟音に通有にして、且つ各音の頭を成す一種の声あるを、よび試みて知るべし。これ即ち子音なり。（和田万吉『新撰国文典』1897：7）

2.2 「母音」、 「子音」 の使用以前（江戸時代まで）

次に、「母音」、 「子音」という語が使われる以前に、《母音》や《子音》が何と呼ばれていたかについて見ていく。江戸時代の洋学資料（辞書や語学書）では、《母音》には、「韻字」が多く使われている。

(例17) 匀字ヲ「キリンクレーテル」〔klinkletter〕ト云。又「ホカーレン」〔vocaalen〕トモ称ス。Aeiou 是ナリ。又 y 字ヲ添テ、六字ノ「ホカーレン」ト云。余ノ十九字ヲ「メデキリンクレーテル」〔medeklinkletter〕ト称ス。又「ストーメ」〔stomme〕トモ云。「メデ」〔mede〕トハ連ル、コト也。「ホカーレン」ニ連從シテ、「セイラブ」〔syllabe〕ヲナスナリ。「ストーメ」トハ瘡字〔啞字〕ト云コト也。愚按ルニ、此十九字「ホカーレン」ニ從ハザレハ、音匀ヲ如何トモ発スルコト能ハス。故ニ此称アルナルヘシ。〔「匀」は「韻（韵）」の略体〕〔句読点は筆者〕（前野良沢『和蘭訳文略草稿』1771 識語）

(例18) 上ノ二十六字ノ中六字ハ、ア、ンエ、ンイ、オ、ンウ、ンエイ、

[aeiouy] ノ韻字ニシテ, 其名即ソノ音也。「キリンクレット
ス」[klinkletters] ト号ス。「キリンク」[klink] ハ即韻字の義,
余ノ二十字ヲ「メデキリンクルス」[medeklinkers] ト号ス。
「メデ」[mede] ハ相合せ連ルヲ云。韻字ニ連合シテソノ音ヲ成
ス義也。〔句読点は筆者〕(大槻玄沢『蘭学階梯 下巻』1788 刊:
9 オ (1783 成立))

(例19) ^(ママ) kliner 韻字 / medeklinker. 六韻字ノ外ノ文字 / vocal. 韻字
(Halma, François, 稲村三伯『Nederduits woordenboek』(江
戸ハルマ, ハルマ和解) 1796 刊)

(例20) klinker. 音母 / medeklinker. 音母 / vokaal. 韻字 (道氏
Doeff, Hendrik 訳, 桂川甫周他校訂『和蘭字彙』1858 刊)

(例21) consonne, 合音 / voyelle, 韻字 (村上英俊『仏語明要』1864
刊)

「韻字」は, 古くから, 「漢詩文で, 韻をふむために句の末に置く字。脚
韻に用いる字。」や, 「漢詩の脚韻を和歌にあてはめて, 一首の末に置かれ
る語とされたことば。」(『日本国語大』「韻字」) として使われてきたが,
上の例では, 「母音字」という意味で使われている。「韻」には, 脚韻に用
いる音 (音節の後ろの部分) として, 古くから, 《母音》を表す用法があっ
た。中国唐代の例を挙げると, 日本における悉曇学 (インドの音韻学) の
創始に大きな影響を与えた『悉曇字記』に, 《母音》(字) に, 「韻」, 「摩
多」(梵語 mātā の音訳) が, 《子音》(字) (母音 a を潜在させる) に,
「声」, 「体文」(梵語 vyañjana の意識), 「文」(同左) が使われている。

(例22) 其ノ始^{マサニカフラ}ノ曰^{シメテ}ア^下ニ悉曇ト^ノ。而^モ韻^ニ有^リレ六ツ。長短兩分字^{イウ}十有二ナリ。
將^{マサニカフラ}冠^{シメテ}ニ下^ノ章^ノ之首^ニ對^シレ声^ニ呼^テ而^モ發^スレ韻^ヲ。声^合ウレ韻^ニ而
字生^ス焉。〔中略〕其次^ニ体文^{三十有五}ナリ。通^{シテ}(?)^ニ前^ノ悉曇^ニ四
十七言明^ケシ矣。声^ハ之所^ニ發^{スル}ニ則^チ牙^ハ齒^ハ舌^ハ喉^ハ唇^ハ等^{ナリ}。ノ初章^ハ將^テ
前^ノ三十四^ノ文^ヲニ對^{シテ}阿^ニ阿^ニ等^ノ十二^ノ韻^ニニ、呼^{ンテ}レ之^ヲ増^スニ以^テス

摩多^マ。生字四百有八^ハリ。(智広『悉曇字記』794 頃成立, 根来寺往生院 1447 刊: 3 ウ, 5 オ)

ほかに, 平安時代の日本の悉曇学書には, 《母音》に「韻音」や「音韻」を用いた例も見られ, 鎌倉時代以降は, 《母音》と《子音》とに, それぞれ, 「韻」と「音」とが使われるようになった(釘貫 2007: 29, 35)。

(例23) 阿等^ア十六音^シ皆^ハ是^レ韻音^リ (安然『悉曇蔵』880 成立, 『校正悉曇蔵 一』「序」1789 刊: 4 オ)。

なお, 例 17 (および, 例 30) にある「瘖字 (啞字)」は, 引用文中にあるように, 「ストーメ」(stomme。『江戸ハルマ』によると「啞人」) の翻訳語である。この名称は, 《子音》のもつ「聞こえが小さい」という性質に基づいたものであろう。例 20 では, 「音母」が, 《母音》と《子音》の両方に使われているが, これは, (表音文字における「字母」と同じように)「言語音 (の一つ)」というような意味で用いられているのではないかと思われる。例 21 の「合音」は, 例 17 に説明のある「メデキリンクレーテル」と同様に, 「母音に合わさる音」(例 24 の「所合^ソ声」に当たる) という意味での造語 (翻訳語) ではなかろうか (英語の consonant も, 『『母音と一緒になり響く音』が原義』である (『ジーニアス英和大辞典』大修館書店 2001))。

ほかに, 江戸時代の文献では, 《母音》には, 「音母」, 「母字」, 「母韻」, 「韻母」のように, 「母」を含むものが多くあり, 《子音》には, 「父字」, 「子韻」, 「子字」など, 「父」や「子」を含むものが見られる。

(例24) 今此^ア a 等^シ五字^ハ短声^ニ而^テ撰^ル長声^及ヒ空 (撥音) 涅槃 [入声]^ノ声^ヲ。能^ク出^ス生^ス一切^ノ音韻^ヲ。就^テ出^ス生^ス之^ヲ以^テカ^カサ^タna 等^ノ九字^ヲ為^シ所合^ソ声^ト。a 等^ノ五字^ヲ為^シ能合^ソ韻^ト。所合^ソ声^ヲ為^シ父^ノ字^ト。能合^ソ韻^ヲ為^シ母^ノ字^ト。声^ノ声^ノ韻^ノ韻^ノ各^々合^シ反音^ス。〔句読点は筆者。梵字はローマ字に翻字した〕(盛典『新增韻鏡易解大全』「卷一 韻鏡易解改正卷一 第二 五韻拗直図説門」)

1718 刊 : 13 ウ)

(例25) 図面七音清濁ノ差別ニヨリテ三十六母〔36種の声母〕ノ配位アリ。又左辺ニ各各韻母ノ字ヲ識ス。是音韻ノニツナリ。〔句読点は筆者〕(文雄『磨光韻鏡後篇 指要録』「開卷知音」1773 刊 : 4 ウ)

(例26) 彼邦の国字を「アベセ」といふ。吾邦のいろはの如し。父字二十字に母字五字をつゞりて万の音をしるす。〔句点は筆者〕(森嶋中良『紅毛雑話』巻之三「唐土の文字」1796 刊 : 11 ウ (1787 成立))

(例27) 按スルニ。^{ア エ イ オ ウ エ}AEIOUYノ六字ハ。単呼定音ヲ倣シ。他音ニ変ゼズ。故ニ之ヲ韻母トシ。其余二十字ヲ子字トス。(藤林普山『訳鍵 凡例并附言』1810 刊 : 7 ウ)

(例28) ^{ホウ エル}vowel 音母 (本木庄左衛門ら編『諳厄利亜語林大成』1814 成立)

(例29) 古来, 「アイウエオ」ノ五音ヲ, 字母ト称ス, 今日ヲカヘテ, 音母ト云フ, 実ニ音ノ母ニシテ, 何レノ音モ, 此ノ「ア」行ノ音ヨリ, 出デザル者無ク, 且何レノ音モ, 此ノ「ア」行ノ音ヲ, 含まザル者無シ, (鳥海松亭『音韻啓蒙』「総論」1816 刊 : 9 ウ)

(例30) 之〔ア, イ, ウ, エ, オ〕ヲ漢土ヨリ先ツ邦々ニ求ムルニ, 此五音母ナキ国ナク, ソノ仮字ナキ地モ亦ナシ。サレハ, 此五韻母字コソ天然ノ音ナル可ケレ。/ ^アA ^エE ^イI ^オO ^ウU / 以下ノ啞字即父字二十字皆協合^ス以上五韻母字^ヲ。〔句読点は筆者〕(大槻玄幹『和音唐音対注 西音発微』1826 刊 : 3 オ, 21 オ)

(例31) 但し此ノ音図. すでに再訂せる神字日文伝にも出せるが. 彼ノ書に釈たる. 母韻アイウエオ. 父声ウクスツヌフムユウルの説等を合せ考へ. 彼此相発して其ノ精義を索むべきなり. 〔日文は省略〕(平田篤胤『古史本辞経』「五十音図訂正 第三」1850 刊 : 25

ウ (1839 成立))

(例32) klinker. 母韻 / medeklinker. 子韻 (飯泉士讓『和蘭文典字類前編』1856 刊)

(例33) 母子之別 第一韻母 A a [中略] 第二韻母 E e [以下略] / voortdrÿven van medeklinkers 語首子字直進 (柳川春三『洋学指針』1857 刊 : 3 ウ, 5 ウ)

(例34) Consonant 子字 / Vowel 音母 (堀達之助『英和对訳袖珍辞書』(初版) 1862 刊)

(例35) 字ニ母子ノ別アリ。韻母^{ヴヲウエル}vowelハ一字独用シテ音ヲ発ス。子字^{コンソネント}consonantハ必ス韻母ニ合シテノミ音ヲ生ズ。独用スルコト無キナリ。(柳川春三『洋学指針 英学部』1867 刊 : 4 オ)

以上のうち、「母韻」と「子韻」とは、明治以降も日本文典などで使われている (例 10, 例 11, 例 13 参照)。ところで、「母音」と「子音」の読み方には、「…いん」と「…おん」とがある。今日では、両音とも「…いん」と読まれることが多いが、これは、「母韻」と「子韻」の読み方が継承されたものかと思われる。

さて、上の例に見られる「韻母」は、今日の中国の音韻学で使われる、「一個音節中声母後面的部分」〔1 つの音節中の声母の後ろの部分〕(『中国語言文字学大辞典』中国大百科全集出版社 2007) である「韻母」と同形語である。しかし、この両者には、直接の関係はないようである。中国の音韻学で「韻母」と「声母」が使われるようになったのは、1918 年に中華民国教育部が公布した「注音字母表」で用いられてからのようで (なお、同表では、 ㄩ i, ㄨ u, ㄩ ü は、「介音」として、「韻母」から切り離されている)、これは、1913 年に教育部の読音統一会が「国音字母」を定めたときに用いた、「韻」と「母」とを改めたものである。『東方雑誌』1914 年 3 月号の邢島「読音統一会公定国音字母之概説」では、「韻」と「母」とが使われ、同誌 1916 年 12 月号の詹父「論国音字母」では、「韻母」と

「声母」とが使われている。この「母」は、声母を意味する「字母」の略称であり (林尹, 林炯陽註釈『修訂増註 中国声韻学通論』黎明文化事業 1982: 46 (1937 初刊)), 日本語における《母音》を表す「母」とは、用法が異なる。これについて、江戸時代の学僧、文雄は「母ハ反切ノ下ナル字〔母音〕ヲ指スト云フハ非ナリ」としている (文雄『磨光韻鏡後篇 伐柯篇』「反切字義」1773 刊: 13 オ)。

ここで、《母音》に使われる「母」、《子音》に使われる「父」と「子」がどこから来たのかについて考えてみたい。これらは、反切の用語から転用されたもののようである。反切とは、ある漢字の音を、他の漢字二字で表す方法で、一字目が声母を示し、二字目が韻母を示す。たとえば、「東」の音は「徳紅」で表される。これは、「徳 tək」の声母 t と、「紅 yuŋ」の韻母 uŋ とを合わせると、「東 tuŋ」の音になることを示している。日本の音韻学 (「日本韻学」, 悉曇学と漢字音研究が混交して発生した日本独特の学問 (馬淵・出雲 1999: 26)) では、伝統的に、この一字目 (反切上字) を「父字」、二字目 (反切下字) を「母字」と呼んできた。また、目的の字 (反切帰字) を「子字」と呼ぶこともあったようである。

(例35) 上父字行_レ豎下母字行_レ横其隅生_二子字_一／例伊¹上⁷父⁷和⁷下⁷母⁷反⁷阿⁷隅⁷子 (明魏『倭片仮字反切義解』1429 頃成立, 1800 親弥写)

(例36) 反切ニ用フル所ノ二字ヲ切韻トモ又ハ父字 母字トモ称ス。二字ノ用ヲ成スコトハ、父字ニテ字母ト音トヲ知ラシメ、母字ニテ韻ヲ知ラシメタルナリ。父字ニテ字母及ヒ音ヲ知ルトハ、字母ト云ハ三十六母ノ中ノ一字ナリ。音トハ呼ヒ出ス音ナリ。母字ニテ韻ヲ知ルトハ、韻ハ其呼ヒアラハス所ノ字音ノ尾ノ余声ナリ。
〔句読点は筆者〕(文雄『磨光韻鏡後篇』「伐柯篇 反切総論」1773 刊: 1 ウ)

例 35 は、『日本国語大』で、「母字 (ははじ)」と「父字 (ちちじ)」の用例として挙げられているものである。ほかに、馬淵 (1984: 55, 68) に

は、鎌倉時代の悉曇学者である、承澄や了尊の韻図（五十音図）に使われた、「母」（母字）、「父」（父字）の例が見える。

（例37） 已上五字〔ヤイユエヨ〕通^ス本末^ニ。為^ル母^ト第二〔イ段〕^ニ之時、為^ル中字^ト。故^ニヤハ通^ス音韻^ニ也。但^シユ字ハ非^ズバ^シノ下^ニ無^シ成^{スコト}レ音^ヲ。〔馬淵 1984：56 を参考に、句読点、訓点を施した〕（承澄『反音鈔』1299 写、馬淵 1984：55 の影印による）

この「母（字）」は、梵語で《母音》（字）を表す「摩多 mātā」から来ているようである。『漢訳対照 梵和大辞典 増補改訂版 新装版』（講談社 1986）によれば、mātā (= mātr) は「母」を意味する語である（英語の mother と同源（Oxford English Dictionary (June 2017 update)）。これについて、内田（2008：18）は、「他の音を『生む』という意味で『母』なのである。」と述べている。

一方、「父（字）」は、梵語で《子音》（字）を表す「体文 vyañjana」の訳ではなく（『漢訳対照 梵和大辞典』によれば、vyañjana の「漢訳」は「語、文、字、文字、言辞、文辞、文詞」などである）、「母」との対応から用いられるようになった語ではないかと思われる。また、例 35 にある「子字」は、「父字+母字=子字」という意味であろうが、『日本国語大』の見出しにもなく、反切用語としては、あまり使われなかった用語のようである。

ところで、《母音》を表す「母」、《子音》を表す「父」、《音節》を表す「子」は、中国の明代末にフランスのイエズス会宣教師ニコラ・トリゴー（金尼閣 Nicolas Trigault）が著した中国語の音韻書『西儒耳目資』の中でも使われている。

（例38） 一 創定音中。有自鳴。有同鳴。／一 創定同鳴為父。自鳴為母。父 母相合。共生字子。〔一、創定す、音中に「自鳴」（母音）有り、「同鳴」（子音）有りと。一、創定す、「同鳴」を「父」と為し、「自鳴」を「母」と為し、父母相合して、共に「字子」を生

ずと。) (金尼閣『西儒耳目資』「西儒耳目資釈疑」1626 刊)

これについて、張世禄は「此或声母与韻母之名所由来歟。」〔此れ或いは声母と韻母との名の由来する所か。〕(前掲『中国声韻学概要』p. 46)と述べているが、この点については、不明である。しかし、少なくとも、日本では、これと同様の「父・母・子」の使い方が、さらに古い時代から行われており、それが、江戸時代を経て、明治以降の「母音」, 「父音」, 「子音」の名称につながっていったということはいえるように思う(中国では、この使い方は、あまり一般的ではなかったようである。文雄は、「又切韻〔反切〕ノ二字ヲ父字 母字ト称スルコト華人ハ多ク言ハサル所ナリ」と述べている(前出『磨光韻鏡後篇 伐柯篇』13オ))。ただし、伝統的な反切における「父・母・子」の関係は、「父字+母字=子字」であり、この用法は、明治中期の日本文典における「父音+母音=子音」に継承されたが、英文典では、採用されず、「子音+母音=音節」が一般的になった(「音節」の使用は、次節で述べるように、明治後期からである)。今日では、日本語学でも、《母音》に「母音」が、《子音》に「子音」が使われているが、これは英語学(洋学)における、「母音」と「子音」の用法が取り入れられたものといえる。なお、内田(2008: 24)は、consonantの訳語に、「父音」ではなく、洋学に由来する「子音」が採用された理由について、「父音」は『ウ段音』という『単子音+単母音』であり、「反切を意識するときのみ使用され、カ行以下45音を意味する『子音』を説明するための概念」であるのに対し、「洋学者たちは音素文字の獲得によって現代の子音の概念を手に入れた」からだとしている。しかし、この「父音=ウ段音」については、日本文典において、「父音」をウ段音(-uを含む音節)と見ているものは、ごく少数であり、大多数の文典では、「父音」を《子音》の意味で用いている。筆者が、明治初年から1900(明治33)年までに刊行された日本文典のうち、73種について調べた結果では、「父音」が使われていた36文典のうち、はっきり「父音」をウ段音としているもの

は4文典のみであった（井田秀生『皇国小文典』1894，遠藤国太郎・鈴木重尚『日本文典教科書』1894，中邨秋香『皇国文法』1898，大林徳太郎・山崎庚午太郎『中学 日本文典 上巻』1898）。日本文典には、「父音」について、次のような説明が多く見られる。

（例39） こゝにまた、五十音の外に、**母音**と配合して、**子音**を生ずる、九個の声音あり。これを**父音**といふ。その音幽微にして、いまだ明に、音声にあらはれたるものにあらず。されば、これにあつる文字あることなし。今仮に、片仮字をもて、これを書きあらはす時は、ク ス ツ ヌ フ ム ユ ル 于〔ワ行のウ〕九個の音の幽微なるものなり。（落合直文・小中村義象『日本文典』1890：4）

（例40） **父音**とは、**母音**と融合して、**子音**をつくる一種の音なり。その音隱微にして、いまば、判然と口外にあらはれたるものにあらず。／されば、また、これを標すべき文字あることなし。今、仮に、片仮字を以て示すときは、五十音の字列の、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル、ウ、の九個の**子音**より、**母音**を引き去りたる跡に残れるもの、即ちこれなり。（大宮宗司『初等教育 日本文典』1894：4）

これらの「父音」は、明らかに《子音》を表している。ただ、いずれにしても、「父音」は「カ行以下45音を意味する『子音』を説明するための概念」であり、《子音》を表す「子音」は、洋学者に由来するということはいえるようである。

3. 音 節

次に、「音節」という語について見ていく。

『日本国語大』に挙げられている、「音節」の、現代的な意味（「言語に於ける音声の単位の一つ。ひとまとまりとして意識される音声連続。〔中

略] シラブル。」(同辞典「音節①」))における最も古い用例は、上田万年『国語学の十講』(1916)の「日本の言葉は多音節主義である。一つの言葉が多くの音節から成立つのを原則としてゐる」であるが、これは、先に挙げた1909年の読売新聞の記事(例1~例4)よりも新しいものである。例3に挙げた記事に、「音節」について、「語学者は普通にこれまで使用して来たのだ。」とあることから、この語は、少なくとも、明治後期には、すでに(「語学者」の間では)よく使われていた語だと思われる。しかし、例4に「音調の曲折変化する調子だ。短くいへば音律だ、音階だ、音度だ。」とあるように、「音節」の本来の意味は、「声、または音楽の調子。ふしまわしやりズム。」(『日本国語大』「音節②」)であった。『日本国語大』には、「日本にむぎつき歌と云も、何事をもうたへども、其音節がむぎつくにあうを云ぞ」(『四河入海』1534成立、慶長元和年間刊)、「右之本頌句音節墨譜等令加筆候」(浄瑠璃『新うすゆき物語』1741刊)などの例が挙げられている(後者は、浄瑠璃本開板における常套句のようである(「ジャパンナレッジ」『日本古典文学全集』の「全文」検索による))。

この「音節」本来の意味は、中国から伝来したもので、『日本国語大』や『辞源 第3版』(商務印書館2015)では、『後漢書』「禰衡伝」の「聞衡善擊鼓、乃召為鼓吏、因大会賓客、閱視音節」〔衡の善く鼓を撃つを聞き、^{すなわ}乃ち召して鼓吏と為す。因って大いに賓客を会し、「音節」を閱視す。〕が最古の例である。中国語には、今日でも、この用法が残っている(ほかに、『音節』の意味でも使われる)。

《音節》の意味で使われる「音節」の用例は、1900年ごろから現れる。

(例41) 現今、学生ノ一般ニ学ブ、英語ナドノ如キ外国語ニアリテハ、其ノ音^{サウンド} トイフモノハ、所謂字^{アルフ} 母^{アベ}ノ音ニシテ、通常、コノ音ドモ相集リテ、一ノ合音ヲ成ス。之ヲ^{シラブル}音節トイフ。(岡沢鉦次郎『初等 日本文典 前編上』1900:34)

(例42) 今若し一塊の音を一音節と云ふとすれば、[／]父音はいつも母音

と組みあつて一つの音節を成し、こゝに初めて、ことばの中へ用ゐられるのが常であるから、(岡倉由三郎『発音学講話』1901: 111, 113)

この「音節」は、従来からある「音節」とは別に、syllableの翻訳語として生まれたものようである(syllableは、『寄せ集められたもの、団結したもの』が原義)である(『ジーニアス英和大辞典』)。

明治前期～中期の日本文典・英文典には、このほかに、『音節』を表すのに非常に多くの語が使われている。なかでも、多いのは、「熟音」(大学南校助教訳『格賢勃斯 英文典直訳 卷之上』1870が古い)、「子音」(中金正衡『大倭語学手引草 前篇』1871が古い)、「子韻」(古川正雄『絵入智慧の環 二編下 詞の巻』1871が古い)である(「熟音」は、日英両文典に見られるが、「子音」と「子韻」とは、主に日本文典に見られる)。

それ以外に、次のようなものが現れている(各名称につき、文典名を1つ挙げる。ほかの名称とともに現れる(単独では現れない)ものには、()を付した)。英文典(洋文典)には、「連綴」(亜遊居人『英学教授』1871)、「綴り」(山田正精訳『英学必携 上』1872)、「(重音)」(片山清太郎・堀江章一『独修新法 英語学全書 前編』1886)、「綴字」(菊池武信『英語発音秘訣』1886)、「連字」(ゲールドプロラン、長野一枝『英吉利文典講義』1886)、「綴音」(大石高德『仏蘭西文法詳解』1899)などが使われている。一方、日本文典には、「(複音)」(古川正雄『絵入智慧の環 二編下 詞の巻』1871)、「単音」(春山弟彦『小学科用 日本文典 卷一』1877)、「(単子音)」(大和田建樹『和文典 上卷』1891)、「(合音)」(高津鍬三郎『日本中文典』1891)、「子母音」(大久保初雄『中等教育 国語文典』1892)、「(成熟音)」(小田清雄『応用 日本文典』1893)、「(客音)」(秦政治郎『皇国文典』1893)、「(配合韻)」(豊田伴『新撰日本文典 上卷』1895)、「成音」(中島幹事『中学 日本文典』1897)、「(複雑音)」(渡辺弘人『新撰国文典』1897)、「(綴字)」(上谷宏『中等教科 新体日本文典』1898)などが使われ

ている (例3や例5の記述と異なり, 《子音》に「熟音」を用いた例や, 《音節》に「父音」を用いた例は見られなかった)。英文典では, 表記 (つづり) に関係する名称が多く, 日本文典では, 音 (構造) に関係する名称が多く見られる。これは, 英文典の関心は正書法にあり, 日本文典の関心は五十音にある (阿久津 2017: 32) という, 両者の関心の違いを表しているように思う。

なお, 大槻文彦の『広日本文典 別記』(1897) には, 「音節篇 (Prosody.) の一篇は, 却て文法科に属すべきものなれど, 余が文典には, 姑く欠きたり。」(例言 p.6) とあり, 音節本来の意味に基づいた使い方が見られる (大槻は, シラブルには「熟音」を用いている。例13参照)。

最後に, 江戸時代~明治中期の対訳辞典, 19世紀の英華字典を見ておくと, 「SYLLABLE 切音, 分音」(前出メドハーストの英華字典 1847~1848), 「Syllable 字符ノ綴り」(前出『英和对訳袖珍辞書』1862, 薩摩辞書 1869), 「syllabe 文字綴」(村上英俊『仏語明要』1864), 「Syllable 字, 字音, 言之切音」(前出ロブシャイド『英華字典』1866), 「Syllable 音, 分音, 切音。」(前出『英華字典集成』1899), 「Syllable 字音, 連字」(柴田昌吉・子安峻『附音挿図 英和字彙』1873), 「Syllable 字音, 連字; 単字, 単語」(島田豊・辰巳小次郎増訂『附音挿図 和訳英字彙』1888, イーストレーキ, 棚橋一郎訳『ウェブスター氏新刊大辞書 和訳字彙』1888), 「Syllable 字音, 連字; 単字, 単音, 単語」(島田豊纂訳『双解英和大辞典 再版』1892) など, 英文典同様に, 表記に関係する名称が多く現れている。英華字典で, 「音節」が見られるのは, ヘメリング (赫美玲, K. Hemeling) の『官話 English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language and Handbook for Translators』(1916) の「Syllable 并音, 音節, 綴音」であるが, おそらくこの「音節」は, 日本語の用法を借りたものであろう。その後, 「音節」は中国語にも普及し, 言語学書にも, 「音節」が現れるようになっている (黎錦熙「漢字革命軍

前進の一条大路』『黎錦熙語言学論文集』商務印書館 2004 : 31 (1922 初刊), 前出『中国音韻学研究』1940 など)。

4. おわりに

「母音」, 「子音」, 「音節」がいつごろから使われるようになったのか, 同様の概念を表す別の言い方にはどのようなものがあったのか, それらの語がどこから来たのかについて, これまで見てきたことをまとめておく。

「母音」と「子音」とは, vowel, consonant の翻訳語として, 明治元年ごろから使われ出した和製漢語のようである。「母音」(「母韻」)が日本文典・英文典(洋文典)の両者で使われた語であるのに対し, 「子音」(「子韻」)は, 当初, 主に英文典で使われた語であった。日本文典では, 明治中期～後期に, 「父音」が多く使われたほか, 「発声」なども使われた。これらの用語に見られる「父・母・子」は, 反切用語に由来するものようである。

「音節」は, 本来「ふしまわしやリズム」という意味の語であったが, 1900 年ごろから syllable の翻訳語として使われるようになった。それ以前は, 日本文典では, 「子音」, 「子韻」, 「複音」, 「単音」など, 音(構造)に関する名称が主に使われ, 英文典では, 「連綴」, 「綴字」, 「綴り」など, つづりに関する名称が主に使われた(「熟音」は両者で使われた)。この両者における名称の違いは, 日本文典と英文典における関心の違い(日本文典における五十音, 英文典における正書法)を示すものだと思う。

参考文献

- 阿久津智 (2017) 「明治期の日本文典における音韻」『立教大学日本語研究』24
立教大学日本語研究会
内田智子 (2008) 「母音・子音の概念と五十音図」『名古屋言語研究』2 名古屋言

語研究会

釘貫亨 (2007) 『近世仮名遣い論の研究：五十音図と古代日本語音声の発見』 名古屋大学出版会

沈国威 (2008) 『改訂新版 近代日中語彙交流史：新漢語の生成と受容』 笠間書院

高野繁男 (2004) 『近代漢語の研究：日本語の造語法・訳語法』 明治書院

馬淵和夫 (1984) 『日本韻学史の研究 増訂版 II』 臨川書店 (1963 初版)

馬淵和夫・出雲朝子 (1999) 『国語学史：日本人の言語研究の歴史』 笠間書院

(原稿受付 2017年11月14日)

〈研究ノート〉

共同研究 〈諸文化圏・諸言語圏における女神〉

ヒンドゥー教の祭礼における 女神たちの役割とお姿

— ディーワーリー（燈火）祭,
ホーリー（迎春）など五つの祭礼の考察 —

坂 田 貞 二

Abstract

Among many festivals celebrated by the Hindus in North India, this paper describes only five of them mainly dedicated to the Goddesses in this manner: the days and the ways they are celebrated, the stories on their origin and the songs sung on the day. The five are as follows:

- **Gangaur**, in which the wives pray to Gan and his wife Gaur for the long lives of their husbands.
- **Śītalāṣṭomī**, in which the ladies pray to the goddess of smallpox Śītalā not to attack their family members.
- **Vaṣ Sāvitrī**, in which the wives pray to the Goddess and pious wife Sāvitrī for the healthy life of their husbands.
- **Diwālī**, in which men and women invite the Goddess of wealth *Lakṣmī* to their homes.
- **Holī**, in which men and women invite *Holikā*, the Goddess of spring/new year.

On the occasions of these festivals goddesses living in the heaven come down to the earth and meet human beings. Thus, Hindu Festivals dedicated to the Goddesses provide excellent occasions for human beings to come closer to the heavenly Goddesses.

キーワード：ヒンドゥー教，北インド，女神祭礼，天界と人界，神と人の交流

[0] 本稿の目的, 考察の範囲, 資料

本稿は、共同研究〈諸文化圏・諸言語圏における女神〉の一環として、ヒンドゥー教徒が行う多数の祭礼のうち、北インドで祝われ、女神崇拝を中心とする五つの祭礼について考察するものである。

祭礼が行われる日は、ヒンドゥー暦の白半月（新月から満月に向かう）の幾日、黒半月（満月から新月に向かう）の幾日というように数えられる。ヒンドゥー暦については、本稿 [I] のバーラハ（十二の）マーサー（月）に示してある。祭礼の月と日は、つぎの①に例示した二例でわかる。

ヒンドゥー教徒の祭礼は、祀られる神々の性別で分けるとつぎの三つになる。

- ① ラーマ王子の生誕を祝う**ラーム・ナワミー祭**（ラーマ [生誕の] チェート月 白半月] 九日）、牧童クリシュナの生誕を祝う**ジャナム・アシュトミー祭**（クリシュナ生誕の [バードー月 黒半月] 八日）のように、男神崇拝を中心に置くもの。
- ② シヴァ神とパールヴァティー女神の結婚を祝う**シヴラートリ祭**（シヴァ神の夜）のように、男神と女神の両方を崇めるもの。
- ③ **ガンガウル祭**のように、女神を中心に置いて、妻が夫の長寿を願ってシヴァ神の妃ガウルに祈るもの。

本稿では、北インドのヒンドゥー教徒が女神を中心に置いて祝う、つぎの五つの祭礼について考察する。

- A. 妻が夫の長寿をシヴァ神ガンとその妃ガウルに祈る、**ガンガウル祭**。
- B. 家族が疱瘡ほかの悪疫にかからないよう女性が、疱瘡の女神**シータラー**に祈る**祭り**。
- C. 妻が夫の長寿を女神と貞女サーヴィトリーに祈る、**ヴァト・サー**

ヴィトリー祭。

- D. 燈火で道を示して富の女神ラクシュミーをみなで家に招く，**ディーワリー祭（燈火祭）**。
- E. 旧年の穢れをホーリカー女神に燃やしてもらい，人々が色水・色粉をかけあって春・新年を迎える，**ホーリー祭**。

本稿はこれらの祭礼の個々について，それが**行われる日**，その**あらまし**，その**祝い**かた，その**由来譚**と**祝い歌**を示したうえで，**女神が果たす役割とその姿**を記す。

これらの叙述の基本的な資料としては，筆者が日ごろ親しんでいる祭礼解説書を用いる。それらの多くはヒンディー語で書かれているが，英語による Kane の文献によることもある。それらを補うために，英語で書かれたインド古典の研究書や現代インド社会の調査報告書をも参照する。

2015 年の中間国勢調査によると，インドの人口は 12 億 8 千万人を超えていて，そのうち共通ヒンディー語とその諸方言を話す人は 4 億人くらいである。それらが話されている地域は，北インドのガンガー川とヤムナー川の中流域，およびそれらを囲む丘陵・砂漠である。ヒンディー語はまた，インド憲法によって「インド共和国の公用語」と定められている。

インドは多数の宗教を奉ずる人々が暮らす連邦で，そこにはヒンドゥー教徒のほかに，回教徒，キリスト教徒，スィク教徒，仏教徒，拝火教徒などもいる。ヒンドゥー教徒はそのうち 80 パーセントほどで，10 億人を超えていた。

つぎの書は題名のとおりヒンドゥー教徒の祭礼に限らず，全インドの人々の祭礼を取りあげているので，インドの祭礼の全貌を知るうえで有益である。

Usha Sharma, *Festivals in Indian Society* Vol. I & Vol. II,
New Delhi: Mittal Publication, 2008.

〔I〕 北インドの一年の季節と祭礼：サーヴァン月ではじまる 一年十二か月の歌バーラハ・マーサーの邦訳で知る

アーシャー・バハンとラードー・バハンの姉妹が著した『インドの齋戒と祭礼 および女性による歌』には、115 を超えるヒンドゥー教徒の祭礼が説明されている。その書には、春にラーマ王子の生誕を祝って行われる**ラーム・ナワミー祭**、夏に牧童クリシュナの生誕を祝って催される**ジャンム・アシュトミー祭**など、男性の神々を中心とする祭礼が多く取りあげられている。しかしその書は、春にシヴァ神ガンとその妃ガウルを祀る**ガンガウル祭**や秋に富の女神ラクシュミーを招く**ディーワリー祭**など、女神を中心に置く祭礼をも少なからず取りあげている。

ところで、北インドの一年の季節の移りかわりと月ごとの祭礼のあらましを知るうえで有益な詩のジャンルに、バーラハ・マーサーがある。バーラハ（十二の）マーサー（月）は、14 世紀ころから今日までのヒンディー語地域で親しまれている。その歴史的な展開については、近刊の [Sakata 2018] に述べておいた。

バーラハ・マーサーがどの月からはじまるかを見ると、春のチュート月（グレゴリオ暦を基とする太陽暦で3～4月）にはじまるものが多いが、雨期のサーヴァン月（7～8月）にはじまるもの、初秋のアサウジュ月（9～10月）にはじまるもの、晩秋のカーティク月（10～11月）にはじまるものなどもあり、はじまりの月はさまざまである。

下に掲げるのは、アーシャーとラードー姉妹が著した『インドの齋戒と祭礼 および女性による歌』（pp. 281～283）に収められたのを訳したもので、雨期のサーヴァン月（7～8月）にはじまる。雨期に家を発って旅に出たクリシュナを、恋する女性が帰宅を待ちわびる心細い思いを、親しい女性の「お友だち」に呼びかける形式をとっている。

邦訳では、月の名と祭礼を太字で示す。[] 内は訳者による補足説明。

サーヴァン月にはじまるバーラハ・マーサー

シトシト シトシト雨が降っています お友だち、池の水かさが上ってきました。

はじめは**サーヴァン**月です、[夫の長寿をパールヴァティー女神に祈る]**ティージュ**祭です。

クリシュナさまが家におられたら、あたしもクリシュナさまとブランコをします。

シトシト シトシト雨が降っています お友だち、池の水かさが上ってきました。

二番目の月は**バード**一月です お友だち、夜にはあたりが真っ暗になります。

クリシュナさまが家におられたら、あたしもいっしょに燈火を点します。
(各月の終末で「シトシト」とはじまる行は、第一の月サーヴァンと同じものが繰り返されるので、11番目のジェート月まで省略する。)

三番目は**アソー**ジュ月です お友だち、希望の月になりました。

クリシュナさまが家におられたら、[ラーマの勝利の祭り] **ダシャヘラー**をともに祝います。

四番目は**カー**ティク月です お友だち、[燈火で富の女神を招く] **ディー**ワリーを祝います。

クリシュナさまが家におられたら、**ディー**ワリーをともに祝います。

五番目は**アガハン**月です お友だち、この月には夫の幸せを祈ります。
クリシュナさまが家におられたら、あたしもお化粧してその方の幸せを願います。

六番目は**ポーフ**月です お友だち、寢床を立派に飾ります。
クリシュナさまが家におられたら、あたしも寢床を飾っていっしょに休みます。

七番目は**マーグ**月です お友だち、寒い冬になりました。
クリシュナさまが家におられたら、寢台に厚い布団をかけていっしょに寝ます。

八番目は**ファーグン**月です お友だち、[旧年の穢れを焼き払う] **ホーリー**祭を祝います。

クリシュナさまが家におられたら、色水・色粉をかけあうでしょう。

九番目は**チェート**月です お友だち、[男児が] **テースー**を祝います。
クリシュナさまが家におられたら、布を染めて祝いの支度をします。

十番目は**ヴァイサーク**月です お友だち、みなが花園を造るときです。
クリシュナさまが家におられたら、わたしも腕輪でお洒落をします。

十一番目は**ジェート**月です お友だち、朝から熱風が吹きあれます。
クリシュナさまが家におられたら、団扇で扇いでさしあげます。

十二番目は**アーシャル**月です お友だち、厚い雲が空を覆います。
クリシュナさまが家におられたら、小屋を建てていっしょに空を見ます。

クリシュナさまはきょうも戻られません、旅で道に迷われたのかと心配です。

薔薇の花を背の君と思い、お会いしたいと待ちのぞみます。

シトシト シトシト雨が降っています お友だち、池の水かさが上ってきました。

上に訳した「サーヴァン月にはじまるバーラハ・マーサー」には、夫の長寿を妻が祈るティージュ祭、ラーマが羅刹ラーヴァナに勝利したことを祝うダシャヘラー祭、燈火で富の女神を招くディーワーリー祭、旧年の穢れを焼き払うホーリー祭、男の子たちが歌いながら家々を巡って穀物をもたらうテースー祭の五つだけが取りあげられている。いっぽう本稿で説明・考察する女神を中心とするヒンドゥー教徒の祭礼のうち、ガンガウル祭、シータラー女神祭、ヴァト・サーヴィトリ祭が、この歌では言及されていない。

しかし 115 を超えるヒンドゥー教徒の祭りを取りあげたラードー姉妹によるこの祭礼手引書には、それらも記述されている。一年十二ヶ月の歌は、長さに制約があるなかで詠われたものなので、主要な祭礼みなを含められなかったのであろう。

〔Ⅱ〕 主に女神崇拝をする五つの祭礼

この章では、北インドで主に女神を崇めるヒンドゥー教徒の五つの祭礼をとりあげ、それが行われる日、そのあらまし、その祝いかた、その由来譚と祝い歌を示したうえで、**女神が果たす役割とその姿**を考察する。

フリード夫妻はデリー近くの北インドの村で調査して、『北インドのある村におけるヒンドゥー教徒の祭礼』という報告書を公刊し、その村で行われる祭礼をつぎの四つに分類している [Freed, Stanley A. and Ruth S.

Freed, pp. 26-35]。

- ① 繁栄・豊穰の祈願と災禍からの庇護を願う祭礼（燈火の祭りディーワリー、疱瘡の女神シータラーの祭りなど）。
- ② 神々を敬する祭礼（クリシュナ神が生誕した日を祝うジャナム・アシュトミー祭、ラーマが羅刹に勝利したのを祝うダシャヘラー祭など）。
- ③ 春の到来を祝うホーリー祭。
- ④ 人の触れあいと死者を悼む祭礼（姉妹が兄弟の右手首に力紐を結ぶラーキー祭、亡くなった先祖を供養するシュラーッダなど）。

フリード夫妻の調査報告書には例示されていないが、本稿で取りあげる祭礼に、妻が夫の長寿を祈るガンガウル祭、妻が夫の無事と長寿を願うヴァト・サーヴィトリー祭がある。これらはフリード夫妻による分類では、①の「繁栄・豊穰の祈願と災禍からの庇護を願う祭礼」に該当するであろう。

以下に、北インドのヒンドゥー教徒が女神を中心に置いて祝う祭礼五つを取りあげ、人間の女性がなにを願いつつ女神らを崇め拜するのかに注目する。

A. ガンガウル祭（シヴァ神ガンとその妃ガウルの祭り）＝妻（や娘）が夫（になる人）の健康と長寿を、シヴァ神ガンとその妃ガウル神に祈る祭り

ガンガウル祭は、ヒンドゥー暦で第一の月チェート白半月の三日（太陽暦で3月下旬）に、夫が元気で暮らす妻や結婚適齢期の女子が行う祭礼である。ガンは衆を率いるシヴァ神の別名であり、ガウルは色白なその妃パールヴァティー女神の別名である。

故事によれば、シヴァ神が妃のパールヴァティーに無尽の幸いを与えると約束したことにちなみ、それに感激したパールヴァティー妃が自分と与

えられた幸いを多くの女性に届けたいと願ったことから、この祭礼がはじまったとされる。

この祭礼の日にその場を通りかかれば、祝いの衣装で着飾った女衆が頭のうえに水を入れた壺を載せ、晴れやかに歌を詠っているさまに出逢うであろう。

祭礼の祝いかた

- ① 祭礼の日に夫が健在な妻と結婚適齢期の女子は、砂でガウル女神の像を造る。
- ② 女衆は砂のガウル女神の像に、ガラスの腕輪、髪分け目に塗る朱、櫛などのめでたい物を捧げて化粧させる。
- ③ その日に夫が健在な妻と結婚適齢期の女子は、お昼まで絶食する。
- ④ 女衆はお盆に載せた白檀、米、花などを、ガウル女神像に捧げて捧む。
- ⑤ 女衆はお昼すぎに、それらのお供物のお下がりです食を摂る。
- ⑥ 女衆は祭礼の由来譚を年長の女性から聴く（後掲）。
- ⑦ 女衆はガウル女神像から髪分け目の朱をいただいて自らの髪につけ、夫（になる人）の健康と長寿を願う。
- ⑧ 最後に砂のガウル像に、壺に入れて運んできた水を飲んでいただき、像を川か湖に流す。 [Tripāthī pp. 35, 36]

祭礼の由来譚、祭礼の歌

チェート月の白半月三日にガン神とその妃ガウル女神が、ナーラダ仙を伴ってある村に着きました。村の女衆が一行の歓迎のために、白檀、米、花などをお盆に載せて差し込みました。ガウル女神はそれらを悦んで享け、彼女らに夫の長寿を祝福する鬱金^{うこん}を振りかけました。

そのあとで村の良家の女衆が、金や銀でできた立派なお盆にお供物を載

せて差しだしました。それを見た夫のガン神は心配して、「鬱金はさきほど振りかけたから、もうない。どうしよう？」とガウル女神に問いました。ガウル女神は自分の指を切って、そこから出た血を良家の女衆に振りかけて祝福しました。

それから女神は川に行き、沐浴して身を浄めてからシヴァ神ガンの像を砂で造り、拝みました。そのさまを見て感激したシヴァ神は、こう祝福しました、「われを崇め、なれを拝する女衆の夫は不滅の生を享け、生死の悩みのない涅槃の境に達するであろう。」

同行したナーラダ仙はガウル女神に、「あなたさまは秘かに背の君の幸いを祈られました。あなたさまと同じようにする女衆の背の君はみな、長寿を愉しむでしょう」と言いました。

それからというもの、女衆はこの祭礼を行うようになりました。

[Gaṅgrāre (ガングラーレー) によると、この詳細は『スカンダ・プラーナ』カーシー巻の後編 80 章に記述]

妃のガウル女神さまとシヴァ神のガンさま、どうぞ扉を開けてください。廟の外にお供物を載せたお盆を、ガン神さまとガウル神さまのために置きました。

女衆はガンとガウルを拝し、祝福してくださいとお願いします。

あの人は「お米や野菜をください」と、富や宝を願います。

(続く 9 行略)

[Bhansāri p. 31]

ガンガウル祭での女神ガウルの役割と姿

ガウル女神はここで、自分を敬愛してお供物を捧げる女衆のだれにも優しくし、またそういう自分を支えてくれる夫のガン神を秘かに敬っている。女神が夫を敬うという由来譚は、人間の妻の姿でもある。

なお祭礼の祝い歌は、祀られている廟の扉を開け「ガン神とガウル女神

は、わたしたち女衆が用意したお供物をお食べください」と請う点では祭礼の趣旨に添っているが、6行目の「あの人は富や財宝を願います」という部分は、夫の長寿を祈る趣旨から外れている。民謡ではこのように、祭礼の本旨から外れて、詠い手の本心がほとぼしりであることがあるらしい。この祭礼のときに富と財宝を願う類似の歌がブラジュ地方でも詠われていることが、Ācārya p. 78にも述べられている。

B. シータラー女神祭=家族が痲瘡ほかの悪疫にかかったり、不幸になったりしないよう女性がシータラー女神に祈る祭り

ヴァイサーク月黒半月八日（4月中旬）に、夫が健在な妻や子をもつ母親が、痲瘡の女神シータラーに祈って宥める祭礼である。気温が40度を超える真夏の5月は、かつての北インドでは痲瘡が流行る時期であったので、その時期を控えたこのころに痲瘡の女神シータラーを宥めるのである。シータラーはデーヴィー（女神）であり、またマター（母）でもあるが、皮肉なことにシータラーという語は形容詞 *śītal*（シータル、冷たい）から生じた女性名詞形である。察するにその名は、痲瘡の高熱からシータルな状態にしてくれるようシータラー女神やシータラー母に祈るという、人間の妻や母の気持ちに発しているのだろう。

祭礼の進めかた

- ① この祭礼の日には、竈に火を入れて煮炊きすることを慎む（料理は前日しておく）。
- ② 当日は沐浴して身を浄めた女性が、シータラー女神の姿を想像する（女神は駱駝に乗り、片手に箒、片手に水壺を持つとされる）。
- ③ シータラー女神に白檀、凝乳、米、花、水などを供える。
- ④ シータラー女神に、夫や子どもが痲瘡にかからないよう祈る（なお痲瘡の患者がいる家では、この祭礼をしてはならない）。

- ⑤ 祭礼の由来譚を年長の女性から聴く。

[Rśikumār Śarmā pp. 21, 22. Kane V-1 p. 428]

祭礼の由来譚，祭礼の歌

人々の幸いを願い、法の導きに従うインデュムヌ王には、王女と王子が一人ずつ授かりました。王女がカウンディニャ国の王子と結婚し、嫁ぎ先に行く吉兆のときがシータラー女神の祭礼と重なりました。それで王は祭礼をさきに行い、そのあとで王女を出すことにしましたが、それはもう吉兆のときでなくなっていました。

それが心配な王は、一向とともに僧を行かせました。僧は奥方も連れて行きました。

森で一行が止まったときに、僧は疲れはてて菩提樹のしたで眠ってしまいました。その間に王女は女衆とともに、神さまを拜するために神殿に行きました。

戻ってくると僧は、樹にいた毒蛇に噛まれて死んでいました。僧の妻は悲しんで、殉死しようとしてしました。王女はそのさまを見て、シータラー女神を念想して祈りました。それに応えて老婦人の姿をした女神が現われ、「なれが食を絶ち僧の妻の平安を願うなら、僧は生きかえるであろう」と言いました。王女がそうすると、僧は生きかえりました。

ところが王女が夫の王子のところに戻ると、王子も毒蛇に噛まれて死んでいました。そこで王女は嘆いて、「死んで夫のもとに行きます」と言いました。その声を聞いて老婦人が現われ、「シータラー女神を敬してお供物をあげるなら、あなたの苦痛はなくなりましょう」と告げました。王女が女神にお供物をあげ死んだ夫を起こすと、夫は生きかえりました。

[Kane V-1 p. 428 によると、A. K. Sen の『ベンガル語と文学の歴史』に『シータラー・マンガラ』の写本について詳述されている。]

女神が怒りだしたらば、大好きな人参を上げましょう。

どうぞお受けとりください、女神さま。

女神が怒りだしたらば、砂糖キビを上げましょう。

怒りがすっかり治まったら、女神さまはゆっくり寝てください。

金と銀の耳飾りを女神さま、どうぞお受けとりくださいな。

[Madan Lāl Śarmā pp. 78, 79]

シータラー女神祭での女神シータラーの役割と姿

疱瘡を広めるシータラーは、人々にとって恐ろしい存在であり、また機嫌がよいときには疱瘡や死から人を護る女神でもある。女神のご機嫌をとるのは、妻・母の仕事である。そのさまは祈りの歌で、女神に人参や砂糖キビを上げて喜んでもらおうとしていることに、見てとれる。

C、ヴァト・サーヴィトリー祭＝妻が夫の無事と長命を願い、サーヴィトリー女神とその夫の創造神ブラフマーに、また貞女サーヴィトリーとその夫のサティヤワーン王子にも祈る祭り

ヴァト・サーヴィトリー祭は、ヒンドゥー暦で第三月ジェートの新月の日（5月下旬）に、夫が存命する妻が行うのが原則の祭礼で、妻は夫の長寿を祈る。夫に先だたれた寡婦や婚前の娘もこの祭礼を行い、息子たちの長寿や将来の夫の長寿を祈ることができる。

ヴァト (vaṭ, サンスクリット語では vaṭa ヴァタ) は聖なる菩提樹を指す。幹の直径が1~2メートル、高さは20メートルになる。釈迦族の王子はボードガヤーのこの樹のもとで瞑想して悟りを開き、覚者（ブッダ＝仏陀）となった。サーヴィトリーは王妃が敬う女神であり、また王と王妃に授かった娘の名でもある。

祭礼の進めかた

- ① 祭礼を執りおこなう女性は、早朝に沐浴して身を浄める。
- ② 竹の籠に砂を入れて、菩提樹の近くに置く。砂で創造神ブラフマーの像を造り、その隣りに配偶神サーヴィトリの像を造って置く。
- ③ 別の竹籠に入れた砂で、サティヤワーン王子とサーヴィトリ王女の像を造る。
- ④ 水の入った壺を持って、菩提樹のところに行く。
- ⑤ 女性は夫と息子たちの長寿・無病息災・来世の幸運を願って、「わたしはサーヴィトリさまを拝します」と唱えながら、菩提樹の根の周りに水を撒く。

幹には鬱金の朱をつけ、米や黒糖をお供物として上げる。そしてサーヴィトリ女神とブラフマー神、サーヴィトリ王女とサティヤワーン王子を拝む。

- ⑥ 一家の儀礼をしてくれたバラモン僧に、ご馳走する。
- ⑦ そのあとで、祭礼の由来譚を年長の女性から聴く。

[Tripāṭhī pp. 67, 68. Gaṅgrāṇe pp. 50, 51]

祭礼の由来譚、祭礼の歌

アシュヴァパティ王には子がいませんでしたが、妃とともにブラフマー神の妃サーヴィトリ女神に願って王女を授かりました。サーヴィトリ女神のおかげで得られた子なので、王女の名もサーヴィトリとしました。

王女が年頃になったのでアシュヴァパティ王は、ドゥユムトセーン王の一人息子サティヤワーン王子と自分の娘の縁談を結びました。ところが全知のナーラダ仙に訊ねると、「王子はあらゆる徳を備えているが、一年後には死ぬ運命にあるので、この縁談はないことにしたほうがよい」と言われます。しかし王女サーヴィトリは、「その方と添いとげます」と言って譲りません。

結婚して王子の死期が近づいたある日、二人は森に行きました。王子はそのとき頭に激痛を覚え、妃の膝にもたれて横になりました。そこに死の使者の閻魔がきて、王子の生命を抜いて立ちさりました。夫を救いたい一心の王女は、閻魔のあとについて行きます。

そのさまにほだされた閻魔は、王女に「二つの願いをなんでも叶える」と約束しました。そこでサーヴィトリー王女は、第一に夫の盲目の両親の目が見えるようにすること、第二に夫の父の王が失った国を回復させることを願い、叶えられました。それでも王女は閻魔について行きます。そこで閻魔は「もう一つだけ、どういう願いでも叶えよう」と約束しました。王女は「夫とのあいだに百人の息子をお授けください」と願いました。王子が倒れた菩提樹のところに王女が戻ると、王子が息を吹きかえしていました。

[Kane V-1 pp.91-94 によると、この由来譚は『マハーバーラタの第 III 卷「森林の巻」にあるとのこと。念のために上村勝彦によるその邦訳を見ると第四卷 pp.352-379 に詳しく述べられている。]

菩提樹を崇めるお祭りの日がきました。

綿の布を黄色く染めます。

菩提樹の周りを巡ります。

一周目には髪の毛の分け目に朱を付けます。

二周目には腕輪を着けます。

三周目には額に朱を、四周目には足の親指に銀の輪を。

五周目には菩提樹にお水や牛乳を注ぎます。

六周を終えたら婚家に戻り、夫の幸せを祈ります。

[Rohatgi p. 467]

ヴァト・サーヴィトリー祭での女神サーヴィトリーの役割と姿

この祭礼で注目すべきは、女神と貞女がサーヴィトリーという同じ名前を持っていることである。両親がサーヴィトリー女神に祈って授かった娘に、女神と同じ名をつけるのは自然かもしれない。

その娘が死神の閻魔から約束を引きだして、命を失った夫サティヤワーン王子を生きかえらせたという話は、女性を力づけるものとなろう。

「菩提樹を崇めるお祭りの日がきました」ではじまる歌は、その祭礼を行う女性がどういう風に行動するかを、「一周目には」以下で具体的に示している。歌や韻文はしばしば、無文字社会での記憶を正確に伝える手段となる。

D. ディーワリー祭＝燈火で道を示して富の女神ラクシュミーを自分の家に招く祭り

秋のカーディク月黒半月の新月の夜（10月上旬）に、人々は燈火を門から家まで並べ、富の女神ラクシュミーを招く。家の輪郭も燈火で示す。新月の夜にこうして、家への道と家が鮮明に浮かびあがる。ラクシュミー女神が道を誤ることなくわが家にお出でくださるだろうという気持ちが、そこに見られる。

祭礼の進めかた

- ① 家の壁をきれいにし、雨期にたまったゴミを片づけて、富の女神を迎える支度をする。
- ② 富の女神ラクシュミーと象頭人身のガネーシュ神の像を置き、水、米、果物、砂糖などのお供物をあげる。
- ③ はじめに男性が、そのあとで女性が神々を拝み、「富をもたらし、貧乏神を追いはらってください」と祈る。
- ④ それから燈火を家の四隅に置いて、ラクシュミー女神を招く。

⑤ この祭礼の由来譚を、年長の女性から聞く。

[Gaṅgrāre pp. 112, 113]

祭礼の由来譚，祭礼の歌

あるとき悪魔のバリが、ラクシュミーを含めた神々と女神らを牢獄に閉じこめました。ラクシュミー女神の夫で宇宙を守護するヴィシュヌ神が、小人の姿でバリを縛りつけ、牢獄から神々と女神らを解放しました。

そのあとラクシュミー女神は、解放された神々と女神らとともに乳海で休息すべくそこに行かれました。しかし富を願う人々は、女神に余所に行かれると困るので、女神の好きなお供物を捧げ、燈火で導いて自分の家に来ていただくのです。

[Kane V-1 pp. 194-201 によると、『ヘーマードリ・プラーナ』
「祭礼」I巻に詳述]

片目の羊みたいな貧乏神は、さっさと消えなさい この家から。
おまえなんかに用はない、[富の女神]ラクシュミーがいればよい。
さっさと出ていきなさい、棒で打たれて痛い目に遭わないうちに。
ラクシュミー女神がおわすところに、おまえなんかいられない。
こんどこの家にきたならば、棒で打ってやっつけるわよ。
おまえなんか置いとけない、箒で叩きだしてやるからね。

[Rṣikumār Śarmā p. 126]

燈火祭での女神ラクシュミーの役割と姿

雨期に家も周りも汚れたのをきれにし、新月の闇夜に燈火で道とわが家をくっきりと浮かびあがらせて、富の女神を家に迎える。雨期から秋への移行の祭礼としてこれがさかんに祝われるのは、納得できる。

ディーワーリーの由来譚で「女神に余所に行かれると困る」とし、歌で

は「貧乏神はこの家を去り，[富の女神] ラクシュミーにいて欲しい」と言っている。これはまさに、この祭りを祝う人たちの気持ちである。

E. ホーリー祭＝旧年の穢れをホーリカー女神に燃やしてもらい、人々が色水・色粉をかけあって春の到来を祝う祭り

ホーリー祭は、ヒンドゥー暦の最終月ファージェンの満月に行われる（3月中旬）。その支度はしかし、八日まえ（ファージェン月の白半月八日）にはじまる。ホーリー祭の翌日は、ヒンドゥー教徒にとって新年になる。ホーリカー女神が旧年の汚れを燃やすのがホーリー祭、翌日が新年となれば、ホーリー祭の日は日本の大晦日にあたる。

祭礼の進めかた

- ① 本祭の八日まえに、任命された人が町や村の辻に木の枝を埋める。
- ② 本祭までのあいだにみなが、草木やガラクタなど穢れたものを辻に置く。
- ③ 辻に木の枝を埋めた人は、本祭の日に沐浴・斎戒してホーリー祭をはじめの誓いを立てる。
- ④ 人々は木で小さな刀を作って男の子たちに渡し、男の子たちが思いっきり遊んであたりを賑やかにするよう仕向ける。
- ⑤ 人々はホーリカー女神の等身大の像を、木の枝を埋めた場所に立てる。
- ⑥ ホーリカー女神像に浄水を振りかけてから、女神を拝む。
- ⑦ 穢れた人（例えば不可触民や産後まもない女）の家の竈から、火をもってきて枯れ木に点ける。
- ⑧ 火が女神の像を包むようになったら女神を拝み、その周りをみなが並んで三周する。
- ⑨ 水を撒いて火を治め、残り火を各自の家に持ちかえて竈に入れる。

- ⑩ そのあとの夜とつぎの日の午前中に、人々は色水・色粉をかけあう。
- ⑪ つぎの日の午後は新年なので、みなは沐浴して身を浄め、新たな衣装に身を包んで、家祭僧・上司やふだんお世話になっている人に挨拶に行く。
- [Tripāṭhi pp. 304-308]

祭礼の由来譚，祭礼の歌

ホーリー祭の由来譚としていくつもの話が伝えられているが、以下にはそれらのうちで最も広く伝えられているものを、一話だけ記す。

羅刹の王ヒランニャカシプには、プラフラードという名の男子がいましたが、その子は正義の維持神ヴィシュヌに信を寄せていました。父のヒランニャカシプにヴィシュヌ神への信仰をやめるように言われても、プラフラードは父の言に従いません。

そこでヒランニャカシプは息子を殺すことにし、自分の妹ホーリカーに「プラフラードを抱いて火のなかに座れ」と命じました。ホーリカーは火中でも無傷でいられ、プラフラードが火で死ぬはずだったのです。しかしかれが火中でヴィシュヌ神を念想したので、かれは無傷でいられ、ホーリカーが焼け死にました。

[Kane V-1 pp. 237-241 によると、『ヘーマードリ・プラーナ』の「祭礼」II 卷に詳述。]

ホーリー祭です、賑やかに詠って色水・色粉をかけあいましょう。
肌白の娘さんが家を出ました、水鉄砲に色水をいっぱい入れて。
色水をかけました相手の男の人に、色粉もいっぱいかけましょう。
ヴェールを外して顔を見せなよ娘さん、怖がらないでこっちへおいで。

[Āśā Bahan & Lāḍo Bahan, p. 288 の 4]

ホーリー祭での女神ホーリカーの役割と姿

ホーリカーはこの祭りで、火中で焼け死ぬ。薪や旧年の襪褌などがともに焼かれることを勘案すると、ホーリカーは旧年の穢れと解されていることが明らかである。

この祭礼には、過ぎさる歳の穢れを焼きはらい、若芽・若葉が膨らんでくる春の到来を祝う意義があるようだ。

春は人々の心身を明るくする。また若い男女にとっては祝い歌にあるように、色水・色粉に託して心のうちを伝える機会でもある。類似の歌に、牛飼いの頭の子クリシュナと恋人ラーダーが色水・色粉をかけあうというものもある [Āśā Bahan & Lāḍo Bahan, p. 288 の 3, 5]。

[Ⅲ] 結び：五つの祭礼で祈願の対象と祈願する人

本稿では北インドのヒンドゥー教徒が祝う祭礼から、主に女神を崇める次の五つについて、それが行われる日、その祝いかた、由来譚と祝い歌を示したうえで、女神が果たす役割と女神の姿を考察してきた。

- A. 妻がシヴァ神の妃ガウルに夫の長寿を祈る**ガンガウル祭**。
- B. 家族が瘡瘡ほかの悪疫にかからないよう女性が**シータラー女神**に祈る**祭り**。
- C. 妻が夫の長寿を女神と貞女のサーヴィトリーに祈る**ヴァト・サーヴィトリー祭**。
- D. 燈火で道を示して富の女神ラクシュミーをみなで招く**ディーワラー祭**（燈火祭）。
- E. 旧年の穢れをホーリカー女神に燃やしてもらい、人々が色水・色粉をかけあって春の到来を祝う**ホーリー祭**。

以下ではおのおのの祭礼で、祈願するのがだれかを中心に見てゆく。

A. のガンガウル祭, B. のシータラー女神祭, C. のヴァト・サーヴィトリー祭の三つは, 主に女神を崇めるものである。崇め祈願するのは, 妻や母という女性である。

D. のディーワリー祭（燈火祭）と E. のホーリー祭の二つの祭礼は, 主に女神を崇めるものであるが, 崇める人は老若男女のだれでもよい。つまりこれらは, すべての人が祝う祭りである。

C. のヴァト・サーヴィトリー祭では, 崇拜の対象に樹木という自然をも含むこと, サーヴィトリーが女神の名であるとともにその女神に祈願して授かった王女の名でもあることに, 注目しておきたい。自然を人々が身近に感じ, 女神と貞女を重ねたいという女性の願いがここに見てとれる。これも含んだ五つの祭礼での女神は, 人に姿を見せて人に語りかけている。つまり神官やバラモンなど仲介する専門家なしに, 人々は神々と語りあえるのである。このことはここに取りあげなかったものも含めて, ヒンドゥー教徒の祭礼の多くについても言える。

神々はいつもは天界におわすのだが, 祭礼のときには人々の勧請に応じて地上の人間界にお運びくださる。祭礼というのはこうして, 神々と人々が触れあうことのできる特別な機会なのだ。

本稿ではそれぞれの祭礼のときに詠われる歌を, 一つずつ訳して掲げた。民謡集や祭礼手引書などに載せられたそれらの歌は, 現今のヒンドゥー教徒が祭礼をどのように祝っているか見せてくれる。祭礼の由来譚の多くが, 4 世紀から 14 世紀ころまでのプラーナ（古譚）文献に依拠していることと対照的である。

本稿ではこうして, 由来譚によって古い時代の思潮を知り, 歌によって今日の民の心情を知ることができた。このことに, 本稿の一つの意義があらう。

なおヒンドゥー教徒の祭礼には, それを祝う人の階層・身分が限られてい

そのことについては、フリード夫妻がデリー近郊の村で調査した報告があるので、関心のある方はそれを参照されたい。

文献（≒ 以降は邦語での概要で、編著者の姓を太字で示した）

- Ācārya, Sunīti. *Braj Sāhitya evaṁ Lokgīt Paramprā*, Kānpur: Candralok Prakāśan, 2010. ≒スニーティ・**アーチャールヤ**『ブラジュ文学と民謡の伝統』。
- Bahan, Āśā & Lāḍo Bahan. *Bhāratīya Vrat-tyauhār aur Mahilā Saṅgīt* Haridvār: Raṅdhīr Prakāśan, N.D. ≒アシャー・**バハン**, ラードー・**バハン**『インドの齋戒と祭礼 および女性による歌』。
- Bhansārī, Anuradhā. *Bārah Mahinoṁ ke Sarasvatī Vrat Tyauhār aur Kahāniyām*, Ajmer: Sarasvatī Prakāśan, N.D. ≒アヌラダー・**バンサーリー**≒『十二月のサラスワティー齋戒と祭礼と関連の話』。
- Freed, Stanley A. and Ruth S. Freed. *Hindu Festivals in a North Indian Village*, Seattle: University of Washington Press, 1998. ≒スタンレー A. **フリード**, ルス A. **フリード**『北インドのある村におけるヒンドゥー教徒の祭礼』。
- Gaṅgrāre, Prakāścandra. *Hinduṁ ke Vrat, Parv aur Tīj-tyauhār*, Dillī: Pustak Mahal, 2006. ≒プラカーシュチャンドラ・**ガングラーレー**『ヒンドゥー教徒の齋戒と祭礼』。
- 上村勝彦『原典訳 マハーバーラタ 4』ちくま学芸文庫, 2002。
- Kane, P. V. *History of Dharmaśāstra* V-1 (Vratas, Utsavas and Kāla etc.) 3rd ed. Pune: Bhandarkar Oriental Institute, 1994. ≒P. V. **カネー**『ダルマシャストラの歴史』V巻の1（齋戒、祭礼と時期など）。
- Rohatgī, Sarojnī. *Avadhī kā Lok Sāhitya*, Dillī: National Publishing House, 1971. ≒ローハトギー『アヴェディー方言の民間文学』。
- Sakata, Teiji. “Hindi Bārahmāsā Tradition: From Narpati Nālha to Present day Folk Songs and Popular Publications”, Williams, Tyler & Anshu Malhotra, John Stratton Hawley (eds.) *Text and Tradition in Early Modern North India*, Delhi: OUP, 2018. ≒坂田貞二「ヒンディー語のバーラハ・マサーの伝統：ナルパティ・ナルハから今日の民謡と俗受ける出版物まで」T. **ウィリアムズ**ほか編『北インド早期の現代文学におけるテキストと伝統』。

- Śarmā, Madan Lāl. *Rājasthāni Lok Gītoṃ kā Sānskritik Adhyayan*, Jodhpur: Rājasthāni Sāhitya Sansthān, 1987. ≒マダン・ラール・シャルマー『ラージャスターン民謡の文化的な研究』。
- Śarmā, Rśikumār, *Bāraha Mahinoṃ ke Vrat aur Tyauhār*, Dillī: Nyū Standard Pablikeśan, 1999. ≒リシクマール・シャルマー『十二月の齋戒と祭礼』。
- Sharma, Usha. *Festivals in Indian Society* Vol. I & Vol. II, New Delhi: Mittal Publication, 2008. ≒ウシャー・シャルマー『インド社会における祭礼』 I, II 卷。
- Tripāṭhi, Rāmpratāp. *Hinduom ke Vrat, Parv aur Tyauhār*, New ed., Illāhābād: Lokbhāratī Prakāśan, 1978. ≒ラームプラタープ・トゥリパーティ『ヒンドゥー教徒の齋戒と祭礼』。

(原稿受付 2017年11月13日)

〈抄 録〉

「英語で授業をする」ことに 関する研究

— 高校生の意識調査から —

保 坂 芳 男

Abstract

The course of study (2009) has required English teachers to use only English in class at high schools, in principle. As Watari (2011) mentioned, there is little empirical research on teaching English through English (TETE).

I have, therefore, decided to do research on TETE with a focus on high school students. Firstly, I collected the data at a high school in a prefecture of Tohoku area from 2nd year and 3rd year students. The former were the first students to be influenced by the new course of study.

The questionnaire was developed by Mr. Uenishi (2011). I revised some to fit my research design. Firstly, exploratory factor analyses were conducted after collecting the data. Then three factors were yielded from 2 groups. They are as follows: (1) Explanation (all English), (2) Introduction and (3) Environment from the 2nd year students, and (1) Environment, (2) Explanation (all English), (3) Review from the 3rd students. Secondly, a t-test was conducted to clarify the difference between male and female students. Thirdly, ANOVA were conducted using majors, interest, or proficiency in English as independent factors.

The results have shown that there is no significant difference between male and female students. Generally, students with higher interest or higher proficiency in English prefer teachers using TETE.

1. はじめに

2009年、高校用の学習指導要領（外国語）が告示された。その新学習指導要領は、2013年から学年進行で実施されており、2016年3月に第一期生が卒業した。

2008年に告示された当時、「授業は英語で行うことを基本とする」が話題になり、英語教育関連の雑誌や、シンポジウムで白熱した議論が交わされた。

筆者は大学で教員養成に携わっており、毎年、都内の中学、高校の教育実習を訪問する機会が多い。

告示当初は、喧々諤々とした議論をよく聞いていたが、最近では、以前と余り変わっていない教育現場を見ることが多いように思う。

学校教育の主人公は生徒である。そうだとすれば、「英語で授業をする」ことに関して、当事者の生徒はどう考えているのか、第一期生が卒業した現在、調査する必要があると思い、本研究を始めることにした。また、巨理（2011）が述べているように、授業を英語で行うことが効果的であるということは実証されていないことも本研究を行った主な理由の1つである。

2. 先行研究について

2.1 学習指導要領について

学習指導要領が高校の英語教師に「授業は英語で行うことを基本とする」ことを求めた理由は以下のとおりである。

英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーション

の場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。
その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

告示当時反響が大きかったので、『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』（文部科学省、2010）には以下のような説明がある。

訳読や和文英訳、文法指導が中心とならないよう留意し、生徒が英語に触れるとともに、英語でコミュニケーションを行う機会を充実することが必要である。（略）これらのことを踏まえ、言語活動を行うことが授業の中心となっていれば、文法の説明などは日本語を交えて行うことも考えられる。（pp.50-51）

つまり英語はコミュニケーションの道具であり、日本の言語環境の中では英語を普段使う機会が少ないので、せめて学校現場ではできるだけ英語を使って欲しいということである。ただし、文法の説明等は日本語を交えて行っても良いが、日本語だけの授業は駄目であるということである。

2.2 上西（2011）より

上西は、以前高校の教員であった利点を生かし、いち早くこの問題に取り組んだ。上西は学習指導要領の告示後に、英語教師 43 名、高校生 338 名に質問紙調査を行った。その結果、以下の 2 点が明らかにされた。

- ① 高校 1 年生と 2 年生を比較した場合、1 年生は全体的に英語での授業を希望しない傾向にあった。一方、2 年生は、受験との関連が高いと思われる項目（文法説明など）は英語での授業を希望しない傾向にあった。

- ② 「英語授業を英語で行う」ことに対して教師と生徒の意識には共通点が見られ、全体的に否定的な考えを持っている。しかしながら、教師は、授業内容に関係ない場面では英語使用を肯定的にとらえている。

調査した高校の偏差値、回答した高校生の英語力や英語に対する興味との関係が気になるところではあるが、大変興味深い結果となっている。本研究では上西（2011）が作成した質問紙を参考にした。

2.3 Shin (2012) より

韓国における大変興味深い調査研究である。Shin は、韓国の高校の英語教員で、勤務当初は英語での授業を意欲的に行っていたが、しばらくして母語（韓国語）の授業に切り替えた若い英語教員 16 人に調査を行った。対象は、勤務 3 年未満、英語力が NS 並みに高い高校の教員である。

対象者の英語教員のうち 9 人は、1 か月以内に母語による授業に切り替えている。その理由は、生徒が授業を理解できない（15 人）、進路が遅れる（14 人）、教室の管理が難しい（11 人）であった。英語教師の英語力不足を原因にあげた教員は誰もいなかった。

2.4 SLA 研究より

SLA 研究の分野での Teaching English through English（以後 TETE）に関しては賛否両論である。

上西（2011）が丁寧によくまとめている。上西が『「語学の授業を目標言語で行う」』ことに関して、多くの学者・教育者がその意義や問題点等について研究を行っている」（p.116）と言っているように、賛否両論、百花繚乱である。

Atkinson（1993）は、英語力の低い学習者には L1 使用が効果的であると、内容理解の確認、発話の促し、簡潔な指示、理解度確認、語の

定義の確認、時間短縮のための翻訳を例として挙げている（pp. 25-36）。

一方で、Harbord は、Atkinson の考えには賛成できず、指示を L2 で行うことや L2 で教師と生徒が交流することが理想的な L2 習得方法であると反論している（Harmer, 2001, p. 132）。

Brown（2007）は、研究や経験からして「English only」は、度が過ぎているのではないかと、他方で、EFL 環境では教師が母語を使いすぎることも問題だと指摘している（p. 247）。

2.5 中井（2010）より

中井は（2010）は、文部科学省が 2008 年に行った中学校・高等学校英語教育実施状況調査結果概要を紹介している。

中学校においては「大半を英語を用いて行っている」「半分以上は英語を用いて行っている」と答えた割合は、いずれの学年においても約 3 分の 1 となっている（略）。

高等学校になると、オーラルコミュニケーション（OC）Ⅰの授業では、授業中に半分以上英語を用いると答えた割合が、国際関係（語学含む）の学科・コースで 79.3%、普通科で 54.6%となっている。これに対して、英語Ⅰでは、授業での英語使用が半分以下と答えた割合が、国際関係で 66.6%、普通科で 88.5%となっており、（略）リーディング、ライティング授業では普通科では英語の使用が半分以下と答えた割合が約 95.5%に及ぶ（略）。

4 技能を統合的に扱う中学校での「英語で授業を行う」実態からすれば、高校でいきなりすべての英語科目で「英語で行う」には無理があるように思われる。ただ、OCⅠの授業実態からみれば科目によっては十分可能であるとも思われる。（pp. 39-40）

中井のいうように、英語だけか母語使用も可という二者選択ではなくて、どの場面では、どういう生徒には、英語だけで授業を行うことが有効で、一方、母語使用も有効であるかを細かく調査する必要があるだろう。

2.6 亙理 (2011) より

亙理 (2011) は SLA 分野の多くの研究を分析する中で、新学習指導要領が目指す「英語で授業する」ことはむしろ弊害が多いと、以下の3つの警告を鳴らしている。

- ① 英語で授業をしたからと言って学習者の英語使用が増えるわけではなく、L1の使用がむしろコミュニケーション活動を円滑にし、英語使用を促す可能性がある。
- ② コード切り替えは二言語話者同士にとってごく自然な振る舞いで、実際には授業の中でも性質の異なるいくつかの用途でL1が用いられていることにもかわらず、教師の多くが不要な「罪の意識」を感じており、新指導要領の要請はその意識を強める可能性がある。
- ③ 英語（だけ）での授業を要求することが、学習者の学習方略を狭め、教師の教育内容・教材構成を阻害する危険性がある。(p. 39)

3. 本研究の目的

本研究では、上記の先行研究を踏まえて、普通程度の高校生がどのような場面で英語教師に TETE を望んでいるかを明らかにしたい。主たる本研究の目的は以下の2点である。

- (1) 高校生はどのような場面で英語で授業をすることを望んでいるか
- (2) 生徒の性別、進路、学年、英語に対する好感度、英語の学力によっ

て意識に差はあるか

4. 調査の実施

4.1 被調査者

東北にある中程度の普通科高校に、2014年4月に質問紙調査を依頼した。当時の高校2年生は、新学習指導要領実施の第1回生である。2年生95人（男子33人、女子62人）、3年生53人（男子11人、女子42人）の回答を得ることができた。

4.2 質問紙の開発

質問紙は、上西（2011）を元に、生徒のアンケート等を参考に修正を加えた（資料1）。また、生徒の属性として、卒業後の進路、英語に対する興味、英語力（自己申告）を追加した。後者の興味と英語力に関しては七件法を用いた。

5. 分析とその結果

5.1 因子分析の結果

5.1.1 2年生の場合

2年生95人のデータを用いて因子分析を行った結果、6回の反復で収束した（最尤法、Kaiserの正規化を伴うプロマックス法）。そして、3つの因子を抽出することができた（資料2）。因子1に関しては、Q26「日本語と英語の構造上の違いについて説明する時」、Q21「複雑な英文の構造を説明する時」、Q17「今まで習った文法を復習する時」、Q2「新出の文法を説明する時」が英文法に関する項目であるが、その他の項目も考慮して、「説明」因子と命名した。ただ、英文法を英語で行うことは学習指導

要領でさえも求めておらず、高校現場の普段の実態から判断して、「英語の授業であるので文法指導も含めてすべて英語でやって欲しい」という生徒の意識の表れであると解釈を行った。そこで、因子1は「説明」(All English)と命名した。

因子2に関しては、Q20「授業で習う内容の紹介をする時」、Q12「ゲームなどの活動の説明をする時」は、いわゆる H. E. Palmer の言う oral introduction に近いものであると解釈することができる。そこで、因子2を「紹介」と命名した。因子3に関しては、Q7「英語学習等に関して生徒を励ます時」、Q10「生徒をリラックスさせようとする時」、Q11「人間関係を作り出す時」が上位に収束しているので、「雰囲気」と命名した。

5.1.2 3年生の場合

3年生53人のデータを用いて因子分析を行った結果、6回の反復で収束した(最尤法, Kaiser の正規化を伴うプロマックス法)。そして、3つの因子を抽出することができた(資料3)。因子1に関しては、Q5「授業を受けるルールを説明する時」とQ15「教師が生徒を注意したりする時」が授業の規律に関する項目である一方で、Q7「英語学習等に関して生徒を励ます時」、Q10「生徒をリラックスさせようとする時」が生徒を励ましたりリラックスさせてたりすることに関する項目である。両方を考慮して、「雰囲気」(規律)因子と命名した。因子2に関しては、Q26「日本語と英語の構造の違いについて説明する時」、Q22「抽象的な内容を説明する時」は、2年生のデータを分析した結果である因子1に近いものと解釈することができる。そこで、因子2を「説明」(All English)と命名した。

因子3に関しては、Q13「前回の授業の復習をする時」、Q14「本日の授業のまとめをする時」が上位に収束しているので、「復習」と命名した。

5.1.3 因子分析の結果の考察

2年生、3年生ともほぼ同じような因子構造が見られたが、3年生の方がそれぞれの因子に収束した質問項目が多く、授業の多くの部分において英語で授業を行うことを望む結果となった。

また、2年生が、最初に「すべて英語で」という意識が高い一方で、3年生は、「雰囲気」重視であった。2年生が、新学習指導要領対象1期生であることが原因であるかもしれない。

5.2 性差による比較

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を、従属変数とし、性を独立変数とするt検定を行った。

2, 3年生とも性差による有意な差は見られなかった ($p < .05$)。

5.3 進路による比較

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を、従属変数とし、進路先を独立変数とする1要因（5水準）分散分析を行った。

5.3.1 2年生の場合

「説明（All English）」において、専攻に主効果が認められた ($F(4,90) = 3.365, p < .05$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、進路未定の生徒に比べて、理系志望の生徒は、説明（All English）を英語で望んでいなかった ($p < .05$)。

「雰囲気」において、進路に主効果が認められた ($F(4,90) = 4.285, p < .01$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、海外大学進学志望の生徒は、文系志望や理系志望の生徒と比べて、「雰囲気」作りのために、英語で授業をすることを好む結果となった ($p < .05$)。

5.3.2 3年生の場合

「雰囲気」において、専攻に主効果が認められた ($F(3,48) = 5.128$, $p < .01$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、進路未定の生徒に比べて、文系志望の生徒は、授業の雰囲気作りのために英語での授業を望んでいた ($p < .05$)。

5.4 英語に対する好感度

2, 3年生とも7件法 (①全然そうでない～⑦本当にそうである) で、英語の対する好感度を生徒に尋ねた。2年生の場合、下位群 30 人 (回答①～③), 中位群 24 人 (回答④), 上位群 41 人 (回答⑤～⑦) であった。

3年生の場合、下位群 18 人 (回答①～③), 中位群 13 人 (回答④, ⑤), 上位群 22 人 (回答⑥, ⑦) であった。

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を、従属変数とし、英語に対する好感度を独立変数とする 1 要因 (3 水準) 分散分析を行った。

5.4.1 2年生の場合

「説明 (All English)」において、主効果が認められた ($F(2,92) = 3.6$, $p < .05$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語好き群は、英語嫌い群と比べて、説明をすべて英語でやって欲しいという結果となった ($p < .05$)。「紹介」や「雰囲気」においては、主効果は認められなかった。

5.4.2 3年生の場合

「雰囲気」において、主効果が認められた ($F(2,50) = 4.36$, $p < .05$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語好き群は、英語嫌い群と比べて、英語の授業の雰囲気作りのために、英語でやって欲しいという結果となった ($p < .05$)。

「説明 (All English)」において、主効果が認められた ($F(2,50) = 7.984, p < .001$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語普通群は、英語嫌い群と比べて、説明をすべて英語でやって欲しいという結果となった ($p < .05$)。

「復習・まとめ」において、主効果が認められた ($F(2,50) = 4.569, p < .05$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語好き群は、英語嫌い群と比べて、「復習・まとめ」をすべて英語でやって欲しいという結果となった ($p < .05$)。

5.5 英語の学力

2, 3年生とも7件法（①全然そうでない～⑦本当にそうである）で、英語の学力を生徒自身に尋ねた。2年生の場合、下位群25人（回答①, ②）、中位群39人（回答③, ④）、上位群31人（回答⑤～⑦）であった。

3年生の場合、下位群20人（回答①～③）、中位群14人（回答④）、上位群19人（回答⑤～⑦）であった。

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を、従属変数とし、英語の学力を独立変数とする1要因（3水準）分散分析を行った。

5.5.1 2年生の場合

「説明 (All English)」において、主効果は認められなかった。

「紹介」において、主効果が認められた ($F(2,92) = 3.575, p < .05$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語力上位群は、下位群と比べて、これから学ぶ内容の紹介等は、すべて英語でやって欲しいという結果となった ($p < .05$)。

「雰囲気」においては、主効果は認められなかった。

5.5.2 3年生の場合

「雰囲気」において、主効果が認められた ($F(2,50) = 4.718, p < .05$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語力上位群は、下位群と比べて、英語の授業の雰囲気作りのために、英語でやって欲しいという結果となった ($p < .05$)。

「説明 (All English)」において、主効果が認められた ($F(2,50) = 4.462, p < .05$)。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語上位群は、下位群と比べて、説明をすべて英語でやって欲しいという結果となった ($p < .05$)。

「復習 (まとめ)」においては、主効果は認められなかった。

6. 結果のまとめとその分析

上記の結果をまとめると以下ようになる。

- ① 因子分析の結果では、2年生、3年生ともほぼ同じような因子構造が見られた。3年生の方がそれぞれの因子に収束した質問項目が多く、授業の多くの部分において英語で授業を行うことを望む結果となった。また、2年生が、最初に「すべて英語で」という意識が高い一方で、3年生は、「雰囲気」重視であった。
- ② いずれの場合においても性別による意識の差は見られなかった。
- ③ 進路に関しては、2・3年とも理系志望の学生は、「雰囲気」作りのための英語による授業を望んではいなかった。
- ④ 英語に対する興味に関しては、2・3年生も英語嫌い群が、英語での説明を避ける傾向が見られた。
- ⑤ 成績に関しては、2・3年生とも上位群が英語での授業を望む傾向が見られた。

「英語で授業をする」ことは、英語の学力や英語に対する興味が高い生徒が望む傾向が表れた。裏を返せば、「英語で授業をする」ことに固執すれば、英語嫌いや英語学力の低下を招く危険性があると言えるのではないだろうか。

従って、学習者の反応を見ながら適切に英語を使い、補助的に母語である日本語を使いながら授業を行うことが求められる。「適切に英語を使う」ということは、具体的にどういうことなのか、さらなる今後の研究が待たれる。

7. 今後の課題

① 質問紙の標準化

「説明」因子を、説明を含むすべて英語で授業を行うことであると解釈したが、それが妥当であるかは、「英語の授業なのですべて英語で行う」等の質問項目を追加する必要がある。そして再修正された質問紙を用いてさらに多くの高校生に質問紙調査を行い、質問紙の標準化を図る必要がある。

② 質的研究の必要性

量的な研究では、英語力上位群や英語好き群に特徴的な傾向が表れたが、質的な研究でその実証性を高める必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただいた青森県内の高校生の皆さま、先生方に心より感謝いたします。ありがとうございました。

さらに拓殖大学言語文化研究所にも感謝を申し上げます。平成28年度の研究助成により資料の収集、SPSS (ver. 24) の購入等が可能となり研究が大幅に進展致しました。ありがとうございました。

本稿は、『日本言語教育 ICT 学会研究紀要』（2017年3月発行）に掲載されたものを本紀要の書式等に合わせて若干修正したものです。今回、学会のご厚意に

より本紀要への転載が承認されました。記して感謝致します。ありがとうございました。

主要参考文献

- 上西幸治 (2011). 「『英語の授業は英語で行う』に関する一考察 — 英語教師・高校生の意識を中心にして」 *Setsunan Journal of English Education*. (摂南大学外国語学部研究紀要), 第5号, 115-141.
- 江利川春雄 (2016年9月6日). 「希望の英語教育」 Retrieved from http://blogs.yahoo.co.jp/gibson_erich_man
- 小篠敏明 (1995). 『Harold, E. Palmer の英語教授法に関する研究 — 日本における展開を中心として』 第一学習社.
- 岡部幸枝・松本茂 (編) (2010). 『高等学校新学習指導要領の展開外国語科英語編』 明治図書.
- 柴田美紀・横田秀樹 (著) (2014). 『英語教育の素朴な疑問』, くろしお出版.
- 中井弘一 (2010). 「高等学校における「英語の授業は英語で授業を行う」についての一考察」『大阪女学院大学紀要』7号, 33-53.
- 平田和人 (編) (2008). 『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』 明治図書.
- 文部科学省 (2010). 『高等学校学習指導要領解説 — 外国語編・英語編』 開隆堂.
- 巨理陽一 (2011). 「外国語としての英語の教育における使用言語のバランスに関する批判的考察 — 授業を「英語で行うことを基本とする」のは学習者にとって有益か —」『教育学の研究と実践』第6号, 北海道教育学会, 33-42.
- Atkinson, D. (1993). *Teaching monolingual classes*. London: Longman.
- Brown, H. D. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy* (3rd ed.). White Plains, NY: Pearson Education.
- Cook, V. (2001). Using the first language in the classroom. *Canadian Modern Language Review*, 57, 402-423.
- Harmer, J. (2001). *The practice of English language teaching* (3rd ed.). Harlow, UK: Pearson Longman.
- Shin, Sang-Keun (2012). “It Cannot Be Done Alone”: The Socialization of Novice English Teachers in South Korea. *TESOL Quarterly*, 46(3), 542-567.

資料1 質問紙

I. 被調査者について

もしよければ出席番号をお願いします（ ）

該当するものに○をお願いします。

1. 性別

- ① 男子 ② 女子

2. 高校卒業後の進路

- ①4年生大学 文系（英語・国際関係） ②4年生大学文系（①以外）
 ③4年生大学 理系 ④海外の大学
 ⑤その他

以下の質問には①（全然そうではない）～⑦（本当にそうである）に1つに○をお願いします。

3. 英語に対する興味

私は英語が好きである。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

4. 英語の学力

私はこの学校において英語が得意な方である。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

II. 英語で授業をすることについて

以下の項目に関して、高校の英語Ⅰの授業で日本人の教員がすべて英語で授業をやることについてどう考えますか。①（全く英語ではして欲しくない）～⑦（全部、英語でして欲しい）の1つに○をお願いします。

1 新しい単語を説明する時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

2 新出の文法の説明をする時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

3 生徒に様々な指示をする時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

4 日本や外国の文化について話す時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

5 授業を受けるルール（姿勢、マナーなど）を説明する時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

6 生徒に課題（宿題）の説明をする時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

7 英語学習等に関して生徒を励ます時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

8 生徒に（小）テストを課す時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

9 生徒に英文内容を理解させる時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

10 生徒をリラックスさせようとする時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

11 人間関係を作り出す（出そうとする）時。

①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

裏もあります。

- 12 ゲームなど活動の説明をする時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 13 前回の授業の復習をする時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 14 本日の授業のまとめをする時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 15 教師が生徒を注意したりする時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
-
- 16 教師が体験談などの話をする時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 17 今まで習った文法を復習する時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 18 雑学やネタを言う時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 19 最初の挨拶など。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
-
- 20 授業で習う内容の紹介をする時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 21 複雑な英文の構造を説明する時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 22 抽象的な内容を説明する時（より平易な単語で）
①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 23 授業の重要ポイントを説明する時 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
-
- 24 本日の授業の流れを説明する時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 25 生徒が日本語で質問してきた質問に答える時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
- 26 日本語と英語の構造の違いについて説明する時。
①—②—③—④—⑤—⑥—⑦
-
- 27 英語で授業が展開された時、あなたはどんなときに日本人教師に英語を使って欲しいですか？上の項目以外であれば、具体的に書いてください。

ご協力ありがとうございました。せっかくのアンケートですので1枚も無駄にたくありません。記入漏れがないか再度ご確認をお願いします。お疲れ様でした。

資料2 因子分析の結果（2年生用）

	1	2	3
Q 26	1.040	-.215	.015
Q 21	.888	.168	-.200
Q 23	.742	.113	.094
Q 17	.726	-.211	.129
Q 25	.635	.095	.021
Q 2	.462	.229	.015
Q 13	.414	.114	.214
Q 20	.142	.878	-.197
Q 12	-.172	.863	-.025
Q 3	-.157	.715	.187
Q 22	.261	.601	-.028
Q 24	.171	.530	.172
Q 4	.261	.486	.114
Q 16	.179	.415	.212
Q 15	-.120	.408	.342
Q 7	.048	-.122	.945
Q 10	.086	-.077	.797
Q 11	-.073	.132	.786
Q 8	.094	.039	.711
Q 5	-.041	.362	.459

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiser の正規化を伴う
プロマックス法

a. 6 回の反復で回転が収束した。

資料3 因子分析の結果（3年生用）

	1	2	3
Q 5	.974	-.072	-.152
Q 15	.851	-.155	-.254
Q 7	.812	-.045	.133
Q 10	.806	-.162	.203
Q 24	.773	.109	.055
Q 16	.763	.112	.041
Q 11	.754	.005	.132
Q 3	.614	-.013	.069
Q 6	.610	.132	.208
Q 25	.595	.286	-.078
Q 8	.502	.229	.009
Q 4	.443	.300	.046
Q 26	.090	.894	-.083
Q 22	-.162	.893	.118
Q 9	-.151	.852	.107
Q 1	-.107	.834	-.083
Q 21	.047	.721	.099
Q 2	.114	.707	-.163
Q 23	-.064	.686	.281
Q 12	.127	.613	-.226
Q 13	-.090	-.141	1.152
Q 14	-.015	-.071	1.023
Q 17	.076	.189	.655
Q 20	.170	.317	.497

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiser の正規化を伴う
プロマックス法

a. 6 回の反復で回転が収束した。

〈資料〉

台湾語 “有 (ū)” “無 (bô)” の 文法化とその周辺 (資料篇)

— 樋口靖著『台湾語会話 (第二版)』に基づいて —

浅井澄民

要 旨

本資料は、台湾語 “有 (ū)” “無 (bô)”⁽¹⁾ の文法化を探求する為、樋口靖著『台湾語会話 (第二版)』⁽²⁾ の本文⁽³⁾ を言語資料として整理・作成したものである。調査の対象は “有” “無” 始め、その他の否定詞、(疑問詞疑問文以外の) 疑問文、語気助詞に及び、各用法⁽⁴⁾ (文型) を整理し、台湾語全体系の中で “有” “無” の文法化について考察する為の資料としたい。

本資料で、上記テキストを使用した主な理由として、

- ① 口語、特に会話体である
- ② 質、量ともに充実している
- ③ 今後、元代北京語、現代普通語の会話テキストとの比較を試みたい

ことが、あげられる。

台湾語 “有 (ū)” “無 (bô)” の文法化用法は、極めて口語的表現であり、特に会話体に多く表れると考えられる。また、上記テキストの言語情報は質が高く、十分研究用に耐えられると判断したからである。そして、将来的に同じ会話のテキストである『(旧本) 老乞大』『新編実用漢語課本』⁽⁵⁾ との比較を通して、通時、共時的考察も視野に入れているからである⁽⁶⁾。

また、調査の対象を、“有 (ū)” “無 (bô)” だけでなく、他の否定詞や疑問文、語気助詞に及んだ理由として、まず筆者は台湾語 “有 (ū)” の文法化用法は、これまで筆者が考察してきた『(旧本) 老乞大』やチベット語、モンゴル語の存在動詞の文法化に見える「言語主体位相の叙述」に類似していると考えており⁽⁷⁾、いわゆるモダリティーやムードと関わると思われるからである。また否定詞 “無 (bô)” の用法は他の否定詞との比較によって初めて明らかになり、併せて否定詞の文末用法 (疑問文) と語気助詞について明らかにしたい

めである。そして“無(bô)”の副詞的用法，語気助詞的用法の探求は，現代語の副詞“没(有)”や語気助詞“吗”の文法化の過程を明らかにするうえで，極めて有用であると考えている⁽⁸⁾。本テーマについて考察していきたい所以である。

キーワード：台湾語，“有(ū)”，“無(bô)”，否定詞，語気助詞

1. “有”の用法

1.1. “有”+名詞フレーズ

A	肯定形	出現数		備考 ⁽⁹⁾
1	～？有。	6		汝 ⁽¹⁰⁾ 有錶仔 ^表 /-- ⁽¹¹⁾ 無？有。88
2	有+NP ⁽¹²⁾	26	32	我有錶仔。88
3	有+NP+VP	6		有一間空房 / 想 beh 要租 /-- 人。226
	計	38		

B	疑問形	出現数		備考
1	有+NP+/-無？	9	12	汝 ^你 有時間 /-- 無？142
2	有+NP+VP+/-無？	2		有啥物 ^{什么} /beh 要交代 /-- 無？240
3	有+NP+ / 是--無？	1		卓仔 ^{桌子的} / 下脚 ^{下面} / 也有書 / 是--無？92
4	敢+有+NP？	2	3	In ^{他们} 敢有囡仔 ^{孩子} ？95
5	敢+有+NP+VP？	1		敢有人 / 会使 ^{可以} kā ^給 我寫？190
6	有+疑問詞+NP？	10	12	Lín ^{你们} 有幾節課？94
7	疑問詞+有+NP？	2		當時 ^{几时} / 有 beh 要去高雄 / 的車？265
	計	29		

A1 あなた時計持っていますか？ 2 私時計持っています。3 ひと部屋空いていますので，だれかにお貸ししたいのです。B1 あなたは時間がありますか？ 2 なにかお伝えしておきましょうか？ 3 テーブルの下にも本があるでしょう？ 4 彼らは子どもがいるのかしら？ 5 誰か書いてくれないかしら？ 6 あなた方は授業がなん時間あるのですか？ 7 高尾行きの汽車は何時ですか？

1.2. “有” + 形容詞フレーズ

A	肯定形			備考
1	～？有。	3	4	學臺灣話 / 有趣味 / -- 無？有。112
2	～有。	1		Chiah-nih 这么 chhe ⁿ -chhau 好菜。 那有 哪里。 222
3	有+A	2	6	我的 /chiah 才 有準。165
4	有+AP	4		我来 chia 这儿 / 有較 比较 利便 方便。 123
	計		10	
B	疑問形			備考
1	有+A+/- 無？		5	臺北 / 的物件 东西 / 有俗 便宜 / -- 無？76
	計		5	

A1 台湾語の勉強は面白いですか？ 2 これはご馳走ですね。いいえ。3 私の (時計) こそ合ってます。4 ここへ来るのはわりに便利です。B1 台北の品物は安いですか？

1.3. “有” + 動詞フレーズ

A	肯定形			備考	
1	～？有。		2	会使 可以 申请提款卡 / -- 無？有。247	
2	有+VP	有+V	3	10	有 tī-leh 在。 160
		有+V 過+数量	1		臺灣料理我有食過幾仔 pái 几次。 188
		有+著 在 +VP	2		我 mā 也有著 在 想 beh 要... 讀臺灣話。280
		有+V+O	4		Chit 这號 bá-suh 巴士 有够 到 車頭 车站。 124
	計		12		
B	疑問形			備考	
1	有+VP+無？	有+V+/- 無？	3	6	Lín 你们 有看 / -- 無？184
		有+V 過 O+/- 無？	1		汝 你有食過臺灣料理 / -- 無？188
		有+著 在 VO+/- 無？	1		有著 在 賣魚 / -- 無？257
		有+副詞+V+/- 無？	1		風箏 台风 / 有定定 常常 來 / -- 無？213

2	有+VP+/抑無	有+VVO+/抑無?	1	汝昨昏 _{昨天} /有去學臺灣話/抑無? 184
3	有+V+/hō ⁿ ?		1	汝有 bat _{认识} /hō ⁿ ? 116
4	有+VP+/唔不?	有+beh _要 +V+/唔?	1	楊文郎/也有 beh _{要去} /唔不? 163
	計		9	

A1 カードも申し込めるんでしょうか? 2(彼は)おります 160。台湾料理なら何度も食べました 188。私も台湾語を勉強したいと思っています 280。このバスは駅に行きます。B1 あなた方は見ましたか 184? あなたは台湾料理を食べたことがありますか 188。お魚も売っていますか 257? 台風はよく来ますか 213? 2 あなたはきのう台湾語を習いに行きましたか? 3 あなたは知っているのですね? 4 楊文郎君も来ますか?

2. “無”の用法

2.1. “無”+名詞フレーズ

A	否定形			備考
1	～?無。	7	8	In _{他们} 敢有囡仔 _{孩子} ?無。95
2	～無。	1		一個囡仔/都無。95
3	無+NP	8	10	阮 _{我们} 老母 _{母亲} /無車。89
4	無+NP+VP	2		已經無時間/食飯/ah _了 。216
	計	18		

B	否定形疑問文 ⁽¹³⁾			備考
1	敢+無?	1		日本/敢無? 223
	計	1		

A1 彼らは子どもがいるのかしら? いいえ。2(彼らは)子どもは一人もいません。3 母は車を持っていません。4 もう食事をする時間はありませんね。B1 日本にもあるかしらん?

2.2. “無” + 形容詞フレーズ

	否定形		備考
1	～ (?)。無。	2	Chit 这条路 / 比 hit 那条路 / 較好行。無。169
2	～ ? 無一定。	1	Liú 丁 / 較 比较 俗便宜柑仔 / 是 -- 無 ? 無一定。168
3	無 + A	2	11 種類 / kap 跟 日本 / 無共 一样。257 臺北 / 的物件 东西 / 無啥 什么 俗 便宜。76
4	無 + AP	9	
	計	14	

1 この道はあの道より歩きやすいです。いや。2 オレンジはミカンより安いでしょう? そうとも限りません。3 日本のものと種類が違います。4 台北の品物はあまり安くありません。

2.3. “無” + 動詞フレーズ

A	否定形		備考	
1	～ ? 無。	7	林 / -- 先生 / 有 tī-leh 在 / -- 無 ? 無。98	
2	無 + VP	無 + V	3	7 伊 他 無 tī-leh。98 無 tī 在 客廳, tī 辦公室。97 我一 pái 一次 / 都無食過。188 chit-má 現在 / 無看著 到 / ah 了。194 無 tī-leh 在 / 創啥物。160
		無 + V + O	1	
		無 + V 過	1	
		無 + VC	1	
		無 + tī-leh 在 + V + O	1	
3	無 + VP + ～	5	無好好仔歇睏 休息 / bōe 使 不行 / ò 啊。262	
4	無愛 (+VP)	5	我無愛 喜欢 食肉。101	
5	無一定 + VP	1	無一定著 应该 上班。156	
	計	25		

B	否定形疑問文		備考
1	無 + V + /hō ⁿ ?	1	飛機 / 無慢分 晚点 / hō ⁿ ? 209
2	無愛 喜欢 + VP + / 是 -- 無 ?	1	汝 你 無愛 喜欢 飲牛 leng 牛奶 / 是 -- 無 ? 101
3	無 beh 想 + VP + / 是 -- 無 ?	1	汝 無 beh 想 kap 跟 lín 你们 大兄 / 去 / 是 -- 無 ? 163
	計	3	

A1 林さんはいらっしゃいますか？ いえ。2 彼はいません 98。(ペンは) 応接室ではなくて、事務室にあります 97。私は一度も食べたことがないんです 188。(その服は) 今は見当たらないわ 194。何もしてはおりません 160。3 よく休まなければダメですよ 262。4 私は肉は好きではありません 101。5 必ずしも出勤しなくてもいいのです。B1 飛行機は遅れませんでしたね？ 2 あなたは牛乳は好きではないのですね？ 3 あなたはお兄さんと行かないのですね？

3. “無” 以外の否定詞

3.1. “唔” の用法

3.1.1. “唔” + 動詞フレーズ

否定形				備考
1	唔 _不 +VP	唔+V	6	14 唔 bat _{認得} (1) 唔知影 _{知道} (4) 唔信 (1) 我唔 bat _{認得} 臺灣話。104 唔知有嗰物料理？219
		唔+V+O (N)	2	
		唔+V+O (VP)	6	
2	唔 bat _曾 +VP	唔 bat+V	1	4 臺灣 / 伊 _他 唔 bat _{曾去} 。188 唔 bat _曾 食過。223
		唔 bat+V 過	3	
3	唔敢+VP	唔敢+V	1	2 ~/ 我 mā _也 唔敢 _睡 。203 唔敢 _夢 像 hit _那 號 _夢 / 著 _就 是 /lah。203
		唔敢+V+O+~	1	
計		20		

1 知らない。知らない。信じない。私は台湾語はわからないんです 104。どんな料理があるのかな 219。2 彼女は台湾は行ったことがありません 188。食べたことがありません 223。3 寝ないことにする 203。あんな夢は見ないよ 203。

3.1.2. “唔” + 形容詞フレーズ

	否定形疑問文		備考
1	“唔” + AP ?	1	按呢 _{那样} / 唔著 _就 好 / 喽? 203
	計	1	

1 それでいいんだろう 203?

3.1.3. “唔是”⁽¹⁴⁾ + 名詞・形容詞フレーズ

	否定形 / 否定形疑問文		備考
1	～? 唔是。	12	是汝 _{你的} 的 / 是 -- 無? 唔是。72
2	唔是 + NP	13	Che / 唔是椅子。47
3	敢唔是 + NP ?	1	今仔日 / 敢唔是拜二? 85
4	敢唔是 + AP ?	2	敢唔是猶 koh _{送真} 少年 _{年轻} ? 254
	計	28	

1 あなたのですか? いいえ。2 これは椅子ではありません。3 今日は火曜日かしら? 4 まだ若いのでしょうか?

3.1.4. “唔免” “唔通” “唔著”⁽¹⁵⁾

	否定形		備考
1	唔免 _{不用} + VP	5	多謝 / -- 汝! 唔免 _{不用} 客气。124
2	唔通 _{不要} + V	1	應該著 _對 序大人 / 唔通 _{不要} 無礼。156
3	(～) 唔著 _{不对} 。	2	無唔著 _{没錯} 。248
	計	8	

1 ありがとうございます。どういたしまして。2 父母に対して礼儀正しくしなければならない。3 確かに。

3.2. “bōe” の用法

3.2.1. “bōe” + 動詞・形容詞フレーズ

否定形				備考
1	～? (副詞+) bōe (+ 語気助詞)。		3	Chit-má/ 汝敢真無閑 / hō ⁿ ? Bōe 沒有 ^o 。76
2	bōe + VP	bōe + V	1	暗時 ^{晚上} / 嗽 ^{人咳嗽} 及 ^得 擺 ^都 bōe 沒有 ^o 睏 ^睡 。262 若按呢 ^{那樣} / 伊 ^他 著 ^就 bōe hō ^被 人笑。194 所以 bōe 想 beh ^要 食。257
		bōe + [介詞]P + V	1	
		bōe + 想 beh ^要 + V	1	
3	bōe + AP	bōe + A	1	臺灣 / 的寒天 ^{冬天} / bōe 寒 ^冷 。76 我 bōe 啥無閑。76
		bōe + AP	1	
計		8		

1 今あなたはお忙しいんでしょう? いや。2 咳で夜も眠れないくらいです 262。それなら人様に笑われることはありませんよ 194。なのであまり食べる気になれません 257。3 台湾の冬は寒くありません 76。私はたいして忙しくありません 76。

3.2.2. “bōe 曉 (得)” “bōe 使 (得)” “bōe 用得” “bōe-tàng”⁽¹⁶⁾

否定形				備考
1	bōe 曉 (得) _{不会}	～? bōe 曉。	1	汝客話 / 也會曉 ^会 講 / bōe? Bōe 曉 ^{不会} 。146 客話 / 我 bōe 曉 ^{不会} 講。146
		bōe 曉 (得) + V	3	
2	bōe 使 (得) ⁽¹⁷⁾	(～)bōe 使 (+ 語助)。	5	無排隊 / bōe 使 ^{不行} / ah。219
3	bōe 用得 _{不可以}	(～)bōe 用得。	2	會用得 ^{可以} 食 ^薰 抽 ^烟 / bōe? bōe 用得 ^{不行} 。153
4	bōe-tàng _{不能}	bōe-tàng + VP	4	汝敢也會 tàng ^能 去? Bōe-tàng _{不能} 去。149
計		15		

1 あなたは客家語も話せますか? いいえ 146。客家語はできません 146。

2 並ばなくちゃあならないね。3 タバコを吸ってもいいんでしょうか？
いいえ。4 あなたも行けますか？ いけないんです。

3.2.3. “bōe 記得” “bōe 要緊” “bōe-bái”⁽¹⁸⁾

	否定形 / 否定形疑問文		備考
1	bōe 記得 + V	2	皮包仔 / bōe 記得 / 提。216
2	(~)bōe 要緊。	2	一頓 / 無食 / bōe 要緊。216
3	(~)bōe-bái _{不坏} (+ 語氣助詞)。	5	汝 _你 好 / -- 無? Bōe- bái _{还可以} / 啦。76 伊的成績 / bōe-bái _{不坏} / 敢唔是? 194
	bōe-bái + / 敢唔是?	1	
	計	10	

1 鞵を忘れました。2 一度ぐらい食べなくてもなんていうことはありませんよ。
3 お元気ですか？ まあまあです 76。彼の成績はいいんでしょうか？
194？

3.3. “未 (bē)” の用法

	否定形 / 否定形疑問文		備考
1	~? 猶 _述 未 (+ 語氣助詞)。	4	今仔日 _{今天} 去 / 抑 _呢 未? 猶 _述 未。184
2	猶未 + VP	2	我猶未辦。250
3	猶未 + V + / 是 -- 無?	1	汝 _你 koh 猶未食 / 是 -- 無? 216
	計	7	

1 今日は行きましたか？ まだです。2 私はまだ作っていません。3 あなたはまだ食べていないのですか？

4. (疑問詞疑問文以外の) 疑問文

4.1. ~否定詞類? ⁽¹⁹⁾

4.1.1. ~“無”類?

4.1.1.1. “有”+名詞・形容詞・動詞フレーズ+“無”?

疑問形				備考	
1	有+NP+/- 無?	9	11	lín _{你们} 有課 /-- 無? 94	
2	有+NP+VP+/- 無?	2		有啥物 _{什么} /beh _要 交代 /-- 無? 240	
3	有+A+/- 無?	5		幼稚園 / 有好損 _{好玩} /-- 無? 237	
4	有 +V P +/- 無?	有+V+/- 無?	4	7	Lin _{你们} 有看 /-- 無? 184
		有+V過O+/- 無?	1		汝 _你 有食過臺灣料理 /-- 無? 188
		有+著 _在 VO+/- 無?	1		有著 _在 賣魚 /-- 無? 257
		有+副詞V+/- 無?	1		風蔞 _{台風} / 有定定 _{常常} 來 /-- 無? 213
5	有 V P / 抑無?	有+VVO+ / 抑無?	1	汝昨昏 _{昨天} / 有去學臺灣話 / 抑 _呢 無? 184	
	計	24			

1 あなた方は授業がありますか? 2 何かお伝えしておきましょうか? 3 幼稚園は楽しいかい? 4 あなた方は見ましたか 184? あなたは台湾料理を食べたことがありますか 188? お魚も売っていますか 257? 台風はよく来ますか 213? 5 あなたはきのう台湾語を習いに行きましたか?

4.1.1.2. 形容詞・動詞フレーズ+“無”?

疑問形				備考	
1	AP+/- 無?	好+/- 無?	3	16	汝 _你 好 /-- 無? 76
		VP+ / 好 /-- 無?	13		我 kâ _話 汝教臺灣話 / 好 /-- 無? 111

2	VP +/-- 無?	V+/-- 無?	3	14	汝 bat _{認得} / 無? 104
		V 有+/-- 無?	2		汝聽有 _{听到} /-- 無? 133
		V+O+/- 無?	3		猶 _还 愛 _要 啥物 _{什么} /-- 無? 101
		助動詞+VP+/- 無?	5		拜六 / 汝 _你 著 _{应该} 上班 /-- 無? 156
		bat _曾 +V+/- 無?	1		Lin _{你们} 太太 / 也 bat _曾 去 /-- 無? 187
3	VP/ 抑無 愛?	愛+VO+ / 抑 _呢 無愛?	1	1	汝愛 _{喜欢} 食肉 / 抑 _呢 無愛? 101
	計		31		

1 お元気ですか 76? わたしがあなたに台湾語を教えてあげましょうか 111? 2 あなたは (台湾語が) わかりますか 104? あなたはわかりましたか 133? ほかに何かご入り用のものは 101? 土曜日はあなたは出勤しなければならないのですか 156? 奥さんも行ったことがありますか 187? 3 あなたは肉を食べるのが好きですか?

4.1.1.3. 形容詞・動詞フレーズ+“是--無”?

疑問形				備考	
1	AP/是--無?	較 A~/ 是 -- 無?	2	3	Liu 丁 / 較俗杆仔 / 是 -- 無? 168
		比~較 A/ 是 -- 無?	1		對 _从 ~/ 去 / 比對~/ 去 / 較好行 / 是無? 169
2	VP/是--無?	是+O+ / 是 -- 無?	12	21	汝 _你 是學生 / 是 -- 無? 68
		有+O+ / 是 -- 無?	1		卓仔的 / 下脚 / 也有書 / 是 -- 無? 92
		V+O+ / 是 -- 無?	2		Ti 客廳 / 是 -- 無? 97
		著在+V+O+ / 是 -- 無?	1		汝著 _在 寫批 _信 / 是 -- 無? 160
		(無)beh+VP / 是 -- 無?	2		汝 beh _要 學臺灣話 / 是 -- 無? 111
		無愛+V+O+ / 是 -- 無?	1		汝無愛 _{喜欢} 飲牛 leng _{牛奶} / 是 -- 無? 101
		猶未+V+ / 是 -- 無?	1		汝 koh 猶未食 / 是 -- 無? 216
		V+C+ / 是 -- 無?	1		汝 mā _也 彈了真好 / 是 -- 無? 118
	計		24		

1 オレンジはミカンより安いでしょう 168? (あの道) から行く方が (この道) から行くよりも行きやすいですね 169? 2 あなたは学生ですか 68? テーブルの下にも本があるのでしょ う 92? (ペン) 応接室にありますか 97? あなたは手紙を書いているの 160? あなたは台湾語が習いたいのですか 111? あなたは牛乳を飲むのが好きではないのですね 101? あなたはまだ食べていないのですか 216? あなたも (ピアノを) 弾くのが上手なんでしょう 118?

4.1.2. ~"--唔" 類?

4.1.2.1. 動詞・名詞フレーズ+"--唔"?

	疑問形		備考
1	NP+/-- 唔?	1	高雄 / 頭一 pái 第一次 /-- 唔? 272
2	有+VP+/-- 唔?	1	楊文郎 / 也有 beh 要去 /-- 唔? 163
3	bat _曾 +V+O+ / 抑唔 bat ?	1	汝 _你 bat _曾 去臺灣 / 抑唔 bat? 187
	計	3	

1 高雄は初めてでしょう? 2 楊文郎君も来ますか? 3 あなたは台湾へ行ったことがありますか?

4.1.2.2. 動詞・形容詞フレーズ+"是--唔"?

	疑問形		備考
1	是+NP+ / 是-- 唔?	4	Lín _{你们} 太太 / 也是臺灣人 / 是-- 唔? 81
2	VP+ / 是-- 唔?	2	In _{他们} mā _也 講臺灣話 / 是-- 唔? 116
3	AP+ / 是-- 唔?	1	臺灣 / 的熱天 _{夏天} / 攞 _都 chiah-nih _{这么} 熱 / 是-- 唔? 213
	計	7	

1 あなたの奥様も台湾人ですか? 2 彼らは台湾語も話すんでしょうか?
3 台湾の夏はいつもこんなに暑いんですか?

4.1.2.3. 動詞・形容詞フレーズ+“唔是”?

	疑問形		備考
1	是+NP+/ 抑 _呢 唔是?	3	Che/ 是書 / 抑 _呢 唔是? 48
2	VP+/ 敢唔是?	1	汝 _你 真愛食魚 / 敢唔是? 257
3	AP+/ 敢唔是?	1	伊的成績 / bōe-bái/ 敢唔是? 194
	計	5	

1 これは本ですか? 2 あなたはとてもお魚が好きでしょう? 3 彼の成績はいいんでしょう?

4.1.3. 動詞・形容詞フレーズ+“bōe”?

	疑問形		備考
1	会+A+/-bōe?	5	臺灣 / 的寒 _{冬天} / 会寒 _冷 / -bōe? 76
2	会+V+O+/-bē?	1	唔知会合汝 _你 的嘴 / -bē? 222
3	会 _呢 会+V+/ bōe?	1	汝 _你 客話 / 也会 _会 讲 / bōe? 146
	会 _呢 会+V+O+/ 抑 _呢 bōe?	2	
4	会 tâng _能 +VC+/bōe?	1	汝会 tâng _能 看 _完 了 / bōe? 148
5	会用 _{可以} 得+V+O+/bōe?	1	Chit 个所在 / 会用 _{可以} 得 食 _抽 烟 / bōe? 153
6	会使 _{可以} +/bōe?	2	按 _呢 这样 / 会使 _{可以} / bōe? 247
	会使 _{可以} +VP+/bōe?	2	
	計	15	

1 台湾の冬は寒いですか? 2 あなたのお口にいますかどうか? 3 あなたは客家語も話せますか 146? あなたは台湾語ができますか 146? 4 あなたは (小説が) 読めるんですか? 5 この場所はタバコを吸ってもいいんでしょうか? 6 これでいいでしょうか 247? 一つあなたにおうかがいしてもかまいませんか 153?

4.1.4. 動詞フレーズ+“未 (bē)”?

	疑問形		備考
1	V+/- 未?	1	早起 _{早飯} / 食 /- 未? 216
2	已經+VP+ / 未?	1	Lín _{你们} 嬰仔 _{嬰兒} / 已經會曉 _会 行走 / 未? 146
3	V+ / 抑 _呢 未?	1	今仔日 _{今天} 去 / 抑 _呢 未? 184
	計	3	

1 朝食はもうお済ですか? 2 お宅の赤ちゃんはもう歩けますか? 3 今日
日は行きましたか?

4.2. A+“抑 (ah) 是”+B?⁽²⁰⁾

	疑問形		備考
1	是 NP+ / 抑 _是 还是 +NP?	4	Che/ 是鉛筆 / 抑 _是 原子筆? 56
2	VP+ / 抑 _是 还是 +VP?	1	汝愛拍 / 抑 _是 愛看? 119
	計	5	

1 これは鉛筆ですか, それともボールペンですか? 2 あなたはやるのが
好きなの, それとも見るのが好きなの?

4.3. その他の疑問文

4.3.1. 名詞フレーズ+“leh”?

	疑問形		備考
1	N+ /leh _呢 ?	3	汝 /leh? 76
2	NP+ /leh _呢 ?	3	汝的囡仔 /leh? 233
	計	6	

1 あなたは? 2 あなたのお子さんは?

4.3.2. 動詞・形容詞フレーズ+“hō”?

疑問形				備考
1	AP+/hō ⁿ ?		2	較近 /hō ⁿ ? 123
2	VP+/hō ⁿ ?	有 V+/hō ⁿ ?	1	汝有 bat _{認得} /hō ⁿ ? 116 飛機 / 無慢分 /hō ⁿ ? 209 CHe/ 是日本茶 /hō ⁿ ? 233
		無 V+/hō ⁿ ?	1	
		是 N+/hō ⁿ ?	1	
計			5	

1 近い方ですね? 2 あなたは知っているのですね 116? 飛行機は遅れませんでしたね 209? これは日本茶ですね 233?

4.3.3. “敢”+動詞・形容詞フレーズ

疑問形				備考
1	敢(唔)是 NP?		3	今仔日 / 敢唔是拜二? 85
2	敢(唔)是 AP?		2	敢是我的 / 較緊 _誤 ? 166
3	敢有 N+VP?		1	敢有人 / 会使 _{可以} kā _會 我寫? 190
4	敢+V?		1	日本 / 敢無? 223
5	敢也会 tāng _能 +V?		2	汝敢也会 tāng 去? 149
6	(敢)有影 _{真的} ?		2	敢有影? 194
7	敢 AP+/hō ⁿ ?		1	汝 _你 敢真無閑 /hō ⁿ ? 76
計			12	

1 今日は火曜日かしら? 2 私の(時計が)進んでいるのかしら? 3 誰か書いてくれないかしら? 4 日本にもあるかしらん? 5 あなたも行けますか? 6 そうかしらん? 7 あなたはお忙しいんでしょう?

5. 語気助詞

5.1. ~“ah”⁽²¹⁾

			備考
1	~?/~。V +/ah _了	13	著 _对 /ah _了 (6) 無 /ah(2) 有 /ah(1) 是 /ah(1)
2	VC+ /ah _了	9	聽有到 /ah。轉 _回 -- 來 /ah。寫好 /ah。
3	V[時量]+ /ah _了	2	有 _俩 三年 /ah。137
4	已經+VP A [時量]+ /ah _了	8	已經+無時間 晏 _晚 九點+ /ah。 _{216 237 216}
5	早著 _就 +V+ /ah _了	1	伊早著 _就 去 /ah。184
6	teh-beh _{快要} +V+ /ah _了	1	應該是 teh-beh _{快要} 够到 /ah。240
7	VP ⁽²²⁾ + /ah _了	6	無排隊 / bōe 使 _{不行} /ah。219
	計	40	

1 そうなんです。いや。ありますよ。ええ。2 わかりました。ただいま。書きました。3 二三年です。4 もう時間がないですよ。もう遅くなりました。もう9時ですよ。5 彼はとっくに行きました。6 おっつけ出社するはずです。7 並ばなくちゃあならないね。

5.2. ~“leh”

			備考
1	NP+ /leh ?	6	汝 _你 /leh _呢 ? 76
2	[疑問詞]VP ⁽²³⁾ + /leh ?	2	圖書館 /tī 何位 _{哪儿} /leh _呢 ? 250
3	VP+ /leh ! ⁽²⁴⁾	8	逐個 _{大家} / 較安靜 /leh _吧 。137
4	AP+ /leh	2	我的字 / 比汝的 /bái _差 多 /leh。190
	計	18	

1 あなたは？ 2 図書館はどこにあるのかしらん？ 3 みなさん静かにしなさい。4 私の字はあなたよりずっと下手なんですよ。

5.3. ~“hōⁿ”

			備考
1	VP+/hō ⁿ ?	3	汝 _你 有 bat _{認得} /hō ⁿ ? 116
2	AP+/hō ⁿ ?	3	按呢 _{那样} /真頭殼/痛/hō ⁿ ? 258
3	AP+/hō ⁿ	3	真方便/hō ⁿ . 280
	計	9	

1 あなたは知っているのですね? 2 それじゃあお困りでしょうね。3 (あなたは) 便利ですね。

5.4. ~“niā- niā”⁽²⁵⁾

			備考
1	VP+/niā- niā	4	出世 _{出生} /八月日 _{八个月} /niā- niā. 146
	計	4	

1 生まれてたった八カ月なもの。

5.5. ~“啦 (lah)”

			備考
1	VP+/ 啦	5	是 / 啦 ₈₅ 。猶未 / 啦 ₁₄₆ 。~著 _就 是 / 啦 ₂₀₃ 。
2	AP+/ 啦	2	好 / 啦 160。差不多 / 啦 280。
	計	7	

1 そうですとも。まだです。(これからはあんな夢は見ないよ) 2 いいわよ。まあまあですね。

5.6. ~“neh”

			備考
1	VP+/neh	2	逐個 <small>大家</small> 攏 <small>都</small> 著 <small>在</small> 等 / 汝 <small>你</small> / neh. 160
2	AP+/neh	3	眞 <small>燒</small> 熱 <small>鬧</small> / koh <small>又</small> 眞 <small>吵</small> 熱 <small>鬧</small> / neh. 272
	計	5	

1 みんなあなたを待っているのよ。2 これはすごい熱気と騒音だ。

5.7. ~“loh”⁽²⁶⁾ / “lò 嘍”

			備考
1	VP+/loh	1	咱 <small>都</small> 是臺灣人 / loh. 81
2	AP+/lò 嘍	1	按呢 <small>那樣</small> / 唔 <small>不</small> 著 <small>就</small> 好 / 嘍。203
	計	2	

1 私たちはみな台湾人ですね。2 それでいいだろう。

5.8. ~“ô” / “oh”

			備考
1	VP+/ô	3	有發 <small>燒</small> / ô. 262
2	AP+/ô	2	Che / 眞 <small>嚴</small> 重 / ô. 262
3	VP+/oh	1	按呢 <small>那樣</small> / oh. 233
	計	6	

1 熱がありますね。2 これはひどい。3 そうですね。

5.9. ~“啊 (a)”

			備考
1	VP+/啊	1	飛機 / 無慢分 / hō ⁿ ? 是 / 啊。209
	計	1	

1 飛行機は遅れませんでしたね? ええ。

- (15) それぞれ普通語の“不用”“不应该”“不对”等に相当する。その他、接続詞の“唔 koh_{不对}”が16例現れる。
- (16) それぞれ普通語の137“不可以”“不能”等に相当する。これらの語も3.2.3 “bōe 記得” “bōe 要紧” “bōe-bái” と併せて一語で処理している。
- (17) テキストの解説部分に「bōe 使得 + V」型式が1例現れる。
- (18) それぞれ普通語の“不記得”“不要紧”“不错”等に相当する
- (19) 普通語の反復疑問文，“吗”疑問文に相当する。
- (20) 普通語の選択疑問文“(是)～还是～?”に相当する。
- (21) 状況や事情が変化したことを表す；本テキスト p. 137 参照。普通語の語気助詞“了”に相当。
- (22) 上記1～6用法以外の動詞フレーズを指す。
- (23) 疑問詞を含んだ動詞フレーズを表す。
- (24) (軽い) 命令, 意志, 勧誘等を表す。
- (25) 「だけ, のみ」の意味を表す；本テキスト p. 119 参照。
- (26) 断定を表す；本テキスト p. 81 参照。

(原稿受付 2017年11月20日)

〈資料〉

“Lazarillo de Tormes” (1554) の 文法的特徴についての考察

—「第一章」(下)—

廣 澤 明 彦

要 旨

本稿は1554年にスペインで出版された“La vida de Lazarillo de Tormes y de sus fortunas y adversidades”に文法的注釈と語釈を加え、試訳を付した資料である。中世スペイン文学やスペイン語史の研究者にとっての資料、大学専門課程の学生が古典スペイン語に触れる際の適切なテキストともなるべく、目指した。

キーワード：ピカレスク小説，中世スペイン語文法，散文

0. はじめに

本稿(=LT1C)は廣澤(2015)(=LT1A)及び、廣澤(2016)(=LT1B)の続きである。紙数の関係で、この「第一章」は3回に分けた。底本として Víctor García de la Concha の注釈(1989, 以下 VGC)のページと行を保ったまま用いた。VGC以外にも Alberto Blecua (1975, 以下 ALBL), Julio Cejador y Frauca (1962, 以下 JCF), Francisco Rico (2002, 以下 FRCA)の注釈も適宜参考にしている。

1. 注 釈

[承前]

p. 62

—No, no —dijo él—, que yo no he dejado el 29
asador de la mano; no es posible. 30

29) no, no: 最初の no は否定の応答「いいえ」。後者の方は LT1B, p. 62, L28-L29⁽¹⁾ のラサロの発言, Alguno (...) haría esto. 「誰かが (….) こんなことをやったんでしょう」に対しての否定文を形成する副詞とする。即ち, no, no *lo haría nadie*⁽²⁾, あるいは, no, *nadie lo haría* 「いいや, 誰もそのことをしなかっただろう」に相当する。29-30), que yo no he dejado el asador de la mano: , que は説明的な理由の節を導入する接続詞, 「なぜなら」。de la mano 「手から」。30) no es posible: 前文を受ける中性代名詞を主語として補うと, *esto no es posible* 「このことは可能ではない」。あるいは *no es posible hacer esto* 「このことを行なうことは可能ではない」となる。

和訳 (p. 62 L29-p. 62 L30)

「いや, それは違う」, 彼は言いました。「俺は焼き串から手を離さなかったんだからな。そんなことは不可能だ」。

p. 62

Yo torné a jurar y perjurar que estaba libre de 31
aquel trueco y cambio; mas poco me aproveché, 32

(1) L=línea 「行」, 即ち L28 「28 行目」, 以下同様。

(2) イタリック体の語は本文にはない語で, 解釈のために筆者が付加した語である。以下同様。

p. 63

pues a las astucias del maldito ciego nada se le es- 1
condía. 2

31) yo torné a jurar: torné <⁽³⁾ tornar+a+不定詞で「再び～する」。vid. LT1A, p. 54, L15-L16. jurar は他動詞で, que 以下に直接目的語に相当する名詞節が続く。「私は que 以下を再び誓った」。31) perjurar: jurar に強調の意味の接頭辞 per- がついた形式。ただし接頭辞の per- には「時として perjurar, (…), のように「悪い」の意味も伴う」(RAE21) とある。perjurar には「偽誓する, 誓いを破る」(TSW), 「誓いを破る, 宣誓に違反する, 偽証する」(DEM) の意味もある。確かに LT1B, p. 62, L26 以下の嘘をくり返してはいるが, いずれも自動詞なので, que 以下に直接目的語に相当する名詞節は続かない。ただし DEM には他動詞の意味で「繰り返し誓う」もある。その場合の per- は強調ととれる。そして更に DEM には他動詞の意味で jurar y perjurar 「堅く(厳粛に)誓う」(DEM) とあり。その場合には直接目的語に相当する名詞節を用いることが出来る。31) libre: 「(～の)ない, (～を)免れた, 免除された」(TSW)。32) trueco: 「trueque (「交換」) [に同じ]⁽⁴⁾」(TSW, RAE21)。32) poco me aprovechó: me は間接目的格で「私に」。aprovechó < aprovechar は自動詞で「役立つ」。poco は位置的に不定代名詞ととることができる。その場合 poco は aprovechó の主語で, 「私にはほとんどないくらいわずかなことしか役立たなかった」。あるいは poco を副詞ととれば, 前文を受ける中性代名詞を主語として補い, 即ち, eso me aprovechó poco 「そのことは私にはほとんど役立たなかった」ととれる。p. 65, 1-2) a las astucias del maldito ciego nada se le escondía: この nada も副詞と

(3) A < B, 「A は B に由来する」。

(4) 「」内には引用, 拙訳を用いたが, 原文にないものを [] 内に筆者が補っている。以下同様。

とれそうであるが、不定代名詞ととる。即ち、nada は se escondía < esconderse 「隠れる」の主語。間接目的格の le は起点の意味で、a las astucias del maldito ciego を受ける。「16世紀には les の代わりに〔単数の〕le の使用が頻繁であった」(ALBL, p. 107)。「邪悪な盲人の狡猾さからは何もかくれることはできなかった」。

和訳 (p. 62 L31-p. 63 L2)

私はそのすり替えとは無関係であることを再び固く誓いました。しかしそのことは私にはほとんど役立ちませんでした。と申しますのも邪悪な盲人の狡猾さからは、何もかも隠れおおせることができなかったからです。

p. 63

Levantóse y asióme por la cabeza y llegóse 2
a olerme. 3

2-3) この文には等位接続詞の y が2つ用いられ、3つの要素が並べられているが、最初の y は中世で多用された y の用法ととる。即ち、levantóse, asióme y llegóse のようにコンマで置きかえられるものとする。2) levantóse: →⁽⁵⁾ se levantó < levantarse 「立ち上がる」、主語は盲人。2) asióme por la cabeza: asióme→me asió < asir 「つかむ」。me は直接目的格で「私を」となるが、por が部位の意味で「～のところを」の用法であるので、「彼は私の頭をつかんだ」となる。2-3) llegóse a olerme: llegóse→se llegó < llegarse 「近づく」、主語は盲人。「彼は私を嗅ぐために近づいた」

和訳 (p. 63 L2-p. 63 L3)

彼は立ち上がると私の頭をつかみ、私の匂いを嗅ぐために顔を近づけたのです。

(5) →の記号は現代スペイン語の表記、及び現代スペイン語の語順を提示する場合に用いた。即ち A→B, 「A は現代スペイン語では B (の語順)」。

p. 63

Y como debió sentir el huelgo, a uso de 3
buen podenco, por mejor satisfacerse de la verdad y
con la gran agonía que llevaba, asiéndome con las 5
manos, abríame la boca más de su derecho y desa-
tentadamente metía la nariz, la cual él tenía lengua
y afilada y a aquella sazón, con el enojo, se había
aumentado un palmo; con el pico de la cual me lle-
gó a la gulilla. 10

3-10) 長い一文であるが、主節を形成する動詞定形は L6 の abríame (→ me abría) と L7 の metía で、両者は L6 の等位接続詞の y で並べられている。3) como debió sentir el huelgo: debió (<deber) sentir は推定の用法 (cf. LT1B, p. 62, L5), 主語は盲人。「彼は(私の)吐息を感じたに違いない」。したがって como は理由の意味で解釈した方が、時の意味「～するとすぐ (= así que)」(TSW) ととるよりも、日本語訳はすっきりする。3-4) a uso de buen podenco: a uso de について。「(～の)ならわしに従って、～流に、風に」(TSW)。podenco は「ハウンド犬」、つまり猟犬。4-5) por mejor satisfacerse de la verdad y con la gran agonía que llevaba: L3-L4 の , a uso de 以下が挿入句となるため、この por 以下の要素は L3 の como が導入する節につながり、核となる debió sentir を修飾するととる。por は目的の para と同義, mejor は副詞の bien の比較級で「より良く」、いずれも satisfacerse 「満足する, 納得する, 腹いせをする, 恨みを晴らす (= vengarse)」(TSW) にかかる。ところで satisfacerse は DEM によると de でも con でも補完補語を導入することができる。その場合前者だと「仕返しをする」、後者だと「満足する」の意味となり、L4 の y が satisfacerse de A y con B と別々の補完補語を並べているともとれそうであるが、本稿では L4 の por が導入する

要素と con 以下を等位接続詞の y で並べ、L3 の debió sentir にかかるととる。その場合 por A y con B, 「A するため、そして B を伴い (感じたに違いないので)」。A について、「(ソーセージをラサロが食べてしまったという) 真実に納得するために」。B について, agonía 「熱望 (ansiedad)」(ALBL, p. 108), 「精神的葛藤によりもたらされる不安」(RAE21), 「熱望, あせり」(TSW), 「彼のいっていた大きな焦りを伴って」。5-6), asíéndome con las manos: 現在分詞にコンマが先行するいわゆる時の分詞構文とも、「～しながら」の意味の副詞の用法の現在分詞が先行しているともとれるが、いずれにしても L3-L10 の主節の核となる abríame と metía にかかっている。前者の解釈では「そしてその時私を両手でつかんだ」、後者だと「私を両手でつかみながら (口をこじ開けた)」となる。

6) abríame: → me abría. me は間接目的格。6) más de su derecho: 名詞の derecho には「正しいこと」(TSW) の意味があることから判断すると、「それ (= 口) の通常の開き具合以上に」の意味にとらざるを得ない。6-7) desatentadamente: 「不注意に, 度を越して」(RAE21), 「むでっぽうに」(TSW)。7), la cual él tenía lengua y afilada: 説明的な関係節を導入する関係代名詞 la cual の先行詞は L7 の la nariz 「鼻」。節の動詞 tenía の主語は él であるので、この la cual は目的格ととる。したがって後続の lengua 「長い」(TSW) と afilada (<afilar 「尖らす」の過去分詞) は目的格補語ということになる。tener について。「(直接補語 [→直接目的語] の性・数によって変化した過去分詞と組合わせて) もう～している, してある」(TSW)。lengua は過去分詞ではないが、これにしたがえば「そして彼はそれを長く尖らせていた」となる。が、ここは通常の鼻の大きさを性質としてあらわしているところなので、「ふだんは彼の鼻は長く尖っていた」の意味にとる。尚この la cual が導入する節の核となる動詞定形はこの tenía と、L8-L9 の se había aumentado である。

8) a aquella sazón: a la sazón が entonces の意味で用いられているこ

とから判断して、「あの時は」ととる。cf. LT1A, p. 48, L3。8-9) se había aumentado un palmo: L7 の la cual が導入する関係節の後半の核となる部分であり、こちらの節に対しては la cual は主格である。palmo 「長さの単位 (約 21 cm, 4 分の 1 vara, 指を開いて親指の端から小指さきまで)」(TSW)。そしてそれは 20 cm ほど巨大化していた」。9-10) con el pico de la cual me llegó a la gulilla: llegó < llegar, 主語は盲人。前置詞を伴う説明用法の la cual であれば、通常、con la cual me llegó 「そしてそれとともに私に近づいた」。ここでは間に el pico 「先端」が入ることで、la cual は前置詞格の ella に相当する用法に近づいている。a は到達点をあらわす「～に」。gulilla 「喉頭蓋 (epiglottis)」(ALBL, p. 108), gula について、「大食, 暴食」(TSW), 「廃用語, 咽頭, 食道」(RAE23) + -illa (示小辞)。「そしてその先端でもって(彼は)私の咽頭にまで達しました」。

和訳 (p. 63 L3-p. 63 L10)

事実を受け入れるため、そして自身がいただいていた大きな焦りもあり、利口なハウンド犬のようなやり方で私の息を感じたからでしょうか、彼は両の手で私を押さえつけながら通常以上に私の口をこじ開け、無謀にも鼻を突っ込んできたのです。その鼻ときたら普段でも長く尖っているのですが、その時には怒りで 20 センチもふくらんでいたのです。その鼻の先端でもって彼は私ののどちんこをつつきました。

p. 63

Y con esto, y con el gran miedo que tenía, y con la brevedad del tiempo, la negra longaniza aún no había hecho asiento en el estómago, y lo más principal, con el destiento de la cumplidísima nariz, medio cuasi ahogándome, todas estas cosas se

juntaron y fueron causa que el hecho y golosina se 15

manifestase y lo suyo fuese vuelto a su dueño. 16

10) con esto: 「それゆえ、ここにおいて」(TSW)。cf. LT1B, p. 58, L13。10-11) con el gran miedo que tenía: tenía < tener の直説法線過去 1 人称単数, つまり主語はラサロ。que は関係代名詞で目的格。con は L11 のと同様に理由や原因ではなく, L12 の no había hecho にかかる様態「～の様子で」ととることにする。「私が持っていた大きな恐れもあり」。

11) con la brevedad del tiempo: 「時間の短い様子で」。ソーセージを飲み込んでからの時間についての言及である。11-12) la negra longaniza aún no había hecho asiento en el estómago: 形容詞 negra (negro の女性形単数) には「黒い」の意味に加え, 「(おもに名詞のまえについて) 暗い, 悲しい, 不運な, (…) 困った, やっかいな」(TSW) の意味でも用いられる。cf. LT1B, p. 57, L17。先達の訳, 「あの問題のソーセージ」(UNL), 「例のろくでもない腸詰」(AYL)。no había hecho asiento について。hacer asiento 「座る (=tomar asiento), 村に定住する」(RAE 21), 「座り(安定)がよい, 定住する」(DEM)。「あの困った長ソーセージはまだ胃の中で落ち着いておらず」。

13) lo más principal: 中性定冠詞の lo による形容詞の抽象名詞化であるが, más との組み合わせで最上級ともとれる。ソーセージをもどした理由について前半から述べられているが, その核心の内容がこの句を主節とし, L14 の todas 以下を従属節として続けることで展開する。即ち語を補うと, lo más principal es (または era) que (...) todas estas cosas se juntaron 「最も重要なことはこれら全てが集まったことです(または, でした)」。

13-14) con el destiento de la cumplidísima nariz: destiento 「(廃用語) 驚き, 動揺」(RAE21), 「びっくり・ぎくりとすること」(TSW)。cumplidísima < cumplida + ísima (絶対最上級の語尾)。cumplido は cumplir 「果たす」の過去分詞として「果たした」の意味となるが, 加えて「(形容詞) 完璧な, (何かが)

長い、余剰な」(RAE21), 「adj. 完全な (=completo), ゆったりした, 礼儀正しい」(TSW) 等の意味がある。FRCA (p. 40) は L6-L7 の *desatentadamente* と関連させ、反語的に礼儀正しいの意味で用いられているとする解説を挙げている。その場合「お行儀の良い鼻にびっくりして」。ただし本稿では「びったりとはまった」の意味にとる。14) *medio cuasi ahogándome: cuasi→casi*. すべての語を訳すと「半ばほとんど私を窒息させながら」。14-15) *todas estas cosas se juntaron: todas estas cosas* 「これら全てのこと」, つまりここまで述べられたソーセージを吐き出すまでの諸々の様態。尚この句は *se juntaron* と L15 の *fueron* の主語である。15) *fueron causa que: →fueron causa de que*, つまり *queísmo*。「これら全てのごとは *de que* 以下の」原因でした」。15-16) *el hecho y golosina se manifestase y lo suyo fuese vuelto a su dueño*: この節は L15 の *fueron causa de que* とつながる従属節の役割を担う。それぞれ *se manifestase* と *fuese* を核とする2つの節から構成され、それらを L16 の *y* が結びつけている。L15 の方の *y* は初めの節の2つの主語 *el hecho* と *golosina* をつないでおり、それら複数の主語を反映させれば *se manifestasen* となろう。*hecho* 「事実」, *golosina* は現代スペイン語では「お菓子」の意味で用いられるのが常であるが、「果物や甘いもので、食事としてではなく嗜好で食されるもの」(COV), 「おいしい物, ごちそう」(TSW) といった意味もある。*fuese vuelto* について。*fuese* < *ser* の接続法過去3人称単数, 主語は *lo suyo* 「彼のものは」。 *vuelto* < *volver* の過去分詞であるが, *volver* を他動詞の「戻す」ととれば, *ser* + 過去分詞を用いた受動態という解釈になる。「事実とごちそうが露見し, そして彼のものはもとの持ち主に戻された (ということの原因であった)」。 *vuelto* を自動詞の *volver* 「戻る」に由来するものととれば, この *fuese* < *ser* は中世スペイン語において自動詞の完了時制を形成するのに用いられた助動詞ということになる。その場合「彼のものはもとの持ち主に戻った」とな

ろう。

和訳 (p. 63 L10-p. 63 L16)

それゆえ私が抱いていた大きな恐れもあり、時間もあまり経っていなかったこともあり、あの厄介な長ソーセージはまだ胃の中で落ち着いてなかったのです。そして最も重要なことは、ぴったりとはまったあの鼻に仰天し、それは半ばほとんど私の息を止めていましたが、こういった全てのことがあわさり、そして真実とごちそうが露見し、彼のものがもとの持ち主へと戻ったことの原因となったというわけです。

p. 63

De 16

manera que, antes que el mal ciego sacase de mi
boca su trompa, tal alteración sintió mi estómago,
que le dio con el hurto en ella; de suerte que su na-
riz y la negra mal maxcada longaniza a un tiempo 20
salieron de mi boca. 21

16-19) L17 の antes que 以下の節がコンマにはさまれた挿入の形をとっており、その解釈だと冒頭の de manera que が導入する節として L18 の tal alteración 以下が続くことになる。しかしその場合主節が欠如することになるので、de manera que 「したがって」には節を導入するはたらしめはなく、結果の por eso の意味に相当する接続詞表現ととる。したがって L17 の antes que 以下が従属節で、L18 の tal alteración 以下を主節ととることにする。17-18) antes que el mal ciego sacase de mi boca su trompa: 時の節を導入する接続詞句 antes (de) que+節は「～する前に」の意味で、核となる動詞定形は sacase < sacar 「引き抜く」の接続法過去 3 人称単数。直接目的語は su trompa 「とても大きな鼻」(JCF, p. 96), 「(象やばくの) 鼻, でっかい鼻」(TSW)。「あの悪辣な盲人が自分ののでっ

かい鼻を私の口から引き抜く前に」。18) tal alteración sintió mi estómago: →mi estómago sintió tal alteración。tal は L19 の que と相関して用いられる。即ち tal A que B (直説法), 「それほどの A なので B する」(DEM)。19) , que le dio con el hurto en ella: tal と相関する que の後に節 (B) が続く。その核となる動詞定形は, dio < dar, の点過去 3 人称単数, 主語は mi estómago 「私の胃」。自動詞の dar は, dar con X en Y で, 「Y に X をぶつける」の意味で用いられる。X には hurto 「盗んだ物」, Y の ella 「それ」は, trompa 「でっかい鼻」を指す。le は間接目的格で「彼に」。L18-L19 は, 「私の胃はそれほどの異変を感じたので, 盗んだ物を彼のそれにぶつけた」の意味となるだろう。19) de suerte que: これは L16-L17 の de manera que とは異なり, 節が後続するととらえる。20) maxcada: →mascada < mascar 「かみ砕く」の過去分詞, 「かみ砕いた」。20) a un tiempo: 「同時に」。

和訳 (p. 63 L16-p. 63 L21)

こうしてあの悪辣な盲人が, 私の口から彼のでかっ鼻を引き抜く前に私の胃袋はそれほどの異変を感じたので, 盗んだものをその鼻にたたきつけたのです。こうして彼の鼻と, よく咀嚼されていないあのいまましい長ソーセージが私の口から同時に飛び出したというわけです。

p. 63

¡Oh, gran Dios, quién estuviera aquella hora sepul- 22
tado, que muerto ya lo estaba! 23

22) quién estuviera (...) sepultado: quién は感嘆文で接続法過去とともに用いられ, 願望をあらわす。「埋葬されていたらなあ」。23) , que muerto ya lo estaba: que はコンマとともに用いられ, 説明的な理由の節を導入する。「なぜなら」。lo は estaba < estar に先行する補語の muerto < morir 「死ぬ」を受ける。ただしここでは本当に死んだのでは

なく、「死んだような」の意味。

和訳 (p. 63 L22-p. 63 L23)

ああ、偉大な神よ、あの時埋葬されていたらどんなによかったでしょう
か。だって私は死んでも同然だったのですから。

p. 63

Fue tal el coraje del 23

perverso ciego, que, si al ruido no acudieran, pienso
no me dejara con la vida. 25

23-24) fue tal el coraje del perverso ciego: tal を fue < ser の補語ととり、主語は el coraje 以下とする。即ち、並べ替えると、el coraje del perverso ciego fue tal. coraje 「憤り、立腹」(TSW)。ここでの tal と L24 の que が導入する節は相関して用いられている。「邪悪な盲人の憤りはそれほど大きかったので (que 以下である)」。24-25) L23 の tal と相関した L24 の que が導入する節の核となるのは、pienso < pensar 「考える」の直説法現在 1 人称単数である。pienso を主節とし、接続詞を補った構文が、pienso *que* no me dejara con la vida である。「(怒りはそれ程大きかったので) 私は que 以下だと思う」。この que 以下の節は L24 の si 以下の条件節の帰結 (apódosis) として機能している。24) si al ruido no acudieran: acudieran < acudir 「駆けつける」の意味に加え、「救いに行く」(TSW)、「誰かの救援に行く」(RAE21) の意味もあり。接続法過去、-ra 型であるが、過去の反事実をあらわしている。即ち対応する現代スペイン語の形式は hubiesen / hubieran acudido。cf. LT1A, p. 53, L26-L28, 及び IEM, p. 123, p. 130。尚主語は 3 人称複数を用いた無人称とも、L30 の「集まってきた人達」ともとれる。その場合、「もしその騒ぎに人々が集まらなかったとしたら」。25) no me dejara con la vida: dejara < dejar 「放っておく」の接続法過去形で -ra 型であるが、

条件文の帰結の過去未来の代わりに用いられている。意味内容を考慮すれば、ここで対応する現代スペイン語の形式は、過去未来完了の *habría dejado* となる。主語は盲人。文字通りの訳は、「命を伴った私を放っておくことはなかったでしょう」となる。

和訳 (p. 63 L23-p. 63 L25)

邪悪な盲人の怒りは相当なものでしたので、もし騒ぎを聞きつけて助けに来てくれなかったとしたら、彼は私を生かしておくことはなかっただろうと思うのです。

p. 63

Sacáronme de entre sus 25

manos, dejándoselas llenas de aquellos pocos cabellos que tenía, arañada la cara y rascuñado el pes-
cuzo y la garganta. 28

25) *sacáronme*: → *me sacaron* < *sacar* の直説法点過去 3 人称複数が主語であるが、L24 の *acudieron* の場合と同様に、主語を特定する場合には「彼らは私を引き出した」、無人称ととるのであれば、「私は引き出された」となるだろう。25-26) *de entre sus manos*: 「彼の手の間から」。26) *dejándoselas llenas de*: コンマを伴い分詞構文的に用いられている現在分詞に、前接の無強勢代名詞が伴っている。このうち *se* は無人称で用いられている再帰代名詞ととり、*las* は *sus manos* 「彼の両手」を指し、*dejando* < *dejar* 「(直接目的語) を (目的格補語) にしておく」の直接目的格「それらを」と解釈、「～に」にあたる目的格補語は *llenas*。即ち動詞定形を用いた対応する節は、*y se dejó las manos llenas de* 「そして彼の両手を *de* 以下で一杯にした」。27) , *arañada la cara*: コンマのあとで過去分詞を用いた分詞構文ととる。「顔はひっかかれて」。27-28) *rascuñado*: < *rascuñar* (→ *rasguñar* 「引っ掻く」) の過去分詞。後続の *el*

pescuezo と la garganta にかかり、分詞構文を形成する。「首と喉は引っ掻かれて」。尚この語は同じ「引っ掻く」を意味する rascar, arañar と同義であるが, rascañar, rasguñar は uña 「爪」を語中に含んでいる。rasguñar 「爪 (uñas) で引っ掻く (…)」(AUT)。

和訳 (p. 63 L25-p. 63 L28)

彼の両手の間から私は引っ張り出されましたが、私に生えていたわずかな髪で、彼の両手は一杯でした。顔はひっかかれ、首や喉も爪でのひっかき傷だけでした。

p. 63

Y esto bien lo merecía, pues	28
por su maldad me venían tantas persecuciones.	29

28) esto bien lo merecía: この節の核となる動詞定形 merecía (→merecía < merecer 「(賞や罰として) 受ける値打ちがある」(TSW) の直説法線過去 3 人称単数) の主語は、一見すると先行する内容を受ける中性の指示代名詞 esto 「このことは」のようにも見える。ただしその場合、lo の受ける内容が、それが男性形の場合でも中性形の場合でも不明確であり、また merecer と lo を用いた慣用表現も確認できないことから、esto は主語ではなく、それ以外の主語を想定する必要がある。VGC (p. 63) 及び FRCA (p. 41) は、この merecía の主語を la garganta 「喉」としている。その場合 esto は動詞に先行する直接目的語の役割を担う指示代名詞で「このことを」、lo はその場合に重複が必要な目的格代名詞で、性は中性ということになる。ただし esto が受ける意味内容は、当初それを主語と想定した場合と同じである。「そして喉はそのことを罰として(ひっかき傷を)受けるのに値する」。28), pues: 説明的な理由の節を導入する。「というも」。29) por su maldad: L28 の merecía の主語が garganta だとすれば、この su 「そのの」が指すのは「喉」のことになる。por は

理由。「その悪さにより」。つまり長ソーセージを吐き出したのが喉のせいということ。29) *me venían tantas persecuciones: venían < venir* 「来る」の直説法線過去 3 人称複数、主語は後続の *tantas persecuciones*。自動詞であるので *me* は間接目的格「私に」。「それほど多くの迫害が私に及んだ」。

和訳 (p. 63 L28-p. 63 L29)

しかし確かに喉はその罰を受けるに値しました。と申しますのも、その喉がへまをしたおかげで私にあんなに多くの迫害が及んだのですから。

p. 63

Contaba el mal ciego a todos cuantos allí se alle-	30
gaban mis desastres, y dábales cuenta, una y otra	31

p. 64

vez, así de la del jarro como de la del racimo, y ago-	1
ra de lo presente.	2

30) *contaba*: < *contar* 「語る」の直説法線過去 3 人称単数、主語は後続の *el mal ciego* 「その悪い盲人」、直説目的語に相当するのは L31 の *mis desastres* 「私の災難」、L30-L31 の *a todos cuantos allí se allegaban* が間接目的語に相当する。30-31) *a todos cuantos allí se allegaban*: L30 の *contaban* を核とする文の間接目的に相当する節。*cuantos* は関係代名詞で、関係節が後続し、*todos* が先行して結びつき、意味を強化している。「～する者全てに」。allíはAYLの訳と同様に、ラサロが長ソーセージを吐いた現場、即ち「その場へ」ととる。ただしUNLは「行く先々で」。「その場に集まって来た人たち全てに」。31) *mis desastres*: L30の*contaba*の直説目的に相当する句。*desastre*には「災厄、失敗」(TSW)のいずれの意味もある。「私の災難 (*mis desgracias*) の意味であり、私が盲人にした災難の意味ではない」(ALBL, p. 109)。先達の訳、「わたく

しの失敗の数々を」(AYL), 「私の災難について」(UNL)。31) *dábales cuenta*: → *les daba cuenta*. *dar cuenta de ...* で, 「～の責任をとる, 償いをする, 弁解・説明をする, 報告して了解を得る」(TSW), 「～について説明(釈明)する」(DEM)。尚この表現の *de* 以下は p. 64, L1 の *de la del jarro*, *de la del racimo*, L2 の *de lo presente* の 3 つの句が担う。*les* 「彼らに」は, L30 の *a* 以下を指す。「(盲人が) 彼らに *de* 以下について説明した」。31-p. 64, L1) *una y otra vez*: 「長々と, しつこく」(DEM)。1) *así de la del jarro como de la del racimo*: *así A como B* で「*A* も *B* も」。 *de la del jarro* の初めの *de* は p. 63, L31 の *dábales cuenta* につながる。 *de la del racimo* の初めの *de* も同様。ところでこれら 2 つの句にある女性の定冠詞の *la* について, 「*contar* 「語る」に由来する *cuento* 「話」の代わりにの *cuenta* [という語をこの *la* が受けている]」(JCF, p. 100)。「壺の話についても, 同様にぶどうの房の話についても」。尚, *la de + 名詞* で「(感嘆) 大量の～, 多くの～」(DEM) という用法もあるが, ここでは適用しない。1-2) *agora de lo presente*: *agora* → *ahora*。この *de* も p. 63, L31 の *dábales cuenta* につながる。 *lo presente*, *lo + 形容詞* で抽象名詞化。「今度は今回のことについて」。

和訳 (p. 63 L30-p. 64 L2)

そこに集まって来た者たち全てに, あのだいどい盲人は私の失敗を語りました。そして壺の話も, 同様にぶどうの房の話も, 今度は今回のことについても何度も繰り返して彼らに説明したのです。

p. 64

Era la risa de todos tan grande,	2
que toda la gente que por la calle pasaba entraba a	
ver la fiesta; mas con tanta gracia y donaire contaba	
el ciego mis hazañas, que, aunque yo estaba tan	5

maltratado y llorando, me parecía que hacía sinjusticia en no se las reír.

7

2) era la risa de todos tan grande: → la risa de todos era tan grande. tan grande は L3 の que 以下と相関して用いられている。tan A que B 「それほど A なので B」。「皆の笑いはそれほど大きかったので (que 以下であった)」。3) que toda la gente que por la calle paseaba: 初めの que は L2 の tan+形容詞 (grande) と相関する節を導入する。核となる動詞定形は entraba。2 番目の que は関係代名詞で主格, 先行詞は toda la gente 「全ての人々」。尚, この名詞句+関係節は entraba の主語となる。「通りを歩いていた全ての人たちは」。3-4) entraba a ver la fiesta: entraba < entrar 「入る」の主語は L3 の toda la gente を核とする句。fiesta は「祭り, パーティー」であるが, この盲人の「独演会」とそれを聴いて笑う人々の様子をあらわしたもの。4) con tanta gracia y donaire: 「それほど多くのおかしさと冗談でもって (語っていた)」。ここで用いられている tanta (mucho 「沢山の」の同等比較女性形単数) も, L5 の que が導入する節と相関。tanto A que B, 「あまりに多くの A なので B」。4-5) contaba el ciego mis hazañas: contaba < contar の直説法線過去 3 人称単数, 主語は el ciego で直接目的語が mis hazañas。「盲人は私の手柄を語っていた」。FRCA, ALBL, JCF は contaba ではなく recontaba の表記となっている。recontar (> recontaba) について, 「数えなおす (…), 語る (referir)」(TSW), AUT には「時としてただ語るだけの意味にとられる」という語義に加えて, 「再び contar (数える, 語る) する」としている。FRCA は「再び語る」の意味にとっている。「recontar は「語る」の意味が頻繁であるが, 『規範辞典』[つまり AUT] が, volver a contar と記載しているように, ここでは反復の意味を排除すべきではない」(p. 41)。ALBL は同じ AUT の記載を根拠に, 反復の意味を認めない立場をとっている。「私はここでは反復の意味をあらわしているとは思

わない。ここは [AUT が] 「時として (recontar は) ただ語るだけの意味にとられる」としているように、ここは「語る」の意味である」(p. 109)。つまり ALBL は TSW と同様に「再び数える」の意味ととっている。5) , que, : L4 の tanta gracia と相関して用いられる節を導入する接続詞である。直後に, aunque の節が挿入されているもので, L6 の me parecía 以下が que の導入する節である。5-6) aunque yo estaba tan maltratado y llorando: 過去分詞の maltratado (< maltratar 「いじめる」) も現在分詞の llorando (< llorar 「泣く」) も, estaba と結びつく。前者は状態の受動文で, 後者は進行を意味する。「私はいじめられ, 泣いていたにも関わらず」。6) me parecía que: parecía→parecía。「私には que 以下に思えた」。6-7) hacía sinjusticia en no se las reír: hacía は 1 人称単数で, ラサロが主語。sinjusticia 「(俗 [語]・方 [言]) 不正 (=injusticia)」(TSW)。「(en 以下において) 私は不正をしていた (ように思えた)」。en no se las reír について。不定詞に前置詞が先行するときに, 無強勢代名詞が後接の位置で用いられるのは中世スペイン語の用法 (IEM, p. 39 及び LT1B, p. 62, L20-L21)。se は無人称, las は直接目的格で L5 の hazañas を受ける。現代スペイン語だと en no reírse las。「それらを (人が) 笑わないことにおいて」。

和訳 (p. 64 L2-p. 64 L7)

皆の笑い声はそれほど大きかったので, 通りを歩いていた全ての人がこの騒ぎを見に入ってきたのでした。しかしながら盲人が私の偉業をそれほど多くのおかしさと冗談でもって語っていたので, 私はひどい扱いを受け, 泣いていたにもかかわらず, それらを笑わないことがいけないことをしているように思えたのです。

p. 64

Y en cuanto esto pasaba, a la memoria me vino

8

una cobardía y flojedad que hice, por que me mal-
decía, y fue no dejalle sin narices, pues tan buen 10
tiempo tuve para ello, que la meitad del camino es-
taba andado: que con sólo apretar los dientes se me
quedaran en casa, y, con ser de aquel malvado, por
ventura lo retuviera mejor mi estómago que retuvo
la longaniza y, no pareciendo ellas, pudiera negar 15
la demanda. 16

8) en cuanto esto pasaba: en cuanto は mientras 「～している間」と同義。「このことが起こっている間に」。8-9) a la memoria me vino una cobardía: (主語+) venir + a + 人 + a la memoria 「～ [間接目的] に思いださせる」(DEM)。a + 人は間接目的格代名詞の me で表わされている。並べかえると, una cobardía me vino a la memoria 「ある臆病さが私に思い出された」。9) una cobardía y flojedad que hice: L8 の vino は 3 人称単数であるが, この句が主語である。que は関係代名詞で目的格。「私のした臆病と怠惰」。9-10) por que me maldecía: por que 「だから」(TSW)。por を原因, 理由の意味ととり, que を接続詞としたもの。これに従えば, 「だから私自身を呪っていた」。ただしこの que を関係代名詞ととり, por la que の定冠詞が省略されたものとすれば, 先行詞は cobardía と flojedad, por は原因の用法と解釈することもできる。「そのことが原因で私は自身を呪っていた」。10) fue no dejalle sin narices: L8 の 3 人称単数の vino の主語の場合と同様に, この fue (< ser の直説法点過去 3 人称単数) の主語も同じ L9 の una cobardía y flojedad とする。dejalle → dejarle, 不定詞に無強勢代名詞が前接する場合の同化現象。vid. LT1A (p. 51, L2), LT1B (p. 59, L16), IEM (p. 155)。le はレイスモで「彼を」。sin narices は目的格補語の役割を担う。「鼻無しに」。尚, nariz は現代スペイン語でも複数で多用されるが, 鼻の穴が 2 つあることに由来

する、いわば双数の用法と考えられる。「(私の行なった臆病と怠惰と言うのは) 彼を鼻無しにしなかったことでした」。10-11) , pues tan buen tiempo para ello: 接続詞 pues はコンマを伴い、説明的に理由の節を導入する。「というの」。tan は L11 の que と相関して用いられている点が L2 と同様。即ち, tan A que B 「それほど A なので B」。中性代名詞 ello 「そのこと」は、前文の内容、盲人を鼻無しにすること(否定文で表わされていた)を指す。「そのことのために私はあまりに良い時を持っていたので」。11) que la mitad del camino estaba andado: que は L10 の tan と相関して用いられる。mitad 「廃用語, mitad [のこと]」(RAE 21)。語を補い並べかえると, yo estaba andado en la mitad del camino で、文字通りの訳は「私は道の半分まで歩いていた」であるが、「もう少しで上手くいった」の意味で用いられているととる。12) que: 意味内容の希薄な、あるいは軽い理由を導入する接続詞、「というの」。導入する節の核となる動詞定形は、L12-L13 の se me quedarán。12) con sólo apretar los dientes: con+不定詞で条件「～すれば」。apretar 「強く押す」。「歯を噛みしめるだけで」。12-13) se me quedarán en casa: 主語は las narices。se は再帰代名詞、即ち quedarse 「とどまる」。me は関与の与格の用法。尚、接続法過去の -ra 型は中世スペイン語では主に直説法の意味で用いられることが多かったが、ここでも推量の意味の過去未来、即ち quedarían と同義ととる。cf. LT1B (p. 57, L29)。quedar と en casa を用いた慣用表現は確認できなかったので、ここは文字通りの訳「自分の家にとどまる」を比喩的にとり、転じて「自分のものとする」の意味に解釈する。JCF はここの en casa について、「口の中で自分の支配下に置く」(p. 100) としている。先達の訳。「(彼の鼻は) 私の家の中にとどまっただろう」。「そいつは自家菜籠中のものになっていたに違いない (…)」(AYL), 「それをわがものにできたのですから」(UNL)。13) con ser de aquel malvado: ここでの con+不定詞は譲歩の意味ととる。意味上の主

語は las narices。ser+de~で所属の意味。「(その鼻は) あの悪党のものであったけれども」。13-14) por ventura: 「もしかしたら」。14-15) lo retuviera mejor mi estómago que retuvo la longaniza: retuviera < retener 「とどめる」の接続法過去-ra型で、ここも L12-L13 の se quedaran と同様に、過去の推量の意味で用いられている過去未来と同義とする。主語は mi estómago。lo は男性単数あるいは中性であるが、las narices を受ける。したがって語を補い現代スペイン語風に直し並べかえると、mi estómago *las retendría* に対応するであろう。mejor は副詞 bien 「良く」の比較級で、比較の対象は L14 の que 以下で導入される retuvo (<retener の直説法点過去 3 人称単数) を核とする節。「長ソーセージを手元においたことよりも、私の胃袋は彼の鼻を長くとどめたかもしれません」。15) no pareciendo ellas: pareciendo < parecer (→ parecer 「(古) 現われる (=aparecer)」(TSW)) の現在分詞。反事実の条件文の前提節に相当する分詞構文を形成するととる。意味上の主語は後続の ellas。動詞定形を用いた節に置き換えると、si ellas no hubieran aparecido 「もしそれら (ellas=narices) が現れなかったとしたら」。15) pudiera negar la demanda: 主語は mi estómago, 過去の反事実の帰結節を表わしている。即ち、現代スペイン語では通常 habría podido negar に対応するであろう。cf. LT1A (p. 54, L28)。「(私の胃袋は) その要求を否定することができただろうに」。この個所の VGC (p. 64) の注釈、「盲人の鼻という犯罪の証拠が現れなければ、司法上の申し立て (demanda judicial) の機会もなかっただろう」。つまり法律用語ではあるが、FRCA は、「negar la demanda はよく知られていた専門用語であるので、この作者が特別に法律用語に通じていたとは推論できない」(p. 42) としている。

和訳 (p. 64 L8-p. 64 L16)

このようなことが起こっている間、私は自分の臆病さと怠惰が思い出さ

れ、それは盲人を鼻無しにしなかったということですが、そのことで自身を呪ってました。と申しますのも、そのことをするためのそういった良い機会を私は持っていたので、その道の半ばまで進んでいたのです。つまり歯を噛みしめるだけで彼の鼻は私の家の中にとどまったであろうということです。そしてその悪人のものではありませんが、もしかしたら私の胃袋はあの長ソーセージをとどめたよりもちゃんとそれを置きとどめたかもしれませぬし、鼻が現れなかったとしたら、申し立てを拒否できたかもしれなかったのです。

p. 64

¡Pluguiera a Dios que lo hubiera 16

hecho, que eso fuera así que así! 17

16-17) ¡pluguiera a Dios que lo hubiera hecho (...)! pluguiera < placer+que+接続法, この場合自動詞としての解釈。「que 以下が(間接的に)うれしい」。pluguiera は placer の不規則な点過去 3 人称複数 pluguieron から派生した接続法過去の -ra 型である。ここでは過去の推量の意味で用いられる直説法の過去未来 *placería* と交替可能なものとする。即ち, *placería a Dios que lo hubiera hecho*。あるいは *placer* を他動詞ととり, *que* を *si* と読めば, 過去の反事実の条件文ととれる。前提節に相当する *lo hubiera hecho* の主語は 1 人称単数で, *lo* は盲人の鼻を噛み切るという前文の内容を受ける。帰結節の *pluguiera* の主語としては, *lo* と同内容を指す *eso* 「そのことは」を補ってとらえる。即ち, *si yo lo hubiera hecho, eso placería a Dios*, 「もし私がそのことをやっていたとしたら, そのことは神様を喜ばせているだろうにな」(17), *que eso fuera así que así*: *que* は接続詞で説明的な理由の節を導入するととる。「なぜなら」。中性の指示代名詞 *eso* は L16 の *lo* と同じ内容を指す。 *así que así* 「[*así o asá, así o así, así que asado* などとも同義で] (ser,

tener, dar などと用いられて) どちらにしても同じこと」(TSW)。「良くも悪くもない, まあまあのこと」(JCF, p. 101), 「así que así という言い回しは, 変種の así que asá と同様に, 事を行ういずれの方法に対しても無関心さを示すために用いられた」(FRCA, p. 42)。fuera < ser の接続法過去 -ra 型で, 過去の推量の意味で用いられる過去未来 sería と同義ととる。「というのもそうしたところでどちらでも同じことだっただろうからです」。この箇所の VGC (p. 64) の読み。「私はそのことをしておけばなあ, だってそのことは被った害においては我々は引き分けにしたであろうから」。

和訳 (p. 64 L16-p. 64 L17)

ああ, もしそれをやるとけばなあ, 神様を喜ばせているんだろうにな!
 だってそれをしたところでどちらでも同じことだっただろうから!

p. 64

Hicieronnos amigos la mesonera y los que allí es-	18
taban, y, con el vino que para beber le había traído,	
laváronme la cara y la garganta, sobre lo cual dis-	20
cantaba el mal ciego donaires, diciendo:	21

18) hicieronnos amigos: →nos hicieron amigos。amigos は目的格補語で形容詞ととる。「仲の良い」。「私たちを仲良くさせた」。hicieron < hacer, 主語は後続の la mesonera y los que allí estaban 「宿のおかみとそこにいた者たち」。尚, 後半の laváronme の主語でもある。19) con el vino que para beber le había traído: que は関係代名詞で先行詞は el vino, 目的格。había traído は 1 人称単数。le は間接目的格で「彼に, 即ち「盲人に」。「飲むために私が盲人に持ってきていたワインでもって」。

20) laváronme la cara y la garganta: laváronme→me lavaron. me は間接目的格で, la cara y la garganta が直接目的語。「私に関して顔と

喉を洗った」。20) sobre lo cual: 中性の lo cual が受けるのは先行する文の内容, 「そのことに関して」。即ちワインで顔や喉を洗ったこと。20-21) discantaba el mal ciego donaires: →el mal ciego discantaba donaires. discantaba < discantar 「稀な使用, 比喩, 何らかの事柄を解説する, その事柄について場合によっては図々しく意見を加える」(RAE21), 「詳解する」(TSW), つまり「述べた」ととる。「そのことに関して悪辣な盲人は冗談を言いました」。21) , diciendo: decir 「言う」の現在分詞で, コンマの後で説明的に用いられているととる。「そして以下のように言いました」。

和訳 (p. 64 L18-p. 64 L21)

旅籠屋のおかみとそこにいた者たちが我々の間をとりなしました。そして盲人が飲むために私が持ってきたぶどう酒でもって, 彼らは私の顔と喉を洗ってくれたのですが, そのことについてあの憎らしい盲人は冗談を飛ばしました。そして以下のように言いました。

p. 64

—Por verdad, más vino me gasta este mozo en 22
lavatorios al cabo del año, que yo bebo en dos. 23
22) por verdad; 前置詞 por は理由, 原因の意味だとすると「真実ゆえに」というのが直訳となる。verdaderamente 「本当に」と同義ととる。先達の訳, 「本当によ,」(AYL), 「まったくのところ」(UNL)。22) más vino me gasta este mozo: →este mozo me gasta más vino. me は間接目的格で「私から」。比較の文で比較の対象は L23 の que 以下。「この若者は (que 以下よりも) より多くのワインを私から消費する」。23) lavatorio: 「洗うこと, 洗浄」(TSW)。23) al cabo del año: al cabo de 「después de [に同じ]」(RAE21), 「～のはじ, 終わりに」(TSW), 「(時間)～の後に」(DEM)。「一年の終わりに」の意味であるが, L23 の en dos から判断す

ると、「その年の終わりに」ではなく、「一年の間に」の意味にとれる。

23) , que yo bebo en dos: この que は比較の対象を説明的に導入する接続詞ととる。語を補うと, , que yo bebo en dos años 「私が2年間で飲むよりも (より多くのワイン)」。

和訳 (p. 64 L22-p. 64 L23)

「実際のところよ、このガキは俺が2年かかって飲むよりも多くのぶどう酒を、傷の洗浄で1年で使っちゃまうんだよ。

p. 64

	A lo	23
menos, Lázaro, eres en más cargo al vino que a tu		
padre, porque él una vez te engendró, mas el vino		25
mil te ha dado la vida.		26

23-24) a lo menos: 「少なくとも」。RAE21にあるように, al menos, por lo menos と同義である。24) eres en más cargo al vino que a tu padre: ser en cargo 「(誰かに) 負債がある, 負債者である」(TSW)。más cargo 「より多くの負債」は比較級で, 比較の対象は que 以下。「君は君の父親に対してよりもワインにより多くの負債がある」。25) , porque él una vez te engendró: él はラサロの父親を指す。engendró < engendrar 「子をなす」, この語を用いた表現には侮辱のニュアンスが伴うことがある。「なぜなら彼は一度 (だけ) お前を作った」。25-26) mas el vino mil te ha dado la vida: mil → mil veces 「1000回」が原義であるが, DEM には「cien veces に同じ」とあり, その cien veces は「(cien mil veces, cientos de veces に同じ) 何度も何度も, ひんばんに」の意味としている。te は間接目的格「君に」。「しかしワインは千回お前に命を与えた」。

和訳 (p. 64 L23-p. 64 L26)

少なくともよ、ラサロ、お前はお前の父親よりもぶどう酒の方に沢山恩義

があるんだぜ。なぜってよお、そりゃお前の親父は一度はお前を作ってやりはしたけど、ぶどう酒の方はお前に千回も命を与えてきたんだからな」。

p. 65

Y luego contaba cuántas veces me había descalabrado y arpadado la cara, y con vino luego sanababa. 1
naba. 3

p. 65

1-3) この文の中で接続詞の *y* が3ヶ所で用いられている。文頭の *y* について。「(話の切り出し) ところで (…)(色々な意味あい)」(DEM)。「(文頭で) で、そこで、ところで」(TSW)。L2の2つの *y* はいずれも *cuántas* 以下の節の中で用いられている。その前半の過去完了の節と、後半の線過去の *sanaba* を核とする節をつなぐのが後半の *y*。前者の *y* は2つの要素から成る過去完了の節をつないでいる。A (*a y b*) *y* B, 即ち *Aa* には *había descalabrado*, *Ab* には *arpado*, *B* には *sanaba* が対応する。

1-2) *cuántas veces me había descalabrado y arpadado la cara: cuántas* は一見すると間接疑問文を形成している疑問詞のようであるが、主節の *contaba* から切り離した場合に、感嘆文を形成する感嘆詞と解釈できることから、ここは「間接感嘆文」を形成しているととる。即ち、*cuántas veces* で「いったい何度」。 *había descalabrado* < *descalabrar* 「頭に打撃を加える」, 直接目的となるのは *me*。「(いったい何回)」私の頭に打撃を加えていたか」。 *arpado* < *arpar* 「ひっかく (*arañar*) あるいは爪で裂く (*rasgar con uñas*)」(RAE21), 「(爪で) かく (= *arañar*)」(TSW) も L1-L2 の *había descalabrado* と同様に過去完了で用いられているととる。即ち, *y había arpadado*, 直接目的語は *la cara* 「(いったい何回) 顔を引っ掻いたことか」。2-3) *y con vino luego sanaba*: L1 でも *luego* が用いられているが, ここの *luego* はかつてラサロを痛めつけた回想の中

で用いられている。「のちに」。sanaba < sanar 「なおす, 治療する」(TSW)。

和訳 (p. 65 L1-p. 65 L3)

そしてのちに, いったい何回ほど私の頭を傷つけ, そして顔を爪でひっかき, そしてそのあとでぶどう酒で治したかを語ったのです。

p. 65

—Yo te digo —dijo— que si un hombre en el mun- 4
do ha de ser bienaventurado con vino, que serás tú. 5

4-5) この文の構造は, L4 の digo < decir 「言う」が主節の核を形成, L4 の que 以下が従属節というものである。「私は君に que 以下を言う」。この従属節が更に複文を形成しており, si 以下が条件節, L5 の que 以下が帰結節, 即ち主節を担う。尚この que は L4 の que と同じとみなす。並べかえると, Yo te digo que serás tú si un hombre en el mundo ha de ser bienaventurado con vino. となろう。5) ha de ser bienaventurado: haber de+不定詞で, 「～するはずである, べきである」(TSW)。主語は L4 の un hombre。bienaventurado は形容詞で「至福, 天福をえた(…), (悪口として) おめでたい」(TSW) といった意味で用いられるが, ここは動詞 bienaventurar 「(他動詞, 古語) 誰かに至福を与える」(RAE21) の過去分詞ととり, ser と受動態を形成しているととる。「もしこの世の中である男がワインで至福を与えられているはずだとすれば」。

和訳 (p. 65 L4-p. 65 L5)

「お前に言っておくけどよ」, 彼は言いました。「もしこの世界で誰か一人の男が, ぶどう酒でもって至福を与えられているはずだとすりゃあよ, それはお前だけ」。

p. 65

Y reían mucho los que me lavaban con esto, 6
aunque yo renegaba; mas el pronóstico del ciego no
salió mentiroso, y después acá muchas veces me
acuerdo de aquel hombre, que sin duda debía tener
espíritu de profecía, y me pesa de los sinsabores que 10
le hice, aunque bien se lo pagué, considerando lo
que aquel día me dijo salirme tan verdadero como
adelante Vuestra Merced oirá. 13

6) los que me lavaban con esto: los que 以下の節が reían (< reír 「笑う」) の主語となる。「los que 以下をしていた者たちは (大いに笑った)」。con esto は「それゆえ, ここにおいて」(TSW) の意味の成句。「その時私を洗っていた者たちは」, 7), aunque yo renegaba: コンマのあとに説明的な節を導入する。ここでの接続詞 aunque は, pero と同義とする。renegaba < renegar は他動詞であれば「強く否定する」の意味であるが, ここは自動詞ととり, その場合「罵る (blasfemar)」(RAE21), 「悪態をつく」(TSW), 「突然怒りの言葉を発する」(JCF, p.102)。7-8) el pronóstico del ciego no salió mentiroso: salir + 主格補語で「(結果として) ~になる」(DEM)。「この盲人の予想は嘘にはならなかった」。8) después acá: この句は desde entonces acá 「そのとき以来」(TSW) と読みかえる。FRCA (p.93) は「desde entonces (「それ以来」)」の意味としている。9), que: 関係代名詞, 主格, 先行詞は L9 の aquel hombre 「あの男」, 説明的な関係節を導入する。「そして彼は」。9) debía tener: debía < deber, 自動詞の推定の用法 (deber (de) + 不定詞), 「持っているに違いなかった」。10) me pesa de los sinsabores: pesar について, 「(与格補語 [...] を伴ない, これを事実上の主語として, 第3人称にだけ活用 [...]) 悲しむ, くやむ, 悩む, 後悔する [...] (pesar de ともいう)」

(TSW)。10-11) que le hice: que は関係代名詞で先行詞は L10 の los sinsabores, 目的格, le は間接目的格「彼に」。「私が彼にした不快なこと(が私に重くのしかかっている)」。11), aunque bien se lo pagué: コンマのあとに aunque が説明的な節を導入しているのは L7 の場合と同様であるが, ここは事実に対する譲歩の節の挿入とする。se は間接目的格で「彼に」, lo は中性の直接目的格「そのことを」。先行する内容「私が彼に行なったいやがらせ」の補足の説明ととれる。「確かに私は彼に対してそのことを十分に報いたわけですが」。尚日本語の「報いる」には「報復する」と「償う」という相反する意味があるが, pagar の場合も同様。11-13), considerando lo que aquel día me dijo salirme tan verdadero como adelante Vuestra Merced oirá: コンマのあとで用いられる現在分詞 considerando は理由の分詞構文を形成, その主節に相当するのは L10 の pesa を核とする節。他動詞の considerar は目的格補語をとり, considerar A (直接目的語) B (目的格補語)「A を B と見なす」の用法がある。A には lo que aquel día me dijo 「あの日彼が私に言ったこと(を)」, B には, ここでは不定詞の salirme が相当する。L8 の場合と同様にこの salir も「(結果として～[主格補語]になる)」。me 「私に」は間接目的格で, 主格補語に相当するのが verdadero 「真実の」。尚この verdadero は同等比較の構文に組み込まれており, ここでは「正に como 以下のように」の意味とする。「あの日彼が私に言ったことを, のちにあなたがお聞きになるように, 私には真実となったと考えるからです」。

和訳 (p. 65 L6-p. 65 L13)

その時私を洗っていた者たちは大いに笑いました。もっとも私は悪態をつきましたが。しかしながら盲人の予言は嘘にはなりませんでした。そしてその時以来今日まで, 私はあの男のことを覚えています。彼は間違いなく予言者の靈感を備えていたに違いありません。そして私は彼に充分報いたとはいえ, 私が彼にした意地悪が私に重くのしかかっているのです。と

いうのもあの日彼が私に言ったことを、のちにあなた様がお聞きになるように、私には真実となったと考えるからなのです。

p. 65

Visto esto y las malas burlas que el ciego burlaba 14
de mí, determiné de todo en todo dejalle, y, como lo 15
traía pensado y lo tenía en voluntad, con este pos-
trer juego que me hizo afirmélo más. 17

14-17) この一文は L15 の等位接続詞 y が 2 つの節をつないでいる。それらの節の核となる動詞定形は、L15 の determiné と L17 の afirmélo である。14) visto esto y las malas burlas: ver 「見る」の過去分詞 visto を用いた理由の分詞構文。visto は後続の esto 「このこと」と burlas 「からかい」の両方と一致するととる。esto は壺による殴打の一件、burlas はそのあと傷の手当てをしていた者たちを沸かせることとなった盲人のラサロへの侮辱と解釈する。「このこととそのひどい愚弄を見たので」。14-15) que el ciego burlaba de mí: que は関係代名詞で先行詞は burlas。burlaba < burlar を他動詞の「からかう」(TSW) の意味にとる。したがってこの que は目的格、de は主題の意味で de mí 「私に関して」。「盲人が私についてからかった (意地悪な) からかい」が直訳。「[burlar burlas は] vivir vida feliz (「幸せな人生を生きる」) のように、内在する目的語 (objeto intrínseco) を伴っている」(JCF, p.103)。15) determiné de todo en todo dejalle: 前半の節の核となる determiné < determinar は不定詞 (dejalle) との組み合わせで「～することを決意する」の意味。dejalle→dejarle, 不定詞に無強勢代名詞が前接する場合の同化現象 (IEM, p.155)。cf. LT1A, p.51, L2 及び LT1B, p.59, L16。le はレイスモで盲人を指す、「彼を」。de todo en todo 「すっかり (enteramente)」(JCF, p.103), 「まったく, すっかり」(TSW)。「きっぱりと

彼のもとを去ることを私は決意した」。15-16) como lo traía pensado y lo tenía en voluntad: 理由の接続詞 como によって導入される従属節で、主節は L17 の afirmélo を核とする節。ここで用いられている lo はいずれも中性で、L15 の dejalle を受ける。lo traía pensado について。traía < traer の直説法線過去、主語は 1 人称単数、pensado は pensar の過去分詞で、ここでは主格補語ととる。「私はそのことを考えて持ってきていた」。traer を「(何かを) している、かまける」(TSW) の意味とするなら、「私はそのことを考えていた (ので)」。lo traía en voluntad もほぼ同内容で、直訳では「私はそのことを意思の中に持っていた」となる。16-17) con este postrer juego que me hizo: con は原因、理由の意味ととる。juego 「たわむれ」(TSW)。postrer < postrero 「最後の」、つまり「最後のたわむれ」とは、今までされてきたいじめのうち、今回の壺打ちの件を指す。即ち、「彼が私におこなった今回の悪ふざげにより」。17) afirmélo más: afirmélo→lo afirmé。この lo も L15, L16 の場合と同様に dejalle を指す。比較の más があることから、lo afirmé más *que antes* と比較の対象を補い、「以前よりも更にそうすることを確信した」とする。和訳 (p. 65 L14-p. 65 L17)

この壺打ちの件と、盲人が私に加えたひどい侮辱を目にしたことから、私はきっぱりと彼のもとから立ち去ることを決意しました。そうすることを私はずっと考え心に決めていたので、今回彼が私におこなった悪ふざげにより、きっとそれを行なうことを私は確信したのです。

p. 65

Y fue así, que 17

luego otro día salimos por la villa a pedir limosna,

y había llovido mucho la noche antes. 19

17) fue así: así→así. fue (< ser) の主語は前文の意味内容であり、

eso fue así と補う。「そのことはそのようでした」。17) que: 意味内容の希薄な接続詞。18) luego otro día: 「すぐに、やがて」(TSW) の意味の luego との組み合わせで、ここは「翌日に」と解釈できる。vid. LT1B, p. 56, L23。18) salimos por la villa: salimos < salir の直説法点過去 1 人称複数, por は方向の意味。villa 「(ある特権をもつ) 町」(TSW), つまりエスカローナの町のこと。「その町に向けて我々は出発した」。

和訳 (p. 65 L17-p. 65 L19)

それは次のような顛末でした。その翌日私たちは物乞いをするために町へ出発しました。そして前の晩に大雨が降ったところでした。

p. 65

Y porque el 19
día también llovía, y andaba rezando debajo de 20
unos portales que en aquel pueblo había, donde no
nos mojamos, mas como la noche se venía y el
llover no cesaba, díjome el ciego: 23

19-23) この箇所は 2 つの文から成る。前半の文は L20 の andaba を主節の核とし, L19 の porque が導入する節を従属節とする。後半の文は L23 の díjome (→me dijo) を核とする主節と, L22 の mas 「しかし(=pero)」に続く como が導入する従属節。19-20) porque el día también llovía: 理由の節を導入する接続詞 porque であるが, 現代スペイン語ではこの位置では como が用いられる。el día は「昼間」の意味にとる。即ち, por el día. 書き換えると, como por el día también llovía 「昼間にも雨が降っていたので」。尚この el día について FRCA は以下のように触れている。「〔前置詞を伴わない, 時の表現である〕 la noche antes 「前の晩に」のように〕 [el día は] 副詞的な意味を伴い, durante el día 「昼の間」〔に相当する〕」(p. 44)。20) y andaba rezando: この y に導入される節は主

節であるが、ここでは文頭で用いられ、結果を表す用法ととる。andaba < andar 「歩く」の意味であるが、ここでは現在分詞との組み合わせで進行形をあらわし、L19 の porque が導入する従属節に対する主節の核をなす。「したがって彼は祈っていた」。21) portales: 「軒下道」(AYL), 「家々の屋根から迫り出した軒下道」(UNL), 「(街の) 軒廊」(TSW)。現代スペイン語では複数形で「アーケード」(DEM) の意味がある。21) pueblo: 「村」の意味以外にも「町, 市 (=población)」(TSW) の意味でも用いられる。21-22), donde no nos mojamos: この nos mojamos について、VGC, FRCA は、正しくは線過去の nos mojábamos である旨指摘している。「[この mojamos は線過去の mojábamos の] 時制の形態素 -ba- における -b- の消失と, [それによって生じた] 2つの -aa- の同化により [発生した]」(FRCA, p. 44)。ALBL の指摘, 「[この mojamos は] mojábamos [のことである]。18世紀までよく用いられた形式である」(p. 111)。22-23) como la noche se venía y el llover no cesaba: como は y で並べられた2つの理由の節を導入する。se venía < venirse であるが、自動詞の venir に用いられたこの再帰代名詞は、強意の意味ととる。「夜が来てしまったので」。llover は「雨が降る」の不定詞であるが、定冠詞を伴い名詞化されている。即ち「降雨」。la lluvia 「雨」と同義。「雨が止まなかったので」。23) díjome el ciego: →el ciego me dijo 「盲人は私に言った」。

和訳 (p. 65 L19-p. 65 L23)

そしてその日も昼間は雨が降っており、その町にあったいくつかの軒廊の下で彼はお祈りをしておりましたが、そこだと我々は濡れませんでした。しかしながら夜になってしまい雨が降り止まなかったので、盲人は私に言いました。

p. 65

—Lázaro, esta agua es muy porfiada, y cuanto la 24
noche más cierra, más recia. Acojámonos a la posa- 25
da con tiempo. 26

24) esta agua es muy porfiada: agua は「雨」の意味。porfiado, da 「しつこい」。「この雨はとてもしつこい」、つまり中々止まない。24-25) cuanto la noche más cierra, más recia: cierra < cerrar は自動詞で「夜になる」(DEM)の意味で用いられ, la noche が主語。cuanto más A tanto más B で「A すればするほどますます B」(TSW)の意味。即ち, 語を補うと, cuanto la noche más cierra, *tanto más el agua se pone* recia 「夜になればなるほど, ますます(雨が)激しく(なる)」。25) acójámonos: < acogerse 「逃げこむ」(TSW), 「(+a に)保護を求める, 避難する」(DEM)の1人称複数肯定命令。25-26) la posada: LT1B, p. 61, L24 の mesón と同じ「旅籠」ととる。26) con tiempo: 「あらかじめ, 余裕を見て」(TSW), 「あらかじめ, 急がずに, 運よく, 間に合うように」(DEM)。

和訳 (p. 65 L24-p. 65 L26)

「ラサロよ, この雨はちょっとしつこいぞ。夜になればなるほど, ますます激しくなりやがる。早めに旅籠屋に逃げ込むことにしようや」。

p. 65

Para ir allá habíamos de pasar un arroyo, que 27
con la mucha agua iba grande. Yo le dije: 28

27) para ir allá: alláは「あちらへ」の意味の, 方向を表わす副詞である。ここでは「その旅籠屋へ向かうためには」の意味ととる。27) habíamos de pasar un arroyo: haber de+不定詞で, tener que+不定詞に相当する, 義務を表わす用法となる。pasar はここでは他動詞で, 直接目的語は

un arroyo, 「小川, 流れ」の意味があるが, これはエスカローナの市街の増水箇所であるので, 「通りの中で, 水が流れる部分」(RAE21), 「(街路わきの) 排水溝」(TSW) の意味にとる。「我々は1つの排水溝を飛び越えなければならなかった」。27-28), que con la mucha agua iba grande: que は関係代名詞でコンマを伴い説明的な関係節を導入している。先行詞は un arroyo, 節の核となる動詞定形は L28 の iba (< ir) で, que は主格。con la mucha agua で用いられている定冠詞を敢えて訳せば, 「その沢山の雨」となる。つまりこの場面まで話題にされていた, 前日から降り続いた雨のことである。iba grande について。ir (> iba)+「形容詞・副詞及びその相当語句」で, 「(～の状態)にある, (～)である」(SDEJ) をあらわす。「そしてそれは前日からの多量の雨で大きくなっていた」。つまり排水溝があふれていたということ。

和訳 (p. 65 L27-p. 65 L28)

そこへ行くためには我々はある側溝を飛び越えなければなりませんでした。そしてそれは前日からの多量の雨であふれていました。私は彼に言いました。

p. 65

—Tío, el arroyo va muy ancho; mas si queréis, yo 29

p. 66

veo por donde travesemos más aína, sin nos mo- 1
jar, porque se estrecha allí mucho y, saltando, pasa-
remos a pie enjuto. 3

29) tío: 「おじさん, 年配の男」(TSW), 盲人への呼びかけ。cf. LT1B, p. 56, L19. 29) el arroyo va muy ancho: ここで用いられている ir (< va) +形容詞 (ancho) も, L28 の場合と同様に「状態」をあらわす。「[水があふれて] 排水溝がとても広がっている」。29) mas si queréis: queréis

< querer の 2 人称複数, 主語は vos 「あなたが」。「しかしもしあなたが望むなら」。ラサロは盲人に対して vos で呼びかけている。vid. LT1B, p. 56, L19 および L20. ibid. p. 60, L13 など。29-p. 66, L1) yo veo por donde travesemos: veo (< ver) の直接目的語で, donde の先行詞ともなり得る語 (algún lugar 「どこかの場所」) を補い, veo *algún lugar* por donde travesemos とする。por は経路の意味。「～を～通って」。travesemos < travesar, 不特定の語 (*algún lugar*) を先行詞に持つ関係詞が導入節であることから, 接続法現在 1 人称複数が用いられている。travesar について。「他動詞, 稀な使用, atravesar 「横切る」 [と同じ] (…)」 (RAE23)。「私たちが横切ることができるような (どこかの場所を) 私は見つけ出します」。1) *aína*: 「(*ainas* と) 副詞, 早く, わけもなく」 (TSW), いずれも古語で「早く, 容易に」 (RAE21)。1-2) *sin nos mojar*: L1 の *más aína* と同格で用いられ, travesemos にかかる。尚, 不定詞に前置詞が先行するときに, 無強勢代名詞が後接の位置で用いられる現象が中世のスペイン語で見られた (MPL, § 20., IEM, p. 39. cf. LT1B, p. 58, L19)。即ち対応する現代スペイン語の語順にしたがうと, *sin mojarnos* 「私たちは濡れることなく」。2) *saltando*: *saltar* の現在分詞で, 条件の分詞構文的に用いられている。「もし飛び越えれば」。3) *enjuto*: 「干からびた」 (TSW), 形容詞で *pie* を修飾。*a pie enjuto* はしたがって, 「乾いた足でもって」の意。

和訳 (p. 65 L29-p. 66 L3)

「おじさん, どぶがあふれてすごく広がっているんですよ。だけどお望みなら, 濡れずにわけなく渡れる場所をおいら見えますよ。だってあっちの方は幅が狭くなってて, 跳び越えれば足を濡らさずに渡れるでしょうからね」。

p. 66

Parescióle buen consejo y dijo: 4

—Discreto eres, por esto te quiero bien. Llévame 5

a ese lugar donde el arroyo se ensangosta, que
agora es invierno y sabe mal el agua, y más llevar
los pies mojados. 8

4) parescióle buen consejo: 語を補い現代スペイン語の語順にすると, *esto le pareció (a él) buen consejo*, 「このことは彼には良い助言に思えた」。5) discreto eres: discreto 「如才ない, 気の利いた」(TSW) は eres < ser の主格補語であるので, 現代スペイン語では, (*tú*) eres discreto が通常の語順。5) por esto te quiero bien: querer bien 「(恋愛的に) 愛する」(TSW)。「それゆえに私は君を愛している」。6) se ensangosta: ensangostar は他動詞で「せばめる」, 主語は人ではなく el arroyo で再帰形であるので, 再帰受動ととる。「流れがせばめられた」。FRCA は「狭まっている (se estrecha, se hace angosto)」(p.44) の意味としている。6) , que: この que は説明的に理由の節を導入する接続詞ととる。7) agora: →ahora。7) sabe mal el agua: saber bien (mal) +a+人で「～の気に入る (気に入らない, 怒らせる)」(DEM) の意味。語を補うと, *me sabe mal el agua*, 「雨が私に気に入らない」。7-8) más llevar los pies mojados: →más me *sabe mal* llevar los pies mojados。más は副詞で「更に」, 不定詞の llevar は sabe の主語。llevar の意味上の直接目的語は los pies で, mojados はその目的格補語ととる。「濡れた足でいることは更に私に気に入らない」。

和訳 (p.66 L4-p.66 L8)

彼には良い助言であったと見えて, こう言いました。

「気が利くじゃないか, お前。だから俺は好きだぜ。その狭くなっている流れの所にこの俺を連れて行ってくれよ。冬だし, 雨は気に食わねえよ。

ましてや足が濡れるのはもっと気に食わねえからな」。

p. 66

Yo, que vi el aparejo a mi deseo, saquéle debajo 9
de los portales y llevélo derecho de un pilar o poste 10
de piedra que en la plaza estaba, sobre el cual y so-
bre otros cargaban saledizos de aquellas casas, y dí-
gole: 13

9) yo: 底本とした VGC 版ではこのように、この yo のあとにコンマを用いた挿入句が続くため分かりにくい、後続の saquéle の主語である。9) , que vi el aparejo a mi deseo,: この que は理由の節を導入する接続詞ととる。即ち como の意味。aparejo 「何らかの事を行うために必要なこと」(COV), 「準備, 支度 (… 道具)」(TSW)。a について「(目的, 動機, 理由) ~ のために (=para)」(TSW)。分かりやすく書き換えると, como vi el aparejo para mi deseo 「私は私の望みのための支度を見たので」となる。9-10) saquéle debajo de los portales: saquéle → le saqué, le はレイスモで「彼を」, 「私は彼を連れ出した」。debajo de は「下に」の意味であるが, debajo は副詞で「下から」(TSW) の意味がある。即ち debajo de ~ は「~ の下から」。「[saquéle debajo de は] 分離の動作を示している」(JCF, p. 104)。ちなみに FRCA, ALBL では de bajo de と表記されている。尚「軒廊」と訳した portal は, L12 にあるように建物の一部の出っ張った部分の下を通る通路であることから, debajo de が用いられているようである。したがって最終的な訳は「~ から」となるだろう。即ち「軒廊から」。10) llevélo derecho de un pilar: llevélo → lo llevé. 「私は彼を連れて行った」。ここの derecho は形容詞の「まっすぐの」とも副詞の「まっすぐに」の意味にもとれる。前者の場合, 目的格補語で lo と一致していることになる。いずれの場合も「ある一本

の柱のまっすぐ前に彼を連れて行った」の意味。cf. L21. 11) que en la plaza estaba: que は関係代名詞で先行詞は L10 の pilar 「支柱」または poste 「柱」, 関係節の動詞定形 estaba に対して主格である。即ち que estaba en la plaza, 「その広場にあった (支柱あるいは柱)」。11-12) , sobre el cual y sobre otros cargaban saledizos de aquellas casas: 前置詞 sobre を伴う関係代名詞 el cual が導入する説明的な節。el cual の先行詞は L10 の pilar または poste。otros は関係代名詞ではないが, sobre otros *pilares* (*postes*) と語を補う。「その柱とその他の柱の上に」。cargaban < cargar 「自動詞 (…), のっかる, のっている」(TSW)。主語は後続の saledizos。「あれらの家々の出っ張った部分が乗っかっていた」。尚, FRCA (p. 48) によれば, 今日でもエスカローナの広場には, saledizo のある家が保存されているという。12-13) dígole: →le digo. le は間接目的で「彼に」。digo < decir の直説法現在 1 人称単数「私は言う」。和訳 (p. 66 L9-p. 66 L13)

私の望みのためのお膳立てがととのったのを確認したので, 私は軒廊から彼を連れ出し, 広場にあった石の支柱, というか柱の, まっすぐ前に彼を据えました。その柱とその他の柱の真上には, そこにあった家々の出っ張りの部分が乗っかっていたのです。私は彼に言います。

p. 66

—Tío, éste es el paso más angosto que en el arroyo hay. 14
15

14-15) el paso más angosto que en el arroyo hay: paso には「通路, 通り道」の意味に加えて「海峡」の意味もある。どぶ川に後者の意味を適用するのは大げさであるが, 通過する場所の意味にとる。paso にかかる形容詞 angosto 「狭い」は, 定冠詞を伴った最上級である。したがって que は比較の対象を導入する接続詞ではなく, 関係代名詞ととり, 導入す

を伴う名詞句という形式をとっているが、意味的に先の B, B' と同等に扱うことが出来るだろう。la priesa 「(まれ) = prisa」 (TSW), 「[priesa は] 語源に忠実な形式, [ラテン語の] prēssa に由来, [強勢のある短母音の ě が変化して推移した] ie が i へと縮小」 (FRCA, p. 45)。この語を先行詞とする関係代名詞 que が関係節を導入。節の核となる動詞定形 llevábamos < llevar 「持つ, 運ぶ」は他動詞であり, ここでは teníamos < tener と読みかえる。即ち teníamos (la) prisa 「我々は急いでいた」に相当し, 従ってこの que は目的格ということになる。de salir del agua 「雨から逃れることの」。この de は la priesa de salir del agua へとつながり, 「雨から逃れることの急ぐ気持ち」が直訳。「そして雨から逃れるために我々が持っていた急ぎがあったので (→雨から逃れるために我々は急いでおり)」。17-18), que encima nos caía: que は関係代名詞で先行詞は el agua, 説明的な節を導入し, 核となる動詞定形は caía < caer 「落ちる」, 自動詞であることからこの que は主格である。nos は間接目的格「私たちに」の意味となる。encima 「その上に」は副詞であり, 動詞 caía を修飾していることから, , que nos caía encima と並べかえると多少分かりやすいが, encima には「更に」の意味もある。その場合, 「そしてそれ (= 雨) は更に私たちに降っていた」という意味になり得る。ちなみに底本とした VGC 以外, JCF, FRCA, ALBL のいずれも encima の後に前置詞の de が用いられている。その場合, 「そしてそれは我々の上に降っていた」という意味を表わし, encima が単独で副詞として用いられている時のように並べかえての解釈は不可である。18), y lo más principal, : ここでの y は como B と porque B' の 2 つの従属節を並べる役割を担っており, その機能を更に明確にするには FRCA の表記に従って, y の後にコンマを入れるべきである。即ち, , lo más principal, を挿入句とすることで, この y と porque B' がつながることになるだろう。18-19), porque Dios le cegó aquella hora el entendimiento: cegó < cegar 「盲目にする」

は他動詞で、el entendimiento が直接目的語。従って le は間接目的格で「彼から」。尚ここで porque にはコンマが先行しているが、説明的な節を導入しているとはならず、上記のように L16 の como が導入する節と L18 の y によって並べられている。即ち como B y porque B'。「(そして) 神様がその時、盲人から判断力を見えなくしてしまったので」。19-20) fue por darme de él venganza: → fue por darme venganza de él。「[この箇所は接続詞の] que あるいは pues が省略された挿入句である」(JCF, p. 105)。por は目的の para の意味で用いられている。この前置詞 de について。「tomar venganza de (en) + 人, (人) に復讐する」(SDEJ)。「それは彼に対する復讐 (の機会) を私に与えるためでした」。20) creyóse de mí: → se creyó de mí。creerse について。「(de を伴ない, ~を) 信用する」(DEM)。「彼は私を信用した」。

和訳 (p. 66 L16-p. 66 L20)

雨は激しく降り、そしてその哀れな男は濡れていたこともあり、加えて我々は頭に降りかかる雨から逃れたいという急いだ気持ちでいたというのもありましたが、一番大きかったのは、あの時に神様が盲人からその判断に必要な視力を奪ってしまったことにより (それは彼に仕返しをするチャンスを私に与えるためでした)、彼はすっかり私を信じ込んでしまったのです。そして言いました。

p. 66

—Ponme bien derecho y salta tú el arroyo. 21

21) ponme bien derecho: ponme < poner の 2 人称単数に対する肯定命令。me は直接目的格「私を」。他動詞の poner には「置く」の意味と、「(目的格補語に) する」の意味がある。前者の場合、人が目的語であるので「立たせる」の意味にもとれそうであるが、L10 でも問題となった derecho がここでは副詞の「まっすぐ前に」とは解釈できない (盲人が石

柱の前に立たせろとは言わないため)。poner の後者の意味の構文であれば、この derecho は目的格補語の形容詞と解釈することになり、その場合「正しい」(TSW) の意味ととれる。ただし、「立たせる」の意味は多少希薄になる。「私を充分正しい位置に置け」。21) salta: < saltar 「跳ぶ」の 2 人称単数に対する肯定命令。

和訳 (p. 66 L21)

「俺を良い位置につけたらお前が流れを跳べ」。

p. 66

Yo le puse bien derecho enfrente del pilar, y doy 22
un salto y póngome detrás del poste, como quien es-
pera tope de toro, y díjeme: 24

22) yo le puse bien derecho en frente del pilar: ここの L21 と同様に poner を用いた「(目的格補語に) する」の構文が用いられている。le はレイスモで直接目的格。「私は彼を正しい位置に立たせた」。bien derecho は L21 で盲人が発した言葉と同じであるが、ラサロにとっての「正しい位置」とは en frente del pilar 「支柱の正面に」であり、ラサロの小悪党ぶりを表わしている。22-23) doy un salto: < dar un salto 「ぼんと飛ぶ」(TSW)。23) póngome detrás del poste: póngome → me pongo < ponerse 「(ある位置に) つく」(TSW)。detrás del poste 「柱の後ろに」が、その「ある位置」である。即ち、「私は柱の後ろに隠れます」。23-24) , como quien espera tope de toro: ここの como は様態の意味で、説明的な節を導入している。tope 「衝突, ぶつかり」(TSW)。「そしてそれは雄牛のぶつかりを待つ者のようでした」。VGC (p. 66) はこの箇所について、「闘牛をする者たちが退避場所に隠れる時のように」としている。24) díjeme: → le dije. le は間接目的格、「私は彼に言った」。

和訳 (p. 66 L22-p. 66 L24)

彼を良い位置, つまり支柱の正面に据えて, 私はびよんと跳び越えてから, 雄牛の攻撃を避ける者のように石の柱の陰に隠れるのです。そして彼に言いました。

p. 66

—¡Sus, saltá todo lo que podáis, porque deis des- 25
te cabo del agua! 26

25) ¡sus (!): 「(犬などを追いはらうときの) しっし！」(DEM), 「しっかり! やれやれ！」(TSW)。25) saltá: ラサロは盲人に2人称複数vosで話しかけている。saltá→saltad < saltar の2人称複数に対する肯定命令。25) todo lo que podáis: todo lo que poder 「できるだけのこと」(DEM)。L25のsaltáを副詞的に修飾している。podáis < poder の接続法現在2人称複数。25-26), porque deis deste cabo del agua: deste→de este。説明的な節を導入している porque であるが, 節中の核となる動詞定形 deis は dar の接続法(現在2人称複数)であることから, 目的の意味の para que と同義ととる。dar de について, 「[dar, 自動詞] (deを伴ないその部分を下にして) 倒れる」(TSW), 「[dar de manos] (地面, 床に) 手をついて倒れる」(DEM), 「dar de+いくつかの名詞で, その名詞の示すところに倒れる」(MED) とある。つまり de が伴う名詞は現代語では体の一部であるが, 中世スペイン語では倒れる場所にも用いることが出来たようである。agua はここでは「流れ」ととる。「そして流れのこちら側に倒れるために」。

和訳 (p. 66 L25-p. 66 L26)

「さあ, 思いっきり跳んで下さい! そして流れのこっち側に倒れ込んでください!」。

p. 66

Aun apenas lo había acabado de decir, cuando se abalanza el pobre ciego como cabrón y, de toda su fuerza, arremete, tomando un paso atrás de la corrida para hacer mayor salto, y da con la cabeza en el

p. 67

poste, que sonó tan recio como si diera con una gran calabaza, y cayó luego para atrás medio muerto y hendida la cabeza.

27-28) aun apenas lo había acabado de decir, cuando se abalanza: lo は中性で前文を受ける目的格代名詞。se abalanza < abalanzarse 「飛びかかる, 突進する」, 主語は後続の el pobre ciego。aun について。「(cuando と照応して) ~してもなお, ~するとすぐ」(TSW)。これに従えば, 即ち, aun A, cuando B 「A をするとすぐ, B をする」。apenas は否定語で「ほとんど (~ない)」の意味以外に, 「~するとすぐ (…)。y や cuando と照応して使われ, aun apenas と強める」(TSW) とある。いずれの語もどちらか単独で用いることも可能であり, 両方用いられても「強め」であることから, apenas をここで特に否定的に訳すことはない。「そのことを言い終わるとすぐに飛びかかった」。尚 TSW にはこの箇所がそのまま引用されて, 「それを言い終わらぬうちに飛びかかった」という訳が付されており, 若干 apenas の否定の意味が反映されているようである。27-p. 67, L1) このまとまりの中で L28 と L30 の 2 か所で接続詞の y が用いられているが, いずれも節を並べており, A (a y b) y B の構造を成している。A (a) は se abalanza を核とする節, A (b) は L29 の arremete (< arremeter 「さっと飛び・おそいかかる」(TSW) を核とする節で, この 2 つが A のまとまりを形成。B の核となる動詞定形は, L30 の da である。いずれも主語は盲人である。28-29) de toda su fuerza: こ

の *de* は様態の意味で用いられているようであり, *con toda su fuerza* 「全力で」の意味にとる。29-30), *tomando un paso atrás de la corrida*: *tomando* はコンマの後で時の分詞構文的に用いられているととる。*de la corrida* について, この *de* を様態の意味としてとるなら「走って(一步下がった)」となろう。AYL は「走り出す前に」としている。その場合, *antes de la corrida* と補ってとる。「走り出す前に一步下がってから」。30-p. 67, L1) *da con la cabeza en el poste*: *dar con A en B* で, 「A を B にぶつける」。 *da* の主語は盲人。1), *que sonó tan recio como si diera con una gran calabaza*: *que* は関係代名詞で先行詞は *poste*, 主格, 説明的な関係節を導入している。「そしてそれは大きな音を立てた」。 *diera* < *dar* の主語は盲人。「まるで(彼が)大きなカボチャをぶつけたかのように」。2-3), *y cayó luego para atrás medio muerto y hendida la cabeza*: 最初の *y* は結果の意味で用いられているととる。「したがってそのあとで後ろに倒れた」。 *cayó* (< *caer*) の主語は盲人で, *medio muerto* は主格補語。先達の訳, 「半死半生の^{てい}体で」(AYL)。 *hendida* < *hender* 「割る」の過去分詞で, 主格補語と *y* で並べられているのを考慮すると, *con la cabeza hendida* と様態の前置詞を補い, 並べかえてとらえた方がよい。「割れた頭の状態で」。

和訳 (p. 66 L27-p. 67 L3)

私がそう言い終わるや否や, この哀れな盲人は全身の力を込めて牡山羊のようにとびかかります。より遠くへ跳ぶために, 走る前に一步下がってから飛び込みます。そして石柱に頭をぶつけます。その石柱はまるで大きなカボチャをぶつけたかのように, 大きな音を立てました。そして彼はそのあと半死半生で頭を割って後ろに倒れたのです。

p. 67

—¿Cómo, y olistes la longaniza y no el poste?

¡Olé! ¡Olé! —le dije yo.

5

4) ¿cómo (...)? : 疑問詞 cómo の直後にコンマがあることで、部分疑問文を形成してはならず、cómo が単独で用いられているととる。単独使用で¿cómo? 「何ですって」(TSW) の意味があるが、ここは感嘆詞として用いられているととる。その場合、¡cómo! 「これはまあ！」(TSW)。4) , y olistes la longaniza y no el poste: olistes < oler 「嗅ぐ」の点過去 2 人称複数形、主語は vos。olisteis の古形ともいえるが、olistes は通常の音声変化により派生した形式である。点過去以外の時制においては、2 人称複数の語尾において i が存在することから、類推により、現代スペイン語と同形の olisteis が形成された。(CGH, p. 183 及び KTS, p. 105)。尚、no olistes el poste と補う。ここで用いられている 2 つの y について、「(文頭で) で、そこで、ところで」(TSW)。「だが、ところが」(id.)。「ところであなたは長ソーセージは嗅ぎつけたが、石柱は嗅ぎつけなかったのか?」。5) olé: 掛け声の ole 「しっかり (激励, けしかけ)」(TSW) は olé とも表記される。そこにアクセントがあると、oler の 2 人称複数、つまり vos に対する肯定命令となり、olé は現代スペイン語の形態でもある oled のいわば異形ということになる。ここは間投詞「しっかり」と命令形「嗅げ」のしゃれでもある。

和訳 (p. 67 L4-p. 67 L5)

「おや、長ソーセージは嗅ぎつけても石柱は臭わないか? しっかり嗅げよ!」。私は彼に言いました。

p. 67

Y déjole en poder de mucha gente que lo había
ido a socorrer, y tomo la puerta de la villa en los
pies de un trote, y, antes de que la noche viniese, di
comigo en Torrijos.

6

9

6) *déjole*: → *le dejo*, *le* はレイスモで「彼を」。 *dejo* < *dejar* 「預ける, 任せる」の直説法現在 1 人称単数。6) *en poder de*: 「[人] の手中 (手元) に」 (DEM)。6-7) *mucha gente que lo había ido a socorrer*: *que* は関係代名詞。先行詞は *gente* で主格, *lo* は直接目的格で「彼を」。 *había ido* < *ir*, ここでは本来の意味の「行く」の意味ととり, 「不定詞 (ここでは *socorrer* 「助ける」) をしに行く」ととる。 *que había ido a socorrerlo*。「彼を助けに行った多くの人々」。7) *tomo la puerta*: *tomo* < *tomar la puerta* は成句で「たち去る」 (TSW)。8-9) *di conmigo en Torrijos*: *comigo* → *conmigo*。「[dar, 自動詞] (con と en と組み合わせて, ある場所) に行っちゃう (…)」 (TSW)。「[dar, 自動詞] (+consigo) 倒れる, 行ってしまふ, 身を落ち着ける」 (DEM)。9) *Torrijos*: トレド県の街。
和訳 (p. 67 L6-p. 67 L9)

そして彼を助けに行っていた大勢の人たちの手に彼を委ね, 私は小走りでエスカローナをあとにします。そして夜が来る前に私はトリーホスへたどり着いたのです。

p. 67

No supe más lo que Dios dél	9
hizo ni curé de lo saber.	10

9) *lo que Dios dél hizo*: → *lo que Dios hizo de él*. *de* は主題の意味にとる。「神が彼についてしたこと」。10) *ni curé de lo saber*: *lo* の位置に関しては, p. 64, L6-L7, 及び p. 66, L1 を参照。即ち, *ni curé de saberlo*. *curé* < *curar* について, 「[自動詞, 再帰動詞] (～を) 気にかける」 (TSW)。尚 TSW の例文ではこの「～を」を導入する前置詞として *de* が用いられている。ただし, 「(de を従えて, ～に) 気を使う, 手入れ・世話をする」 (id.) とあり。 *lo* は中性で, L7 の *lo que* が導入する節の内容ととる。「私はそのことを知ろうと気にならなかった」。

和訳 (p. 67 L9-p. 67 L10)

私は神様があいつをどうなさせたのかこれ以上は知りませんし、またそれを知りたい気持ちにもなりませんでした。

参考文献 (()) 内は引用の際の略号)

- 会田由訳 (1941). 『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』, 東京: 岩波書店 (=AYL)
- Alonso, Martín (1986). *Diccionario medieval español: desde las Glosas Emilianenses y Silenses (s. X) hasta el siglo XV*, Salamanca: Universidad Pontificia de Salamanca (=MED)
- Alpert, Michael ed. (2003). *Lazarillo de Tormes and The Swindler: Two Spanish Picaresque Novels*, London: Penguin Books
- Blecu, Alberto ed. (1975). *Lazarillo de Tormes*, Madrid: Editorial Castalia (=ALBL)
- Cejador y Frauca, Julio ed. (1962). *Lazarillo de Tormes*, Madrid: Espasa-Calpe (=JCF)
- Corominas, Joan et al. (1980-1991). *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico* (6 vol.), Madrid: Editorial Gredos
- Covarrubias Horozco, Sebastián de (1611, 2006). *Tesoro de la lengua castellana o española (edición integral e ilustrada de Ignacio Arellano y Rafael Zafra)*, Madrid: Editorial Iberoamericana (=COV)
- García de la Concha, Víctor ed. (1989). *Lazarillo de Tormes*, Madrid: Espasa Calpe (Colección Austral, a-12) (=VGC)
- 廣澤明彦 (2001). 「強変化時制 (古典ラテン語) から点過去不規則活用 (スペイン語) への推移について」, 『語学研究』 98 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 99-128 (=KTS)
- 廣澤明彦 (2015). 「“Lazarillo de Tormes” (1554) の文法的特徴についての考察 — 第一章 (上) —」, 『拓殖大学語学研究』 132 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 235-293 (=LT1A)
- 廣澤明彦 (2016). 「“Lazarillo de Tormes” (1554) の文法的特徴についての考察 — 第一章 (中) —」, 『拓殖大学語学研究』 134 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 121-176 (=LT1B)
- ホセ・ガルシア・ロペス著, 東谷頼人, 有本紀明訳 (1976). 『スペイン文学史』

- 東京：白水社
- Lathrop, Thomas A. (1984). *Curso de Gramática histórica española*. Editorial Ariel: Barcelona (=CGH)
- 宮城昇（ほか）編（1999）。『現代スペイン語辞典（改訂版）』東京：白水社（=DEM）
- Menéndez Pidal, Ramón (1906, 2006). *El dialecto leonés (edición conmemorativa 1906-2006)*, León: El Búho Viajero (=MPL).
- 中岡省治（1993）。『中世スペイン語入門』東京：大学書林（=IEM）
- Pedraza, Felipe B. et al. (1980). *Manual de literatura española. II Renacimiento*, Estella (Navarra): Cénlit Ediciones
- Real Academia Española (1992). *Diccionario de la lengua española (21ªed.)*, Madrid: Espasa-Calpe (=RAE21)
- Real Academia Española (2014). *Diccionario de la lengua española (23ªed. Edición del Tricentenario)*, México D. F.: Espasa Libros (=RAE23)
- Real Academia Española (1963). *Diccionario de autoridades* (ed. facsímil), Madrid: Gredos (=AUT)
- Rico, Francisco ed. (1987, 2002¹⁶). *Lazarillo de Tormes. Edición de Francisco Rico*, Madrid: Cátedra (=FRCA)
- 高垣敏博編（2007）。『西和中辞典』東京：小学館（=SDEJ）
- 高橋正武（1984）。『西和辞典（増訂版）』東京：白水社（=TSW）
- 拓殖大学外国語学部平成22年度廣澤ゼミ（4年）編（2011）。『「ラサリーリョ・デ・トルメス」の注釈』（私家版）
- 牛島信明訳（1997）。「ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯」, 『ピカレスク小説名作選』, 東京：国書刊行会（=UNL）

（原稿受付 2017年11月11日）

〈資料〉

文化的反義語

— 英語の実例集 —

山田政通

要 旨

本稿では、著者がこれまで集めてきた英語の文化的反義語の実例を紹介した。まず第2節では、多項非両立性、二項対立、コンテキスト依存の観点と標準的反義語との差異を踏まえた上で、文化的反義語を定義し、これまでの研究で指摘されてきた代表例を確認した。以上を踏まえて、第3節では、著者が集めた文化的反義語の実例を日常生活、一般社会、文化の3つの分野別に整理し、適宜解説を加えた。最後に、時間の経過と共に変わりゆく文化的反義語にも触れ、現在は消滅してしまった例や変化が進行中のもの、そして将来変化しそうな例を挙げた。

反義語は本来意味論の研究分野に属するが、文化的反義語は現実世界と深く関わり、コンテキスト依存性が高いので語用論の色彩が濃いトピックである。本稿を契機に文化的反義語の重要性が認知され、英語のみならず他の言語でも研究が進むことを期待する。さらに、そのような研究が、異文化理解や辞書の記述の向上、さらに翻訳・通訳などの分野に応用され、効果を上げることが出来れば幸いである。

キーワード：文化的反義語、多項非両立性、二項対立、コンテキスト依存、標準的反義語

目 次

1. はじめに
2. 定義と代表例
 - 2.1 文化的反義語とは

- 2.2 代表例
- 3. 実例集
 - 3.1 日常生活
 - 3.2 一般社会
 - 3.3 文化
 - 3.4 文化的反義語の変遷
- 4. 終わりに
- 参考文献

It is no exaggeration to say that antonyms are a ubiquitous part of everyday language and culture. (Jones 2002: 181)

(反義語は、日常の言語と文化に遍在すると言っても過言ではない [著者訳]。)

1. はじめに

本稿では、山田 (2015) に従い、文化的な背景から成立する反義語を「文化的反義語」(cultural antonyms) と呼ぶ (詳細な定義は、次節に示す)。反義性について調べる過程 (Yamada 2009) で、著者が文化的反義語の着想を得たのは、Hofmann (1993) を読んだ時である。アメリカ出身の Hofmann は、日本の大学で教鞭をとり、滞在した経験を基に、多くのアメリカ人にとり *mountain* の反対は *valley* であるのに対して、日本人の多くにとっては *山* の反対は *海* であると述べている (反義語ペアは、A / B で示す。カッコ内は補足説明) :

(1) **mountain / valley** (アメリカ人にとっての代表的な地形)

(2) **山 / 海** (日本人にとっての代表的な地形) (Hofmann 1993: 40)

Hofmann は、この日英語の反義語ペアの違いには、言語の知識と共に文化的な背景が関連していると主張した (“the pair constitutes part of their culture as well as linguistic knowledge” p. 44)。彼は、日本人は

山と海に挟まれた限定された地域で生活することが多いので、自然にこの二つの地形を対照的に捉えるようになったのであろうと述べている。

英語の反義語の典型例は、*long / short, alive / dead, up / down*などで「標準的反義語」(canonical antonyms, Jones et al. 2012: 13)と呼ばれる。概ね基本語彙からなり、反義語としての認知度が高く、辞書にもその旨の記載がある。一方、本稿で取り上げる文化的反義語は、ある特定のコンテキストではじめて二項対立の関係が顕在化するペアである。文化的反義語についての辞書の記述を見ると、それぞれの語の説明はあるが、当該のペア2語の対立関係に言及されていないことが多い。例えば、イギリスの劇場の座席の区分として、*the stalls / the circle*（一等席 / 栈敷席）という対比があるが、それぞれの語のエントリーに劇場のどの部分の席を指すかの解説はあるが、両者をペアとして捉え、その対比関係に言及した辞書に出会ったことはない。

本稿の目的は、この数年著者が収集してきた英語の文化的反義語の実例を整理し、解説をつけて提示することである。これを契機に、文化的反義語の重要性が認知され、英語のみならず他の言語でも研究が進むことを期待したい。そのような研究が、異文化理解や辞書の記述の向上、さらには翻訳・通訳などの分野にも貢献できれば幸いである（尚、日本語の実例については、別に稿を改めて発表する予定である）。

言うまでもなく、本稿で示す英語の文化的時反義語の例は、いかなる意味でも「網羅的」ではなく、「部分的」である。事例は、著者自身の現地滞在体験（イギリス [特にスコットランド]、アメリカ [特に東海岸]、カナダ、オーストラリア等）、マスメディア（テレビ、新聞、雑誌、ネット等）から得た情報などを基に集められた私的なリストである。しかし、時間をかけて試行錯誤の上で収集した実例で、文化的反義語研究の第一歩になればと考え、今回本稿で紹介することにした。将来、拡充され、より網羅的になることを願っている。

冒頭の引用にも言及されているが、文化的な背景に裏打ちされた文化的反義語は、反義語の遍在性の一つの側面を示す事例であると考えられる。

本稿全体の構成は以下の通りである。まず第2節では、文化的反義語の定義とこれまで指摘されてきた代表例を挙げる。次の第3節が本稿の本体であり、著者が集めた文化的反義語の実例を分野別に示し、解説を加える。最後に第4節で本稿のまとめと今後の課題を述べる。

2. 定義と代表例

2.1 文化的反義語とは

本稿では、山田（2015：154）を基に、文化的反義語を、「元来はあるカテゴリーの下位語として多項非両立性（multiple incompatibility）の関係にある2語が、実際の言語使用のコンテキストで選択肢がその二つに限定され、あたかも相補的反義語のように扱われる例」と定義づける。文化的反義語は、他の反義語と比較して、特にコンテキスト依存度が高いことが特徴である。Murphy（2003：174）は、標準的反義語がコンテキストに中立的（context-neutral）であるのに対して、文化的反義語はコンテキストに依存的（context-dependent）な特徴があると述べている。有標理論の観点からすると、前者を無標（unmarked）、後者を有標（marked）と見なすことも出来るであろう。

（1）の *mountain / valley* を例にすると、以下のように地形（geography）の下位語としては通常複数のもが存在すると考えられる：

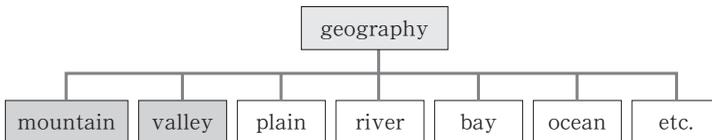


図1 文化的反義語としての *mountain / valley*

多くのアメリカ人にとっては最初の二つが強く意識されていて、“What is the opposite of *mountain*?” (*mountain* の反対は何?) と尋ねられると多くの場合 *valley* と答える。最初の二つに意識が集中すると、この二つが二者択一の関係になり、二項対立 (binary opposition) を示す反義語のように扱われるようになると考えられる。同じ質問について、日本人の場合は、「海」(*ocean*) に注目する傾向が高い (ただし、「川」, 「里」, 「野」と答える人や「谷」の可能性もあるだろう。ただし、近年「海の日」に続き、「山の日」が国民の祝日となったことは、「山」と「海」の関係性の強さを示している)。

筆者は自分の留学体験等を通じて、文化的反義語が異文化理解へのキーワードになると考えている。例えば、イギリスの新聞に関する *tabloid* / *broadsheet* (大衆紙/ 高級紙) の区別は、単に新聞の記事内容の対比にとどまらず、その読者層も労働者階級 (*working class*) と中産階級 (*middle class*) という社会を二分する階級の区別に沿っていることが見えてくる。また、大衆紙の代表格の一つの *The Sun* と著名な高級紙の *The Times* は、双方とも同じ企業が発行しているというのも興味深い事実である。同様に、アメリカを理解する上で、*state* / *federal* の対比を知っておくことは、重要である (山田 2015: 156-157)。アメリカ人は日常生活では、州を第一に考え、連邦政府は必要悪のように考えているところがある。連邦政府は、本当はない方がいいが、ないと対外的に困るので仕方なく認めておく、という具合である。これは、今の日本人が持っている国と地方の考え方とは相当大きく異なる。

文化的反義語は、普通の辞書には反義語としての記載がない場合が多く、語学学習者には学びにくいのが現状である。また、反義語は本来意味論の範疇に属するが、文化的反義語は現実世界と深く関わり、コンテキスト依存性が高いので語用論の色彩が濃い研究課題である。

2.2 代表例

先に、Hofmann (1993: 40) の *mountain / valley* (アメリカ人の場合) の例を挙げたが、ここでは他の研究者が反義語の議論の中で挙げた文化的反義語の候補となる英語の例をまとめて提示して、第3節への導入としたい。

① 大塚・中島 (1982)

大塚・中島 (1982: 84) は、反義性のカテゴリーの一つとして「文化的に定義された反義」に言及し、英語の例を二つ挙げている：

(3) *man / brute* : 人 / 野獣 (生き物の区別)

(4) *town / country* : 都会 / 田舎 (生活圏の区分)

前者は、知性や思慮のある「人間」に対してそれらを欠く「野獣」という対立を、また後者は、人の生活圏の分類として「都会」に対して「田舎」という対立を指摘している。後者については、ロンドンの *METRO* 紙 (地元の free paper) に *METRO Property* という住宅紹介記事があり、*town & country* として地域を明確に二分して住居が紹介されていた (2016年8月30日)。また、イソップ物語 (Aesop's Fables, 講談社インターナショナル, 1988: 30) の英訳でも “town mouse” と “country mouse” の話が出てくる。アメリカ英語 (AmE) では *city / countryside* という対立になるであろう。

② Hoey (1983)

Hoey (1983: 112) は、文化的対立語 (cultural opposites) として、

(5) *red / green*

を挙げている。Hoey 自身はこのペアについて特に解説をしていないが、交通信号のコンテクストで、それぞれ赤信号 (red light) と青信号

(green light) を指し, “stop” と “go” を意味することを表していると考えられる。それらを含む *run a red light* (赤信号を無視する) や *give someone/ something the green light* (～に許可を与える) などの表現があり, 一般的なコンテキストで前者は「停止命令」を, 後者は「(公式) 許可」を表す。

③ Cruse (1986 and 2000)

Cruse (1986: 198 & 2000: 167) は, 論理的・本質的な根拠はないが, 事実上二つの選択肢しかない状況で対立して使用される語を「偶然の対立語 (accidental opposites)」と呼び, 次のような例を挙げた:

(6) *single-decker* / *double-decker*: 1階建てバス / 2階建て

(バスの種類)

(7) *tea* / *coffee*: 紅茶 / コーヒー (飲み物の選択: マンチェスター大学の教員控室で)

(8) *gas* / *electricity*: ガス / 電気 (一般家庭での熱源)

Cruse はイギリスで教鞭をとっていた学者なので, 例にもイギリス文化の色が出ている。(6)はイギリスのバス特有の区分で, 理論上は *triple-decker* がありうるが, 車体の安定性, 橋の高さなどの現実的な制約があり, この2種類に限られているので対比が生じる。(7)も Hoey の勤務校での限定的な場面での体験が基になっていて, そこでの飲み物の選択は紅茶かコーヒーに限られていたようだ。この選択肢は, 相当広い範囲でも有効で, 外食時の飲み物の代表はこの二つで, 飛行中の機内で食事後に提供される飲み物も通常この二つであろう。(8)の選択肢も, 先進国を中心に世界の多くの地域で当てはまると思われる。

④ Murphy (2003)

Murphy (2003: 173) は, コンテキストで反義語が変化する例として,

以下の例を挙げているが、これも文化的反義語の候補となりうる：

- (9) *sweet* / *salty* (スナック食品)
- sweet* / *bitter* (チョコレート)
- sweet* / *hot* (香辛料)
- sweet* / *dry* (ワイン)

Sweet は多義語であるが、明確な標準反義語を持たないように思われる。上記の例はいずれも味覚 (taste) に関わる例で、カッコ内で示したように対象によって、*sweet* と対になる語が変わる。さらに、果物の味については *sweet* / *sour* (甘い / すっぱい)、音 (sound) については *sweet* / *harsh* (心地よい / 不快な)、水や空気については *sweet* / *stale* (新鮮な / 古くなった、よどんだ) などが追加できる。

⑤ Riemer (2010)

Riemer (2010: 140) は、動詞の例として以下の3つを挙げている：

- (10) *colour* / *bleach* : 色染めする / 脱色する (毛髪の色染)
- (11) *plant* / *harvest* : 植える, 種をまく / 収穫する (植物の栽培)
- (12) *rehearse* / *perform* : 稽古する / 上演する (演劇や演奏等)

これらの対立に関しては、語の意味についての百科事典的な知識が必要であると述べている (p. 140 : “part of our encyclopedic knowledge about the word’s meaning”)。また、Riemer は一つの語がコンテキストにより複数の反義語を持ちうると指摘して、以下の例を挙げている (pp. 153-154) :

- (13) *red* / *white* (ワイン)
- red* / *green* (交通信号)
- red* / *black* (簿記・会計)

コンテキストにより、*red* は上記のように少なくとも3つの反義語が存在する。

⑥ Jones et al. (2012)

Jones et al. (2012) は、コーパスから実際の使用例を多く集め、談話の視点も踏まえて反義語を分析した実証的な研究書であり、示唆に富む。以下のように、広範囲にわたり文化的反義語の候補となるペアを紹介している：

- (14) *white* / *green* (アスパラガス asparagus の種類 [p. 14])
- (15) *warm* / *light* : *a warm coat* (暖かいコート) と *a light coat* (涼しい・軽いコート) の対比より (p. 103)
- (16) *warm* / *cold* : *a warm front* (温暖前線) と *a cold front* (寒冷前線) の対比より (気象で前線の種類 [p. 103])
- (17) *own-labels* / *brands* : 自社ブランド商品 / ブランド商品 (p. 109 : 前者は, *own-brand* という言い方もある)
- (18) *Wildean* / *Dickensian* : ワイルド風の / ディッケンズ風の (19世紀のイギリスを代表する二人の作家, Oscar Wilde [1854-1900] と Charles Dickens [1812-70] を指す [p. 110])
- (19) *cat* / *dog* : 猫 / 犬 (「慣習的にペアとなっていて, 両立しない語」 [“incompatible terms that are conventionally paired,” p. 111] であるとの解説がある)
- (20) *style* / *substance* : (うわべだけの) スタイル / (実質的な) 中身 (英米で, 当初は政治家の派手な振る舞いと政策の中身の不一致を指していたが, 次第に広く他のコンテキストでも使用されるようになった [p. 113])
- (21) *laparoscopic surgery* / *open surgery* : 腹腔鏡手術 / 開腹手術 (代表的な外科手術の方法。興味深いのは, 前者は専門用語として確立しているが, *closed surgery* と呼ばれることもあるという [p. 114]。この言い方は, 腹部に穴をあけるので厳密には正確ではないが, *open* / *closed* という標準的反義語の結びつきの強

さを示している [p. 64 & p. 114])

- (22) *real* / *virtual* : 現実の / 仮想の (現実世界とネット上の仮想世界の対比。 *virtual reality* [仮想現実] というフレーズもあり、この二つの境はますます混沌となっている [p. 125])

3. 実例集

この節では、これまで著者が集めた英語の文化的反義語の実例を紹介する。「はじめに」でも述べたように、ここに挙げる実例集は、決して網羅的なものではなく、あくまでも今後の研究の出発点を目指したものである。

実例は、以下のように分類する。まず、(3.1)~(3.3)では、分野別に日常生活 (3.1)、一般社会 (3.2)、文化 (3.3) の3つに分類して解説する。そして最後の (3.4) では、時間の経過と共に文化的反義語が変遷する姿に触れる。各分類はさらに下位分類されていて、その中で文化反義語の例は最初の語のアルファベット順に配列されている。

各見出しは、*A* / *B* の形で提示し、[:] の後にそれぞれの日本語訳を示し、カッコ【】内に対比関係を明示する。必要があれば、それ以下に補足説明を加える。さらに、当該の文化的反義語の使用や指示対象が、英語圏内の特定地域に限定される場合は、見出し語の直後に (BrE) [イギリス英語]、(AmE) [アメリカ英語]、(CanE) [カナダ英語]、(AustE) [オーストラリア英語]、(ScotE) [スコットランド英語] などと地域を表示した。特に地域表示がない場合は、地域の限定がないことを示す (ただし、この地域限定はあくまでも目安である)。

また、*A* / *B* の語句の順番については、以下のような原則に従った：(1) 基になるフレーズや実例での出現の順 (例：*trick* / *treat* は、定形表現の “Trick or treat!” の順に従った)、(2) 時間軸の順 (*Oxford* / *Cambridge* はそれぞれが大学を指し、前者が 1249 年、後者が 1284 年の創立

であるので、その順で表示；plant / harvest は栽培過程の順）、(3)注目度の順（*Washington, D. C. / New York* は、著者の前者の地での体験が基になっているのでこの順となる）、(4)以上のどれにも該当しない場合はアルファベット順とした。

これ以降では実例を見ていくが、日常生活はさらに下記のように①～⑦に下位分類されている。

3.1 日常生活：①飲食 ②買い物 ③交通 ④名前 ⑤地名 ⑥イデオム (*X or Y*) ⑦その他

① 飲 食

- (23) *beef / chicken*：牛肉 / 鶏肉【機内食のメインディッシュの選択】*Beef or chicken?* という形で用いられる。既出の *Tea or coffee?* と同様に、この2語はよくペアとなり対比的に使われる。
- (24) *brown rice / white rice* (AmE)：玄米 / 白米【健康志向が強いアメリカのレストランでの rice の種類の選択】。
- (25) *butter / margarine* (AmE)：バター / マーガリン【パンやトーストに塗るものの代表】アメリカ滞在中著者もよく買い求めたが、Unilever 社のバター代用品（＝マーガリン、1981年発売）に“I Can’t Believe It’s Not Butter!” という独特のネーミングの商品がある。この2語の対比を上手く逆手に取っている。
- (26) *English / Continental* (BrE)：イングリッシュ / コンチネンタル【朝食の選択】機内やホテルなどで、*English or Continental?* というフレーズで用いられる。
- (27) *for here / to go* (AmE)：店内 / 持ち帰り【ファーストフード店で注文時の選択】店員が *For here or to go?* (店内でお召し上がりですか、それとも持ち帰りですか) と客に尋ねる形で使われる。内田 (2009：203-204) によると、AmE では文頭の For が

ない *Here or to go?, To stay or to go?, Stay here or to go?* などが紹介されている。また BrE では *For here or take away?, Eat here or take away?, Eat in or take away?* などのバリエーションがあるという。ロンドンでは、最後の *Eat in or take away?* という看板を店先でよく目にした (2016 年夏)。

- (28) *still / sparkling* : 普通の水 / 炭酸水【水の種類の選択】*Still or sparkling?* の形で用いられる。ワインの選択でも使用でき、その場合は *still or fizzy* という言い方もある。
- (29) *tea / coffee* : 紅茶 / コーヒー【飛行中の機内サービスで、食事後の飲み物の選択】*Tea or coffee?* の形で使われる。(7)の解説も参照のこと。
- (30) *white / brown* : 白 / 茶色【イギリスの大学の寮でのトーストの選択】*White or brown?* として用いられる。
- (31) *yellow / chocolate* (AmE) : 白生地 / チョコレート生地【スポンジケーキの選択】*birthday cake* などの注文時に、スポンジケーキの選択について店員から尋ねられる。

② 買い物

- (32) *brand / generic* (AmE) : ブランド薬品 / ジェネリック薬品【薬局での処方箋薬の選択】*Brand or generic?* の形で使用される。日本では前者を先発医薬品、後者をジェネリック (後発) 医薬品と呼んでいる。
- (33) *buy / rent* : 買う / 借りる【住居の契約形態】それぞれ持ち家と賃貸を指す。通常辞書には *buy* の標準的反義語としては *sell* が載っているが、住居に関しては買うか借りるかの選択も重要である。この文化的反義語は、家賃 (rent) が払えなくて立ち退きを迫られている若者たちの葛藤と友情を描いた *RENT* というブ

ロードウェイ・ミュージカルからヒントを得たものである。また、同ミュージカルには、**Rent or eviction** (家賃を納めないと立ち退きだ) という「家主から借り手への警告」があり、**rent / eviction** (家賃 / 立ち退き) という対比も文化的反義語と捉えられるであろう。

- (34) **cash / charge** (AmE) : 現金 / (クレジット) カード 【デパート等での支払い方法の選択】店員が **Cash or charge?** (「現金でしょうか、それともカードでしょうか」と尋ねる。同様な表現として **Cash or credit?** があるようだ。ロンドンのあるスーパー (Sainsbury Local) では、店員が **Card or cash?** と尋ねていた (2016年8月)。カードで払う人が優勢だからか、**card** が先になっている。また、客のカード情報を不法入手する犯罪が頻発するアメリカでは、最近客自らが店員に **Chip or swipe?** (「決済はICチップ又は磁気のどちらを読み取る方式?」) とカード情報の読み取り方式を不正防止の為に確認することがあるという (読売新聞 2017年2月12日, p.21 「特派員直伝・トラベル英会話」)。
- (35) **checking account / savings account** (AmE) : 当座預金 / 貯蓄預金 【銀行口座の種類】前者は、預金に利子を生まない、小切手 (check) 用の口座、後者は利子を生む、貯蓄用の口座を指す。BrE では、それぞれ **current account**, **deposit account** と呼ばれている。
- (36) **in-store / online** : 店舗内の / オンラインの 【販売方法の種類】**in-store sales** (インストアー販売高) と **online sales** (オンライン販売高) という対比がある。また、“Buy **in-store** and/or **online**” という広告をよく見かけるようになった。
- (37) **laptop / desktop** : ラップトップ / デスクトップ 【パソコンの種類】この選択は、現状では少々時代遅れになっており、今後の

PC 機器の変化に合わせて、変わるであろう。

- (38) **paper / plastic** (AmE) : 紙袋 / ビニール袋 【スーパーのレジでの持ち帰り袋の選択】 店員が買い物客に **Paper or plastic?** と尋ねる。日本のデパートでも、特にパン店等で紙かビニール袋かの選択があるところもある。日本同様、イギリスでも食料品の買い物で紙袋を使う習慣がなく、ロンドンのスーパーでは、ただ“Bag?” と、ビニール袋が必要かどうかを尋ねられ、必要だと追加料金が加算される仕組みになっていた (2016 年夏)。

③ 交 通

- (39) **bus / coach** (BrE) : 市内バス / 長距離 (観光) バス 【バスの分類】 前者は、大都市では通常 2 階建てバス (**double-decker**) である。後者は、1 階建てバス (**single-decker**) が主流で、元々は馱馬車 (**stagecoach**) として使用されていた大型有蓋四輪馬車を指したが、現在では同じ役目を果たす長距離バスの意味に変化した (小島 2004 : 218)。少々ややこしくなるが、AmE ではフライトのエコノミークラス (**economy class**) のことを **coach (class)** ということがある。
- (40) **contactless / Oyster** (BrE) : 非接触型カード / オイスターカード 【ロンドンの交通機関を利用する際の支払い方法の選択】 **contactless** と **oyster** の選択肢がある。後者は、日本の Suica と似た方式で、IC カード乗車券に金額をチャージする。前者は最近導入された方法で、銀行が発行するカードに交通機関利用機能を付加するもので、一つのカードで日常生活をカバーできるのが利点のようだ。
- (41) **domestic / international** : 国内線 / 国際線 【国際空港でのフライトの種類】 将来的にはこれに **space** (宇宙) が加わるかもし

れない。実際すでにアメリカでは *spaceport* があるという (読売新聞 2011 年 10 月 18 日)。

- (42) *off-peak / anytime* (BrE): ラッシュ時間帯外 (乗車) / 無制限 (乗車) 【ロンドン市内の交通機関 (地下鉄とバス) 利用パスのタイプ】前者は利用者が多い時間帯は利用できないタイプで、後者はどの時間帯でも利用できるタイプを指す。
- (43) *single / return* (BrE): 片道 / 往復 【運賃・切符の種類】 *Single or return?* というフレーズで。往復には割引の特典がある。AmE の *one-way / round-trip* に当たる。ただし、BrE では *round-trip* は「一周旅行」の意味になる。

④ 名 前

- (44) *GI Joe / GI Jane* (AmE): 男性の米兵 / 女性の米兵 【兵士の男女の区別】女性の場合は、他に *GI Jill* や *Joan* がある。*GI* とは government issue (官給品) の略字である。
- (45) *Jack / Jill*: 男 / 女 【子供や若い男女の区別】 *LDEL C* (p. 738: *OGBAC*, p. 237 にも) によれば, “two children in a nursery rhyme” (伝承童話) として, 以下の例が紹介されている (*OGBAC* 2005: 237 にも):

*Jack and Jill went up the hill
To fetch a pail of water;
Jack fell down and broke his crown,
And Jill came tumbling after.*

女の子は *Gill* (発音に変化なし) となることもある。他に *John / Jane, Joe / Jane, Jack / Jean* などのバリエーションがある (いずれも頭韻を踏んでいることに注目)。スコットランド英語 (ScotE) には、男女を示す *Jock / Jean* がある (*Jock* は *John*

の異名)。同様に、*Romeo / Juliet* (Shakespeare の悲劇中の男女名。通信文字の R と J を表す通信符号としても使用される)、さらに *Adam / Eve* (旧約聖書の「創世記」に出てくる神が初めて造った人間の男女) なども類例であろう。日本語にも **太郎 / 花子**がある。

- (46) *John / Joan* (CanE?): 男性用 / 女性用 【トイレの男女別の表示】 地域のスポーツ施設の敷地内の設けられていたプラスチック製の野外用簡易トイレのドアの表示で、*Jiffy John / Jiffy Joan* として用いられていた (製造会社の商標であろう)。男子用は茶色、女性用はピンク色のボックスであった (2012年8月カナダ、バンクーバーにて)。
- (47) *John Doe / Jane Doe* (AmE): 男性 / 女性 【仮名での男女の区別】 警察や裁判などで身元不明や実名を伏せる時の仮名を指す。
- (48) *us / them, we / they*: 味方 / 敵 【対立関係にある敵と味方の区別】 アメリカのニュース専門ケーブルテレビ局である CNN で放送された、イスラム教徒とアメリカ人の関係についての特別レポート (2016年8月再放送) の題名は “Why They Hate Us?” で、they はイスラム教徒、us はアメリカ人を指していた。この2語の対立は、通常の学習辞典に記載されていない。次の例は、*Daily Mail* 紙 (電子版: 2013年6月13日) の記事から取ったものであるが、“Mommy Wars” というフレーズについての解説で、働くママと専業主婦ママの対立関係を描くのに “us vs. them” を使用している: “The phrase ‘Mommy Wars’ was originally used to describe the us vs. them attitude between working and stay-at-home moms” (働くママと専業主婦ママの対比については、3.3の(111)で扱う)。

⑤ 地名

- (49) *the East Coast / the West Coast* (AmE) : 東海岸 / 西海岸
 【アメリカの両海岸】一般的に、東海岸の住人は伝統を重んじ、芸術・文学・音楽などの文化に興味があるとされ、西海岸の人々は自由な発想を重んじ、自然、スポーツ、健康食品に関心が高いとされる (LDELIC, p. 434 と pp. 1565-6 の Cultural Note 参照)。east と west は単独で反対方向を示すが、ここに挙げるフレーズは、ただ単に方向の対立を示すだけでなく、それに付随して対照的な独自の特徴を有するので、文化的反義語として挙げている。次項も同様の趣旨で挙げている。
- (50) *the East End / the West End* (BrE) : 東部地区 / 西部地区
 【ロンドン中心部の対照的な街区分】東京の **下町 / 山の手**に通じるところがある。前者は、もともとは労働者階級の住居地で下町気質が強かったが、近年の再開発で変貌を遂げつつある。後者は、高級住宅や高級店の多い商業地区で、劇場、ホテル、レストランが多くエンターテイメントの中心地でもある。また、前者の住民は *East Enders* と呼ばれ、同名の BBC の連続ドラマ (1985 年放送開始) が人気を博し、長寿番組となっている (LDELIC, p. 434 と p. 1566 参照)。
- (51) *Edinburgh / Glasgow* (BrE) : エジンバラ / グラスゴー 【イギリスのスコットランドを代表する 2 大都市】前者は、政治と商業の中心でホワイト・カラーの街 (人口 49.2 万人, 2014 年の統計)、後者は工業中心でブルー・カラーの街 (59.9 万人) で、対照的な性格を持つ。著者の体験では、少なくともエジンバラの住人のグラスゴーに対する対抗意識は相当根強いと思われる。
- (52) *Land's End / John o'Groats* (BrE) : 南端 / 北端 【イギリス国土の両端にある地名】それぞれイギリスの南端 (西南端) と北端

と考えられている地名で、*from Land's End to John o'Groats* (又は地名を逆にして *from John o'Groats to Land's End*) というイディオムがあり、「イギリスの端から端まで、イギリス中で」という意味で使用される。AmE では、*from California to the New York Island* というフレーズがある (Woody Guthrie の *This Land is Your Land* (1956) という歌の中にも出てくる)。同様に日本語にも、**北は北海道から、南は九州、沖縄まで**というフレーズがある。Yamada (2009: 62) の反義語の分類では、方向的反義語 (directional antonyms) の中の antipodal (対蹠的反語語) に近い。一つの事物・事態に内在するある軸の両極を示す反義語であり、*top / bottom*, *start / finish* (名詞として、競技・ゲームなどの開始と終了を指す) がその例である。また、Jones et al. (2012: 58) は反義語のペアと連語関係の高い7つの型 (frames) を指摘しているが、*from X to Y* という定型表現もその一つであり、“transitional antonymy frame” と呼んでいる (他の6つは、*X and Y alike*, *both X and Y*, *either X or Y*, *whether X or Y*, *between X and Y*, *X versus Y* である)。

- (53) **Washington, D. C. / New York** (AmE) : ワシントン D. C. / ニューヨーク 【アメリカ東海岸を代表する二つの都市】前者は政治の中心地、後者はビジネス、金融、エンターテイメントなどの中心地である。特に、ワシントン D. C. の住人にとって、ニューヨークへの対抗意識は強い。ただ、逆は必ずしも真ではないようだ。人口、経済規模などで圧倒的な力を持っているニューヨークの住人は、ワシントン D. C. をそれほど意識していないのであろう。

⑥ **イディオム *X or Y***

ここでは、*X or Y* という選択を示すイディオムが基になっている文化的反義語をいくつか紹介する。先にも触れたように、Jones et al. (2012: 58) は反義語のペアと連語関係の高い7つの型を指摘しているが、(either) *X or Y* もその一つであり、本稿でもここまでの例の中で頻繁に出てきた。

- (54) ***heads / tails*** : 表 / 裏 【***Heads or tails?*** (表か裏か) という表現から】 順番や勝負などを決定する為にコイントス (toss-up) をする時の選択肢で、他にも *Heads I win, tails you lose.* (表なら私の勝ち、裏なら君の負け [ジョーク]), や *can't make heads or tails of ~* (何が何だかさっぱりわからない) などのイディオムがある (ジーニアス, pp. 987-8)。
- (55) ***make / break*** : 成功する / 失敗する 【***make or break*** というイディオムから】 「~の成否を握る、運命を左右する、(いちかばちかの) 賭けである」という意味で用いる。次の例文は、毎夏イギリスのエジンバラで開催される実験的演劇祭 (the Fringe) についての報道のタイトルである: “**Make or break at the Edinburgh Fringe**” 「エジンバラ・FRINGE祭で当たるか、滑るか」 (*BBC News*, 2010年8月6日)。両語は脚韻を踏んでいる。
- (56) ***shape up / ship out*** (AmE) : (仕事で) がんばる / 去る 【***Shape up or ship out*** というイディオムから】 「(行いを改めて) しっかりしろ、さもなければ出て行け」 (ジーニアス, p. 1911)。LDOCE (p. 1668) には、AmEの口語表現で “used to tell someone that if they do not improve, they will be made to leave a place or their job” と説明されていて、相手に奮起を迫る表現である。これも最初の語が頭韻を踏んでいる。
- (57) ***sink / swim*** (AmE) : 溺れる / 泳ぐ 【***sink or swim*** というイ

ディオムから】ジーニアス大辞典では、(1)一か八か、のるかそるか、(2) [S~ or swim.] おぼれたくなければ泳げ (米国の英語同化政策で唱えられた標語) という二つの意味が掲載されている。この両語も頭韻を踏んでいる。

- (58) **take it / leave it** : 受け入れる / 置き去りにする 【**take it or leave it** というイディオムから】ジーニアス (p. 2120) には、「承諾するかしないかは君の勝手だ、これでだめならなかったことに」という意味で、例文としては、*This is the final price. Take it or leave it.* (承諾するかは君が決めてくれ) を載せている。このイディオムは、アメリカ CBS の人気クイズショーの名 (**Take it or Leave it**, 1941~48年に放送) にも使用された。

- (59) **trick / treat** (AmE) : いたずら / ごちそう 【**“Trick or treat!”** (ごちそうくれなきゃ、いたずらするぞ) より】主にアメリカの Halloween で、仮装した子供達が、近所の家を **“Trick or treat!”** と言って立ち寄り、お菓子やお金をもらう習慣から生まれた。1930年代にアメリカで始まり、今ではイギリスでも一般的になった (OGBAC, p. 484)。両語は頭韻を踏んでいる。

⑦ その他

- (60) **cat / dog** : 猫 / 犬 【身近なペット用動物の代表例】英語の表現として *cat and dog* ([夫婦が] 仲が悪い, 犬猿の仲の), *fight like cat(s) and dog(s)* (激しく戦う・口論する) や *rain cats and dogs* (土砂ふり) がある。既述の通り (例(19)を参照), Jones et al. (2012: 111) は **cat / dog** を, 慣習的に対立関係にあるペアだと見なしている。また, Murphy (2003: 177-178) は, コーパスを使った両語の共起調査から, **cat / dog** を標準的対立語 (canonical opposites) であると性格付けている。さらに Murphy

(2003: 177-178) は、類例として *cat / mouse* を取り上げ、*play cat and mouse with*~, *when the cat's away, the mouse will play* という表現を挙げている。森岡 (2005: 69) は、日本語でも **犬 / 猫** を「敵どうし」の対義関係で捉えると述べている。

- (61) *email / snail mail* : Eメール / カタツムリ郵便【文字による伝達方法の選択】ユーモアを込めて、Eメールに比べて普通郵便は比較できないほど遅いことから生まれた。前者の使用が伸び、後者の普通郵便の利用は減少していて、今後この対比は薄れていくと思われる。
- (62) *pen / sword* : ペン / 剣【文事と武事】*The pen is mightier than the sword.* (ペンは剣よりも強し) より生じる。これは一般に諺だと思われているが、実際には1839年 Edward Bulwer-Lytton が書いた劇中の台詞の一節である (井上 1975: 903)。日本語にも文事と武事という対比があり、「文武両道」というフレーズがある。私見ではあるが、日英両語において、文・武を対比的に捉える表現は、今となっては少々古風な感じがする。

3.2 一般社会：①政治 ②社会 ③マスメディア

① 政治 [A. 固有名詞]

- (63) *Conservative / Labour* (BrE) : 保守党 / 労働党【イギリスの
 二大政党】それぞれ正式名は the Conservative Party と the Labour Party で、特に前者は、その前身の政党である the Tory Party (=Tories) に因んで Tory と呼ばれることがある。
- (64) *Democrat / Republican* (AmE) : 民主党 / 共和党【アメリカの
 二大政党】それぞれ the Democratic Party, the Republican Party と呼ばれ、各党のシンボルは *donkey / elephant*, 両党の支持者が多い地域はそれぞれ *blue / red* で示される。

- (65) *the House of Commons / the House of Lords* (BrE) : 下院 / 上院【イギリスの議会 (Parliament) を構成する 2 院】。
- (66) *the House of Representatives / the Senate* (AmE) : 下院 / 上院【アメリカの連邦議会 (Congress) を構成する 2 院】。
- (67) *the Tories / the Whigs* (BrE) : トーリー党 / ホイッグ党【17～18 世紀のイギリスの 2 大政党】前者は保守党の前身、後者は自由党 (the Liberal Party) の前身である。

[B. 固有名詞以外]

- (68) *doer / talker* (AmE) : 実行する人 / 口先だけの人【政治家のタイプ】アメリカ大統領選に関する *ABC News* の報道 (2015 年 7 月 15 日) で、苦戦を強いられていた Jeb Bush 共和党候補者が知名度の高い苗字を敢えて使わず、自分の個性を前面に出す選挙戦を展開していることについて、次のようなコメントが流れた：“you won’t even find the Bush name on his campaign logo. Just Jeb. Who is he? A doer, not a talker, he says.” ジーニアスの *doer* の項目 (p.622) には、通例 *thinker, talker* など対照的な語と共に用いるとして “I’m a doer, not a talker.” (私は実行者だ、口先だけの人間ではない) という例文を挙げている。
- (69) *go home / face arrest* (BrE) : 帰国すること / 逮捕に直面すること【国内の不法居住者へ投げかけられた選択肢】2013 年ロンドンで不法滞在者取締キャンペーンに使用されたフレーズ “**Go Home or Face Arrest**” (「帰国しなさい、さもなければ逮捕の覚悟を」) より。イギリス内務省の移民取締り政策の一環で、ロンドンの移民の多い地区でこのフレーズを掲載した車両を走らせた。間もなく抗議の声が上がり、その後このキャンペーンは中止に追い込まれた。この *go home* はただ単に「自宅へ帰る」のではなく、「祖国へ帰れ (go back to your country of origin)」

という差別的な意味合いを含む。また、複雑な現実を単純化し、二者択一の選択を迫っている点も、この様な政治や政策のメッセージの中によく見られる現象である。類例としては、フィリピンの新大統領によるドラッグ撲滅運動のスローガンである“Surrender or die”も、*surrender* / *die* という究極の選択を迫っている（2016年夏）。

- (70) *gray* / *blue* (AmE)：南軍 / 北軍【南北戦争時の敵対勢力】アメリカ史上の南北戦争時、南軍 (Confederate army) と北軍 (Union army) の兵士の制服の色から、それぞれ南軍 (の兵士) と北軍 (の兵士) を指す。ジーニアスの *gray* と *blue* の項目に、それぞれの説明はあるが、対になることへの言及はない。史実に関する文化的反義語であるが、今なお残る南部独自の自負意識にも繋がり、アメリカ理解の一助となるペアである。
- (71) *hawk* / *dove*：タカ派 / ハト派【政治的信条について相反する二つの立場】特に外交・国際問題で、前者は強硬論者・主戦論者、後者は穏健論者・平和主義者を指す。
- (72) *leave* / *remain* (BrE)：離脱する / 残留する【欧州連合 (EU) からの離脱か残留を問うイギリスの国民投票での選択肢、2016年6月実施】政治分野での使用で、二者択一の選択を迫る。*Leave* の標準的反義語は、*arrive* である。
- (73) *olive branch* / *arrows* (AmE)：平和 / 戦い【平和と戦争という対立を象徴するもの】アメリカの The Great Seal of the United States (合衆国国璽) には、白頭ワシ (bald eagle) がオリーブの枝と矢を手を持っている図があり、それぞれ平和と (自由を守る) 戦いを象徴している。Washington Post 紙 (電子版：2013年9月11日) には Obama's 'olive branch' and 'arrows' というタイトルで、“Like the presidential seal,

President Obama had an olive branch in one hand and arrows in the other.” と伝えている。*olive branch* が平和の象徴となるのは、旧約聖書の「創世記」(Genesis) のノアの洪水の話に由来し、英語には *hold out an [the] olive branch* (和解を申し入れる) というイディオムもある (堀内 1990 : 587)。オリーブの枝は国連旗にも図案化されている。

- (74) *state / federal* (AmE) : 州政府 (の) / 連邦政府 (の) 【アメリカの政治・社会制度の二つのレベル】 アメリカを理解するのに不可欠な重要キーワードである。ジーニアスの *federal* (2) に ⇔ *state* という反義語の表示がある。
- (75) *yea / nay* (AmE) : 賛成 / 反対 【アメリカの議会で賛否】 *the yeas and nays* 賛否 (の投票数・投票者数) という表現がある。一方、イギリス議会では *the ayes* と *the nays* を使う。

② 社 会

- (76) *blue / pink* : 男の子の色 / 女の子の色 【男・女の色分け】 “blue for boys and pink for girls” という言い方がある。山田 (2015 : 158) でも述べたが、長い間子供は性別に関係なく白い服を着ていたようだが、1940年代に衣料品メーカーが販売促進の為にこの区別を提案し、1980年代半ば以降一般に広まったようだ (Maglaty 2011)。
- (77) *blue-collar / white-collar* : ブルーカラー (肉体労働者) の / ホワイト・カラー (事務労働者) の 【労働者の分類】 AmE では伝統的に女性の職場である秘書、事務職員や店員などの仕事に関して *pink-collar* というフレーズがある。
- (78) *cradle / grave* : 揺りかご / 墓場 【人生の始まりと終わり】 社会福祉の充実を求める標語 *from the cradle to the grave* (揺り

かごから墓場まで) より生まれる。反義語の分類では、方向的反義語の中の対蹠的反語語に近い (Yamada 2009: 62 参照のこと)。人の一生に関わる時間軸の両極を比喩的に示す反義語である。

- (79) *ebony* / *ivory* : 黒人 / 白人 【代表的な人種を指す語】 Paul McCartney と Stevie Wonder の 1982 年の曲 “Ebony and Ivory” が基になる。*Ebony* は黒檀, *ivory* は象牙で, それぞれピアノの鍵盤の材料である。その黒と白の鍵盤を黒人と白人に喩え, 鍵盤と同様に隣人同士仲良くしようと訴える歌である。黒人を示す *ebony* は, 米国の黒人向け月刊グラフ誌の *Ebony* (1945 年創刊) や黒人英語を指す *Ebonics* (*ebony* と *phonics* の混成語) などにも見られる。
- (80) *loner* / *joiner* (AmE) : 孤独を好む人 / 社交・交際好きな人 【人の対人関係についての相対する性向】 前者は, 形容詞の *lone* (ただ一人の) が基で, *a lone wolf* (単独行動を好む人) というフレーズもある。後者は, 動詞の *join* (参加する) から派生した。
- (81) *lumper* / *splitter* (AmE) : 併合派 / 細分派 【生物分類上の相反する二つの立場】 前者は生物の類似点を重視して, 分類群を少数にまとめよう (*lump*) とする立場であり, 後者は相違点に注目して, より細かく分類する (*split*) 傾向を指す。Schiffirin (2006: preface XI) は, この相反する傾向を “lumpers (who focus on similarities) or splitters (who focus on differences)” と簡潔にまとめ, 言語研究の指向だけでなく, 一般的に人の物の考え方の分類にも当てはまるであろうと述べている。
- (82) *medical* / *recreational* (AmE) : 医療用 / 嗜好用 【大麻の代表的な使用目的】 アメリカの州レベルでの大麻解禁のニュースの中で, 鎮痛用の医療目的と個人使用の嗜好目的の二つが対比的に論じられていた。前者は, *medicinal* という語も使用される。留意

すべき点は、この大麻合法化の動きはあくまでも州レベルで、現在連邦レベルではどちらの使用も認められていないという点である。ここでも *state / federal* (74) の対比がみられる。

- (83) *perception / reality* : 思い込み / 現実【物事に関する人の思い込みと現実との落差】“*a perception*” rather than “*reality*” というようなフレーズで対照的に使われ、人々の認識と現実の差を強調する文脈でよく用いられる。
- (84) *Plan A / Plan B* : 第一案 / 第二案【原案と代案の二つの案】
When Plan A fails, you go to Plan B. (第一案がだめなときは、第二案を実行しなさい) のように用いられる (ジーニアス, p. 1598)。LDOCE, OALD にも掲載あり。
- (85) (*Planet A*) / *Planet B* : 地球 / 地球の代わりになる惑星【地球と代替惑星の対比】自分達の住む地球を指す *Planet A* の存在を暗黙の前提とした上で、*There's no Planet B* というような言い方で、かけがえのない地球に代わる物はないという文脈でよく使われる。LDOCE, OALD, ジーニアス等には、このペアのエントリーはない。
- (86) *residential / business* (AmE) : 個人宅 / ビジネス【電話番号案内 (directory assistance) の区分】案内は、個人宅の場合と店や企業などの業務関連の場合とに二分される。
- (87) *White Pages / Yellow Pages* (AmE) : 個人名別電話帳 / 職業別電話帳【電話帳の種類】前項と同様な区分を示す。後者は、実際黄色の紙に印刷されている。日本の職業版 (タウンページ) も同様に黄色が多い。

③ マスメディア

- (88) *tabloid / broadsheet* (BrE) : 大衆紙 / 高級紙【新聞の種類】

印刷用紙の大きさの区別から、編集方針や紙面の内容などで対照的な2種類の新聞を指すようになった。前者は小型版で手に取って読み易く、大衆好みのセンセーショナルな紙面作りを売りものにしていく。後者は従来からの伝統的な大型版で、質の高い報道を誇るため *quality paper* とも呼ばれる。近年、読者の扱いやすさを優先し高級紙もタブロイド判へ移行する動きがあり、この区別が当てはまらないケースが出てきた。

- (89) **TIME / Newsweek** (AmE) : タイム / ニューズウィーク 【アメリカを代表する2大ニュース週刊誌】 **TIME** (1923年創刊) は、記事内容が保守寄り、凝った文体を特徴とする。また、その年に最も話題になった人物を “Person of the Year” (以前は “Man of the Year”) として発表し、毎年注目を浴びている。一方、**Newsweek** (1933年創刊) は、「*Time* に比べるとリベラルで、文章も凝りすぎたところがなく平易・簡明」であると評される (山田・田中 2011 : 295)。著者の経験では1970年以降この対比はよく取りざたされたが、現在ではニュース報道が多様化し、この二誌への注目度も以前よりは低下したと思われる。
- (90) **rescue / recovery** (AmE) : (人命) 救助 / (遺体) 回収 【事故・事件後の捜索活動】 1999年7月 John F. Kennedy, Jr (38歳) が死亡した飛行機事故では、捜索活動の初期では “search and rescue” (捜索・救助) が行われたが、時間の経過に伴い生存の可能性がゼロに近づくと “search and recovery” (捜索・回収) の活動へと変化した。一般的に、人を巻き込む事故や災害の捜索活動は、“a search and rescue operation” から “a search and recovery operation” へと移行する。

消えつつある文化的反義語

以下に挙げる4例は、以前はニュース報道に頻繁に使用された文化的反義語ペアだったが、時間の経過に伴い、現在では過去を振り返る時以外には使用されることが少なくなったものである。

- (91) *Apollo / Soyuz* (AmE) : アポロ / ソユーズ 【アメリカとソ連の宇宙船の名前】米ソ間で人類を月へ送る宇宙開発競争が盛んだった1960年代から頻繁に使われた両国を代表する有人宇宙船の名称である。Apollo 11号が1969年に初めて人の月面歩行に成功して勝負がついた。*Soyuz*は、英語ではなくロシア語（「連邦」の意）であるが、*Apollo*と対になって使用されることが多いので本稿で取り上げた（下記のロシア人名も同様である）。
- (92) *astronaut / cosmonaut* (AmE) : アメリカの宇宙飛行士 / ソ連の宇宙飛行士 【米ソの宇宙飛行士を区別する呼び名】両語とも宇宙飛行士を指すが、米ソの冷戦時代の対立を反映してか、この様に名称の区別があった。
- (93) *Kennedy / Khrushchev* (AmE) : ケネディ / フルシチョフ 【1962年のキューバミサイル危機 (the Cuban missile crisis) 当時の米ソの指導者】John F. Kennedy (大統領1961-63) と Nikita Khrushchev (首相1958-64) を指す。
- (94) *Reagan / Gorbachev* (AmE) : レーガン / ゴルバチョフ 【1980年代のソ連解体と冷戦終結時の米ソのリーダー】Ronald Reagan (米大統領1981-89) と Mikhail Gorbachev (ソ連共産党書記長1985-1991, 大統領1990-91) である。

3.3 文化：①教育 ②スポーツ ③エンターテイメント ④その他

① 教育

- (95) *Eton / Harrow* (BrE) : イートン校 / ハロー校 【イギリスのパ

ブリックスクール (public school, 私立中・高一貫学校) の代表格】前者は 1440 年, 後者は 1572 年に創立。両校の間には「強い対抗意識がある」(“There is a strong sense of competition between Eton and Harrow...”, *OGBAC*, p. 147) とされている。

- (96) **Harvard / Yale** (AmE) : ハーバード大学 / エール大学【アメリカの東海岸を代表する二つの大学】前者は 1636 年, 後者は 1701 年の創立。*OGBAC* の Yale University の項 (p. 528) には, “often seen as a rival of Harvard University” という解説がある。
- (97) **Oxford / Cambridge** (BrE) : オックスフォード大学 / ケンブリッジ大学【イギリスを代表する二つのライバル名門大学】前者は 1249 年, 後者は 1284 年に創立。*OGBAC* (p. 349) には “The two universities are academic rivals” と記されている。両校をまとめて *Oxbridge* という語もある。ただし, 藤原正彦氏 (『遙かなるケンブリッジ: 一数学者のイギリス』1991, 新潮社) によると, この対抗意識は一方通行の部分もあるようで, 「ケンブリッジの教官や学生は, オックスフォードには無関心である」(p. 97) と述べている (一方通行については, (53) の *Washington, D.C. / New York* も参考のこと)。
- (98) **town / gown** (BrE) : 市民 / 大学側【特に Oxford, Cambridge の一般市民と大学関係者】**town and gown** というフレーズで (両語は脚韻を踏んでいる), 両者間の異なる背景や利害の対立を表す (“tension”, *OGBAC*, p. 481) とされている。**Gown** は, 正服を着ている人の意から, 大学町の大学生や教授陣を指す。

② スポーツ

- (99) **Celtic / Rangers** (BrE) : セルティック / レンジャーズ【スコットランドの最大都市 Glasgow を本拠地とするサッカーのライバ

ルチーム】双方とも19世紀後半に設立された。前者はカトリック系、後者はプロテスタント系で、両者の試合は、特別に *the Old Firm (game)* と呼ばれる。

- (100) **home / away** : ホーム / アウエー 【スポーツの試合で、本拠地の試合 (*a home game*) と相手チームの本拠地での試合 (*an away game*)、又は本拠地のチームと遠征側のチームを指す】 **home-and-away** は対戦するチームがそれぞれの本拠地で試合をする形式のことである。関連して、アメリカの野球の試合で、スコアボードに両チームのことを **guest / home, visitor / home** と記載されているのを筆者は見たことがある。ロンドンのサッカースタジアムでも **home / away** が *team, match, game, section* などの語の前に形容詞的に使われていた (2016年夏)。また、AmEでは、特に野球の試合の場合に **road** を「遠征先」の意味で使う。
- (101) **leaders / chase group** : 先頭集団 / 第二集団 【多人数で競う競技での上位集団の区分】 トライアスロン (triathlon) 競技のレースの実況中継で用いられていた (2016年8月のリオ・オリンピック)。
- (102) **Liverpool / Everton** (BrE) : リバプール / エバートン 【イギリスの都市 Liverpool を代表する二つのサッカーチーム】 前者は *red*, 後者は *blue* をチームカラーにしている。この二つのチームの試合は、*Merseyside derby* と呼ばれる (*derby* とは、同じ地域を本拠地にするチーム同士の試合を指す)。他にも、*Manchester derby* (**Manchester United** と **Manchester City** の試合) や *North London derby* (**Arsenal** と **Tottenham Hotspur** の試合) などが有名である。これらのチームも文化的反義語の候補となる。
- (103) **mentality / physicality** : 精神力 / 体力 【試合の勝敗を握る二つの要素】 イギリスの Premier League の試合 (Stork City vs.

Tottenham Hotspur, 2015年5月14日)の解説の中で、シーズン最終盤を迎え最終的には *mentality* が勝敗のカギを握るだろうという解説があった。

- (104) *New York Yankees / New York Mets* (AmE): ヤンキース / メッツ 【アメリカのニューヨークを本拠地にするプロ野球のライバルチーム】 著者は不案内だが、この他にも、アメリカン・フットボールやバスケットボール等でも同様な敵対する組み合わせがあるはずである。
- (105) *possession / penetration* (BrE): ボールの保持 / 有効な攻撃 【試合中の対照的な戦略】 イギリスのサッカー実況中継で、両チームともなかなか点が取れない膠着状態の中で、それぞれ「ボールの支配力」と「得点を生む突破力」の意味で対照的に使われていた。

③ エンターテイメント

- (106) *evening / matinee* (BrE): 夜興業 / 昼興業 【ロンドンの劇場での上演時間帯の区分】 映画の上映時間帯にも使われる。
- (107) *the stalls / the circle* (BrE): 一等席 / 栈敷席, 階上席 【劇場での座席の種類】 前者は、劇場の舞台近くの一等席, 後者は特に2, 3階の半円形の栈敷席で比較的安価な席を指す。AmEでは、通常 *the orchestra / the balcony* となる。

④ その他

- (108) *gay / straight*: 同性愛の / 異性愛の 【性的嗜好】。
- (109) *Generation X / Generation Y* (AmE): X世代 / Y世代 【特徴的な世代の呼称】 前者は、1960年代から70年代生まれで社会への所属意識が低い世代を指し、後者は1980年から90年代生ま

れで、パソコンや電子機器に強い世代を指す (*LDOCE*, p. 763, *OALD*, p. 654)。

(110) *soccer mom* / *waitress mom* (AmE): サッカー・ママ / ウエイトレス・ママ【お母さんの区分】1990年代後半の大統領選で話題になったフレーズから生まれた。前者は、経済的に余裕がある中産階級の主婦層を、また後者は比較的低賃金の仕事について家計を支える働く主婦層を指す (飛田 2000: 1000-1001 & 1114)。 *Soccer mom* は *LDOCE* (p. 1737), *LDELIC* (pp. 1319-1320) や *OALD* (p. 1481) にも記載がある。ただし *waitress mom* は掲載されていない。

(111) *stay-at-home mom* / *working mom* (AmE): 専業主婦ママ / 働くママ【お母さんの区分】Mommy Wars (ママさん戦争: (48)に既出) と呼ばれる議論の対立点の一つである。 *Daily Mail* 紙 (電子版: 2013年6月13日) によると, Mommy Wars とは「専業主婦ママ」と「働くママ」の意見の対立から出発して, その後育児全般にわたる選択肢にも拡大されたようだ。具体的には, 以下のような対立があり, 文化的反義語の例となるであろう:

— *breastfeeding mom* / *formula feeding mom*: 母乳派 / 粉ミルク派

— *cloth diapering mom* / *disposable diapering mom*: 布おむつ派 / 使い捨て紙おむつ派

— *homeschooling mom* / *traditional school mom*: ホームスクーリング派 / 通常の学校派

3.4 文化的反義語の変遷

文化的反義語は、現実世界での出来事や考え方に基づいて生まれるので、その現実世界に変化が起ると、その変化の影響を受けて消滅していくも

のや新たに生まれるものが出てくる。ここまで本稿で挙げた例は、程度の差はあるが現在使用されているものである。以下では、現実世界の変化の影響を強く受けた例に焦点を当てて見ていく。

次の例は、19世紀のイギリスで流行った子供用のミニチュア劇場の遊びに関するものである。その玩具の劇場で使う人物や風景を切り抜く板紙の広告の文句が基になった文化的反義語ペアである：

- (112) *plain / coloured* (BrE)：色なし / 色つき【子供用おもちゃの劇場で使う人物や風景を切り抜く板紙の種類】“Penny **Plain**, Twopence **Coloured**”「色なし1ペンス，色つき2ペンス」より (Evans 1990: 838)。

この板紙に印刷された人物や風景を切り抜いて、ミニチュア劇場に配置して遊んだそうだ。その当時の白黒（モノクロ）とカラーの対立は、その後も写真、映画、テレビ番組等に引き継がれたが、今はカラーが圧倒的に主流となり、日常ではほとんどその対立を意識することはなくなった。しいて言えば複写コピーや文書のプリントアウト時の選択で残っているであろうか。特に子供を対象にした絵本やゲームを白黒で作成するのは今では稀であろう。つまり今やカラーが主流となり、*plain / coloured* の反義語ペアは消滅したといえるだろう。

消滅とまでいなくても、使用が廃れているペアもある。以下はそのような例である：

- (113) *silk / glossy*：絹目 / 光沢【写真をプリントするときの用紙の選択】*silk* は *matte*（つや消し）ともいう。著者が1990年代初めにアメリカに滞在中に経験した選択肢である。

日本でも以前はあった選択だが、今は基本的に光沢が主流となっているようだ。そもそも写真はデータとして保存して、プリントしないことも多くなったので、このペアは近い将来は消滅する可能性が高いと思われる。

一方でつい最近生まれた文化的反義語もある。ロンドン名物のタクシー

は長年黒塗りの *black cab* と呼ばれ親しまれてきたが、2012年にアメリカから上陸した配車サービスの *Uber* との激しい競争に現在さらされている。前者は、ロンドンの道に精通したプロの運転手 (cabby) の信頼できるサービスが売り物だが、後者は素人ドライバーながら、スマホのアプリを使うことにより、格安で手軽なサービスを客に提供できる点が魅力である。従って、現在ロンドンでは以下の対比が存在する：

- (114) *black cab* / *Uber* (BrE)：ブラックキャブ / ウーバー【ロンドンのタクシーの選択】2017年7月4日 *New York Times* 紙電子版の記事 (On London's Streets, Black Cabs and Uber Fight for a Future, 2017年8月31日閲覧) より。

おそらく同様の現象は、現在 *Uber* が進出している世界各地で起こっていると想像される。同社の設立は2009年であるので、ごく最近の現象であり、ロンドンの状況も今後変化していくと思われる。どう変化するかは予断を許さないが、比較的短期間で消えるペアかもしれない (追記：2017年9月24日の読売新聞によると、ロンドン交通局は乗客の安全対策に不備があるとして、*Uber* の営業許可を更新しないと発表した)。

また、未来へ向けて変化する可能性の高い文化的反義語もありそうだ。先に、旅客機のフライトに関する文化的反義語として *domestic* / *international* (国内線 / 国際線) という例(41)を挙げ、将来はこれに *space* (宇宙) が加わるかもしれないと述べた。実際アメリカでは *spaceport* ができているという報道が数年前にあった。そう考えると将来の空の旅は例えば *global* / *space* (地球 / 宇宙) といった区分になるかもしれない。

文化的反義語の変遷を見てきたが、外界の変化に影響されて語彙の構成に変化が生じるのは何も文化的反義語特有の現象ではなく、広く語彙全般に当てはまる現象である。文化的反義語は、その時々々の文化的背景を色濃く反映するので、そのような変化をより強く受けることになる。裏を返せば、文化的反義語の変化をたどることで、その背景にある文化の変化を明

らかにできるというメリットもある。

4. 終わりに

本稿では、著者がこの数年間収集してきた英語の文化的反義語の実例を示した。まず第2節では、文化的反義語の定義とこれまでの研究で指摘されてきた代表例を確認し、第3節では、著者が集めた文化的反義語の実例を分野別にまとめ、適宜解説を加えた。本稿をまとめて、改めて文化的反義語を意識して学ぶ・教えることは、英語学習の促進と英語圏文化の理解に有意義であるとの思いを強くした。本稿を契機に文化的反義語の重要性が認知され、英語のみならず他の言語でも研究が進むことを期待する。さらに、そのような研究が、異文化理解や辞書の記述の向上、さらに、翻訳や通訳などの分野に応用され、実績を上げることが出来れば幸いである。

今後の研究課題としては、次の3点を挙げる。まずは、本稿で英語の例を提示したので、次のステップとして、それに対応する日本語の実例を示し、比較したい。第2点目は、色彩語の反義関係を総合的に調査したい。特に基本的な色彩語（例えば Berlin and Kay 1969 の11色）を中心に、日英語での文化的反義語の例を比較することは有益であろう。

さらに、第3点目の課題として、反義語と類義語の差異の詳細を明確にしたい。実例を精査する過程で反義語と類義語の区別の難しさを痛感することがたびたびあった。例えば、英語教育の分野で、英語を母語以外の言語として学ぶ時の区別として、*ESL* (*English as a Second Language*) と *EFL* (*English as a Foreign Language*) という2語がよく使われる。前者は「第二言語としての英語」、後者は「外国語としての英語」で、外国人が英語を学ぶ環境に注目した区分である。第二言語の環境と外国語の環境の違いに注目する際には対比が強調され、反義語の役割を果たす一方で、ネイティブが英語を母者として習得するプロセスと対比させる際には、

この2語は類似点に注目が集まり、類義語の役割を果たすと考えられる。同じペアでも視点が違くと異なる関係性が生まれるようだ。反義語と類義語は想像以上に近い関係にあると言えそうだが、その関係性の詳細は未だに不明な点が多い。

以上、本稿が文化的反義語の実態解明に少しでも役立てば幸いである。

参考文献

[和書]

- 小島義郎他(編). 2004. 『英語語義語源辞典』東京:三省堂.
- 森岡健二. 2005. 「私の対義語観」宮地(編)『「日本語学」特集テーマ別ファイル(2) 意味Ⅱ』, 68-71, 東京:明治書院.
- 大塚高信・中島文雄(監修). 1982. 『新英語学辞典』東京:研究社.
- 内田聖二(編). 2009. 『英語談話表現辞典』東京:三省堂.
- 山田政通. 2015. 「文化的反義語の試案——第4のカテゴリーとして——」*拓殖大学語学研究*(言語文化研究所)第133号, 149-172.

[英書]

- Berlin, Brent and Paul Kay. 1969. *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Berkeley: University of California Press.
- Cruse, Alan. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, Alan. 2000. *Meaning in Language: An Introduction of Semantics and Pragmatics*. Oxford and New York: Oxford University Press (3rd ed., 2011).
- Hoey, Michael. 1983. *On the Surface of Discourse*. London: George Allen and Unwin.
- Hofmann, Th. R. 1993. *Realms of Meaning: An Introduction to Semantics*. Essex and New York: Longman.
- Jones, Steven. 2002. *Antonymy: A Corpus-based Perspective*. Oxon, UK: Routledge.
- Jones, Steven, et al. 2012. *Antonyms in English: Construals, Constructions and Canonicity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maglaty, Jeanne. 2011. "When Did Girls Start Wearing Pink?" (smithsoni-

- an.com [posted on April 7, 2011]: <http://www.smithsonianmag.com/arts-culture/when-did-girls-start-wearing-pink-1370097/?no-ist=&page=2>: 2015年5月5日検索).
- Murphy, M. Lynne. 2003. *Semantic Relations and the Lexicon: Antonymy, Synonymy, and Other Paradigms*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Riemer, Nick. 2010. *Introducing Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, Deborah. 2006. *In Other Words: Variation in Reference and Narrative*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yamada, Masamichi. 2009. "Making More Sense of Antonymy in English." *拓殖大学語学研究* (言語文化研究所) 第120号, pp.43-79.

[辞典・英書]

- Evans, Ivor. H. 1990. *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* (14th ed.). London: Cassell.
- LDEL*C = *Longman Dictionary of English Language and Culture*. 2005 (3rd ed.) Essex, UK: Pearson Education Limited.
- LDOCE* = *Longman Dictionary of Contemporary English*. 2014 (6th ed.) Essex, UK: Pearson Education Limited.
- OALD* = *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 2015 (9th ed.) Oxford, UK: Oxford University Press.
- OGBAC* = *Oxford Guide to British and American Culture*. 2005 (2nd ed.) Oxford, UK: Oxford University Press.

[辞典・和書]

- ジーニアス=『ジーニアス英和辞典』(第5版)2014. 東京: 大修館.
- ジーニアス大辞典=『ジーニアス英和大辞典』(電子版)2001-2002版, 東京: 大修館.
- 堀内克明(編). 1990. 『英語圏生活・文化情報事典』東京: 学習研究社.
- 井上義昌(編). 1975. 『英米故事伝説辞典』(第3版)東京: 富山房.
- 飛田茂雄(編). 2000. 『現代英米語情報辞典』東京: 研究社.
- 山田政美・田中芳文(編著). 2011. 『英和ブランド名辞典』東京: 研究社.

拓殖大学研究所紀要投稿規則

(目的)

第1条 拓殖大学（以下、「本学」という。）に附置する、経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所、理工学総合研究所及び人文科学研究所（以下、「研究所」という。）が刊行する紀要には、多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し、研究活動の促進に供することを目的とする。

(紀要他)

第2条 研究所の紀要は、次の各号のとおりとする。

- (1) 経営経理研究所紀要『拓殖大学 経営経理研究』
- (2) 政治経済研究所紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
- (3) 言語文化研究所紀要『拓殖大学 語学研究』
- (4) 理工学総合研究所紀要『拓殖大学 理工学研究報告』
- (5) 人文科学研究所紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』

2 研究所長は、次の事項について毎年度決定する。

- (1) 紀要の『執筆予定表』の提出日
- (2) 投稿する原稿（以下、「投稿原稿」という。）及び紀要の『投稿原稿表紙』の提出日
- (3) 投稿原稿の査読等の日程

(投稿資格)

第3条 紀要の投稿者（共著の場合、投稿者のうち少なくとも1名）は、原則として研究所の兼担研究員および兼任研究員（以下「研究所員」という。）とする。

2 研究所の編集委員会が認める場合には、研究所員以外も投稿することができる。

(著作権)

第4条 投稿者は、紀要に掲載された著作物が、本学機関リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。

2 共同執筆として紀要に掲載する場合には、共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し、投稿代表者に承諾書を提出しなけれ

ばならない。投稿代表者は、共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

(執筆要領および投稿原稿)

第5条 投稿原稿は、研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。

- 2 投稿原稿は、図・表を含め、原則として返却しない。
- 3 学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は、紀要に投稿することはできない(二重投稿の禁止)。

(原稿区分他)

第6条 投稿原稿区分は、次の表1、2のとおり定める。

表1 投稿原稿区分：経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所及び人文科学研究所

(1)論文	研究の課題，方法，結果，含意(考察)，技術，表現について明確であり，独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
(2)研究ノート	研究の中間報告で，将来，論文になりうるもの(論文の形式に準じる)。新しい方法の提示，新しい知見の速報などを含む。
(3)抄録	経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所，人文科学研究所の研究助成要領第10項(2)に該当するもの。
(4)その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿(公開講座記録等)については，編集委員会において取り扱いを判断する。また，編集委員会が必要と認めた場合には，新たな種類の原稿を掲載することができる。

表2 投稿原稿区別：理工学総合研究所

(1)論文，(2)研究速報，(3)展望・解説，(4)設計・製図，(5)抄録(発表作品の概要を含む)，(6)その他(公開講座記録等)

- 2 投稿原稿区分は、投稿者が選定する。ただし、紀要への掲載にあたっては、査読結果に基づいて、編集委員会の議を以て、投稿者に掲載の可否等を通知する。
- 3 紀要への投稿が決定した場合には、投稿者は600字以内で要旨を作成し、投稿した原稿のキーワードを3~5個選定する。ただし、要旨には、図・表や文献の使用あるいは引用は、認めない。

- 4 研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表（原稿）の投稿原稿区分は、原則として論文とする。
- 5 研究所研究助成を受けた研究所員が、既に学会等で発表した研究成果（原稿）は、抄録として掲載することができる。

（投稿料他）

第7条 投稿者には、一切の原稿料を支払わない。

- 2 投稿者には、紀要3部を贈呈する。
- 3 投稿者が研究所員の場合には、掲載の抜き刷りを50部まで無料で贈呈する。50部を超えて希望する場合は、超過分について有料とする。

（リポジトリへの公開の停止及び削除）

第8条 投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合または編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には、リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

（その他）

第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については、編集委員会の議を以て決定する。

（改廃）

第10条 この規則の改廃は、研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附 則

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

拓殖大学言語文化研究所紀要『拓殖大学 語学研究』執筆要領

1. 発行回数

『拓殖大学 語学研究』（以下、「紀要」という）は、原則として年2回発行する。その発行のため、以下の原稿提出締切日を厳守する。

(1)	原稿は、9月中旬締切－12月発行
(2)	原稿は、11月末日締切－3月発行

2. 使用言語

用語は、日本語又は日本語以外の言語とする。ただし、日本語以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に言語文化研究所編集委員会（以下、「編集委員会」という。）に申し出て、その承諾を得たときは、使用可能とする。

3. 様式

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿（A4用紙を使用し、横書き、1行33字×27行でプリント）2部を編集委員会宛に提出する。

- (1) 数字は、アラビア数字を用いる。
- (2) ローマ字（及び欧文）の場合は、ダブルスペースで32行。1行の語数は日本語33文字分。
- (3) 投稿原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として、以下のとおりとする。

①	日本語論文による原稿	20,000字（1行33字×27行）以内	} A4縦版・ 横書
②	日本語以外の言語による原稿	20,000字（ダブルスペース、20枚）以内	

上記分量を超えた投稿原稿は、編集委員会で分割掲載等の制限をおこなうこともある。

投稿者の希望で、本紀要の複数号にわたって、同一タイトルで投稿することはできない。ただし、編集委員会が許可した場合に限り、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で全体像と回数を明示しなければならない。

- (4) 上記以外の様式にて、投稿原稿の提出する場合には、編集委員会と協議する。

4. 投稿原稿

- (1) 原稿区分は、「拓殖大学 研究所紀要投稿規則」に記載されている種別のいずれかとするが、「その他」の区分、定義については付記のとおりとする。

- (2) 投稿原稿の受理日は、編集委員会に到着した日とする。
- (3) 投稿は完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4) 投稿原稿数の関係で、紀要に掲載できない場合には、拓殖大学言語文化研究所長（以下「所長」という）より、その旨を執筆者に通達する。

5. 図・表・数式の表示

- (1) 図・表の使用は、必要最小限にし、それぞれに通し番号と図・表名を付けて、本文中に挿入位置と原稿用紙上に枠で大きさを指定する。図・表も分量に含める。
- (2) 図および表は、コンピューター等を使って、きれいに作成すること。
- (3) 数式は、専用ソフトを用いて正確に表現すること。

6. 注・参考文献

- (1) 注は、本文中に（右肩に片パーレンで）通し番号とし、執筆者の意向を尊重して脚注、後注とも可能とする。
- (2) 引用・典拠の表示は各言語の一般的な方式に従うものとする。

7. 執筆予定表の提出

紀要に投稿を希望するものは、『拓殖大学 語学研究』執筆予定表を、指定された期日までに研究所に提出する。

8. 原稿の提出

投稿原稿と一緒に、『拓殖大学 語学研究』投稿原稿表紙に必要事項の記入、「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し、原稿提出期日までに添付する。

9. 原稿の審査・変更・再提出

- (1) 投稿原稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が決定する。編集委員会は、原稿の区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2) 出された投稿原稿は、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
- (3) 編集委員会は、投稿者に若干の訂正あるいは書き直しを要請することができる。
- (4) 編集委員会は、紀要に掲載しない事を決定した場合は、所長名の文書でその

旨を執筆者に通達する。

- (5) 他の刊行物に既に発表された、もしくは投稿中の原稿は、紀要に投稿することができない。

10. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4 版用紙（縦版、横書き）にプリントした完成原稿 1 部と電子媒体を提出すること。

電子媒体の提出時には、コンピューターの機種名と使用 OS とソフトウェア名及びバージョン名を明記すること。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿のデータを保管しておくこと。

11. 校正

投稿原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、編集委員会と所長が三枚を行う。この際の校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。

校正は、所長の指示に従い、迅速に行う。

校正が、決められた期日までに行われない場合には、紀要に掲載できないこともある。

12. 改廃

この要領の改廃は、言語文化研究所会議の議を経て、所長が決定する。

附 則

この要領は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この要領は、平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

付記：「その他」の区分・定義について

①	調査報告：	専門領域に関する調査。
②	資 料：	原稿区分の範疇以外で教育・研究上有用であると考えられるもの。
③	書 評：	専門領域の学術図書についての書評。
④	紹 介：	専門領域に関するもの。

以上

執筆者紹介（目次掲載順）

久米井敦子（くめい・あつこ）	商学部准教授	中国近現代音楽史，中国近現代文学
末延 俊生（すえのぶ・としお）	政経学部准教授	応用言語学，言語教育学
平山 邦彦（ひらやま・くにひこ）	外国語学部教授	中国語学，現代中国語文法
村上 祥子（むらかみ・しょうこ）	商学部教授	韓国語，韓国民俗学
阿久津 智（あくつ・さとる）	外国語学部教授	日本語学
坂田 貞二（さかた・ていじ）	拓殖大学名誉教授	ヒンディー語文学，北インドの民間伝承
保坂 芳男（ほさか・よしお）	外国語学部教授	英語教育，英語教育史
浅井 澄民（あさい・すみたみ）	外国語学部准教授	中国語学，中国語口語発達史
廣澤 明彦（ひろさわ・あきひこ）	外国語学部教授	スペイン語学，スペイン語文法研究
山田 政通（やまだ・まさみち）	外国語学部教授	語用論，談話分析

拓殖大学 語学研究 第137号 ISSN No.1348-8384

2018年2月10日 印刷

2018年2月20日 発行

編集 拓殖大学言語文化研究所編集委員会

編集委員 寺家村博 阿久津智 尾崎茂 狩野紀子 平山邦彦 廣澤明彦
松下直弘 永江貴子 藤本淳史 岩崎光一 末延俊生 村上祐紀

発行者 拓殖大学言語文化研究所長 寺家村博

発行所 拓殖大学言語文化研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4番地14号

Tel. 03-3947-7595

印刷所 (株)外為印刷
